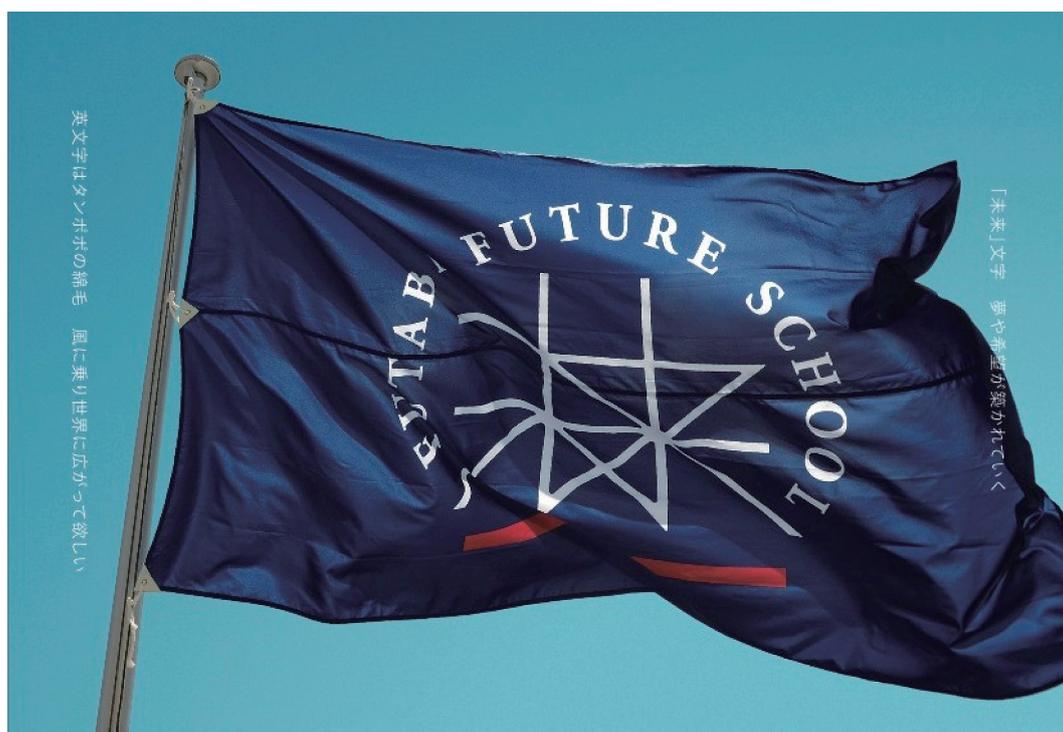




令和5年度指定
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業

研究開発実施報告書
第1年次



福島県立

ふたば未来学園中学校・高等学校

「学びの変革」の実現に向けて

福島県教育庁高校教育課長 箱崎 兼一

はじめに、このたびの令和6年能登半島地震により亡くなられた方々に対し、深く哀悼の意を表しますとともに、被害に遭われた皆様に心からお見舞いを申し上げます。

福島県では、現地に職員を派遣するなど、今後とも、被災された方々が一日も早く元の生活を取り戻されるよう、最大限の支援を行ってまいります。

さて、令和5年度WWLコンソーシアム構築支援事業研究開発実施報告書の発行にあたり、御挨拶申し上げます。本事業については、今年度、文部科学省に採択され、事業拠点校をはじめとして、事業協働機関及び国内外の事業連携校の御理解と御協力のもと、様々な取組を進められたことに心より感謝申し上げます。

本県は、東日本大震災及び原子力発電所事故からの復興・創生に向けて、今後も様々な課題を乗り越えていかなければなりません。また、Society5.0の到来や国際情勢の急激な変化等、将来を予測することが極めて困難な社会となっております。正解が一つとは限らない社会の中で、一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せである Well-being を実現するには、子どもたちに自らの力で豊かな人生を切り拓き、多様な他者とともにより豊かな社会や地域を創造する力を育む必要があります。復興・創生の過程という困難な状況の中で培われてきた他者との対話や協働を通じた学びを、「福島ならではの」の教育として更に充実・発展させてまいります。

このような状況を踏まえ、本県教育委員会では、昨年度からスタートした第7次福島県総合教育計画において、本県教育の柱として、「学びの変革」を掲げ、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びを推進しております。このような「学びの変革」を実現させるための施策の一つとして、世界で活躍する人材育成を推進し、ふたば未来学園中学校・高等学校を事業拠点校にした本事業に取り組んでおります。

本事業は、「原子力災害からの復興を果たし、新たな社会を創造するグローバル・リーダーの育成」という研究開発構想のもと、事業協働機関や国内外の事業連携校と連携しながら、先進的なカリキュラムの研究開発を行い、高校生へ高度な学びを提供する仕組みである「アドバンスト・ラーニング・ネットワーク」の形成を目指すものです。

1年目としましては、事業拠点校及び管理機関を中心に、各連携先と「福島アドバンスト・ラーニング・ネットワーク」を形成しました。また、事業協働機関の一つである東北大学とは、先取り履修及び単位認定に向けた協議を開始し、今年度は、東北大学の講座を本県高校生が大学生とともに履修し、その成果を合同発表会で披露するという取組を行いました。条件を満たした生徒には、「オープンバッジ」が発行される仕組みとなっております。また、事業拠点校と事業連携校との連絡協議会を開催し、各校の取組を共有しました。さらに、県内外の学校間での交流も始まっています。

2年目においても、高度な学びを提供する先取り履修及び単位認定の実現に向けて、事業協働機関と協議を進めてまいります。また、事業拠点校と事業連携校が協働して行う「高校生国際会議」の開催に向けて、準備を進めてまいります。

最後になりますが、本事業が「学びの変革」を実現し、新たな社会を創造するグローバル・リーダーの育成につながることを心より期待しております。



巻 頭 言

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 校長 郡司 完

日頃から、本校の教育活動に対しまして、多方面から多大なる御支援と御協力を賜っておりますことに、この場をお借りしまして心から御礼を申し上げます。

東日本大震災からの教育復興のシンボルとして、平成27年4月に開校しましたふたば未来学園は、今年度で高等学校が9年目、中学校が5年目を迎えました。原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成を目指して、開校後の5年間、文部科学省からスーパー・グローバル・ハイスクール事業の指定を受けて特色ある教育活動を展開し、その後の3年間はグローバル型の事業に取り組んでまいりました。令和5年4月からは、新たにワールド・ワイド・ラーニング（WWL）コンソーシアム構築支援事業の拠点校に指定され、東北大学高度教養教育・学生支援機構と連携協定を締結して本校生が大学の講義をオンラインで受講したり、双葉郡浪江町に開所しました世界的研究施設である福島国際研究教育機構（F-R E I）との連携により理事長のトップセミナーを開催していただいたりしています。また、令和5年5月から新型コロナウイルスが5類感染症に移行したことで、生徒たちの活動はこれまで以上に活発化し、外部と連携してフィールドワークを行ったり、専門家の協力を得て高度な活動に挑戦したりしております。加えて、海外との交流も一層盛んになり、これまでのように日本から海外に出かけるだけの研修でなく、海外連携校の生徒・職員や各国大使、在外福島県人会の方々が本校を訪問して交流活動を行うなど、2年後に計画している生徒国際会議の開催に向けた足がかりも築かれつつあります。このように各種事業が順調に進んでおりますのも、一重に本校の教育活動を支え御支援していただいた方々のお陰だと思っております。深く感謝いたします。その御恩に報いるためにも、引き続き先進の教育活動にも果敢に挑戦して、本校の教育活動の質的向上を図るとともに、全国各地からの御視察を積極的に受け入れながら活動の成果を広く発信して、日本の教育レベルの向上にも貢献してまいりたいと考えております。

令和6年4月、ふたば未来学園は創立10年目に当たる節目の年を迎えます。同時に現在静岡県内で学んでいる三島長陵校舎の生徒たちが福島県内の本校舎に帰還するとともに、平成31年4月に併設中学校に入学した第一期生が高校3年となり、ふたば未来学園は形の上で完成します。しかし、私はここをゴールではなくスタート地点と捉え、「感謝」と「挑戦」という言葉を大切にしながら、引き続き特色ある教育活動をとおして、地域や日本の将来を支える人材育成に、職員一丸となって取り組んでまいります。

結びに、本書には、福島県教育委員会や連携校を始め、たくさんの関係団体の御尽力をいただきながら取り組んできましたWWLコンソーシアム構築支援事業の活動のすべてを包み隠すことなく掲載しています。本書が皆様のこれからの活動に少しでも役に立ち、日本の教育の進展に僅かでも寄与できましたら幸いに存じます。

目 次

巻頭言	
第1章	研究開発概要 1
第2章	管理機関の取組
	2.1 第7次福島県総合教育計画の概要 21
	2.2 ALネットワークの構築 23
第3章	拠点校の研究開発の内容・活動実績
	3.1 地域創造と人間生活（高校1年次） 25
	3.2 未来創造探究（高校2年次） 33
	3.3 未来創造探究（高校3年次） 43
	3.4 海外・国内研修 53
	3.5 外部発表・交流 65
	3.6 社会起業部の活動 69
	3.7 未来研究会 71
第4章	連携校の取組
	4.1 県内連携校の取組 73
	4.2 県外連携校の取組 78
第5章	外部連携
	5.1 外部連携 80
	5.2 外部連携実績 81
	5.3 早稲田大学との協働 84
	5.4 コラボ・スクール 86
第6章	実施の効果とその評価
	6.1 ルーブリック評価 88
	6.2 ルーブリック評価の定量的分析 （アクセンチュア株式会社） 93
	6.3 7期生の個別評価 95
	6.4 3年間を通じた各取組に関する評価 98
	6.5 進路や生き方在り方に関する評価 99
	6.6 学校アンケートによる評価 100
	6.7 設定した目標の達成度 101
第7章	研究開発の成果と課題
	7.1 研究開発成果概要 102
	7.2 コンソーシアム組織との協働 105
	7.3 今後の課題 105
	7.4 カリキュラム・アドバイザーからの総括 106
関係資料	資料1 教育課程表 108
	資料2 ルーブリック表 110
	資料3 運営指導委員会 111
	資料4 生徒探究テーマ一覧 113

第1章 研究開発概要

令和5年度の構想計画書および事業実施計画書を示す。

期間	ふりがな	ふくしまけんきょういくいいんかい	所在都道府県
令和5年度	管理機関	福島県教育委員会	福島県
～	ふりがな	ふくしまけんりつふたばみらいがくえんちゆうがっこう・こうとうがっこう	
令和7年度	事業拠点校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校	

令和5年度 WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業 構想計画書

1 構想目的・目標の設定【2ページ(ページ番号1～2)で記載すること。】

(1) イノベーティブなグローバル人材像

福島県双葉郡は震災および原発事故という、人類が経験したことがないような複合災害にみまわれ、解決困難な様々な課題に直面した。事業拠点校であるふたば未来学園はこれまでの価値観や社会のあり方を根本から見直し、新たな生き方や新たな社会を建設する人材の育成を目指して新設された。令和5年には福島国際研究教育機構(以下、「F-REI」)が開設され、世界中の研究者との協働による先端研究・開発と復興への取組が本格化する。世界と協働しながらイノベーションを創出する人材の育成は福島復興の必須要件であり、休校となっている高校を除き、双葉郡唯一の高校であるふたば未来学園の役割は大きい。

また、福島県教育委員会では、SDGsの視点を生かした「福島ならではの」教育の充実を通して、急激な社会の変化の中で、自分の人生を切り拓くたくましさを持ち、多様な個性を生かし、対話と協働を通して、社会や地域を創造することができる人材を育成するために、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへと変革していく「学びの変革」を掲げている。

こうした福島県の方向性は、創造的復興教育の拠点として開校したふたば未来学園の蓄積も基盤としたものである。ふたば未来学園は双葉地区教育長会が中心となってまとめた「福島県双葉郡教育復興ビジョン(平成25年7月)」を建学の礎とし、同ビジョンで地域が提起した求める人材像を踏まえ、開校時から「原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造する変革者」の育成を掲げ、人材要件ループリックで「変革者」の資質・能力を具体化してきた。また、「グローバル型」事業指定時には地域とのコンソーシアムにおいても改訂を行ってきた。

福島復興の課題とこれまでの経緯を踏まえ、注力する育成人材像として下記を設定する。

(A) 地域や世界の課題と自己の将来の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する能動的市民性

地域と世界の課題を重ね合わせた探究において、解決困難な課題に向き合う実践者と協働し、能動的市民性を育成する。その過程で自己の夢とも重なる在り方生き方の涵養にも繋げる。

(B) 立場・価値観の違いによる深刻な分断や対立を止揚する協働的ネットワーク構築力

福島や世界で生じている分断や対立を、対話を通じた協働へと止揚する力を育成する。

(C) 地域の資源を見出した上で、知識や想像力を発揮し、世界に新たな価値を創造する力

連携機関と協議しループリック項目「A社会的課題に関する知識・理解」を改訂し、文理融合した高度な学術的知見を活用してイノベーションを創出する力を育成する。また、イノベーションの基盤となる創造力の育成に教育課程の特例を活用した教科芸術における「演劇I」をはじめ教科横断で取り組むとともに、カリキュラムの柱となる「未来創造探究」では、現状や課題を起点とした課題解決力(フォアキャスト思考)のみならず、自己が理想とする社会像を思い描いた上で逆算し新たな価値を創造する力(バックキャスト思考)を育成する。

*詳細については【参考資料1 ふたば未来学園人材要件ループリック】を参照

このふたば未来学園が掲げる3つの人材像はWWL事業の趣旨・目的で掲げるイノベーティブでグローバル

な人材像と合致する。福島の創造的復興を担う人材には内発的イノベーションを起こすグローバル人材としての資質・能力が不可欠であり、このことなくして真の復興は成しえない。

(2) AL ネットワークの目的と役割

ふたば未来学園中学校・高等学校を本事業の拠点校として「福島アドバンスト・ラーニング・ネットワーク」(以下、「福島AL ネットワーク」)を形成し、これまでの研究開発の成果をさらに発展させ、以下の4つの目的を掲げる。このネットワークによって、福島県内の高校生たちが単独校では得られない高度な学びの場を獲得するとともに、時間や場所の制約を超えた探究的な学びを実現する。

- ① 本県から東北地区に展開するグローバル人材育成AL ネットワークの形成
- ② 探究を軸としたカリキュラムの編成と海外研修、事業協働機関(大学)と連携したアドバンストプレイシメント(以下、「AP」とする)を体系的に位置づけたカリキュラム開発
- ③ F-REIをはじめ地域や全国・海外で世界と協働しながら課題解決に貢献するイノベティブでグローバルな人材の育成
- ④ 「教育」と「創造的復興による持続可能な地域実現」の相乗効果創出

また、AL ネットワークの役割としてネットワーク参加校、事業協働大学(東北大学・早稲田大学・福島大学)、F-REI をシームレスに繋ぐ(縦のネットワーク)とともに、事業拠点校と福島県内の中核校を中心とした事業連携校(県内外のSSH校、併設型中高一貫校や国際バカロレア校等)が協働する(横のネットワーク)ことで、縦と横の強固なネットワークを構築し、世界と協働して福島から内発的なイノベーションを創出する人材育成のための強固なプラットフォームとする。

具体的には、事業拠点校及び事業連携校においてSGH・「グローバル型」・SSH事業での研究開発の成果をさらに発展させ、探究を軸としたカリキュラム編成と、大学と連携したAPの導入によるグローバル人材育成のカリキュラムを構築する。また、管理機関を中心として、事業拠点校・事業連携校・事業協働機関で研究・開発の成果や情報を共有し、協働する体制を構築する。

(3) 短期的、中期的及び長期的な目標

短期(3年)、中期(5年)、長期(10年)の3つの時期に分けて目標設定を行う。

○ 短期的な目標(WWL 指定3年以内=令和5~7年度)

文理融合した高度な学問分野との接続を強化した探究カリキュラムを開発するとともに、大学と連携したAPの導入によるグローバル人材育成のカリキュラムを構築する。その際、事業連携校とも目的と情報を共有し、一部プログラムへの参画を可能とするとともに、連携校のカリキュラム開発にもつなげる。また、本カリキュラムを修了した生徒から研究者や福島の創造的復興に貢献する人材を輩出する。具体的には高校段階の探究と大学段階の専門的な学びをシームレスにつなぐことによって、福島復興にもつながる明確な目的意識を帯びた在り方生き方を見出し、事業協働大学を始め国内外のトップ大学への進学や海外留学を志す生徒を各年度30名輩出する。

○ 中期的な目標(WWL 指定5年後=2028年まで)

WWL事業指定終了後もプラットフォームが機能し、事業連携校が各地区の高校のカリキュラム開発のモデルとして波及効果を創出する。また、福島AL ネットワークの質的発展により、東北地区を中心としたAL ネットワークの拡大へ繋げていく。また、地域の持続的な発展に向けた活動の連動による創造的な地域の実現と将来的な地域への人材還流のモデルの形成を進めていく。

○ 長期的な目標(10年後=2033年まで)

F-REIをはじめ、地域や全国・海外で世界と協働しながら活躍する人材の輩出に繋げる。将来地域に戻った人材が、福島国際研究教育機構をはじめとしたイノベーション・コースト構想推進の中核を担い、内発的な人材と世界の研究者の協働による双葉郡復興を実現していくことを目指す。

2 AL ネットワークの形成 【3ページ（ページ番号3～5）で記載すること】

(1) AL ネットワーク運営組織

管理機関は以下の構成員からなる福島AL ネットワークを形成し、主要な構成員による福島AL ネットワーク推進会議を管理機関に設置する。本事業の構想目的・年度計画の策定・事業の運営、達成状況の評価・見直しのため、各機関責任者及び担当者による定期的な会議を開催する。

【福島AL ネットワーク】

○管理機関：福島県教育委員会（福島AL ネットワーク事務局、責任者：県教育長）

○事業拠点校：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

○事業連携校：

[県内事業連携校5校] 福島県立福島高等学校、福島県立安積高等学校、福島県立会津高等学校、福島県立会津学鳳中学校・高等学校、福島県立磐城高等学校

[県外事業連携校2校] 宮城県仙台二華中学校・高等学校、山形県立東桜学館中学校・高等学校

[国外事業連携校3校] 国連国際学校（アメリカ・ニューヨーク）、
エルンスト・マッハ・ギムナジウム（ドイツ・ミュンヘン）、
ブロッカウス・バイ・インター・ディ・エット（ニュージーランド・オークランド）

○事業協働機関：東北大学（高度教養教育・学生支援機構と協定締結予定）

早稲田大学（協定文書あり：早稲田大学環境総合研究センターとの間で締結、
福島大学

福島国際研究教育機構(F-REI)（予定）*

福島イノベーション・コースト構想推進機構

NPO 法人カタリバ双葉みらいラボ（以下、「カタリバ」）

* F-REI 設置に際しての「国際教育研究拠点に関する最終とりまとめ(R2.6)」では「シームレスな形の人材育成」のため「ふたば未来学園中学校・高等学校が本拠点に積極的に参画できる機会を設ける」ことが示されている。

(2) 関係機関の情報共有体制

本事業が円滑かつ適切に遂行されるよう、管理機関は以下の会議体を主催し、関係機関全体で情報を共有する。管理機関が調整役となり、事業拠点校と連携機関または連携機関同士をつなぎ、互いに協議する場を設定することにより、研究開発を行う環境を整える。また、管理機関は関係機関と連携をした上で、生徒の合同発表会や教員研修に係る実施計画を立案し、事業拠点校や事業連携校に周知する体制を整える。さらに、管理機関は情報共有のためのオンライン上のプラットフォームを整備する。（詳細4（2）参照）

1) 福島AL ネットワーク推進会議

主要な機関の長により、事業の内容や計画・進捗に関する情報を共有するとともに、専門的かつ総合的な観点から、各取り組みの方向性を決定する。なお、別途実務担当者会を設置する。

[会議の参加者]・管理機関 ・事業拠点校 ・事業協働機関 ・カリキュラムアドバイザー

2) 事業拠点校・連携校連絡協議会

推進会議で決定した方向性を受け、事業の内容や計画を共有し、実施方法等について具体的に各校校長及び担当者間で協議する。また、事業拠点校の研究開発の内容や各校での取組について協議することにより、各校のカリキュラム開発につなげる。

[会議の参加者]・管理機関 ・事業拠点校 ・事業連携校

3) 先取り履修（AP）に関する協議会

先取り履修実施の準備段階にかかる事業協働機関との調整や計画立案、実施後の実施状況、成果及び課題を共有することで、先取り履修事業が円滑かつ適切に遂行できるようにする。

[会議の参加者]・管理機関 ・事業拠点校 ・事業協働機関（大学）

(3) 修了生の国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進に向けた計画

生徒の主体的な探究を軸として以下の事業を実施し、本事業の修了後も世界をフィールドにより高度な探究を継続するマインドと意思を育成し、国内外のトップ大学等への進学希望者を増加させることを目指していく。

①プロジェクト型海外研修・留学生ツアー

カリキュラムに位置付けた形で、生徒が自ら計画を立案し実践を行うプロジェクト型海外研修や海外の大学生向け留学生ツアーを行う。国際機関職員や海外の大学生と福島での探究で見出した課題意識をグローバル・イシューと重ね合わせ、持続可能な世界の実現に向けた議論を行う機会を設定することで、世界をフィールドとして探究するマインドと意志を育成する。（詳細3（4））

②海外留学等の促進

事業拠点校では、中学校での海外修学旅行（ニュージーランド・オークランド）を実施し、幅広い生徒へ海外で学ぶ意欲を涵養する。また、文部科学省のトビタテ！留学 JAPAN プログラム等による海外研修派遣事業を活用した海外留学を全校体制で後押しするとともに、プログラムに参加した生徒が後輩たちのメンターとなって更なる留学生輩出の後押しとなる学校文化を形成し、海外トップ大学進学を促す体制を構築する。

③AP にむけての環境整備

事業拠点校と事業連携校は東北大学と連携した AP の導入を行う。東北大学の全学教育科目である「学問論演習」と「総合的な探究の時間」等を連携させ、研究の手法やアカデミックスキルを身につけさせる。また、東北大学みらい型「科学者の卵養成講座」での自然科学における最先端の学習体験・実験経験・国際的英語力を1年間にわたって継続的に取り入れるプログラムへの参加枠の設定も検討する。高度な AP プログラムを受講した生徒が協働大学進学後の単位認定を行うとともに、大学の総合型選抜をはじめとした入試で問われる資質・能力を育成することで高大接続の流れを強固にする。

④より高度な内容を学びたい高校生のための環境整備

管理機関は協働機関と連携し、事業拠点校と事業連携校を対象としたオンライン講座受講環境を整備する。オンライン講座は協働機関である東北大学 MOOC や早稲田大学等の講義を検討する。

⑤連携校における国際バカロレアに基づいたカリキュラム開発を AL ネットワークで共有する

国際バカロレア（International Baccalaureate、IB と略記）の MYP（中等教育プログラム、Middle Years Programme）に基づくカリキュラムの思想（重要概念、関連概念、グローバルな文脈を把握した上での探究テーマの設定や問いの設定方法）を参考とし、グローバル・イシューの解決に向けた教科横断による学際的な学びの実践につなげる。

（4）カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置計画

管理機関は、事業拠点校を中心として組織的にカリキュラム開発を行うため、管理機関に福島 AL ネットワーク事務局専任の教育課程担当指導主事を配置するとともに、カリキュラムアドバイザーを配置し、事業拠点校の探究を軸としたカリキュラム開発への指導・助言や、事業連携校のカリキュラム開発への取組状況について、指導・助言を行う。また、高校教育課長が事務局全体を統括し、これまで全県の学びの変革を担ってきた主任指導主事が事務局実務を統括する体制とする。さらに、管理機関における全県の「学びの変革」を推進する担当課（教育総務課）と連携し、福島県全体が目指す学びの変革の方向性と合致させたカリキュラム開発を進めるとともに、AL ネットワークでの取組を全県に波及させていく。

さらに、事業拠点校校舎内に併設され、SGH 事業・「グローバル型」事業指定8年間にわたり、カリキュラム開発や実際の探究学習の指導を事業拠点校とともにやってきた NPO 法人カタリバと密接な協働を行う。イノベティブなグローバル人材の育成を目指したカリキュラム開発や探究学習の効果的な指導方法の研究開発・教員研修を行うために、カタリバと管理機関におけるカリキュラムアドバイザー、教育総務課、拠点校が密に連携・協働をしていく。また、カタリバは管理機関・拠点校とともに連携校の教員研修も担当することとし、カタリバ双葉みらいラボに認定ワークショップデザイナー資格を有するカリキュラム専門家を配置する。

（5）テーマと関連した高校生国際会議等の開催に向けた計画

WWL 指定最終年度の R7 年初夏～初秋の時期に「創造的復興～レジリエンスとイノベーション～（仮）」をテーマとした高校生国際会議を事業拠点校を会場として開催する。R5 年度は高校生国際会議の準備組織を構成するに際し、本事業で育成をめざす資質・能力を事業拠点校・事業連携校連絡協議会で規定し、実施に向けたロードマップを作成する。高校生国際会議の準備組織については、事業拠点校及び事業連携校から生徒を募集し、R5 年度内に生徒実行委員会を組織する。生徒実行委員会は、国際会議の名称の決定、企画立案、会議時に実施する海外生徒向け双葉郡ツアー、WEB ページの開設等の準備を生徒主体で行う。準備等に当たっては管理機関が準備のための調整を行い、課外活動のコーディネートを海外機関との連携実績・知見を有する NPO 等に依頼し、連携して生徒の指導やプログラムの具体的企画を進めていく。

高校生国際会議のプログラムの内容や規模については、管理機関がF-REI や国連関係者等の連携機関から助言を受けつつ、R5年度の事業拠点校・連携校連絡協議会で事業連携校からの意見を集約し、決定する。

また、高校生国際会議に先立つプレ会議の実施をR6年度に向けて検討する。その実施可否については、事業拠点校・連携校連絡協議会で検討する。本事業の主な活動場面は、総合的な探究の時間であることから、総合的な探究の時間にかかる成果発表会を実施する。

また、R5年度は実施拠点校であるふたば未来学園で福島県総合学科生徒研究発表会を実施し、県内の総合学科校8校（事業連携校でもある福島県立会津学鳳高等学校も含まれる）で生徒の探究成果の発表の機会とする。

なお、高校生国際会議の海外からの参加については、海外の事業連携校や、事業連携機関である大学の海外留学生や、国連本部関係者の参加に向け協議を行う。

（6）フォーラムや成果報告会等の実施に向けた計画

全県立学校担当者向けの研修会を事業期間内に設定し、成果の共有を図るほか、同コンテンツを県内の全ての教員が視聴可能なオンデマンドコンテンツとして配信する。また、双葉郡8町村の小中学校教員向け研修も実施するとともに、双葉郡の小中高生が一堂に会する探究発表の機会に高校生の発表を設定し、小中学生にとっての学びのロールモデルとしての姿を地域内に共有することで、地域全体の学びの変革につなげる。

さらには、全国の教育関係者向けのWWL事業研究成果報告会を指定最終年度のR7年1月～2月に行う。研究成果発表会の内容については、運営指導委員会の指導を受けながら、研究・開発における成果と課題についてまとめる。また、研究成果については毎年報告書にまとめ、WEBサイトで発信していく。

加えて、管理機関において、第7次福島県総合教育計画で掲げた育てたい人材像の実現をめざして、教育関係者だけではなく、児童生徒や保護者、学びを支える地域社会と意思を共有し、ともに子どもたちを支える応援団をつくっていくために、noteによる新しい公式サイト（福島県学びの情報プラットフォーム）を立ち上げる。本県の県立中・高校では、複雑な社会の課題を主体的に解決する力の育成に向けて、地域を学びのフィールドとした探究活動に力を入れているため、学びの変革に挑戦する各校の魅力ある取組や生徒の活躍を共有できるようにする。

（7）情報収集・提供等、その他の取組に関する計画

管理機関が国や海外の教育動向や先進的な取り組みの情報収集にあたり、連携校協議会等で情報共有を行う機会を提供する。その際、運営指導委員やWWL事業終了した他の管理機関等との連携を行い、その情報を県内の教員研修会等で共有する。

また、管理機関は高校生国際会議の実施にあたり、本県の生活環境部国際課と連携し、事業計画や海外から参加する生徒に係る情報共有と環境整備を行う。

3 研究開発・実践（教育課程の特例が必要となる場合はその旨詳細に記載）

【5ページ（ページ番号6～10）に記載すること】

（1）テーマとして設定するグローバルな社会課題

事業拠点校は開校当初年からのSGH事業（H27～R元年）や「グローバル」型事業（R2～4年度）で、研究開発テーマ「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」を掲げ、カリキュラムの柱である「未来創造探究」を中心とした研究開発を行ってきた。これまで「未来創造探究」では震災と原発事故で顕在化した福島の課題領域毎にゼミを編制してきた。ここまでの成果と課題の分析の結果、文理横断した学術的知見の活用に課題が見られたことから、本事業実施に際してR5年度からはゼミ編制を抜本的に見直し、より文理融合したグローバル・イシューや高度な学問分野との接続を強化する。具体的には、これまでの課題意識を引き継ぎつつ、実社会と結びついた真正（Authentic）な課題に向き合う探究・課題解決の実践を通じて、福島の核となる問い（根源的な課題 Essential Questions）と向き合い、各教科の個別の知識の中核にある「重大な観念」と、関連する概念を獲得させることを目的とし、学問分野ごとのゼミ編制とする。その際、既存の学問領域を超えて文理融合の分野横断的なゼミ編制とする。

ゼミ編制に際して、「対立・分断を超え、多様性を認め合う包摂的な共生社会の実現」や「科学技術による社会の発展と不確実なリスクへの対応」等、福島の核となる問いや重大な観念を整理しながら、探究を通じてつかみ取らせたい概念を紐付けた。同概念は「トランス・サイエンス」「ソーシャル・キャピタル」「エコシステム」等いずれもグローバル・イシューを解決するためのキー概念になる。ゼミ編制と掴み取らせたい概念は下記の通りである。

<新しいゼミ編制と想定するグローバルな社会課題> ※詳細は【参考資料2】参照

- ① 原子力災害・伝承探究ゼミ：原子力災害の教訓の後世・世界へ伝承、トランス・サイエンス
- ② 共生社会探究ゼミ：ソーシャル・インクルージョン、差別・偏見のメカニズム
- ③ 地域社会・経済産業探究ゼミ：社会イノベーションによる新たな地域産業の創出
- ④ 人間科学・文化・芸術探究ゼミ：シビック・アイデンティティ、ウェルビーイングの追求
- ⑤ 自然科学・地球環境探究ゼミ：放射能汚染からの環境回復、持続可能な社会の実現
- ⑥ スポーツ医・科学探究ゼミ：アスリート育成パスウェイ

なお、事業連携校とも、福島の核となる問い・重大な観念や探究を通じて掴み取らせたい概念を共有し、「総合的な探究の時間」の研究・開発に生かせるようにする。

（2）関係機関による先進的なカリキュラムの研究開発・実施体制

これまでの事業拠点校での研究開発の成果と課題について検討を行い、管理機関が主体となって特に以下の2点に重点を置き研究開発を行う。その際、拠点校にはカリキュラムを統括する副校長をおくとともに、カリキュラム開発を担う企画・研究開発部を設置して専任教員を6名配置し、同部署がコントロールタワーとなり全校体制で進めていく。

- ① 事業拠点校における「総合的な探究の時間（未来創造探究）」の研究・開発

○事業拠点校の研究開発・実施体制

これまでのSGH事業や「グローバル型」事業で見えてきた課題として、2つの課題がある。

【課題1】「問いのアップデート」をしながら探究テーマが深化したものの、先行研究の調査や課題解決のアクションの際の学術的なアプローチが弱い。

【課題2】すぐれた調査アクションや課題解決アクションを行いながらもそれらをまとめる際のアカデミック・ライティングのスキルが不足している。

課題1、2ともにより高度な学術的知識との接続が課題であり、事業協働機関の各大学との協働が不可欠である。そのため、これまでの模擬授業等の高大連携の枠を超え、APを含めたカリキュラム開発と、大学教員による高度な探究指導に向けた協議を進める。

また、事業拠点校では「グローバル型」事業の研究開発を通じて、探究学習の指導法を4つのルールと23の関わり方に整理し、拠点校の教員の関わりを定量的に測定した。本事業においてはこの指導法について精査・検証を進めるとともに指導法研修を行い、探究指導法を深化させる。

(探究指導法：4つのロールと23の関わり) ※23の関わりの具体については記載割愛

- ・ティーチャー・インストラクター (答を持っていて教える) :
見通しを立てる支援 (関わり①～③)、教師の経験・知識による支援 (④～⑦)
- ・ファシリテーター・コーディネーター (引き出す・つなげる) : 気づきを促し思考を深める支援 (⑧～⑬)、外部リソースとの接続による支援 (⑭～⑯)、振り返り・意味づけの支援 (⑰)
- ・ジェネレーター (生成的な参加者: Generative Participant として協働する) :
創造性を誘発させる支援 (⑱～⑳)
- ・メンター (精神的にサポートする) : 勇気づけ・応援(㉑～㉒)、個の状況に応じたサポート(㉓)

○事業協働大学との研究開発・実施体制

事業協働大学との協定を基盤として協働し、個に応じて文理横断した高度な学術的知識を学び、学んだ知識を探究で発揮していけるよう、APを構造的に位置づけたカリキュラムを構築する。

また、「未来創造探究」の6つのゼミに、各分野の大学教員をアカデミック・アドバイザーとして配置し、文理融合した高度な学問分野との接続を強化した探究カリキュラムを開発するとともに、大学教員による高度な専門知を活用した探究指導を行う。また、ふたば未来学園と早稲田大学とで専門家・地域・生徒が参加する「ふくしま学(楽)会(過去11回開催)」や「1F地域塾(現在二期目)」を引き続き共催し、多様な主体で議論を行い探究の質的向上につなげるとともに、生徒と地域の協働を加速させることで「教育」と「創造的復興による持続可能な地域実現」の相乗効果創出にもつなげる。このため、早稲田大学の研究員が週次で拠点校の企画・研究部の会議に参加しカリキュラム開発で協働するほか、生徒の探究と専門知の接続のコーディネート、アカデミック・ライティングの指導、参考文献リスト・教材の開発等で協働していく。

○その他連携機関との研究開発・実施体制

令和5年度に開設されるF-REIや、イノベーション・コースト構想推進機構等の関係機関と人材育成の方向性をすり合わせるとともに、3(1)記載のゼミにおける探究への専門家の指導等、具体的な授業連携を行う。また、海外研修においては福島県の課題と世界の課題を重ね合わせて学ぶ研修を国連本部グローバル・コミュニケーション局(DGC)シビルソサエティユニットと連携して実施する。さらには、実施拠点校に併設されるカタリバの常駐スタッフが、週次の企画・研修開発部の会議に参加し、カリキュラム開発や探究指導で密に協働していく。

② 事業連携校におけるカリキュラム研究開発

東北大学との協定を基盤として、個に応じて文理横断した高度な学術的知識を学び、学んだ知識を探究で発揮していけるよう、APを構造的に位置づけたカリキュラムを開発する。そのため、2(4)記載の教員研修を拠点校で実施する。その際、各連携校が自校のカリキュラム開発に繋げられるよう、各校からの複数名参加によるカリキュラム協議型研修(視察や座学のみならず、事業趣旨等と自校の実態を踏まえてカリキュラムの検討を行う形態)の継続的な実施を検討し、具体を拠点校・連携校連絡協議会で協議する。

また、事業連携校において、本事業のほかに国の他事業を実施している学校があり、その成果や課題についてもALネットワーク内で情報共有する体制を整える。また、SSH事業校4校にはWWL担当者を置き情報共有を図り、事業拠点校が研究・開発する文理融合カリキュラムの開発成果を、SSH事業の蓄積も踏まえながら自校のカリキュラムの見直しに活かせるように後押しする。

さらに、各校の研究・開発の成果を共有するために、事業拠点校・連携校の合同成果発表会をR7年度に行うこととし、R5・6年度はその準備期間として協議を進めていく。また、APの拠点校・連携校での単位認定について管理機関が主体となって協働大学及び各校と調整を行う。

(3) 新たな教科・科目の設定

① 教育課程の特例を活用した学校設定科目「地域創造と人間生活」の設定

教育課程の特例を活用して、総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を「地域創造と人間生活」に代替する。「産業社会と人間」は、高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告(平成5年)において具体的指導内容が提言され、この内容に十分配慮した指導が求められているが、職業の種類や特徴、職業生活の理解等において、固定的な産業や職業が想定されている。一方事業連携校ではSociety5.0の社会像と求められる人材像を踏まえ、社会において新たな価値を創

造する人材の育成を構想しており、産業や職業は創造の対象の一部である。時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成することで、狙いを損なうことなく人材の育成がより確かになるため、代替が適当であると判断する。また、新たな価値を創造できる人材を育成する目的を達成するために、以下の3つの活動を行う。

- 1) 地域でのフィールドワークやインタビュー等を通して、困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れ、主体的に新たな社会の創造に参画する自覚と態度を養う。
- 2) 各種スキル学習や地域課題の取材と演劇創作を通して、産業の発展とそれがもたらした社会の変化について多面的かつ協働的に考察し、望ましい社会と生活を創造していく能力を養う。
- 3) 自己の能力・適性、興味・関心等と、地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と実社会の課題を重ね合わせ、自己の将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。

② 教育課程の特例を活用した高等学校教科「芸術」における学校設定科目「演劇Ⅰ」の創設

探究を軸としたカリキュラム編成と、大学と連携したAPの導入による人材育成と関連させ、イノベーションの基盤となる創造力の育成を更に進めるため、演劇教育を進める。これまでの研究開発を通じて探究をはじめとした各種学習において生徒たちの「創造力」に課題がみられたことに加え、イノベーションによる新たな産業の創造や新たなまちづくりが求められる地域の実態に照らしても、さらなる「創造力」育成の強化が求められる。このことから「芸術系教科・科目が、子供たちの創造性を育む上でも大切な役割を担っている（中央教育審議会答申（H28.12））」ことを踏まえ、芸術科教員及び演劇担当教員が中心となり本校ルーブリックを改訂し、教科芸術と各教科等が連携した一層の「創造力」育成の強化に着手している。これまで以上に、演劇教育の成果・蓄積を十分生かすため、R6より研究開発のテーマと関連した教科・科目として、教科「芸術」に学校設定科目「演劇Ⅰ」を設定し必履修科目の1つとして選択可能とする。その際「演劇Ⅰ」においては「学習指導要領第7節 芸術」「第1款 目標」に照らし、教科の特性に応じた内容の系統性及び体系性に配慮した学習としつつ、芸術必履修科目の単位数を確保し、内容事項は芸術各科目の内容及び内容の取扱いを参照し適切に実施する。

また、全国にALネットワークを広げていくWWL事業の趣旨を踏まえ、全県・全国の参考となるよう「芸術」における「演劇Ⅰ」設定による資質・能力の育成について研究開発を進めていく。

③ 外国語も用いたグローバルな課題の学び

設定済み学校設定科目の内容を組み替え、外国語を用いたグローバル・イシューについての学びを強化する。中学校に時数増して設定している「グローバル・スタディ科」では事業協働大学や事業連携校（海外）とオンラインで結んだCLIL（Content and Language Integrated Learning）による学びを展開する。また、高校においては英語科のうち「総合英語演習」で、新たに配置する外国人講師とのグローバル・イシューに関するディスカッション型の高度なCLILの授業を展開する。また、英語書籍の精読やディスカッションを教育課程の内外で行う。さらに、「未来創造探究」においても文理融合授業を展開する。これまで「未来創造探究」の課題設定期に展開してきた「社会科×福島学」「理科×福島学」のインプットの講座について、より福島の課題を教科横断的に学ぶため、協働大学と協議して授業内容の改変を行う。その際、ゼミ編制時に検討した探究を通じてつかみ取らせたい「概念」として規定した「トランス・サイエンス」「ソーシャルキャピタル」等の概念を様々な教科の見方・考え方でとらえていく授業の研究・開発を進める。

（4）カリキュラムに位置づけられた短期・長期留学や海外研修

短期・長期留学については、文部科学省のトビタテ！留学JAPAN等を活用しながら積極的に海外留学に取り組ませている。その際、海外留学に行った生徒が高校に戻ってきた際に卒業に不利にならないように、海外での学習の成果の校内の単位履修について校内体制を整える。

海外研修については、事業拠点校は国連本部DGCシビルソサエティユニット、国連国際学校、エルンスト・マッハ・ギムナジウム、ブロックハウス・ベイ・インターメディアエットと連携し、探究を軸としたカリキュラムに体系的に位置づける形で毎年訪問し、福島と世界の課題を重ね合わせた探究を深化させるカリキュラムを編成する。海外研修は生徒自らプログラムを作成する「プロジェクト型海外研修」を実践する。コロナ禍に実践してきた国内代替研修やオンライン国際交流の研究の蓄積を生かし、海外連携校とのオンラインでの日常的な交流と、生徒がコンフォートゾーンから海外のストレッチゾーンに出て五感も駆使して行うコミュニケーションと協働の経験とを有機的につないだ資質・能力の育成と探究深化につながる海外研修を実施する。また、連携する東北大学の留学生を招いた双葉郡ツアーもプロジェクト型で実施し、福島復興を発

信するとともに、福島の課題と世界の課題を重ね合わせて議論を深め、資質・能力の育成につなげていく。

事業連携校においても、同様の観点からプロジェクト型海外研修を推進する体制を構築して海外研修を実施し、プロジェクト型海外研修が他校でも効果的なカリキュラムとなり得るよう実証していく。具体的には連携校の中からプロジェクト型海外研修の研究・開発を行う学校を1校選定し、3年間の研究・開発を行う。また、事業連携校の渡航先については、事業拠点校と重ならない国・地域とし、様々なグローバル・イシューについての学びが共有できるようにする。

<事業拠点校における海外研修の趣旨>

- ニューヨーク研修：国際機関や現地住民との交流の中で福島を発信するとともに、持続可能な社会づくりを世界で活躍する同世代の人と共に考え、協働して未来を創造する。
- ドイツ研修：環境先進国であるドイツの持続可能なまちづくりについて学ぶ。また、ダッハウ強制収容所を訪れ、歴史的な教訓伝承の在り方を学び、現地の高校生と意見交換を行う。
- ニュージーランド研修：中学校の探究の成果である「福島の魅力」を同世代に発信し、交流の中で異文化コミュニケーション等についての課題を意識して高校での学習に繋げる。

(5) バランスよく学ぶ教育課程の編成

事業拠点校の教育課程については、総合学科の特徴を生かし、3系列の特色が出る教育課程となっている。スペシャリスト系列・トップアスリート系列の教育課程については、各系列の専門教科の時数を確保しながら、幅広い進路選択が可能となるよう選択科目を多く配置した教育課程となっている。また、スペシャリスト系列（商業・農業・工業・福祉）のすべての1年次生が受講する学校設定科目「スペシャリスト基礎」と、トップアスリート（バドミントン・サッカー・野球・レスリング）系列の生徒が受講する学校設定科目「トップアスリート概論」を設定し、専門領域に閉じることなく広く専門性を生かした実社会での課題解決やスポーツ医・科学等を学び、より高度な学びにつながるカリキュラムとなっている。アカデミック系列の教育課程については、各教科科目を幅広く選択できる編成となっている。地歴公民科では理系の生徒にも「倫理」を選択可能とし、トランス・サイエンス（科学と人間社会の関係性）やエコシステム（自然を人間の関係）を課題解決のカギ・見方考え方として定義した。また、文系の生徒には「応用数学」でデータ・サイエンスを取り入れた授業を選択科目として設定した。

(6) 工夫された学習活動の実施に向けた計画

各学習が探究を軸として資質・能力の育成と在り方生き方の涵養に繋がるよう下記の工夫を行う。

- 事業拠点校における「未来創造探究」（総合的な探究の時間）

「未来創造探究」については、事業協働大学と協働してカリキュラム開発を行う。特に評価方法について、生徒が学びを振り返るポートフォリオを開発し、探究学習とAPを含めた各教科等の学習が自己の探究学習や、在り方生き方にどう結び付き、どのような変容が生まれたのか等を体系的に蓄積できるように進める。併せて、探究学習の多面的な評価法について研究を進める。

- 先行事例の調査やアカデミック・ライティングの強化等探究の高度化に対する計画

早稲田大学よりR3年度から常駐リエゾンマネージャー（ポスドクの研究者）を事業拠点校に常駐させ、生徒達と地域・専門家との学びの接点をよりきめ細やかにコーディネートしてきた。今後は新たに協働大学となる東北大学の知見も生かしながら、探究ゼミや探究を通じてつかみ取らせたい「概念」ごとの参考文献リスト・教材の作成や、プレゼンテーション・卒業論文におけるアカデミック・ライティングの指導を進める。

- 外国人指導者等によるグローバル課題に関する探究指導および英語ライティングスキルの育成強化により、高度な英語活用力を育成する授業の展開

ネイティブの教員による3(3)③記載の高度な英語活用力育成の指導を行い、培われた力を高校生国際会議や海外研修で発揮するカリキュラムの構造を構築する。

(7) 大学教育の先取り履修の実施に向けた計画

R5年度より先取り履修に向けての環境整備を行う。管理機関と事業協働機関である東北大学との間でR5年3月に連携協定を締結し、R5年度中に先取り履修に関する調整や計画立案を行い、R6年度から実施することを目指していく。具体的には、2(3)③記載の通り、同大学の学部横断型授業「学問論演習」との連携を検討する。「学問論演習」においては、約70のテーマでの演習に取り組む大学生との合同履修や合同発表会も検討していく。また、APの検討においては連携校生徒の受講と単位認定も可能となるよう調整を

行っていく。その他、領域横断的な発想力と科学の眼を兼ね備えた国際的に活躍する科学技術人材を育成する東北大学のみらい型「科学者の卵養成講座」等との連携も検討していく。R6年度からの先取り履修実施後は、実施状況、受講者数、単位取得率等の情報を収集し、協働大学と実施上の成果及び課題を共有することによって、先取り履修が円滑かつ適切に遂行できる体制を整える。なお、事業連携校との関わりや、大学の科目等履修の受講料の取扱いについても今後関係機関との調整を行っていく。

(8) より高度な内容を学びたい高校生のため事業拠点校・共同実施校の条件整備

管理機関は協働機関と連携し、オンライン講座受講環境を整備する。オンライン講座は協働機関である東北大学 MOOC 等の活用やより高度な教養科目（データサイエンス関連科目や言語等）を検討する。また、早稲田大学グローバル・エデュケーション・センターの全学科目「環境問題と持続可能な社会」「エネルギーと原子力を考える」等の特別聴講生としての受講や、早稲田大学と拠点校共催の 1F 地域塾等の機会での研究者との議論の機会を2か月に1回程度設けていく。

その際、拠点校と連携校においては、各生徒の特性や学習進度、学習到達度等に応じた学校外の学修の単位認定の検討も行い、個別最適な学びを実現していく。また、併せてカリキュラム・オーバーロードに配慮し、個に応じて高校の科目履修を弾力化し、大学講座の学習時間確保も含めた指導の個別化を可能とする環境整備も検討していく。

(9) 留学生の受け入れ及び体制の整備

拠点校は国が実施しているアジア高校生架け橋プロジェクト（AFS）の留学生を毎年受け入れ、過去5年で6か国7名の留学生を迎えてきた。学習面では総合学科の特色を生かし、留学生の興味関心に基づき、普通教科に加え農業・工業・商業・福祉等実生活に即した実践的な内容を学ぶことができる。また、所属するクラスにバディを設け、日常生活のサポートを行うとともに探究学習や部活動にも取り組ませる等様々な経験を積み、本校生徒と交流しながら相互に学び合える仕組みとしている。また、中学校が併設されている強みを生かし、中・高両方の国語の授業に参加して日本語の学習を強化し、毎年日本語能力試験を受験させている。生活面では、英語科教員が中心となり、AFS 協会やホストファミリー等との連絡調整を密にして相談環境を確保している。

また、今後事業連携校（海外）からの短期留学・学校交流受入を調整している。ブロックハウス・ベイ・インターメディアエット・スクール（ニュージーランド・オークランド）とは姉妹校提携を調整するほか、国連国際学校からは同校の特色を背景として（109か国・地域の生徒が在籍、半数が各国国連職員子弟）多様な国のリーダーを目指す留学生を福島で受け入れていく。

4 実施体制の整備【3ページ（ページ番号11～13）で記載すること】

(1) 管理機関によるALネットワークの整備

管理機関の下、拠点校を中心として以下の連携校及び協働機関とともに福島ALネットワークを形成し、目的と情報を共有しながら探究を軸としたカリキュラム開発に取り組む体制を整備する。

【福島ALネットワーク】

○管理機関：福島県教育委員会（福島ALネットワーク事務局、責任者：県教育長）

○事業拠点校：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

○事業連携校：

[県内事業連携校5校] 福島県立福島高等学校（SSH）、福島県立安積高等学校（SSH）、
福島県立会津高等学校、福島県立会津学鳳中学校・高等学校（SSH）、
福島県立磐城高等学校

[県外事業連携校2校] 宮城県仙台二華中学校・高等学校、
山形県立東桜学館中学校・高等学校（SSH）

[国外事業連携校3校] 国連国際学校（アメリカ・ニューヨーク）、
エルンスト・マッハ・ギムナジウム（ドイツ・ミュンヘン）、
ブロックハウス・ハイインターナショナル（ニュージーランド・オークランド）

○事業協働機関：東北大学、早稲田大学、福島大学
福島国際研究教育機構（F-REI）、福島イノベーション・コースト構想推進機構
NPO 法人カタリバ双葉みらいラボ

拠点校においては、これまでのカリキュラム研究開発を通じて、生徒全体の探究に取り組む文化（探究を通じた変化、R3年度卒業生「具体的進路選択への影響66.9%」「在り方生き方の涵養87.4%」）と、教職員が学校全体の授業改善に取り組む文化が浸透（探究指導前後での変化、R4.9本校教員調査「教職員間の協働や日常の話し合い71%」「新しい取り組みへの実践の前向きさ54%」）しており、本事業の研究開発を通じて更に深化させる。拠点校では従来、人文科学系の探究プロジェクトが中心であったことから、その取組を補完する観点から、連携校のSSH事業における知見の蓄積を生かして、文理横断した高度な学びを目指すカリキュラム開発につなげて行く。

また、拠点校ではこれまで多くの学校視察を受け入れてきた知見から（R4年度は2月末時点で350名強が来校）学校視察で得た気付きや知見を一部の教員だけで自校に持ち帰り学校改革に繋げるには多くのハードルがあると認識している。そのため、3(2)②記載のカリキュラム協議型研修を開発し、R4年度より一部学校の研修を受け入れてきた。本事業においては、連携校向けの教員研修を拠点校で実施するとともに、拠点校は連携校を訪問して研修を行うことを検討する。

他方、連携校のうちSSH指定4校に対しては、管理機関は既存プロジェクトも含めた複数の取組を実施するための体制の確認を行うとともに、福島県立の事業連携校においてもカリキュラム改革や教員の指導力向上に繋がるよう、教員研修やカリキュラム開発についての環境整備を行っていく。

(2) 管理機関による情報共有体制の整備

本事業が円滑かつ適切に遂行されるよう、管理機関は以下の会議体を主催する。

1) 福島ALネットワーク推進会議（年2回程度実施）

主要な機関の長により、事業の内容や計画・進捗に関する情報を共有するとともに、専門的かつ総合的な観点から、各取り組みの方向性を決定する。なお、別途実務担当者会を設置する。

[会議の参加者]・管理機関：責任者（県教育長）、学びの変革推進担当（教育総務課長）、事務局統括（高校教育課長）、カリキュラムアドバイザー等

・事業拠点校：校長、カリキュラム統括（副校長）、担当（企画・研究開発部）

・事業協働機関：東北大学担当副学長、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・センター長、福島大学担当幹部

F-REI 担当幹部、福島イノベーション・コースト構想推進機構教育・人材育成部長、
NPOカタリバ双葉みらいラボ拠点長

2) 事業拠点校・連携校連絡協議会（年2回程度実施、初年度については3回実施予定）

推進会議で決定した方向性を受け、事業の内容や計画を共有し、実施方法等について具体的に各校校長及び担当者間で協議する。また、事業拠点校の研究開発の内容や各校での取組について協議することにより、各校のカリキュラム開発につなげる。また、事業拠点校と事業連携校の担当教員が相互訪問し情報共有を図る。

[会議の参加者]・管理機関：事務局統括（高校教育課長）、カリキュラムアドバイザー等
・事業拠点校：校長、カリキュラム統括（副校長）、担当（企画・研究開発部）
・事業連携校：校長、WVL 担当
・事業協働機関：NPO 法人カタリバ双葉みらいラボ拠点長

3) 先取り履修 (AP) に関する協議会 (随時)

先取り履修実施の準備段階にかかる事業協働機関との調整や計画立案、先取り履修実施後の実施状況、成果及び課題を共有することによって、先取り履修事業が円滑かつ適切に遂行できるようにする。

[会議の参加者]・管理機関：学びの変革推進担当（教育総務課長）、事務局統括（高校教育課長）、カリキュラムアドバイザー等
・事業拠点校：校長、カリキュラム統括（副校長）、担当（企画・研究開発部）
・事業協働機関：東北大学担当副学長等
※ 必要に応じて事業連携校代表の参加も求める

さらに、管理機関は、クラウドサービス (Google Workspace for Education) の特長を生かし、行事予定の共有、各種文書・資料等の共同編集等、情報共有のためのプラットフォームを整備する。また、管理機関においては、2 (6) 記載の通り教育関係者向けの研修会や発表会を開催するとともに、児童生徒や保護者、地域社会向けの新しい公式サイトを立ち上げ情報を発信する。

(3) 管理機関の長や事業拠点校等の校長の役割

管理機関の長である福島県教育長は福島 AL ネットワークを形成するとともに管理機関内に福島 AL ネットワーク事務局を設置し、国内外の連携校や大学等に協力を要請し、高度な学習環境を整備し、全県の学びの変革に位置付けた形で本事業を推進する。また、県内のみならず東北全域や全国への成果の普及に努める。県教育総務課長は全県の学びの変革推進の方向性との調整や連携機関との調整を行い、事務局を統括する県高校教育課長はカリキュラムアドバイザー等を指揮して拠点校・連携校へ指導・助言を行い、本事業を推進する。

事業拠点校の校長及び副校長は、スクール・ポリシーと方向性を合致させながら拠点校におけるカリキュラム開発を進めるとともに、管理機関や連携校に必要な情報を提供し、連携校のカリキュラム開発を支援する。また、本事業の成果を本県の WVL 関係校以外にも普及させるため、県教育委員会が主催する研修会等へ協力する。

(4) 運営指導委員会や検証組織の設置及び運営に向けた計画

管理機関に「運営指導委員会」及び「検証委員会」を設置し、本事業の実施に際し、専門的見地から指導・助言を得る。運営指導委員の人選については、とりわけ Education2030 プロジェクトで世界の教育情勢をリードしてきた経済協力開発機構 (OECD) 等の事業に参画した有識者からの知見は大変貴重であり、WVL 事業で目指すべきイノベティブでグローバルな人材を育成するために引き続きご指導いただけるように準備を進める。また、拠点校の「総合的な探究の時間」を柱とするカリキュラム・デザインを更に進めていくために、カリキュラム開発や教育政策、イノベーション創出等に関する知見を有する下記専門家3名に依頼する。

(運営指導委員)

鈴木 寛 東京大学公共政策大学院教授 (教育政策、公共政策の視点)

田熊 美保 経済開発協力機構 (OECD) 教育局教育訓練政策課シニア政策アナリスト
(教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030 の視点)

田村 学 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授
(総合的な探究の時間の指導、カリキュラム研究の視点)

本事業の成果検証に関しては、「グローバル型」事業において実施してきたルーブリック評価に新たな指標を取り入れながら、定期的に測定し、次年度以降のカリキュラム検討に活用する。検証組織について、検証委員会を組織し、年1回の検証会議を実施する。検証委員は、これまで SGH 指定5年と「グローバル型」

事業の3年間の計8年間にわたり、事業拠点校のルーブリック評価の定量分析を担ってきたアクセンチュア株式会社と一般社団法人次世代教育・産官学民連携機構に依頼する。事業拠点校は両組織による定量分析をもとに研究開発の見直しを図っていく。

(5) 事業拠点校等の卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向けた計画

管理機関においては、高校卒業後の大学生等の若者と地域のつながりを創出する仕組みを構築するために、進学先や連絡先等を収集し、若手人材の連携体制や若手人材と地域をつなぐプラットフォームを構築する計画がある。本取り組みとも関連させ、WWL 事業修了生のイノベティブなグローバル人材としての変化について追跡調査を行う仕組みを検討する。

具体的には、拠点校において本事業修了生の卒業時にルーブリックの資質能力及び在り方生き方の涵養について調査を行った上で、同意を得て収集するメールアドレスに対して卒業後一定期間経過後に調査を送信し回答を得る。卒業までの3年間の経年変化及び卒業3年後（大学在学相当年次）及び5年後（大学卒業相当年次）の追跡調査を検討する。その際、イノベティブなグローバル・リーダーとしての資質・能力（本校ルーブリック）、在り方生き方の意識、グローバルな活動の経験有無等を調査することを検討し、運営指導委員の助言を受けて具体を検討する。

また、事業拠点校にある地域協働スペース双葉みらいラボは校外の方の利用が可能であり、定期的に卒業生同士が在校生も交えて自身の研究・探究を共有するイベント「卒業したって探究は続くんです！」が開催されている。加えて、卒業生は生徒をより深い探究へと導く重要なメンターとして、毎年30名程度が来校している。こうした環境を生かして、卒業生への定性的なインタビュー調査の実施も検討する。

なお、上記検討の際は研究上の効果と学校現場の調査負荷を見極め、管理機関の支援のもとワーク・ライフ・バランスに配慮した形で有効な調査を実施し、研究開発と波及につなげて行く。

(6) 留学生等の学習や生活の支援体制

事業拠点校においては、国が実施している「アジア高校生架け橋プロジェクト」の留学生をこれまで例年2名程度受け入れており、今後も受け入れる予定である。管理機関は、留学生等の学習や生活について、福島県生活環境部国際課や公益財団法人福島県国際交流協会と連携しながら、支援していく。福島県国際交流協会には、外国人相談窓口があり、生活の相談や申請に関する手続き等について、多言語に対応できる体制が整っている。また、日本語の学習や地域のイベント、各市町村の国際交流協会で行っていることについて情報提供を行うことができる。

また、留学生の地域理解の機会として、管理機関で主催する福島県高等学校英語プレゼンテーションコンテストへ招待することを計画している。本コンテストは、福島の未来を担う高校生が英語でプレゼンテーションを行い、日本や世界の課題、国際理解・国際協力、ふくしまの復興や将来像等に関する自分たちの意見や考え、メッセージを県内外に広く発信することを通して、社会問題に関する理解を一層深め、福島の復興への関心を更に高めるとともに、英語による発信能力の向上及びグローバル人材の育成を図ることを目的に毎年、開催されている。このコンテストに留学生を招待し、コンテストに参加した本県生徒と意見交換等を行うことで、地域理解の一助とすることができる。

さらに、本県の生活環境部国際課と連携して、留学生が本県生徒とともに本県文化や原子力災害の復興について理解を深めていく国際交流の機会を創出することを検討し、事業拠点校と協議を行う。

5 財政支援等【1ページ（ページ番号14）で記載すること】

（1）自己負担額の支出計画

研究開発による事業拠点校及び事業連携校のカリキュラム改革を加速していくために、管理機関は「福島県東日本大震災子ども支援基金」を財源に、事業拠点校及び事業連携校の生徒に対するカリキュラムに位置付けた海外研修経費の一部を補助する。

なお、原子力災害からの避難による影響等が続く本地域の事情に加え、現下のコロナ禍、ウクライナ戦争、原油高、円安等により海外研修の生徒自己負担が大幅に高騰していることを踏まえ、より多くの生徒が参加可能なよう管理機関負担額を積み増している（コロナ禍前のR元年度の海外研修では生徒自己負担額を5～10万円程度に設計していた）。WWL 指定期間中（R5～7年度）は旅費での負担は極力コロナ禍前と同様となるよう、プログラムを工夫するとともに管理機関として支援を行う。

また、管理機関においてはこれまで活用してきた上記基金等を継続的に支出していく。

（2）人的または財政的な支援、研修やセミナー等の実施に向けた計画

管理機関は事業拠点校と連携を取りながら事業を推進するとともに、拠点校が単独で対応することが困難な場合には、他課への依頼も含めて連絡調整を取りながら支援体制を整える。人的または財政的支援については具体的に以下のような支援体制となる。

①人的支援

- ・教育課程担当指導主事を専任で配置するとともに、カリキュラムアドバイザーを配置する
- ・拠点校に教員の加配を行い、研究開発が円滑に進むように支援する
- ・英語によるライティングスキルやプレゼンテーション技法指導のために、グローバル・イシューの内容面の指導も可能な外国人講師を拠点校に加配して配置する
- ・イノベーションの基盤となる創造力の育成のために、演劇の専門家を教員採用試験の特別選考枠で採用し、拠点校に加配して配置する

②財政的支援

- ・（1）記載の WWL 事業にかかる財政的支援を行う

また、管理機関は2（7）記載の通り、事業拠点校や事業連携校に対して、イノベティブな人材育成に資するカリキュラム開発や探究学習の指導方法などについて、国や海外の研究成果や事例、課題等を報告することを通じて研究開発を支援し、同取組を県内の教員研修等で共有する。加えて、管理機関は拠点校における研究成果発表会において、探究の指導方法等に関する研究協議の場を設定し、拠点校・連携校とともに研究開発結果の分析を深めていく。

さらには、本県の事業として、大学教授・地域人材・大学生等の外部人材を積極的に活用しながら、リーダーの資質をもつ高校生や英語による発信能力をもつ高校生の育成、探究学習・SDGs の視点を踏まえた教育の充実を図る取組への支援や、拠点校の取組を学びながら自校の体制やカリキュラムを構想する教員向けの研修プログラムを実施することを計画している。

（3）支援期間終了後の事業の継続的な実施に向けた計画

1（1）に記載した通り、福島の創造的復興を担う人材には内発的イノベーションを起こすグローバル人材としての資質・能力が不可欠であり、このことなくして真の復興は成しえず、事業拠点校の社会的役割は大きい。また、AL ネットワークによる高度な学びの場が広がっていくことが、分厚い人材育成、ひいては福島の創造的復興へと繋がっていく。そのため、管理機関としては WWL 指定終了後も事業拠点校を中心として県内の高校で高度な学びを実現するために、大学や企業、福島イノベーション・コースト構想推進機構、R5年4月に設立される福島国際研究教育機構（F-REI）等の協働機関との連携を発展させ、協働しながら、福島県の「学びの改革」推進事業の中核として取組を継続していく。そのため、F-REI の設立後に速やかに具体の協議に入り、初等中等教育段階からのシームレスな人材育成体制を構築していく。

6 ワーク・ライフ・バランスの推進【1ページ（ページ番号15）で記載すること】

（「ワーク・ライフ・バランス等の推進に関する評価」における認定等又は内閣府男女共同参画局長の認定等相当確認通知がある場合は、その写しを添付すること）

福島県教育委員会では、R4年度から第7次福島県総合教育計画の施策2に『「学校の在り方の変革」によって教員の力、学校の力を最大化する』を掲げ、教職員の働き方改革を最重要課題として、その推進に取り組んでいる。子どもたちと教職員のウェルビーイング（一人一人の多様な幸せ及び社会全体の幸せ）の実現のためにも、「教職員多忙化解消アクションプランⅡ」をより実効性のあるものに改定するとともに、「福島県立学校に勤務する教育職員が業務を行う時間の上限に関する規則」を遵守することにより、県教育委員会を中心に各所属の管理職がリーダーシップを発揮し、教職員の多忙化解消に取り組んでいる。

本プランの目標で「時間外勤務時間月80時間を超える教職員の割合を0%かつ月45時間を超える教職員の割合を3分の1以下にする」としており、重点取組テーマとして、①働き方と勤務の在り方変革事業の推進、②部活動の在り方の見直し、③統合型校務支援システムの効果的な運用、④モニタリング校支援事業の推進の4つを掲げている。

特に、重点取組テーマの①では、県立学校を対象に、PBL型（Project Based Learning：自ら課題を見つけ出し、課題解決につなげる手法）の業務改善を促進したり、重点取組テーマの④では、「アクションプランⅡ実践モニタリング校」を指定し、アクションプランⅡの取組状況と教職員の勤務時間についてモニタリングを行い、時間外勤務時間の削減を推進したりするなど新たな取組を行っている。

事業実施計画書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福島県福島市杉妻町2番16号
管理機関名 福島県教育委員会
代表者名 教育長 大沼 博文

1 事業の実施期間

契約締結日 ～ 令和6年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

学校長名 郡司 完

3 構想名 原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成

4 構想の概要

拠点校が所在する福島県双葉郡は東日本大震災および原発事故という、人類が経験したことがないような複合災害にみまわれ、解決困難な様々な課題に直面した。原子力災害からの教訓の伝承や放射能汚染からの環境回復などの福島固有の社会課題と差別・偏見のメカニズムや持続可能な社会の実現などのグローバルな課題を重ね合わせ、その解決に向けてより探究的で文理融合した高度な学習プログラムの研究・開発・実践・検証を国内外の連携校や大学・福島国際研究教育機構などの研究機関と協働しながら進める。「福島ならではの」教育の充実を通して、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへと変革する「学びの変革」を実現する。この「学びの変革」を通じて、地域の「創造的復興」や全国・海外で協働しながら福島の創造的復興を担う内発的イノベーションを起こすグローバル人材の輩出に繋げ、教育と復興の相乗効果を創出する。

5 令和5年度の構想計画（本事業における教育課程の特例の活用：有）

(1) 福島アドバンストラーニング（以下、「AL」）ネットワーク運営組織の構築

事業協働機関や事業連携校が主体性を持って関わり合えるように、管理機関が①～③において、調整・指導助言を行っていく。特に、大学との先取り履修（アドバンストプレイスメント（以下、「AP」））や事業拠点校と事業連携校における取組の共有において、連携していく。

①福島ALネットワーク推進会議（年3回）の開催

管理機関に設置する。主要な機関の長により、事業の内容や計画・進捗に関する情報を共有するとともに、専門的かつ総合的な観点から、各取組の方向性を決定する。なお、別途実務担当者会を設置する。対面またはオンライン会議の開催とする。

[参加者]・管理機関 ・事業拠点校 ・事業協働機関 ・カリキュラムアドバイザー

②事業拠点校・連携校連絡協議会（年3回）

推進会議で決定した方向性を受け、事業の内容や計画を共有し、実施方法等について具体的に各校校長及び担当者間で協議する。また、事業拠点校の研究開発の内容や各校での取組について協議することにより、各校のカリキュラム開発につなげる。

[参加者]・管理機関 ・事業拠点校 ・事業連携校

③先取り履修（アドバンストプレイスメント（以下、「AP」））に関する協議会（年3回）

AP実施の準備段階に係る事業協働機関との調整や計画立案、実施後の実施状況、成果及び課題を共有することで、APが円滑かつ適切に遂行できるようにする。

[参加者]・管理機関 ・事業拠点校 ・事業協働機関（大学）・事業連携校

(2) 研究開発・実践

④テーマとして設定するグローバルな社会課題

- 1) 【原子力災害・伝承探究ゼミ】 (原子力災害の教訓の後世・世界へ伝承、トランス・サイエンス)
- 2) 【共生社会探究ゼミ】 (ソーシャル・インクルージョン、差別・偏見のメカニズム)
- 3) 【地域社会・経済産業探究ゼミ】 (社会イノベーションによる新たな地域産業の創出)
- 4) 【人間科学・文化・芸術探究ゼミ】 (シビック・アイデンティティ、ウェルビーイングの追求)
- 5) 【自然科学・地球環境探究ゼミ】 (放射能汚染からの環境回復、持続可能な社会の実現)
- 6) 【スポーツ医・科学探究ゼミ】 (アスリート育成パスウェイ)

これらのゼミは、既存の学問領域を超えて文理融合の分野横断的な編制としており、生徒の多様な興味・関心に対応することができる。掲げている資質・能力については、事業拠点校の人材要件ルーブリックで、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つの評価の観点を決めている他、ルーブリックによる自己評価の妥当性を確認するために、探究の指導教員によるルーブリック面談を行っており、探究ステージに応じた評価の観点を設定して運用している。また、「原子力災害からの創造的復興について」等の福島ならではのテーマを共通のテーマとして掲げ、連携校にも探究学習に組み込んでもらえるよう調整していくとともに、様々な地域でも取り組むべき普遍的なテーマとなるように研究・開発を進めていく。また、高校生国際会議の共通テーマとしていくことを検討する。

⑤事業拠点校における「総合的な探究の時間（未来創造探究）」の研究開発・実施体制

事業協働機関の各大学と協働して、個に応じた文理横断した高度な学術的知識を学び、学んだ知識を探究で発揮していけるよう、APを含めたカリキュラム開発と、大学教員による高度な探究指導に向けた協議を進める。また、探究学習として行っている地元企業との商品開発等やNPO法人との協働をスペシャリスト系列の授業とも連動させながら、さらに継続的なものとしていく。さらに、ふたば未来学園と早稲田大学とで専門家・地域・生徒が参加する「ふくしま学（楽）会」や「1F地域塾」を引き続き共催し、多様な主体で議論を行い探究の質的向上につなげるとともに、生徒と地域の協働を加速させることで「教育」と「創造的復興による持続可能な地域実現」の相乗効果創出にもつなげる。このため、生徒の探究と専門知識の接続のコーディネート、アカデミック・ライティングの指導、参考文献リスト・教材の開発等で協働していく。また、NPO法人カタリバ双葉みらいラボ（以下、「カタリバ」）の常駐スタッフが、週次の企画・研修開発部の会議に参加し、カリキュラム開発や探究指導で密に協働していく。さらに、これまで開発した探究学習の指導法について精査・検証を進め、探究指導法を深化させる。

また、生徒が探究学習とAPを含めた各教科等の学習が自己の探究学習や、在り方生き方にどう結び付き、どのような変容が生まれたのか等を体系的に蓄積できる学びを振り返る方策を研究・開発する。併せて、探究学習の多面的な評価法について研究を進める。

⑥教育課程の特例を活用した学校設定科目「地域創造と人間生活」の設定

総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を「地域創造と人間生活」に代替し、以下の3つを目標とする。

- 1) 主体的に新たな社会の創造に参画する自覚と態度を養う。
- 2) 各種スキル学習や地域課題の取材と演劇創作を通して、社会の変化について多面的かつ協働的に考察し、望ましい社会と生活を創造していく能力を養う。
- 3) 自己の夢と実社会の課題を重ね合わせ、自己の将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。

⑦教育課程の特例を活用した高等学校教科「芸術」における学校設定科目「演劇」の創設

イノベーションの基盤となる創造力の育成を更に進めるため、演劇教育を進める。令和6年度より研究開発のテーマと関連した教科・科目として、教科「芸術」に学校設定科目「演劇」を設定し必履修科目の1つとして選択可能とする。その際「演劇」においては「学習指導要領第7節 芸術」「第1款 目標」に照らし、教科の特性に応じた内容の系統性及び体系性に配慮した学習としつつ、芸術必履修科目の単位数を確保し、内容事項は芸術各科目の内容及び内容の取扱いを参照し適切に検討する。また、全県・全国の参考となるよう「芸術」における「演劇」設定による資質・能力の育成について研究開発を進めていく。

⑧外国人指導者等によるグローバル課題に関する探究指導および英語ライティングスキルの育成強化により、高度な英語活用力を育成する授業の展開

外国語を用いたグローバル・イシューについての学びを強化する。「総合英語演習」で、新たに配置する外国人講師とのグローバル・イシューに関するディスカッション型の高度なCLIL (Content and Language Integrated Learning) の授業を展開し、英語書籍の精読やディスカッションを教育課程の内外で行う。また、「未来創造探究」においても文理融合授業を展開する。協働大学と協議して授業内容の改変を行う。培われた力を高校生国際会議や海外研修で発揮するカリキュラムの構造を構築する。

⑨バランスよく学ぶ教育課程の編成

スペシャリスト系列・トップアスリート系列の教育課程については、各系列の専門教科の時数を確保しながら、幅広い進路選択が可能なるよう選択科目を多く配置した教育課程となっている。アカデミック系列の教育課程については、各教科科目を幅広く選択できる編成となっている。

⑩事業連携校における「総合的な探究の時間」のカリキュラム研究開発

東北大学との協定を基盤として、個に応じた文理横断した高度な学術的知識を学び、学んだ知識を探究で発揮していけるよう、APを構造的に位置づけたカリキュラムを開発する。そのための教員研修を拠点校で実施する。その際、各連携校が自校のカリキュラム開発に繋げられるよう、各校からの複数名参加によるカリキュラム協議型研修の継続的な実施を検討し、具体を拠点校・連携校連絡協議会で協議する。また、県内SSH事業校3校にはWWL担当者を置き情報共有を図り、事業拠点校が研究・開発する文理融合カリキュラムの開発成果を、SSH事業の蓄積も踏まえながら自校のカリキュラムの見直しに活かせるように後押しする。さらに、各校の研究・開発の成果を共有するために、事業拠点校・連携校の合同成果発表会を令和7年度に行うこととし、令和5・6年度はその準備期間として協議を進めていく。特に、SSH校における探究と教科の往還についての取組を共有できるようにする。また、APの拠点校・連携校での単位認定について管理機関が主体となって協働大学及び各校と調整を行う。

⑪連携校における国際バカロレア（International Baccalaureate、以下「IB」）に基づいたカリキュラム開発をALネットワークで共有する

IBのMYP（中等教育プログラム、Middle Years Programme）に基づくカリキュラムの思想（重要概念、関連概念、グローバルな文脈を把握した上での探究テーマの設定や問いの設定方法）を参考とし、グローバル・イシューの解決に向けた教科横断による学際的な学びの実践につなげる。

⑫大学教育の先取り履修の実施に向けた計画

事業拠点校と事業連携校は東北大学と連携したAPの導入を行う。同大学の学部横断型授業「学問論演習」との連携を検討する。「学問論演習」においては、約70のテーマでの演習に取り組む大学生との合同履修や合同発表会も検討していく。また、APの検討においては連携校生徒の受講と単位認定も可能となるよう調整を行っていく。東北大学のみらい型「科学者の卵養成講座」等との連携も検討していく。令和6年度からの先取り履修実施後は、実施状況、受講者数、単位取得率等の情報を収集し、協働大学と実施上の成果及び課題を共有することによって、先取り履修が円滑かつ適切に遂行できる体制を整える。なお、事業連携校との関わりや、大学の科目等履修の受講料の取扱いについても今後関係機関との調整を行う。

⑬より高度な内容を学びたい高校生のため事業拠点校・事業連携校の条件整備

管理機関は協働機関と連携し、オンライン講座受講体制を整備する。オンライン講座は協働機関である東北大学MOOC等の活用やより高度な教養科目（データサイエンス関連科目や言語等）を検討する。また、早稲田大学グローバル・エデュケーション・センターの全学科目「環境問題と持続可能な社会」「エネルギーと原子力を考える」等の特別聴講生としての受講や、早稲田大学と拠点校共催の1F地域塾等の機会での研究者との議論の機会を2か月に1回程度設けていく。

その際、拠点校と連携校においては、各生徒の特性や学習進度、学習到達度等に応じた学校外の学修の単位認定の検討も行い、個別最適な学びを実現していく。また、併せてカリキュラム・オーバーロードに配慮し、個に応じた高校の科目履修を弾力化し、大学講座の学習時間確保も含めた指導の個別化を可能とする体制整備も検討していく。

⑭教員研修の実施

カリキュラム開発や探究学習の効果的な指導方法の研究開発・教員研修を行うために、カタリバと管理機関、カリキュラムアドバイザー、教育総務課、拠点校が密に連携・協働をしていく。また、カタリバは管理機関・拠点校とともに連携校の教員研修も担当することとし、カタリバに認定ワークショップデザイナー資格を有するカリキュラム専門家を配置する。また、全県立学校担当者向けの研修会を事業期間内に設定し、成果の共有を図るほか、同コンテンツを県内の全ての教員が視聴可能なオンデマンドコンテンツとして配信する。さらに、双葉郡8町村の小中学校教員向け研修も実施するとともに、双葉郡の小中高校生が一堂に会する探究発表の機会に高校生の発表を設定し、小中学生にとっての学びのロールモデルとしての姿を地域内に共有することで、地域全体の学びの変革につなげる。

(3) 海外研修や海外留学及び高校生国際会議

⑮海外事業連携校と連携した海外研修・留学生ツアー

探究を軸としたカリキュラムに体系的に位置づける形で毎年訪問し、福島と世界の課題を重ね合わせた探究を深化させるカリキュラムを編成する。海外研修は生徒自らプログラムを作成する「プロジェクト型海外研修」を実践し、ニューヨークの国連本部を訪れるとともに、協働大学の留学生を招いた双葉郡ツアーもプロジェクト型で実施し、福島復興を発信する。また、福島と世界の課題を重ね合わせて議論を深め、資質・能力の育成につなげていく。さらに、ドイツ研修においては、環境問題やエネルギー問題、「厄災での教訓を後世に伝える」伝承のあり方など共通の課題について交流する。また、両校とも「演劇」を活用して発信する授業に取り組んでいることから、オンラインでの発表会なども想定している。ニュージーランドとの協働については、グローバル・イシューに関するディスカッション型の高度なCLILの授業を英語の授業や課外活動でも展開していく。

⑯事業連携校における海外研修

県内の事業連携校においてもプロジェクト型海外研修を推進する体制を構築して海外研修を実施し、プロジェクト型海外研修が他校でも効果的なカリキュラムとなり得るよう実証していく。具体的には連携校

の中からプロジェクト型海外研修の研究・開発を行う学校を1校選定し、3年間の研究・開発を行う。また、事業連携校の渡航先については、事業拠点校と重ならない国・地域とし、様々なグローバル・イシューについての学びが共有できるようにする。

⑰海外留学等の促進

事業拠点校では、中学校での海外修学旅行（ニュージーランド・オークランド）を実施し、幅広い生徒へ海外で学ぶ意欲を涵養する。また、文部科学省のトビタテ！留学 JAPAN プログラム等による海外研修派遣事業を活用した海外留学を全校体制で後押しするとともに、プログラムに参加した生徒が後輩たちのメンターとなって更なる留学生輩出の後押しとなる学校文化を形成し、海外トップ大学進学を促す体制を構築する。

⑱留学生の受け入れ及び体制の整備

拠点校は国が実施しているアジア高校生架け橋プロジェクト（AFS）の留学生を毎年受け入れており、学習面・生活面ともにサポート体制を整えている。今後は事業連携校（海外）からの短期留学・学校交流受入を調整し、ブロックハウス・ベイ・インターメディアット・スクール（ニュージーランド・オークランド）とは姉妹校提携を調整する。国連国際学校からは同校の特色を背景として（109 개국・地域の生徒が在籍、半数が各国国連職員子弟）多様な国のリーダーを目指す留学生を福島で受け入れていく。

⑲テーマと関連した高校生国際会議等の開催に向けた計画

令和7年度初夏～初秋の時期に高校生国際会議を事業拠点校を会場として開催する。令和5年度は、本事業で育成をめざす資質・能力を事業拠点校・事業連携校連絡協議会で規定し、実施に向けたロードマップを作成する。生徒実行委員会を組織し、国際会議の名称の決定、企画立案、会議時に実施する海外生徒向け双葉郡ツアー、WEBページの開設等の準備を生徒主体で行う。管理機関が準備のための調整を行う。なお、高校生国際会議の海外からの参加については、海外の事業連携校や、事業連携機関である大学の海外留学生や、国連本部関係者の参加に向け協議を行う。

(4) 実施体制の整備

⑳運営指導委員会の開催

本事業の実施に際し、以下の運営指導委員より専門の見地から指導・助言を得る。9月及び1月に開催する。

氏名	所属・職	備考
鈴木 寛	東京大学公共政策大学院教授	教育政策、公共政策の視点
田熊 美保	経済開発協力機構（OECD）教育スキル局教育訓練政策課シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030の視点
田村 学	國學院大學人間開発学部初等教育学科教授	総合的な探究の時間の指導、カリキュラム研究の視点

㉑検証委員会の開催

3月に開催し、検証委員は、アクセンチュア株式会社と一般社団法人次世代教育・産官学民連携機構に依頼する予定である。事業拠点校は両組織による定量分析をもとに研究開発の見直しを図っていく。

(5) 広報・普及

㉒報告書の作成及びホームページへの掲載

研究成果については毎年報告書にまとめ、WEBサイトで発信していく。

㉓県内外への発信

管理機関において立ち上げたnoteによる新しい公式サイト（福島県学びの情報プラットフォーム）において、本事業の取組を発信していく。

(6) 財政等の支援

㉔自己負担額の支出計画

管理機関は「福島県東日本大震災子ども支援基金」を財源に、事業拠点校及び事業連携校の生徒に対するカリキュラムに位置付けた海外研修経費の一部を補助する。

㉕人的または財政的な支援、研修やセミナー等の実施に向けた計画

管理機関に教育課程担当指導主事とカリキュラムアドバイザーを配置したり、事業拠点校への教員や外国人講師、演劇の専門家を加配したりする。事業拠点校や事業連携校に対して、カリキュラム開発等を県内の教員研修や拠点校における研究成果発表会等で共有する。

㉖支援期間終了後の事業の継続的な実施に向けた計画

WWL 指定終了後も事業拠点校を中心として県内の高校で高度な学びを実現するために、大学や企業、福島イノベーション・コースト構想推進機構、福島国際研究教育機構等の協働機関との連携を発展させ、協働しながら、福島県の「学びの改革」推進事業の中核として取組を継続していく。

<添付資料>

- 令和5年度教育課程表

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
①福島ALネットワーク推進会議	福島県教育庁等	福島県教育委員会教育長
②事業拠点校・連携校連絡協議会	事業拠点校	福島県教育委員会教育長
③先取り履修（AP）に関する協議会	福島県教育庁、協働機関	福島県教育委員会教育長
④～⑨カリキュラム研究開発	事業拠点校	事業拠点校校長
⑩事業連携校のカリキュラム開発	事業連携校	事業連携校校長
⑪国際バカロレアに基づいたカリキュラム開発	事業連携校	福島県教育委員会教育長
⑫、⑬高大接続	事業拠点校、事業連携校、協働機関	福島県教育委員会教育長
⑭教員研修	事業拠点校等	福島県教育委員会教育長
⑮～⑰事業拠点校における海外研修等	事業拠点校等	事業拠点校校長
⑱事業連携校における海外研修	事業連携校等	事業連携校校長
⑲高校生国際会議の準備	事業拠点校等	福島県教育委員会教育長
⑳運営指導委員会	事業拠点校等	福島県教育委員会教育長
㉑検証委員会	事業拠点校	福島県教育委員会教育長
㉒～㉓広報・普及	事業拠点校等、福島県教育庁	事業拠点校等校長、福島県教育委員会教育長
㉔～㉖財政等支援		福島県教育委員会教育長

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（契約締結日～令和6年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①福島ALネットワーク推進会議			○			○				○		
②事業拠点校・連携校連絡協議会			○			○				○		
③先取り履修（AP）に関する協議会	○			○							○	
④～⑨カリキュラム研究開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑩事業連携校のカリキュラム開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑪国際バカロレアに基づいたカリキュラム開発				○								
⑫、⑬高大接続	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑭教員研修						○			○			
⑮～⑰事業拠点校における海外研修等										○		○
⑱事業連携校における海外研修				○								
⑲高校生国際会議の準備	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑳運営指導委員会						○				○		
㉑検証委員会												○
㉒～㉓広報・普及	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
㉔～㉖財政等支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

8 再委託先の無

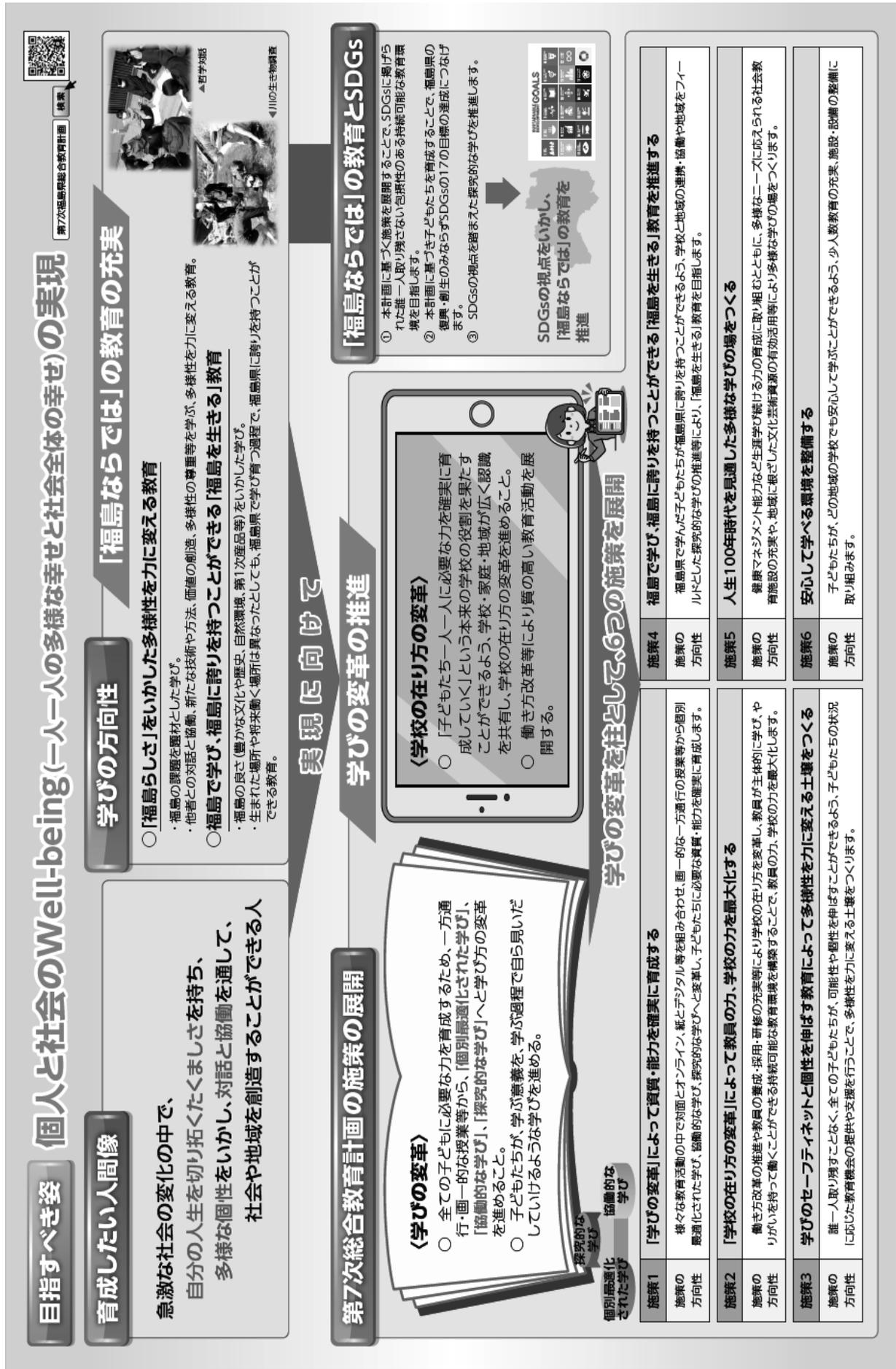
9 所要経費

別添のとおり

【担当者】

担当課	福島県教育庁高校教育課	TEL	024-521-7773
氏名	赤岡 奈津美	FAX	024-521-7973
職名	指導主事	E-mail	akaoka.nastumi@fcs.ed.jp

2.1 第7次福島県総合教育計画の概要



「学びの変革」実現のためのストラテジー

(令和5年度 福島県教育委員会 主要施策)

— 「学びの拡張推進プラン」を進めていくための令和5年度主要施策 —

「福島ならではの」教育の充実を通じて、急激な社会の変化の中で自分の人生を切り拓くたくましさを持ち、多様な個性をいかし対話と協働を通して社会や地域を創造することができる人材を育成し、個人と社会のwell-beingを実現する。<第7次福島県総合教育計画の推進>

1 「学びの変革」実現戦略

- (1) 「授業」を中心に据えた「学びの変革」の実現
エビデンスに基づく学力向上（ふくしま学力調査事業） 89,483千円
外部専門家の参画も得つつ県学力向上対策会議を開催し、各市町村のふくしま学力調査の結果を踏まえた学力向上策を推進。
学力向上支援アドバイザーの配置【新規】 10人
学力向上支援アドバイザーを新たに配置し、県内各地の小中学校を定期的に訪問することで授業改善を促進。
教科担任制追加の配置増【拡充】 43→69人
教科の専門性を高め、専門性の高い教科指導を行うために、小学校高学年における教科担任制を推進。
ふくしま高校生学びの革新支援事業【拡充】 17,714千円
短期大学の志者を対象とした合同学習会の開催及び理数教育や思考力等を育む取組等の支援で学びの革新を推進。
- (2) これからの時代に求められる新しい学びへの挑戦
コミュニケーション教育の推進 4,515千円
遠隔教育や対話を通じて、自己表現力や他者を理解する力を養成。
豊かな体験活動の推進（チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業） 166,658千円
県立関連学習や多様な体験活動を推進し、幅広い教習を推進するとともに、主体的に履修に寄与する子どもを養成。
情報化社会に対応した人材の育成【拡充】
高等学校「情報科」の指導体制の充実やICTを活用した「未来の教室」の実現、「自分手帳」のデジタル化、
世界で活躍する人材育成の推進（WWL、海外留学支援）【新規・拡充】 18,886千円
「アット・フット・テック・エッジ」の形成や海外大手への留学準備プログラムにより世界で活躍できる人材を養成。
福島イノベーション・コースト構想を担う人材の育成 86,221千円
福島国際研究教育機構の設立も見据え、理数教育、専門教育の充実等、初等中等教育段階からチームメレスに人材育成。
- (3) 非認知能力を高める幼児教育の充実
ふくしま幼児教育研修センターの設置【新規】 10,804千円
幼児教育研修センターの設置により、公私・施設類型を超えた就学前教育の充実と小学校教育との円滑な接続を実現。
幼児期からの運動習慣形成【新規】 7,503千円
プレイリーダーの育成による運動遊びの実践普及によって、幼児期からの運動習慣を形成。
- (4) 一人一人の認知特性等に合った特別支援教育の充実
地域で共に学び、共に生きる教育の推進【拡充】 36,962千円
特別支援教育アドバイザーの配置（10校）や認知特性・アセスメント等に係る研修の充実。

3 「変革」を支える基盤の整備

ICTスキルハンドブックの作成・周知【新規】
福島県版ICTスキルハンドブックの周知及びハンドブックに基づく研修の充実。

543千円

2 「学校の在り方の変革」実現戦略

- (1) 多様性を力に変える学校への変革
個別支援教育の推進【新規・拡充】 7,469千円
個別支援教育コーディネーターの県立高校への配置（9校）や、高校内に「生徒の居場所」を設置。
不登校への学習支援体制の構築・強化【新規・拡充】
不登校児童生徒支援センターを設置しオンラインを活用した不登校支援を行うほか、ZOOM研修・1対1の設置等。
生徒参画による校則の見直し
生徒指導課等の改訂を踏まえ、学びの題材としての校則の見直しを推進。
学びのセーフティネットとしての特別支援教育の充実【新規・拡充】
長期入院児童生徒のための入院児童生徒支援員の配置や通級指導導入校の充実、視覚支援学校幼稚園の新設。
- (2) 魅力ある学校への変革
探究を軸とした魅力ある学校づくり（ふくしまを創る若者のアソビナラム構案）【新規】 42,810千円
地域向けに推進員を県内7地域に配置し、若手・地域人材を育成し「アソビナラム」が「A」化することで、地域課題探究活動を推進。
震災と復興を未来へつむぐ語り部の育成 18,162千円
地域課題探究活動や国内外への情報発信を通じて震災からの復興を自らの言葉で語ることでできる高校生を養成。
特色化推進による魅力ある学校づくり
普通科コース制の拡充や、スクールミッション・スクールポリシーの策定推進、地域みらい留学の受入れ拡大を検討。
統合校の魅力化・特色化の推進【新規・拡充】 479,995千円
改体計画に基づく再編を進めながら、地域とのつながりを維持し地域の魅力を発信するほか、空き校舎等への対応を検討。
- (3) 働き方と勤務の在り方の変革
多忙解消アクションプランIIの推進
モニタリング校の状況分析を踏まえ多忙解消アクションプランIIの取組を進めることで業務改善を推進。
働き方と勤務の在り方の変革につながる人事配置等の見直し
初任等の人事配置の見直しや単身赴任の解消等、業務に集中できる環境を整備するとともに、女性管理職の登用を促進。
中学校における休日の部活動地域移行の推進【拡充】
会津若松（運動部）に加え文化部のモデル地区を指定するとともに、指導員の配置を拡充。
各種大会・コンクール等の精選
大会等に係る実務調査を実施するとともに、大会・コンクールの精選を推進。

チーム学校を支える体制強化【拡充】

副校長の配置増（24→26名）、主幹教師の配置増（49→56名）やICT支援員など専門人材の配置等、学校を支える体制を整備。
学び続ける教師のための研修環境整備
免許更新制の発効を踏まえ、研修履修に基づく受講奨励の実施と合わせて研修内容の充実と充実化を推進。
社会に開かれた戦略的な教育情報の発信【新規】
メディアアットフォーオームnoteによる新しい公式サイトを開設し、児童生徒や保護者、地域社会への情報発信を強化。

2.2 福島アドバンスト・ラーニング・ネットワークの構築

1 福島アドバンスト・ラーニング・ネットワーク（以下、「福島ALネットワーク」）について

（1）事業拠点校

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

（2）県内事業連携校

福島県立福島高等学校、福島県立安積高等学校、福島県立会津高等学校、福島県立会津学鳳高等学校・中学校、福島県立磐城高等学校

（3）県外事業連携校

宮城県仙台二華中学校・高等学校、山形県立東桜学館中学校・高等学校

（4）事業協働機関

福島国際研究教育機構（F－R E I）、東北大学、早稲田大学、福島大学、認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ

2 管理機関主催会議及び研修会について（令和6年2月15日現在）

（1）第1回福島ALネットワーク推進会議実務担当者会（オンライン）

期日：令和5年6月19日（月）16：00～17：30

内容：令和5年度事業実施計画及び進捗状況等について

東北大学との連携について

今後の予定について

（2）第1回福島ALネットワーク推進会議（オンライン）

期日：令和5年7月20日（木）10：00～11：30

内容：令和5年度事業実施計画及び進捗状況について

東北大学との連携について

高校生国際会議の進め方について

WWL事業アンケート調査について

第1回事業拠点校及び事業連携校連絡協議会について

教員研修について

（3）第2回福島ALネットワーク推進会議実務担当者会（対面）

期日：令和5年8月22日（火）14：00～15：30
内容：カリキュラム開発の目的と教員研修の位置づけについて
事業連携校のカリキュラム開発及び教員研修の全体像について
教員研修について

(4) 第1回事業拠点校・事業連携校連絡協議会（ハイブリッド）

期日：令和5年9月4日（月）14：30～16：00
内容：令和5年度WWLコンソーシアム構築支援事業の概要について
事業拠点校の取組について
県内及び県外事業連携校の取組について
東北大学との連携について
その他の取組について

(5) 第1回運営指導委員会（オンライン）

期日：令和5年11月28日（火）15：00～16：30
内容：令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の取組について
令和5年度事業実施計画について
令和5年度事業実施状況について
協議「生徒が自分で計画を立て、その学び方を自覚するメタ認知能力をいかに獲得させるかについて」
運営指導委員による指導助言

(6) 第1回教員研修会（対面）

期日：令和5年12月5日（火）10：00～16：30
内容：事業拠点校の「総合的な探究の時間（未来創造探究）」の見学
講義／ワークショップ「資質能力を伸長させるための探究カリキュラムづくりのポイント」
各校協議及び参加校同士の意見交換

(7) 第2回運営指導委員会（オンライン）

期日：令和6年2月13日（火）16：00～17：30
内容：令和5年度事業実施状況について
令和6年度事業実施計画について
協議「文理融合・教科横断的なカリキュラムの開発について」
運営指導委員からの指導助言

第3章 拠点校の研究開発の内容・活動実績

3.1 地域創造と人間生活（高校1年次）

3.1.1 課題を知る学習

本校の地域創造と人間生活は、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①では自分史やマインドマップを用いた自己理解を通して、将来を見据えてありたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③ではイラクでエイドワーカーとして活躍する高遠菜穂子氏などの協力で、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、未来創造探究に繋げてきた。中高一貫生が高校に入学して2年目となる今年度は、学びのさらなるバージョンアップを目指し、探究のスタートアップをさらに3ヶ月早め、夏休み明けから実施し、演劇と探究の接続を丁寧に行った。

(1) 実施内容

① 地域創造と人間生活 オリエンテーション

新入生への課題として「自分史」を実施し、これから地域やそこで生きる人々と出会う前に自分のこれまでの人生を振り返ってもらった。入学式後すぐに、クラスの関係性作りのためのコミュニケーションWSを実施。その後この授業のオリエンテーションを行った。改めてこの学校が設立された経緯や、この授業で身に付けてほしい力について共有した。そして、これから地域と出会う前のイントロダクションとして、双葉郡の紹介を丁寧に行った。

身に付けて欲しい力

目標

地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を育成する。

社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う

地域社会の変化を多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく

自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、主体的に学び続ける能力と態度を養う

② 双葉郡8町村バスツアー

日時：4月28日（金）終日

講師：

1号車	檜葉町 広野町	磯辺吉彦（広野わいわいプロジェクト）
		青木裕介（広野ふらっとあっと）
		平山将士（一般社団法人ならはみらい）
2号車	富岡町	青木淑子（富岡町3.11を語る会）
		平山 勉（ふたばいんふお）
		明石重周（J-Village）
3号車	双葉町	半谷裕明（双葉高校野球部OB）
4号車	葛尾村 川内村	下枝浩徳（一般社団法人葛力創造舎）
		一般社団法人かわうちラボ
5号車	双葉町 大熊町	佐藤真喜子（一般社団法人おおくままちづくり公社）
		南郷市兵（大熊町立学び舎ゆめの森）
		増子啓信（大熊町立学び舎ゆめの森）
6号車	浪江町	柴口正武（元なみえ創成中教諭）

行程：

1号車 檜葉町・広野町

【午前：檜葉】

みんなの交流館ならは CANvas 着 ～ 檜葉町案内(み

るーる天神、J-Village、笑ふるタウンならは) ～ 地域活動拠点施設「まざらっせ」見学 ～ 藍染め体験及び地域住民との対話

【午後：広野】 柏屋にて昼食、広野周辺散策

2号車 富岡町

富岡高校 ～ 富岡町周辺案内 ～ 学びの森(青木先生の口演) ～ ふたばいんふお(昼食) ～ とみおかアーカイブミュージアムへ ～ J-Village ～ 学校

3号車 双葉町

双葉駅周辺(Overalls 壁画アート)～ 双葉高校 ～ 双葉町産業交流センター(昼食)～ 東日本大震災・原子力災害伝承館見学

4号車 葛尾村・川内村

【午前：葛尾】

葛尾村周辺案内 ～ 旧葛尾中学校校舎にて WS

【午後：川内】

村内にて昼食 ～ 川内村周辺案内

5号車 双葉町・大熊町

【午前：双葉町】 双葉駅周辺(Overalls 壁画アート) 東日本大震災・原子力災害伝承館見学

【午後：大熊町】

Link 大熊にて昼食 大熊町周辺散策(内容検討中) 学び舎ゆめの森の先生の口演

6号車 浪江町

大平山霊園 ～ 請戸小学校 ～ 請戸漁港 ～ 道の駅なみえ(昼食)～ 浪江町周辺案内(スポーツセンター、浪江駅、浪江小学校跡地、中央公園)



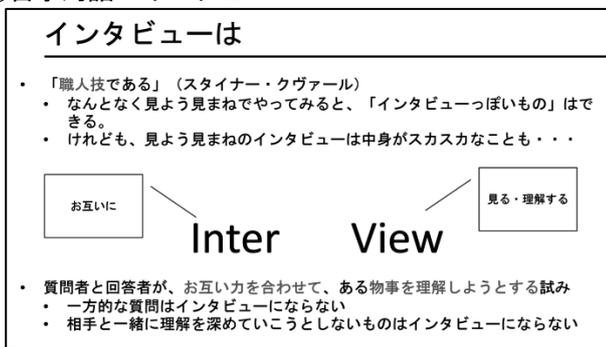
概要：

双葉郡の現状と課題を実際に自分の目で見て、この地で学ぶ意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的として、双葉郡8町村バスツアーを毎年実施している。今回は、8町村を6コースに分けて、1日かけて双葉郡を歩いた。今回は、トップアスリート系列の生徒専用のコースを作り、例えば野球部は双葉高校へ行き、野球部OBの方から直接当時の話を聞き、ふた

ば未来への想いを聴く機会を設けた。サッカー部は富岡高校を訪れ、実際に国際スポーツ科を設立した当時の校長先生から貴重なお話を聴くことができた。他にも、4月に開校したばかりの大熊町の学び舎ゆめの森を訪問するなど、これまでにない新しいコースの実現もできた。

本校には、福島県外出身者も多数在学している。事前に調べ学習を行い、実際に自分の足でその地を訪れた際に得る学びが深化したと考えられる。また、双葉郡出身者で、震災後避難して以来故郷を初めて訪れる生徒も一定数おり、バスの中から自分の家のあたりを必死で探す様子もみられた。震災以前とは様子の変わった町に驚く生徒もいたが、12年振りに故郷を見て様々なことを感じたようだ。バスツアー振り返りでは、こちらが想像したよりも生徒は多くの学びを得ていたようだ。

③哲学対話×インタビュー



演劇創作のための取材をする前に、インタビューとは何かという視点で対話を行った。開智国際大学の西山溪氏を講師に迎え、インタビューとは何か、そもそもどんな時にインタビューをするのか、インタビューにはどんなタイプがあるのか等を学び、実際にグループで役割を決めて対話型インタビューの練習を行った。実戦を通して、相手がよりリラックスして応えられるようにするため、また相手の気持ちや考えをより深く理解するためには、良い質問をすることが大事だということを学んだ。

④演劇班取材

インタビューの練習を経て、実際に演劇のための取材を行った。対話型インタビューを意識しながら、取材をすることができ、演劇創作に向けて中身の濃いインタビューを行うことができた。また、全員が役割分担をしながら主体的にインタビューに参加したことで、取材相手の地域の方々との間に良い信頼関係を築くことができた。



⑤プチ探究

夏休み明けから始まる未来創造探究に向けて、そのトレーニングとして演劇創作と並行して、プチ探究を実施

した。まずは探究のサイクルを体験してもらうため、自分の「気になるもの」を決めて、何かしらアクションをして、結果を振り返り提出するという課題を出した。1回目は6月に実施し、2回目は夏休みの宿題として実施した。テーマは自由としたため、仲間同士の知的好奇心をくすぐるものばかりとなった。夏休み明けには表彰式を実施した。

◆ベストアクション賞

「検証!『常磐線の魅力』1日で全てまわれるのか!」
「広野町の海沿いをゴミ拾い」

◆ベストクリエイター賞

「アーティストの曲名と絵を合体する」
「かわいく魔法」
「古着を使ってわんちゃんの洋服を作ってみた!」
「自分の頭の中を演劇にしてみた」
「カップケーキを作ってみた」

◆ベストラーニング賞

「適当にピアノを弾いても良い曲に聞こえるのか!」
「牛乳を使って環境にやさしいプラスチックを作ってみました!」

「他者理解への第一歩」

◆ベストリサーチ賞

「興味のある論文を読んでみた」
「STONES of Rivers〜川の石大調査〜」
「体育座りに着目してみた」
「AIを使ったボーカロイドを作ろう」
「名探偵コナンの犯罪について」
「普段の練習で女サカの皆はどれくらい集中力がつづいているのか」
「アスリートにとって大事なもの」
「十円玉を綺麗にするにはどうすればいいか実験」

◆ファーストペンギン賞

「広野の海沿いをゴミ拾い」

生徒感想より

「まずは身近なテーマでプチ探究をしてみて、とことん調べたりアクションをおこしたりすることが楽しいと思うことができた。」

「好きなことを探究することでどんどん知りたくなった。これから実際に探究が始まるが、どうせやるなら楽しんでできるように、テーマを見つけていきたい」

(2) 成果

新型コロナウイルスが第5類に移行し、完全にコロナ前のような活動ができたことは嬉しいことである。同時にコロナ禍に普及したICTを活用して学びの共有を有効に行うこともできた。プチ探究を2回実施したことで生徒たちの興味・関心を知ることができた。

(3) 課題と展望

今年は4月にバスツアーを実施し、入学後すぐに地域と出会う機会を持つことができた。生徒たちそれぞれがこの地域で学ぶ意義について考えたようである。コースの打ち合わせなどの事前準備が大変ではあるが、その分生徒たちの学びは大きいので、引き続きそれぞれの地域をより深く学ぶ機会としていきたい。

3. 1. 2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「地域創造と人間生活」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒全員が 20 班に分かれて演劇を創作し、演じた。

生徒達は課題を知る学習における双葉郡 8 町村バスツアーを通して、震災前と後の双葉郡の変容について話を聞き、地域の復興に向き合う。また、演劇の題材となる地域の課題を発見するために、事前に調べ学習をした後、地域の公共機関や商店、企業などを訪問し、フィールドワーク(FW)を行う。生徒たちは復興に携わる地域住民の内面に焦点を当ててインタビューを行い、学んだ内容を演劇創作につなげていく。演劇創作の中では、地域の方を取材し、聞いた話を持ち帰り、議論しながら双葉郡の復興のための核心的な課題を見つけ出す。それぞれが置かれる立場の違いから生じる葛藤や対立など、複雑に絡み合う事象から、解決の難しい課題があることを認識する。生徒は発見した課題や学びを、その後展開される未来創造探究(探究活動)を通じて探究することになる。今年度は哲学対話を入れた。対話を通してそれぞれが取材や演劇を通して感じたことを言語化しながら問い、深めていき、さらにリッチピクチャーを使って自分達の演劇作品を構造化し、探究への問いづくりへ繋げた。

(1) 目的

- ① 学校の所在する広野町の特色や課題の理解を深めるために、自分たちが設定した具体的な課題に基づき、地域住民や企業、公的機関、施設等への取材 (FW)を実践し、地域についての正しい知識を身につける。
- ② 対話劇を創作することで、地域の様々な立場の方々の視点で物事多面的に見つめ、そこで出てきた課題と向き合い、2年次以降の未来創造探究での活動に繋げる。
- ③ 自分達の学習の成果について、特に伝えたい内容や相手を踏まえた有効な方法を確立し、校内外での発表を通して正しく伝える。

(2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	5月2日(火)	5・6	演劇班によるWS①	○
2	5月10日(火)	終日	演劇オリエンテーション	○
3	5月23日(火)	5・6	哲学対話×インタビュー	○
4	5月30日(火)	5・6	演劇班WS② 取材先を決める	○
5	6月6日(火)	5・6	演劇創作のための取材	
6	6月20日(火)	5・6	取材の振り返り&FWに向けた準備	
7	7月4日(火)	終日	演劇創作のためのフィールドワーク	
8	7月11日(火)	5・6	演劇班WS③	○
9	7月18日(火)	5・6	演劇班WS④	○
10	7月24日(月)	終日	演劇創作WS⑤・中間発表会	○
11	7月25日(火)	終日	演劇成果発表会	○
12	夏休み		プチ探究	
13	8月22日(火)	5・6	演劇振り返り&分析・リッチピクチャー作成	○
14	8月29日(火)	5・6	哲学対話「結局、演じるとは何だったのか？」	○
15	9月12日(火)	5・6	哲学対話「みんなの問いは？」	○

(3) 講師

平田オリザ(青年団主宰 劇作家・演出家)

わたなべなおこ(劇団あなごーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)

森内美由紀(青年団・俳優、NPO 法人 PAVLIC)

宮崎 悠理(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、河野 悟(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

石本 径代(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、有吉 宣人(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

金 恵玲(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、植浦菜保子(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

村田 牧子(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、館 そらみ(脚本家・演出家)

北村 耕治(俳優、劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC)

(4) 対象生徒

1 学年生徒 148 名 20 班編成

(5) 授業内容 (抜粋)

1・2 演劇WS、オリエンテーション

昨年度に引き続き、演劇班編成にあたり、意図的にクラス・部活動・一貫生/高入生などバラバラなメンバーが混在するように工夫した。まずは班のチームビルディングのためのコミュニケーションWSを丁寧に行い、後半は演劇を通して地域課題を知ることの意義について体験を通して学んだ。身体を使ったゲームや、台本を使った短い演劇体験を通して、イメージを共有することの難しさや、人それぞれに価値観が違うことを楽しみながら学び、そこから福島の問題にも結びつけて考えた。

授業の最後には、生徒たちをシアターに集め、プロの俳優である講師の方々と、担任教員による演劇発表があった。生徒だけでなく、教員も舞台上に立って表現をする姿を見せることで、生徒たちのモチベーションに繋がればという思いから実施しているが、事前に何も知らされていなかった生徒たちは教員の登場に大いに湧き、最後まで集中して観劇を楽しんだ。演劇が学校全体の文化として浸透した成果と言える。生徒の感想には「初めてプロの演劇を観た。喜怒哀楽をはっきり表現していて格好良かった。」**「制服姿で出てきた先生方を見て、びっくりしたけど、先生たちが高校生だった頃を想像した。今までより身近に感じる事ができた。」**「伝えたいことが観客に正確に伝わるように、私も恥ずかしがらずに堂々と演じたい。」といった感想が多く、これから成果発表会に向けて大きな後押しとなった。



3 取材先を決める

演劇の班ごとに希望を取り、地域で様々な分野で復興に携わる方々の中から生徒達自身が取材希望先を選んだ。これまでお世話になった方々に加え、毎年地域との新たな繋がりも増えている。また、年々生徒たちの興味関心も深く、今年度はより明確に「この人にこのことについて聞きたい」という目的を持って取材先を選ぶ班が多い印象を受けた。取材先は右のとおり。

4・6 演劇創作のための取材・FW

演劇の題材を探す(地域の課題を発見する)ために、2回インタビューを行った。1回目は学校に来校いただき、2回目は生徒達が現地に赴いた。お話を伺うだけでなく、実際にその場所を見ることで、より強くイメージを共有することができた。

様々な試行錯誤を重ねてきたこの授業だが、地域の方々の協力なしには成立せず、今回も様々な資料等を用意してくださり、FWの際には生徒達により伝わるようにツアーを組んでくださるなど、伝え方を工夫してくださった。この場を借りてお礼申し上げたい。生徒たちは事前に調べ学習の中で考えた質問内容を演劇コミュニケ

ーションWSにて更に掘り下げたのちにインタビューを行った。ただ用意した質問をするだけでなく、相手が答えた内容からさらにストーリーを引き出すことができた。さらに、2回目に実際に現地を訪れ、語られた言葉とその場所を重ねて震災当時に思いを馳せることができたことは、その後の演劇創作に真摯に打ち込む生徒達の姿勢に繋がったと感じる。

	FW先
1班	小泉良空さん(大熊町・一般社団法人ふたばプロジェクト)
2班	松本佳充さん(浪江町・双葉高校元教員)
3班	志賀風夏さん(川内村・Café&Gallery 秋風舎)
4班	田村善孝さん(双葉町・東京電力福島復興本社)
5班	増子啓信さん(大熊町学び舎ゆめの森)
6班	鈴木謙太郎さん(楡葉町・木戸川漁協)
7班	平山 勉さん(富岡町・ふたばいんふお)
8班	明石重周さん(楡葉町・株式会社 J-Village)
9班	菅野孝明さん(浪江町・まちづくりなみえ)
10班	神崎克訓さん(大熊町・鹿島建設株式会社・除染解体作業)
11班	滝沢月子さん(富岡町)
12班	下枝浩徳さん(葛尾村・葛力創造舎)
13班	磯辺吉彦さん(広野町、ぷらっとあっと)
14班	中井俊郎さん(楡葉遠隔技術開発センター)
15班	木村紀夫さん(大熊町・大熊未来塾)
16班	田中秀昭さん (東京土木支店 東電福島遮水壁工事事務所所長)
17班	青木裕介さん(広野町、ぷらっとあっと)
18班	佐藤亜紀さん(大熊町)
19班	青木淑子さん(富岡町・3.11を語る会)
20班	柴口正武さん(元広野中学校教員)

7~10 演劇創作WS

講師陣と共に、生徒の状況を見ながら授業を組み立てた。取材内容を基に少しずつイメージを形にしていく工程を丁寧に行った。演劇創作においては、脚本を書かずグループで話し合いながらその場でシーンを創りあげた。書かれた言葉に頼らず、その場で生まれる表現を大切に、全員で合意形成を図りながら創作をすることで他者と協働する力を伸ばすことをねらいとした。

中間発表会では教員が審査員として入り、地域課題がより多角的・多面的に見えてくるよう、作品の中で足りないところをアドバイスした。視点は以下の3つである。

- ① 取材対象の心理描写だけでなく、地域課題がきちんと描かれているか。
- ② 取材対象に寄り添いすぎて、物事を一方向から見ていないか。きちんと相手の背景も描けているか。
- ③ 取材相手が何者で、どのような仕事をしているのが劇を見て分かるようになっているか。

中間発表会でのアドバイスを受けて、多くの班が作品

をガラッと変えた。その軽やかさもまた、演劇を中学3年間実施してきた生徒たちがいる学年ならではの变化だと思われる。

1.1 成果発表会

本校みらいシアターにて、成果発表会を行った。20班 20作品を4グループに分け、休憩を挟みながら終日かけて演劇鑑賞を行った。生徒はそれぞれの発表に対してワークシートにコメントを記入した。感想シートは後日誰でも見るできるように共有した。

FW先をはじめ今年度お世話になった方々にも案内を出し、発表をご覧いただき、フィードバックをいただいた。最優秀賞、平田オリザ賞、校長賞、副校長賞を用意し、表彰も行った。

	班	タイトル	FW先
A	8	まだ消えていない風評被害と偏見	檜葉町
	4	仕事とホンネ	東京電力
	13	ぷらっとあっと～双葉郡のルール～	広野町
	16	原発	大熊町
	17	ぷらっとあっとと完成までの道のり	広野町
B	1	良空の軌跡～前向きにふるさとの「今」を伝える～	大熊町
	2	3. 11 松本物語	双葉町
	14	アルプス処理水	檜葉町
	15	木村さんの話	大熊町
	19	伝えつづける	富岡町
C	11	避難所	富岡町
	9	道の駅「なみえ」	浪江町
	5	三角フレームの学び舎	大熊町
	12	復興のために	葛尾村
	7	富岡は負けん!	富岡町
D	10	私の理想と現実	大熊町
	6	電柱は全て見ていた	檜葉町
	3	カフェができるまで	川内村
	18	大熊町と人々の想い	大熊町
	20	今できることを!	広野町

特に衣装や舞台セットなどはなく、全員がジャージや制服姿で演じたが、それでも情景が伝わったのは、演劇が様々なものを受け手が補完して鑑賞する表現であるからだ。生徒たちは、椅子や机などの少ない小道具を上手に使用して防波堤や瓦礫、家、会社などを表現していた。

また、演じる役の心情を丁寧に理解しようとし、震災当時の混乱や、その後の立場の違いによるそれぞれの葛藤などをとても丁寧に描いている班が多かった。生徒たちの創作に丁寧に向き合ってくださった講師の方々の方は大きい。演劇を通して、全てにおいて単純な悪者などはおらず、あくまで各々がそれぞれの立場で物事を見て誰かを想って動いて、それが噛み合ったりすれ違ったりするために対立が起きてしまうのだということを学ぶことができた。

今年度も、取材にご協力いただいた多くの方が発表会を観にきてくださり、丁寧なフィードバックをいただいた。さらに客席では生徒たちの演劇を通してお互いの当時の想いを知り、お互いの境界を超えて新たな対話が

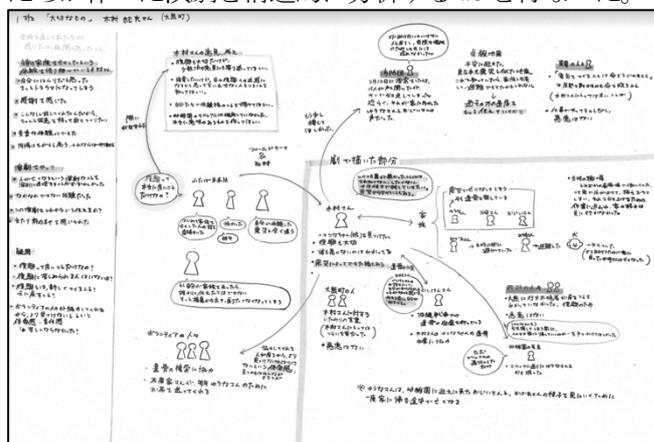
生まれる場面もあった。

「境界を超える」とは、自らが引いた境界が揺らぐことである。演劇を見ることで他者の記憶を追体験し、自分が自分でありながら他者に「なる」ことで足場を揺るがされるとき、境界が揺らぎ、自分の見方で他者を判断する眼差しは相対化され、その先に対話が生まれるのを感じた。ギャラリーも埋まるくらいたくさんの観客に見守られながら、無事に発表会を終えることができた。この時間を生徒と教員、地域の方々と共にできたことを嬉しく思う。



1.3 演劇振り返り、リッチピクチャー作成

成果発表会を終えて、これまでのプロジェクト全体を振り返り、個人として・チームとして自分達がどのように成長したのかを言語化し、お互いの成長を讃え合った。その後、「リッチピクチャー」の手法を用いて自分たちが作った演劇を構造的に分析するWSを行なった。



(昨年度のリッチピクチャーの例)

リッチピクチャーとは、ある人とそれを取り巻く様々な人・モノ・コトと関係性を表現した図のことである。書き方はおおむね次の通りである。

- ① 中心となる人を書く
- ② その人に関係する人・モノ・コトを手当たり次第書く
- ④ 場合によってはそれらを並べ直し、グループ化する
- ④ 線でつなぎ、それを矢印にする
- ⑤ 線や矢印に吹き出し等で、その矢印に関わる感情などを書いていく更に、より内容を整理するために、演劇では描ききれなかった部分の情報を補足させた。残念ながら

ら十分な時間が取れず、リッチピクチャーを全ての班が完成させることはできなかった。しかし、完成させることができた班は自分たちの演劇を構造化することができた。

14・15 哲学対話

今年度、演劇プログラムの中に哲学対話を初めて導入した。演劇の発表会が終わり、夏休みを経てちょうど1ヶ月経ったところで、哲学対話を通して演劇プログラム全体のリフレクションを行った。

最優秀賞を取った班に、ファシリテーターが質問をする形で行った。「結局、演じるとは何だったのか？」を問いとして、取材という問う行為から「聞きたいことは聞けたのか？」「聞けなかったとしたら、なぜ？」「何については踏み込めなかったか？」についてそれぞれじっくり考えた。

演劇プログラムの1つ1つに取り組む中で、慌ただしく過ぎてしまっていた「なぜ？」という問いを、過ぎた後にもう一度取り出し、丁寧に扱い、皆でじっくり考える時間となった。



(6) 振り返りと評価

演劇や哲学対話を中学校で経験している中高一貫生がいることで、年々創作までのスピードが速くなってきている。自分と違う他者の意見を否定せず、共に対話を楽しみながら腑に落ちるまで考え続けることができる生徒がそれぞれの班に存在していたことで、あらゆる作業がスムーズに進んだ。実際に、どの班も必要最低限の衝突はあったが、どの班も逃げずに向き合い、誰一人取り残さない姿勢が見られた。何より生徒達が協働作業を楽しんでいた。

また、「地域課題を演劇にする」という一見固くなりがちなテーマにも、演劇の良さである「フィクション」を軽やかに取り入れていた。例えば、漁協を取材した班は、取材対象の人を主役にするのではなく、漁協に聳え立つ電柱を主人公にして、「電柱は全て見ていた」というタイトルで震災当時の様子を描いた。携帯電話のライトを上手く使い、暗い中家族の安否を心配しながら車を走らせる取材相手の方を照らしていた。無機質な電柱にも感情があるかのような高度な演出をした。また、椅子やテーブルを上手く使ってあらゆるものを表現していた。

演劇は、舞台上立つ演者同士のコミュニケーションだけでなく、舞台と観客の間のコミュニケーションも成立しないと上手くいかない。4月からの演劇WSを通し

て、生徒たちの中に、受け手を想像し伝え方を工夫するという能力が積み上がっていると感じた。この力は今後の未来創造探究でも活かされるだろう。

演劇創作は探究に必要な論理的思考と批判的思考のトレーニングの場である。論理的思考は、演劇を作ること自体が論理的に情報を出していないと相手に伝わらない。批判的思考は、時にはフィクションの力を使って地域が抱える課題を掘り下げることだ。審査員の平田オリザ氏の言葉を借りれば、「探究」とは課題を探究するのではなく、「人間」と人間が作っている「社会」について探究するものだ。人間の複雑さを深掘りすることが重要である。取材をすると、どうしても取材対象に共感してしまい、そのままに伝えたい！という気持ちが起こるが、そこで踏ん張って、その周りを取り巻く複雑な構造を深掘りしてもらいたい。

(7) 次年度実施への課題

振り返りでも述べたように、意見の違いを越えて協働し合える集団づくりは成功したと言える。しかし、同時に課題に感じたのは、一貫生と高入生のインプットの知識量の差である。一貫生は既に中学で3年間地域について学んでおり、高校生になって初めて地域について学ぶ高入生と共に班を作って地域課題と向き合うとなると、そこにある知識の温度差を埋めることに時間がかかっているように感じた。一貫生だけの演劇班を作り、より踏み込んだ作品を作るということにも挑戦してみたい。それが、高入生にとっても質の高い学びとなるはずだ。また、地域を新鮮な気持ちで捉えた高入生が作る作品からも、学ぶものがあるはずだ。

これからの世の中エンパシーの力が重要だとある。エンパシーとは「他者の感情や経験などを理解する能力」のことであり、それを「他者の靴を履くことができる能力」として表現している。生徒たちがこの授業を通してなるべく多くの地域の方々と出会い、顔が見える人たちを増やしていくことが、彼らのエンパシーを育てる唯一の方法であると改めて考えた。また、地域の大人たちが考えていることを想像・理解することや、他者の感情を自分も感じるといったエンパシーで完結せず、それが何らかのアクション（未来創造探究）を引き起こすにはどうすればよいかについても考えたい。

演劇を通して他者の人生に触れるだけでなく、その先へ行くにはどうすれば良いのか。演劇と探究をシームレスにつなげられるような仕掛けを、次年度に向けてさらに考えて更新していきたい。



3. 1. 3 国際理解教育

本年の「地域創造と人間生活」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、スタディサブリの活用を通して、働くことの意義を考え、自己理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について知る・学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる (Global Citizenship Education)。

(1) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会～概要～

イラク支援ボランティア、エイドワーカーとして取り組んでいる高遠菜穂子氏に講話いただいた。高遠氏の体験談を通して、地域が抱える課題を世界の課題と繋げて考え、世界平和や国際理解の意義を考えることを目的としている。

- ① 日時 令和6年1月23日 (火) 6、7校時
- ② 講師 イラク支援ボランティア
エイドワーカー (フリーランス)
高遠菜穂子 (たかとお なほこ) 氏
- ③ 対象 本校1年次生徒、教職員

(2) 実施内容

演題『戦争の与える影響～人々の体と心に残る傷 (トラウマ) ～』 内容を一部抜粋する。

【世界と日本の難民問題】

難民 UNHCR グローバル・トレンドズ 2022 によると、紛争、迫害、暴力により家を追われた人が過去最多 1 億 840 万人 (2011 年は 8930 万人) である。国境を越えたら難民 (現在 3530 万人)、越えないのが国内避難民 (現在 6250 万人)。難民出身国はシリア (650 万人)、ウクライナ (570 万人)、アフガニスタン (570 万人) で、全体の 52% が 3 カ国からの避難者である。また、難民最多受入国のトルコ、イラン、コロンビア、ドイツ、パキстанは 2～300 万人近く受け入れているのに対し、日本の難民認定が毎年 50 人以下に止まっている。非常に悲しいことに日本の入国管理局による外国人に対する人権侵害は深刻であり、死者も出ている。ウィシュマさん (スリランカ) の事件で大きく報道された。クルド人問題もある。このような人権侵害が日本という平和な国で起きていることを皆さんにはもっと知ってほしい。



【市民のトラウマのほかに、兵士のトラウマも深刻】

戦争によって市民が受けるトラウマ (身体的外傷、心的外傷 PTSD) について、目を背けたくなるような写真や映像と共に説明を受けた。医療施設への攻撃や、捕虜・容疑者の扱い、スクリーニング (身元確認) での拷問や処刑は、交戦規定、国際人道法、ジュネーブ条約などの違反であり、戦争犯罪になるが、戦場ではモラルが完全に低下している。

市民だけでなく兵士のトラウマも大きな問題になっている。PTSD (心的外傷後ストレス障害) により、帰還米兵の自殺はイラクでの戦死者より多いという。「兵士のト

ラウマは、軍の名誉とされる行為が良心と折り合いがつかないことで生じてくるのだ。」という言葉が強く心に残った。日本でも帰還兵のトラウマケアについての研究がすでに始まっているようだ。つまり、自衛官の海外派遣における新たな任務は、戦闘を想定せざるをえない内容となってきているという。これも大きな問題である。

【PEACE CELL PROJECT について】

高遠さんは 2022 年に、日本とイラクの仲間たちと平和教育とエコロジーに特化した一般社団法人 PEACE CELL PROJECT を立ち上げた。絵本の読み聞かせによる情操教育と、演劇を通して彼らの想像力を刺激し、紛争解決できる人を増やしていくのが目的である。現在では NGO 団体やドホークの学校でワークショップ (WS) を行っている。

今でもイラクでは民族間の分断が根強く残っている。そして今大きな問題となっているのが、IS ファミリーと子供兵の社会復帰だそうだ。人々の中に IS に対する強い恐怖心と憎悪があり、社会復帰が著しく難しいという。

「IS の子どもは受け入れられない」と「子どもに罪はない」で社会は揺れている。再教育、リハビリを終えた元戦闘員や元子ども兵をコミュニティが受け入れるかどうかは課題である。現在はコミュニケーション WS が中心だが、最終的には本校と同じように演劇を通して彼らのエンパシーを高めたいと高遠さんは話していた。(エンパシー: 他者の感情や経験などを理解する能力のこと)

※講演後は、本校の演劇作品を鑑賞し、生徒たちに熱心に質問をしていた。



(3) まとめと今後の展望

「気づくとは、傷つくことだ」とは歌人・柘野浩一の短歌である。子供扱いせず、紛争地の現状をありのままに伝えてくれた高遠さんに感謝したい。生徒達は、その熱量に圧倒されながらも自分達の知識を広げようと真剣にその思いを受け止めた。辛い現実涙を流しながら、しっかりと前を見てメモを取り続ける生徒もいた。講演会後の質疑応答は 2 時間以上に及んだ。例年、本校で自衛官を目指す生徒の中には、復興支援で被災地に来ていた自衛隊に助けられ、憧れを抱いた者が多い。今年も自衛官を目指す生徒が遅くまで高遠さんに質問をしていた。全ての生徒にとってまた、イラク復興と双葉郡の復興を重ねた生徒も多く、探究のテーマに直接繋がった生徒もいたようである。多いに刺激を受けた講演となった。

3. 1. 4 探究との接続・キャリア教育

1年次の「地域創造と人間生活」の授業は、9月から地域の問題の解決に向けた実践プロジェクト創出を目指す「未来創造探究」に切り替わる。ゼミの所属は2年次からとなるが、以下のような段階を経て生徒は自らの興味関心に問いを見つけ、探究活動を行った。

(1) はじめに

8月までの「地域創造と人間生活」の授業では先述の通り演劇や双葉郡ツアーなどを行った。生徒はそれを振り返りながら9月からの探究をスタートさせる。

(2) 実施内容

①プチ探究

6月27日と7月10日には「自分の「気になるもの」を決めて」「何かしらアクションをして」「結果を振り返り提出する」プチ探究を行った。生徒にはたとえ仮説がうまくいかずともそれは失敗ではなく検証の過程のひとつに過ぎず、構造として失敗が存在しないことを伝えた。テーマアプローチとして、やりたい・なりたいことを実現するコース、困りごとを解決するコース、気になることを深掘りするコースを示した。

後日、行動力、創造性、探究的な学び・調査で評価し、表彰を行った。

②自己理解ワークショップ

探究テーマを創出する方法として、自己の興味関心を広げ、社会課題とつなげるアプローチがある。9月19日のワークショップでは、興味関心を言語化するために、自分の「やってみたい」ことを100個目標に書き出す「Will リスト100」を行った。

③探究オリエンテーション

10月3日の探究オリエンテーションでは「未来創造探究はどんな学習活動でどのように取り組むのか？」の学習を行った。インプットが多くなるので3項目に分けジグソー法で取り組ませた。分担項目は以下の通りである。

- ・中学の総合的な学習の時間との違い
- ・探究的な学びとは何か
- ・なぜふたば未来学園は探究を大事にしているのか。地域・社会を通して学ぶとはどういう意味か
- ・探究を行うにあたっての先輩からのアドバイス

④マイキーワード探し

10月10日と17日はテーマへのアプローチとしてマイ

ンドマップとマンダラートを用いて、自己の興味関心について深掘りをした。前時に学習した「探究的な学びとは、自分で答えを創る学び」を確認した上でマインドマップに取り組む。その後、特に関心のあるもの＝「マイキーワード」でマンダラートを作った。マイキーワード×学問、マイキーワード×具体化と手掛かりに深掘りをした。

⑤ヒューマンライブラリー

10月31日は地域で活動する方々のプロジェクトについて話を聞いたうえで、自分自身の探究テーマを深めていくヒューマンライブラリーを行った。生徒は異なるゲストの話を2回聞き、それを踏まえ教員との座談会を行った。ゲストは以下の通り。鈴木恵さん（紙芝居震災語り部）、中井 俊郎さん（日本原子力研究開発機構）、小松理度さん（へキレキ舎 代表）、江尻 浩二郎さん（東日本国際大 専任教員）、高橋大就さん（東の食の会 専務理事）、平澤俊輔さん（いわき FC スタッフ）、横須賀直生さん（おかしなお菓子屋さん Liebe 代表）、猪狩僚さん（いわき市役所職員）、小林奨さん（YONOMORI DENIM）。

⑥しくじり先生

11月28日に生徒が教員の失敗や挫折の話を聞くことで、チャレンジする目標を自分で持てるようになること、批判せずに相手の言葉を受け止められるようになること、自己表現の方法を学ぶこと、受け身から脱却することなどの効果を期待し実施した。

⑦探究クラスに分かれて各自活動

11月以降は基本的に各自の活動となるため、以下のような段階を提示した。

- ①課題設定ワークシートを用い、現状と理想の状態（あるべき未来・ありたい未来）とのギャップを浮かび上げさせ、それを埋めるための「問い」や「仮説」を立てる。
- ②調査のためのアクションを実施し、探究の「テーマ（＝問い）」を固める。
- ③振り返り、新たなアプローチや問いを立てる。

3. 2 未来創造探究（高校2年次）

3. 2. 1 未来創造探究2年の概要

2年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出する。本校の「未来創造探究」の授業において、生徒は自らの興味関心に従い、「原子力災害・伝承探究ゼミ」、「共生社会探究ゼミ」、「地域社会・経済探究ゼミ」、「人間科学・文化・芸術探究ゼミ」、「自然科学・地球環境探究ゼミ」、「スポーツ医・科学探究ゼミ」の6つからひとつのゼミに所属して探究活動を行う（※新課程カリキュラムに伴い、開校以来設定していたゼミ編成を改編）。

（1）はじめに

本年度は、新課程カリキュラム編成に伴い新しくゼミが改編された。

＜原子力災害・伝承探究ゼミ＞

原子力災害からの復興や廃炉など福島固有の問題を軸にしながらか地域社会の在り方を探究する。

科学技術による発展と不確実なリスクへの対応や、廃炉の進め方、廃炉推進の際の合意形成のあり方、偏見や風評、原子力災害等の厄災からの教訓の後世・世界への発信と伝承などの課題を設定し、トランス・サイエンスの時代における課題の解決に向けて探究と実践を行う。

＜共生社会探究ゼミ＞

地域に暮らす人と人の関係性や、ウェルネス(健康・福祉・医療にとどまらない社会的環境の豊かさ)について探究する。

対立や分断を超えて多様性を認め合う包摂的な共生社会の実現や、市民性とアイデンティティの確立によるコミュニティの真の自立(自助・共助・公助)、スポーツによる健康増進や豊かなコミュニティの実現などの課題を設定し、課題解決に向けて探究と実践を行う。

＜地域社会・経済探究ゼミ＞

避難や少子高齢化等により断絶してしまった地域コミュニティの再構築について、生業や農商工業などの産業振興や社会システム(仕組み)の観点から探究する。

地域の農水水産資源を活用した6次産業化等による新たな価値の創造や、イノベーションによる新たな産業の創出、循環型の地域・経済システムの実現などについて課題を設定し、その解決に向けて探究と実践を行う。

＜人間科学・文化・芸術探究ゼミ＞

人間の心理・行動の分析や、人間が生み出す芸術・アートを生かした社会のあり方について探究する。

差別・偏見のメカニズムの解明や、芸術・アートを生かしたウェルビーイングを追求するコミュニティの実現、地域の文化財や伝統芸能などによる地域のアイデンティティの確立などの課題を設定し、課題解決に向けて探究と実践を行う。

＜自然科学・地球環境探究ゼミ＞

自然現象の真理や、人間と自然環境との関係性を探究する。

自然科学の究明による人間社会と調和した環境の実現や、汚染からの環境回復、気候変動、再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する地域特性を活かした循環型のエネルギー・社会の実現、望ましい人間社会と地球環境の関係性などの課題を設定し、持続可能なエコシステム構築に向けて探究と実践を行う。

＜スポーツ医・科学探究ゼミ＞

スポーツ医・科学に基づいたハイパフォーマンスの実現について探究する。

スポーツ医・科学にもとづく意図的なトレーニングやトップアスリートとすそ野の好循環による育成環境の実現、部活動などの育成年代の社会環境の課題などについて、スポーツバイオメカニクス、生理学、栄養学、医学、心理学などの視点から課題解決に向けて探究と実践を行う。

これらの新しいゼミは福島の抱える真正(Authentic)な課題と世界の課題を重ねた未来創造型の探究と実践を通して、新たな社会を考えるために改編された。

新課程カリキュラムの編成に伴い、未来創造探究は高校1年次の10月から始まることとなった。従来の高校2年次4月から前倒しになったため、より探究が進んだ状態での、高校2年次の探究開始となった。

（2）実施内容

＜4月 ゼミ配属のための面談＞

ゼミ	6月時(人数)	7月時(人数)	計
原子力災害・伝承	8	9	17
共生社会	30	34	64
地域社会・経済産業	15	13	28
人間科学・文化・芸術	43	42	85
自然科学・地球環境	17	16	33
スポーツ医・科学	17	16	33

自分のプロジェクトと合うゼミを選択するため、ゼミ担当教員との面談を行う。

＜5月 ゼミ配属決定、ゼミ活動＞

＜6月 情報検索講座、ゼミ活動＞

情報検索 (Level 1) : 動画系

- STEAMライブラリ
 - 関連するテーマについて動画のレクチャーを見ることが出来る。<https://www.steam.library.gpc.ac/>
- 夢ナビ
 - 関連するテーマについて、大学の先生が書いた解説を読むことが出来る。<https://yumenavi.info/>
- JMOOC (ジェイ・ムーブ)
 - 無料で学べる日本最大級のオンライン大学講座。<http://www.jmooc.ac/>

情報検索 (Level 2) : 新書・新聞記事系

- 新書マップ
 - 関連するキーワードで探したり、テーマごとに絞りこむことが出来る。<https://shinshomaps.info/>
- 朝日けんさくくん (学校への依頼依頼)
 - 1984年以降の朝日新聞中、系列雑誌の記事などを絞りこむことが出来る。<https://ken-saku.kanri.com/page/>
- ヨミダスforスクール
 - 1988年以降の読売新聞の全国版・地域版の記事を絞りこむことが出来る。<https://yomidasschool.com/school/>
- リサーチ・ナビ
 - 国立国会図書館の調べ方案内、便利なデータベースの紹介、ウェブサイトの案内など。<https://search.nac.go.jp/online.html>

情報検索 (Level 3) : 論文系

- Google Scholar
 - <https://scholar.google.co.jp/>
- J-STAGE
 - <http://www.jstage.gpc.ac.jp/>
- CiNii Articles
 - <https://ci.nii.ac.jp/>

例年、文献調査・先行研究が弱いという反省を受け、学校司書との協働で、新書・新聞記事・書籍・論文等の情報検索方法のワークショップを行った。

<7月 ゼミ内報告会、ゼミ活動>

これまでの活動をまとめつつ他の生徒の活動から気づきを得られるよう、ゼミ内でミニ報告会を開催した。

<8月 ゼミ活動>

<9月 ゼミ活動、小論文講座>

		9/22	使用教室	10/27	使用教室	
1	塩田	『下流志向』	92-4教室	10/27	32-4教室	
2	小宅	『ほんとうの環境問題』	13	選択12	5	選択12
3	渡部ゆ	『「家族」難民』	92-2教室	0	講座なし	
4	草野	『海洋プラスチックごみ問題の真実』	7	選択9	7	選択9
5	蒲生	『できることをしよう。ぼくらが震災後に考えたこと』	7	選択10	3	選択10
6	鈴木敬	『未来の年表』	6	選択11	0	講座なし
7	高野	『友だち地獄』	19	選択1	13	選択1
8	柳川	『哲学の使い方』	62-3教室	82-3教室		
9	大谷	『認知症と長寿社会 笑顔をのままで』	4	ALS2	7	ALS 2
10	佐藤貴	『異常気象と人類の選択』	32-5教室	0	講座なし	
11	駒木根	『生物はなぜ死ぬのか』	15	理科実験室 1	10	理科実験室 2
12	阿部	『「つなみ」の子どもたち作文に書かれなかった物語』	5	選択7	3	選択7
13	四家	『スマホ編』	162-1教室	192-1教室		
14	杉	『18歳からの格差論』	7	選択8	4	選択8
15	成田	『この世でいちばん大事な「カネ」の話』	講座なし	262-2教室		
16	佐藤和	『教育という病』	講座なし	72-5教室		
17	遠藤太	『給食の歴史』	講座なし	11	選択11	

大学入試等の小論文試験で頻出のテーマ・トピックに関する新書の要約版(学研小論文ブックレポート)を担当教員が選び、グループ学習を取り入れながら、議論しながら生徒と理解を深めていく。

<10月 中間発表会、ゼミ活動>

高校3年次生徒の発表を視聴、時には質問しながら、探究的思考を高めた。特に今年度は「対話交流部門」が新設され、発表者および視聴者や視聴者同士がフラットに議論し、理解をより深める部門への参加者も多かった。

<11月 専門知講義、ゼミ活動>

ゼミ編成の改編の目的が、探究内容の深化および専門性の獲得であったことを受け、大学の先生を外部講師として呼びし、生徒の探究のヒントとなるよう、全体講義と個別相談を行った。10月には、福島大学 川崎興太教授(主に、共生社会ゼミの生徒対象)、11月には、筑波大学大学院 西嶋尚彦 名誉教授(主に、スポーツ医ゼミ

の生徒対象)に全体講義および個別相談をお願いした。

<12月 専門知講義、ゼミ活動>

<1月 専門知講義、ゼミ活動>

自然科学ゼミの生徒を対象に、福島大学 佐藤理夫教授より「研究の作法講座」という題で、研究を進める上で大事な事(例:テーマ設定/仮説設定/検証/考察のサイクル、ゴールや目標タイム設定等)について講義をして頂いた。

<2月 セルフエッセイ、ゼミ活動>

Part	項目	詳細
1	自身の体験・エピソード	・学習の動機 ・ふたば未来学園入学の動機 ・震災等の体験
2	探究テーマ(問い)と「地域・社会のあるべき姿」	・調査した地域、社会の実態 ・地域、社会のあるべき姿 ・実態とあるべき姿のギャップ
3	探究テーマの検証・課題解決のアクションと考察	
4	探究を通して得た自身の学びと創りたい社会	・自分自身の成長、変化 ・創りたい地域、社会 ・地域、社会に対して、自分はどうか関わっていくか(生き方・在り方)

本校独自の様式で、探究に取り組む背景となった体験・エピソード(Part 1)・探究テーマ(問い)と地域・社会のあるべき姿(Part 2)、探究テーマの検証・課題解決のアクションと考察(Part 3)、探究を通して得た自身の学びと創りたい社会(Part 4)に分かれ、探究や自分の将来について理解を深めるエッセイを、今回はPart 1とPart 4のみを記述する。

(3) 成果

新しくゼミが編成されたことで、目指すべき抽象的な概念がより具体的かつ幅広く設定され、生徒の活動・プロジェクトに幅を利かせることができた。また、大学の先生などが行う専門知講義によって、生徒の活動・プロジェクトの深化をある程度促すことができた。特に、スポーツ医探究ゼミにおいて、アスリート等の育成に関わる先生の助言を継続的に得ることができ、トレーニングに統計的・客観的なデータを用いる手段を少しずつ学ぶことができた。

(4) 課題と展望

前述の通り高校1年次の10月から探究が始まり前倒しになったことは、生徒の進路計画にとっては良いことではあるが、教員側にとっては、2年次4月の段階でかなり高度な内容を扱わなければならず、教員側の指導体制(月次会のあり方)やゼミ担当者間のコミュニケーションについて改善の余地がある。

3. 2. 2 原子力防災伝承探究ゼミ

本ゼミは旧原子力防災探究ゼミの流れを汲んだ新カリキュラムのゼミである。

分断・対立を超え、多様性を認めあう包摂的な共生社会の実現、市民性とアイデンティティの確立によるコミュニティの真の自立、賠償・ケアによる被害者支援、地域資源の活用による新たな価値の創造、イノベーションによる新たな地域産業の創出、廃炉事業の推進におけるゴール設定、エンドステート、技術開発、合意形成の課題、科学技術による社会の発展と不確実なリスクへの対応など、多岐にわたる問いを通して、トランス・サイエンス（科学と人間社会の関係性）や厄災の記憶と伝承といった概念の獲得を目指して作られたゼミである。伝承活動に関するプロジェクトを実践したい生徒が多く所属し、多様なジャンルの実践につながりそうなところまで進捗した。

(1) はじめに

このゼミの設立当初、第一希望で提出してきた生徒数は4名である。そこから面談を重ね、20名程度の人数まで希望者が増えた。人間科学と共生社会のゼミで取り扱う内容との差異がわからず、トランスサイエンスの概念と、人数が少なければ担当者との十分な対話をしたうえで活動ができると考えた生徒で所属者数が増えた。

そのため、単なる文系の探究活動に終始させず、科学的なものの考え方を意識させ、授業の時間は基本的に対話形式で進めることとした。また、進捗の報告会も、対話形式で進めることを勧め、生徒が自分たちで動く雰囲気づくりにつながった。

(2) 実施内容

ゼミメンバーを対象として実践をした内容でも、必ず他のゼミに声をかけ、共鳴した生徒にも参加させることにした。

①学び舎ゆめの森訪問

本に関する探究活動をしている生徒、演劇教育についての探究活動をしている生徒を連れて、双葉郡大熊町にある、学び舎ゆめの森を2日訪問した。1度目は、演劇の公演会を参観し、2度目は対話・本・演劇・哲学対話を取り扱っている生徒を連れて訪問した。他ゼミから同行した生徒の中には大熊町出身の生徒も含まれていた。小さい頃の資料の展示を見て喜ぶ彼女の姿に、原子力防災伝承ゼミのメンバーも、伝承にかける思いを新たにされた様子であった。

②新潟大学附属新潟中学校の招待

1月31日(火)の授業時間中に、新潟大学附属新潟中との交流会を行った。中学1年生の地域探究活動の助言が欲しいと、ホープツーリズムで来県され、120名の生徒が双葉郡でフィールドワークの後、来校した。

本校からは、原子力防災伝承探究ゼミを中心に、他のゼミからも合わせて20名の展示実践発表とワークショップを行った。参加する中学一年生からの鋭い質問に驚きを隠せない生徒もいたが、失敗をすることも含め、伝承活動やワークショップの運営の難しさを痛感した様子であった。

(3) 成果

基本的には、探究活動の時間を対話の時間と位置づけ、生徒たちの話に耳を傾ける時間にした。授業ははじめの5分~10分を目線合わせの時間とし、それ以外の時間は実践をしたり、作業をしたりする時間とした。カリキュラムの変更後、7時間目の後の放課後には活動時間が多くないことから、ゼミとしての目線合わせに時間をかけず、各自ワークとした。他のゼミからも相談に来る生徒が多くおり、トランスサイエンス的なものの考え方や対話の重要性については、潜在的にも理解している生徒が多い。

対話を取り扱った探究活動では、ゼミで普段取り入れている方法で対話を試しに始めてみる生徒が多く、あちらこちらで車座ができていた。

(4) 課題と展望

書籍に当たることは、引き続き意識的に行っていききたい。データを用いたプレゼンテーションにも、考察に主観が入ったものも多くあった。

また、実践に向けた心理的障壁が低くなるよう、実践時には同じようなテーマの生徒を参加させることも多かったが、そのことによって初対面の相手と対話する際にも自分の知り合いを多く出席させ、いつものメンバーのように対話を始めてしまうことも多かった。新潟中との交流を振り返り、次の実践に向けた態度変容につなげたい。

3. 2. 2 共生社会探究ゼミ

共生社会探究ゼミは、個人の固有の外面の属性（国籍、人種、性、年齢、障がいの有無など）や内面の属性（経歴、価値観など）にかかわらず、互いの多様な違いを尊重し受容し合い、包摂的な共生社会の実現や市民性とアイデンティティの確立によるコミュニティの真の自立（自助・共助・公助）、スポーツによる健康増進や豊かなコミュニティの実現などの課題を設定し、課題解決に向けての探究を行っている。今年度本ゼミに所属しているのは、アカデミック系列15名、スペシャリスト系列9名、トップアスリート系列3名、計27名で、個人あるいはグループで探究しており、全部で22のプロジェクトが進行している。

(1) はじめに

探究の「テーマ」や「やりたいこと」の方向性は決まっているが、「どうしてそのように考えるのか」といったロジックが作れていないため、アクションまでたどり着けない生徒が多かったため、1年次に作成した課題設定ワークシートを見直すことから始め、各プロジェクトの進捗状況に合わせて教職員（教員とカタリバスタッフ）が個別にフォローした。

また、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へと移行し、アクションしやすい環境となったため、積極的に外部と連絡を取り、イベントに参加したり、専門家の話を聞くなどして探究を進めているところである。

(2) 実施内容

今年度最初の授業で、グループ（生徒4～5名、教職員1名）ごとに春休みに実施したアクションや進捗状況を報告した。アクションまでたどり着けていない生徒が多いため、課題設定ワークシートを再記入させ、それぞれの「問い」をブラッシュアップしていった。

7月11日、ゼミを2つのグループに分け（1グループ11～12プロジェクト）ゼミ内報告会を実施した。報告会後は、友だちと教職員の感想やアドバイスをもとに、自分のアクションを振り返り、夏休み計画シートを活用しながら夏休みの計画を立てた。

10月3日、専門知講義を実施。「地域連携・まちづくり・高校生の社会参画」をテーマに福島大学共生システム理工学類教授 川崎興太先生より講義をしていただいた。講義後、生徒の各探究へのコメントやアドバイスをいただいた。



10月17日、中間発表を実施。外部講師からのコメントや生徒同士の対話から新たな気づきや具体的なアクションへの意欲を高めることができた。



(3) 成果

今年度は新型コロナウイルス感染症が5類感染症へと移行し、アクションしやすい環境となったため、施設を訪れたり、遠方の専門家とオンラインで話を聞くなどして、現状や課題について基礎的な知識を得ることができていた。そこから、今後のアクションの方向性や新たな課題を見つけることができた。

2年次10月時点での生徒のルーブリック自己評価では6月時と比べて、【E：他者との協働力】と【H：寛容さ】の項目において評価が大きく伸びていることから分かるように、テーマは違うが、方向性が同じ生徒同士が一緒にアクションをし、仲間と協力・協働しながら、共通の目標に向かって活動を進めることができている、他者の意見を受け入れたり、思いやりの気持ちを持って、相手の幸せを考えることができていた。

(4) 課題と展望

生徒のルーブリック自己評価において低いのが【D：表現・発信力】【I：能動的市民性】である。今後は、論理的に自分の探究をまとめ、外部の発表機会も積極的に活用するように促していきたい。さらに、「自ら行動する」「アクションする」ことから、他者の意見や考えを聞く機会を増やし、そこから「自分の考え」「自分の意見」を見つけ出し、社会の主体としての意識を持ち、未来を考えることができる力が養われていくように、生徒に寄り添い探究活動を進めていくことが大切であると思う。

3. 2. 2 地域社会・経済探究ゼミ

(1) はじめに

本ゼミは、避難や少子高齢化等により断絶してしまった地域コミュニティの再構築について、生業や農商工業などの産業振興や社会システム（仕組み）の観点から探究を深めることを目的としている。地域の農林水産資源を活用した6次産業化等による新たな価値の創造や、イノベーションによる新たな産業の創出、循環型の地域・経済システムの実現などについて課題を設定し、その解決に向けて探究と実践を行っている。

(2) 実施内容

・大熊いちごプロジェクト

大熊町のいちごを利用したスイーツやパンを開発し、大熊町を盛り上げようと考えた。スーパーのマルトと協力し、商品開発を行って販売するところまでアクションが進んでいる。

・フードロス

家庭で調理の際に出る野菜くずや生産余剰の米や野菜を使い、誰でも簡単においしく調理できる料理を調べた。実際に農家に赴き、余ってしまった野菜や規格外の米をいただき、簡単にできる料理を調査し、試作している。



・スイーツで広野町を盛り上げる

自分の好きな韓国発祥のスイーツ「トュンカロン」を広野町の名物にして広野町を盛り上げようというプロジェクトを考えた。広野町のミカンをとんかろんに取り入れることで、さらに広野町を盛り上げたいという想いで、広野町民と交流会を行い、意見をもらうというプロジェクトを模索している。

・葛尾村のヤギプロジェクト

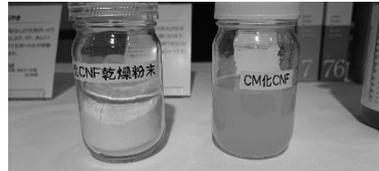


葛尾村にあるヤギと触れ合える施設と協力し、葛尾村の魅力を発信したり、ヤギのミルクを使用したスイーツやせっけんを開発しようと活動している。また、学校でヤギを飼育し、ヤギに親しみを持ってもらおうと考え、葛尾村の施設と協力してプロジェクトを進めている。

・ふたばエシカル

双葉郡の特産品を用いた化粧品を制作するプロジェクトを進めている。基礎化粧品やエシカルの認知度に関するアンケート調査を行い、双葉郡在住の化粧品メーカーの協力を得ながら化粧品制作に向けた活動に取り組んでいる。

・ウッドストロープロジェクト



双葉郡の間伐材を原料とした木製ストローの制作に取り組んでいる。自然由来の

接着剤を手に入れるため、大阪で開催された展示会に参加したり、木材加工会社にアポイントを取ったりしながら、環境にも配慮した木製ストローを制作中である。

・磐越東線魅力発信プロジェクト

磐越東線の魅力を多くの人に伝え、利用者を増やそうと考えた。実際に磐越東線フォトコンテストに自ら応募し、それをきっかけに特に小川郷駅の魅力を伝えるアクションを考案中である。

・Novel create

大熊町を盛り上げるための様々なアクションを考えて模索している。リーダーの生徒の活動が大熊町に高く評価され、魅力をより多くの人に発信できるアクションを考案している。



(3) 成果と課題

ここまで半年以上授業が進んでいく中で、自分のアクションのテーマが変わらず、自分の立てた目標に向かって自分で進めている生徒と、テーマがなかなか定まらず、テーマが何回か変わってしまった生徒もいた。また、テーマは変わらないが、アクションの規模を小さくしたりするなど、方向性の微調整が必要な生徒もいた。経済面から地域を盛り上げるためには、外部の専門家の力が必要で、そのアクションをいかに進められたかによって進捗状況が変わっている。実際に大熊町と連携している2つのプロジェクトは、専門家のアドバイスを取り入れることで毎回プロジェクトが前進し、生徒自身もより前向きに取り組んでいる。一方で外部との連携がうまくいかない生徒はプロジェクトが停滞しがちになっている。そのため、まずは外部とつなげることを支援しながら授業を進めている。それぞれの生徒がより自分が立てたゴールに近づけるよう、今後も時には寄り添い、見守りながら少しでもアクションを前進させたい。

3. 2. 2 人間科学・文化・芸術探究ゼミ

R5年度より新たなゼミ編成が行われ、「人間科学・文化・芸術探究ゼミ」ゼミが作られ、主に人間の心理・行動の分析や、人間が生み出す芸術・アートを生かした社会のあり方について探究している。差別・偏見のメカニズムの解明や、芸術・アートを生かしたウェルビーイングを追求するコミュニティの実現、地域の文化財や伝統芸能などによる地域のアイデンティティの確立などの課題を設定し、課題解決に向けて探究と実践を行う。

(1) はじめに

高校8期生は、新課程カリキュラムへの移行初年度ということもあり高校1年次から未来創造探究を進め、例年より進捗が早い(中学校1期生はふたば未来中学校での総合的な学習の授業「未来創造学」において同様の探究学習をしている)。基本的には高校1年次に決めたテーマに沿って生徒が調査・実践を行い、それを教員が個々にフォローする体制が取られた。

(2) 実施内容

①応用倫理学×哲学対話

ふたば未来中学校の授業の一つである哲学対話をさらに発展させ、社会的にやや難しい話題でも気軽に話せる場を作りにはどうしたらいいか？

②10代が暮らしやすい社会へ

中高生を中心に自殺者の数が増えている。中高生の悩みに寄り添い、一人でも多くその悩みを解決するには何ができるか？

③虐待について

近年子どもへの虐待のニュースをよく耳にする。虐待はなぜ起こってしまうのか、虐待を防ぐために自治体や団体はどのような対策をしているのか？

④サステイナブルアートで知る海

近くの海で拾ってきたゴミで、海洋ゴミに関する啓発ができるようなアート作品を制作できないだろうか？

⑤社会問題 on TRGP

シナリオを自ら作れるテーブルトークRPGで、人々が関心を持ちにくい社会問題への関心を高めるには？

⑥学習サポートプロジェクト

最近の高校生の読書時間が短くなっている。高校生が日常的に読書を楽しむようになるにはどうしたらいいか？

⑦わたしたちだってできるもん！

子どもがヘアアレンジメントを自分でできることで、親の家事を軽減をさせつつ、生活の質が向上するのではないか？

⑧保育士が他種と平等な仕事になるために

保育士の待遇があまりよくないというデータがある。

保育士を魅力ある仕事として伝えるには？

⑨復興をめぐる対話の難しさ

震災の復興には対話が必要とよく言われるが、難しい。

⑩原発事故と食

原発事故後大熊町の復興は進んでいるが、原発大国のフランスの高校生は、原発事故とその後の影響、そして復興の状況をどこまで理解しているのか？

⑪自己覚知の重要性

自分自身の事を客観的に分からず、心理的に苦しんでいる人たちを救うにはどうしたらいいのか？

⑫個人と共同体について

自己承認欲求が強すぎる若者が増えている。自己承認欲求に依存しない生き方をするには？

⑬復興の需要と供給

震災後の双葉郡の復興において行政と住民の間には温度差がある。住民の意見が復興の行政に反映されるにはどのような仕組みが必要か？

⑭Full of Fun! Liveの可能性

双葉郡には都市部にあるようなライブハウスがない。ライブを行って広野町でも楽しめるようにするには？

⑮音楽とスポーツの関係性

音楽療法など、スポーツ選手がハイパフォーマンスを発揮するための音楽には、どのようなものがあるのか？

⑯音楽の人に与える影響

人の目覚めがよい目覚ましの音とはどのようなものか？

⑰演劇を通じた地域活性化

演劇を通じて双葉郡を活性化させるには？

(3) 成果

一人一人に対してきめ細かい指導をすることができた。

(4) 課題と展望

時間割と校務の関係で教員間の情報共有があまりできていないので、MTGやその他の方法により生徒の進捗状況を確認できるよう、情報共有の在り方を改善し、生徒の探究活動が活性化するのに資するものにしていきたい。

3. 2. 2 自然科学・地球環境探究ゼミ

本ゼミでは自然現象の真理や人間と自然環境との関係性を探究する理系分野に特化したゼミである。本ゼミ生は、自然科学の究明による人間社会と調和した環境の実現、汚染からの環境回復、気候変動、再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する地域特性を活かした循環型社会の実現、望ましい人間社会と地球環境の関係性などに各自課題を設定し、探究と実践を行っている。

(1) はじめに

今年度のゼミの再編で新たに創設されたゼミである。自然科学系の内容に特化し、計画・実行・結果確認・考察のサイクルを回す中で課題を解決していくという、既存のゼミとは異なるアプローチで探究を進めている。

(2) 実施内容

インターネットや図書館を利用した調査をしたり、フィールド調査や有識者への訪問活動等の実践活動を行ったりして、探究を進めている。

教員3名、カタリバスタッフ1名の人員で生徒18名の探究の進捗状況を把握し、活動をサポートしている。

(生徒の研究テーマ例)

- ・土壌の調査 ・カメムシの匂いで香水作ってみた
- ・おなかのすいたからザリガニ食べたい
- ・捨て犬捨て猫ゼロへ！
- ・意識啓発のためにできること
- ・海洋汚染

ゼミ活動の様子



(3) 成果

- 各種コンテスト等での入賞
- サイエンスキャッスル 2023 関東大会 ポスター発表部門 優秀賞
 - ・紺野 一剣「五社山おろしの研究」
 - ・齋藤 佑磨, 古山 寿智「ホタル保護のためのカワナナの生態調査Ⅰ」
- 令和5年度中学生・高校生の科学・技術研究論文「野口英世賞」 入選
 - ・齋藤 佑磨, 古山 寿智「ホタル保護のためのカワナナの生態調査Ⅰ」
- 各種発表会への参加
- START 2023 参加 ・星野 寿々花, 山崎 こはる
- 2023 国際高校生放射線防護ワークショップ 発表会 参加
 - ・星野 寿々花, 山崎 こはる

○第8回福島イノベーション・コースト構想シンポジウム ふたば未来学園高等学校 代表生徒発表

・林佳瑞「双葉郡の水生昆虫と環境保全」

○MY PROJECT AWARD 2023 エントリー

・四家 遥, 猪狩 驍「微生物発電」

・伊藤 珠弓「意識啓発のためにできること」

・星野 寿々花, 山崎 こはる「除去土壌から見える大熊町の復興」

●専門知講義の実施

○福島大学 佐藤理夫教授 講義「実りある探究活動のために」、探究個別相談会 実施

(4) 課題と展望

本ゼミでは、1年間を通してコンテストや各種発表会への参加を促した。専門家の助言を受けることで、各自の探究の内容を整理し、その後の活動に活かすことができた。

生徒は、興味関心がある物事を探究のテーマにしていることもあり、意欲的に取り組んでいる。これまで、生徒それぞれが課題解決に向けてアクションを実施してきたが、現在取り組んでいる課題を解決するためには先行研究等の膨大な知識量が必要であり、生徒個人だけで進めていくことは難しい。よって、教員が生徒の伴走をしつつゼミ運営を行っているところである。課題としては以下のことがあげられる。

- ・先行研究(根拠)に基づいて、論理的な仮説を立てることが難しい。
- ・検証を行う上での条件設定、検証方法や解決アクションを模索することが難しい。
- ・仮説設定から考察や新たに問いを設定しなおす段階において、探究が高度化するにつれて、多くの支援が必要となる。

これらを踏まえ、今後の展望としては、ゼミとしての基盤を盤石にし、先輩の研究テーマを先輩が引き継ぐほか、研究機関などとも連携するなどしてより高度な研究を進めることが望まれる。

3. 2. 2 スポーツ医・科学探究ゼミ

スポーツを通して、「する」だけでなく「みる」「支える」「知る」という4つの観点を軸に、改めて自分が関わっている競技や各種スポーツについて理解を深めることをしている。その上で、競技力向上や、この双葉郡あるいは福島県にスポーツの力で地域を活性化させるためには何が必要なのかを深めていく探究を行った。

(1) はじめに

スポーツ医・科学に基づいたハイパフォーマンスの実現について探究する。

スポーツ医・科学に基づく意図的なトレーニングや、トップアスリートとすそ野の好循環による育成環境の実現、部活動などの育成年代の社会環境の課題などについて、スポーツバイオメカニクス、生理学、栄養学、医学、心理学などの視点から課題解決に向けて探究と実践を行う。

(2) 実施内容

生徒たちは、以下に挙げる3つのテーマのいずれかに関わる調査・アクションを進めた。

- ①競技力向上
- ②コンディションの調整やヘルスケア
- ③普及活動、地域振興

また、2年次のゼミテーマが変更になり、1年次の後期から進めてきた探究活動を、担当教員との面談等を通して内容やゴールの再確認をした。更には、活動状況を随時確認しながらアクションが思うように進まない時にも生徒主体のを維持しつつも支援をした。

①競技力向上

ジャンプ力やスピード、フィジカルの向上に向けての効率よいトレーニング方法の立案をし、その成果の検証を進めてきた。



運動能力の向上のほかにも、キック精度の向上を目指す活動もした。

②コンディショニング調整

アンケートや専門家へのインタビューを行ったり、実際に調理をしたり検証を実践したりを通して、アスリートのコンディ



ション調整や体づくりにふさわしい睡眠や食事は何かを求めて活動した。

③普及活動、地域振興

子どもたちが運動を好きになるためにはどのような環境やイベントを設けるべきなのかをアンケートや実際の指導実践を通して検証を重ねてきた。また、スポーツや本校ならではの競技を通して地域振興をするために地域との連携を築くアクションを進めてきた。



(3) 成果

特に競技力向上を目指すテーマで活動してきた生徒は、アクションを積み重ねてきた結果、課題の克服につながる成果を見出すことができた。そこまで行きつかなくても順調に検証を重ね、変化を表現できたり、異なる視点の課題を発見できたりという状況でもある。また、大学の先生との接続が叶い、生徒たちの悩みも解消されながら活動が進んだ。

中間発表の時期頃からギアが入る生徒が増え、ゼミ活動も活発化させることができた。

(4) 課題と展望

医・科学的な探究をするためのアプローチの仕方や検証方法に苦慮してしまい、アクションが滞ってしまう場面が何回も起きてしまった。探究したい内容についての基礎知識を身につけたり視点の持ち方をイメージしたりする機会が必要だと感じた。

放課後や休日の時間を各競技の活動時間に費やすことがほとんどのアスリート系列の生徒たちに、どのように授業時間外にアクションを活性化させるための声掛けや活動の充実を目指した支援に工夫をしていく必要がある。

3.2.3 進路探究 キャリア学習

(1)はじめに

本校では、毎週金曜日の3時間目に「進路探究」という時間が設定されている。この時間は、生徒たちが自ら取り組んでいる「探究」の内容や興味・関心と、将来の進路を「繋げ、深めていく」ことを目的としている。2年次では生徒の希望進路が多岐にわたるため、大きく大学進学希望者・専門学校進学希望者・就職希望者の3つの講座を設定し、授業を展開していった。4時間目にはLHRが設定されており、2コマ連続の授業とすることもあった。以下は、その1年間の概要である

(2)「進路探究」の概要

	大学進学希望者	専門学校進学希望者	就職希望者
1	・進路講演会（外部講師依頼） 大学受験のスケジュール、共通テストの概要について理解する。	・進路講演会（外部講師依頼） 大学や専門学校への進学、就職を選択した場合のシミュレーションを行い、進路選択の仕方について理解する。	
2	・進路講演会 各教科の学習についてのガイダンスを行い、年間学習計画を作成する。	・自己分析（外部講師依頼） 「ライフプラン」の作成を通して、自分の人生について考え、やるべきことを明確にする。	
3	・志望校研究 大学パンフレットやインターネットを使い、志望校決定のための情報収集を行う。	・自己分析（外部講師依頼） グループワークを通して、自分の長所やPRポイントを考え、進路選択に生かす。	
4	・進路講演会（外部講師依頼） 進学費用等についての講演を行い、大学生活についてイメージを持つ。	・業界研究（外部講師依頼） 専門学校の講師の先生方による各仕事についての説明を聞き、仕事に対するイメージを持つ。	
5	・志望校研究 「分析チャート表」に沿って学校を調べ、志望校の絞り込みを行う。	・自分の適正に合った絞り込み これまでの業界研究・自己分析をもとに、自分に合った職業の絞り込みを行う。	
6	・志望校の決定 今までの志望校研究や夏季休業中に参加したオープンキャンパスの内容をもとに志望校を決定する。	・分野別講演会（外部講師依頼） 専門学校の講師の先生方の話を聞き、専門学校での学習内容を理解する。	・進路講演会（外部講師依頼） 求人票の見方や、昨今の企業動向について理解する。
7	・OB、OG 講演会 卒業生の大学生活や高校時代の勉強の取り組みについての講演を聞き、意識を高める。	・志望校研究 「分析チャート表」に従い、専門学校を調べ、絞り込みを行う。	・企業研究 求人票をもとに「分析チャート表」に従い企業を調べ、絞り込みを行う。
8	・成績概況の中間振り返り（外部講師依頼）	・専門学校説明会（外部講師依頼） 各専門学校講師の先生方の学校説明を聞き、志望校についての理解を深める。	・企業説明会（外部講師依頼） OBOGの社会人との座談会・人事担当者による企業説明会を通して、社会人としての意識を高める。

	模擬試験の成績概況についての講演を聞き、今後の学習計画を立てる。		
9	・状況に合わせた個別指導 共通テスト対策に関する講話。 総合型選抜に関する講話と志願理由書の作成。 進路未定者に対する面談。	・進路講演会（外部講師依頼） 志願理由書の作成について理解するとともに、現段階での志願理由書を作成する。	・進路講演会（外部講師依頼） 履歴書の作成について理解するとともに、現段階での志望動機を作成する。
10	状況に合わせた個別指導 前時の続きを行う。	・志願理由書の作成 前時の講演の内容をもとに、志願理由書を作成する。	・志望動機の作成 前時の講演の内容をもとに、履歴書を作成する。
11	1年間のまとめ		

その他、これとは別にトップアスリート系列生のスポーツでの進学や実業団への就職、競技継続を望む生徒に対しては、セカンドキャリアに関する講演を行った。

大学進学希望者に対する講座では、前半に様々な情報を収集し、志望校を決定することで進学に対し強い目的意識を持つこと、また、後半では、OBOG 講演会や中間振り返りなどにより、自分の立ち位置や勉強法を振り返りモチベーションを高めることを意識して講座を設定した。

また、専門学校進学・就職希望者に対する講座では、自分自身の内面を掘りさげ、自分の性格（長所やアピールポイント）について考える。その後、様々な仕事の概要について理解を深め、自分に合った職業を選択し、学校や就職先を決定していくことを意識して講座を設定した。特にこの講座では進路業者と1年間を通したプランニングを行い、協力し進めて行った。いずれにせよ、どちらの講座でも、生徒が自らたてた目標に向かい自主的に努力する姿勢を養うことを目指した。

(3) 成果と課題

1月末に進路探究の振り返りとして、この講座を受講した2年次生に自由記述のアンケートを実施した。「1年間の講座を受けて、自分が変わったと思う点があれば、教えてください。」という質問に以下のような回答がみられた。「1年生の頃より、『やらなくては！』という意識が生まれた。」「大学入試に持っている有利な検定などを積極的に受けるようになった。」「将来のために『受け身』にならないようになった。」「自分を変えるのは自分だということがわかった。」「空き時間を有効に活用し、真摯に勉強や自分自身に向き合い頑張っていこうと思えた。」こうした記述から、生徒が自らたてた目標に対し、主体的に取り組み努力する姿が想起される。回収したアンケートの7割弱に同様の主旨の回答がみられ、当初設定した目標に対し、ある程度の成果が得られたように思う。一方、「講座に対する改善点や要望があれば、教えてください。」という質問に対しては、「もっと早い時期から行ってほしかった。」「自分が行きたい私立大学の進学に関する話が薄かった。」「進路が決まっていない人には少しやりづらかった。」などの意見があった。上述したように、本校の進路は多岐にわたり多いときには10教室を使い講座を展開することもあったが、生徒の希望進路のすべてをカバーすることは大変難しいことであった。また、その生徒の希望進路を教員全体が把握し情報を共有すること、業務上の時間的な制約から教員間で講座の主旨や目的を共有しながら講座を進めていくことにも難しさを感じた。この点、次年度への課題と考えている。

3.3 未来創造探究（高校3年次）

3.3.1 未来創造探究3年の概要

週3時間の未来創造探究としてのうち1時間は主として自らを見つめ、進路実現のための時間として、残りの2時間を探究活動として実施した。2年次に引き続き、3年次においても6つの探究ゼミに分かれ、グループや個人でテーマを設定し、実践を行った。昨年までと比較して、最終発表会後の論文作成に力を入れ、論文作成を通じて自分の探究の理解を深めることを重視した。

(1) 3年次の探究活動概要

4月26日 中間発表
5月～9月 各班、グループに分かれて探究活動
9月24日 未来創造探究生徒研究発表会
10月～1月 論文作成

(2) 実施内容

① 中間発表

3年次の探究の進捗状況を確認することも踏まえ、まず4月に中間発表会を行った。今年度は昨年度に倣って発表+聴衆との議論を軸として、今後の探究のヒントを得ることを重視した。聴衆として新2年次を招き、これから取り組む未来創造探究のイメージをつけるとともに、ゼミ選択の参考にもなるようにした（※今年度より下記のゼミ分けとは異なる）。新たに赴任して探究担当となった教員にとっても、発表会を通して生徒の取り組みを理解する助けとなった。

② 探究活動

6つのゼミに分かれて探究活動を行った。各ゼミの構成は以下のとおりである。

探究ゼミ	プロジェクト数 (総生徒数)	担当教員人数
原子力防災	7 (11)	4
メディア・ コミュニケーション	15 (22)	4
再生可能エネルギー	6 (9)	3
アグリ・ビジネス	5 (6)	2
スポーツと健康	13 (30)	4
健康と福祉	9 (14)	3

※また、上記以外にゼミ混合のプロジェクトとして、「メディア+再エネ」が1PJ、「メディア+福祉」が1PJあった。

③ 未来創造探究発表会

「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。詳しくは「3.3.4 探究活動発展のための発表会等」に記す。各分野の第一線で活躍されている方（専門知を持つ方）、地域の課題に取り組んでいる方（地域知を持つ方）を審査員兼コメンテーターとして呼びびし、各賞を設定した。

今年度は高校 61PJ、中学 14PJ に加え、仙台二華高校の生徒 3PJ を招き、スライドを用いたポスターセッション部門で出場していただいた。発表部門は生徒の様々な探究活動の特色を活かせるように、コンテスト部門と対話交流部門、ポスターセッション部門（ポスター、スライド選択制）の

3部門に分けた。賞のためだけの発表会ではなく、あくまで探究を深めるための発表会という位置づけとしている。

④ 論文作成

発表会終了後は、探究内容を深めるため論文の形でまとめていった。論文の構成は目次・要旨（アブストラクト）・内容（動機・目的・仮説・検証方法・解決アクション・結果）・考察・探究で得た成長・謝辞・参考資料、とした。分量は6,000字～10,000字と設定したが、文字数よりも内容に探究活動の取り組みがしっかり反映されているかどうかを重視した。12月中旬を一次締め切り、ゼミ担当者のフィードバックを経て1月下旬を最終締め切りと定めた。最終的に優秀な論文1つに「未来創造探究大賞」を与える。

(3) 評価と課題

現行のゼミ編成（左表参照）で行われる最後の未来創造探究となり、新2年次からは新しいゼミ編成で運用しているが、ゼミや学年という枠組みを超えて協働するような活動の形も見られた。

例年の課題となっているが、進路活動との兼ね合いで中途半端に終わってしまうケースや、「活動報告」に終始しデータを用いた分析や深い考察に至らないケースが見られた。次年度以降は最終発表会の時期を早めており、前者の問題点は解決されるという考えだが、後者についてもより質の高い探究活動が生まれることを期待する。

3. 3. 2 原子力防災探究ゼミ

本ゼミは、福島原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究することを主な目的として活動している。所属する生徒は、処理水の海洋放出、事故後の避難により分断された地域コミュニティの再生、震災の記録・記憶の伝承等の課題に取り組んでいる。

(1) はじめに

11名（男子6名、女子5名）の生徒が在籍し、昨年度から各自の設定したテーマに沿って、調査や課題解決のためのアクションを起こしてきた。共同して活動を行っている生徒もあり、7プロジェクトが進行している。

(2) 実施内容

2年次に、各自が設定したテーマに基づき、インタビューやアンケート等の実態調査、文献調査等を行ってきた。3年次では、2年次の活動で判明した事実等をもとに、課題解決のための方策を具体的に考え、実践に移してきた。

①「原発処理水の海洋放出について」

原発処理水の海洋放出に反対する人々の意見の背景に着目し、漁業関係者へのインタビューを行った。また、海洋放出実施前後に、福島県産水産物への風評被害の実態等についての調査・考察を行った。

②「フードロスを減らすためには？」

フードロス問題への関心を高めることを目標とし、楢葉町の飲食店でフードロス削減に向けてどのような取り組みをしているかインタビューを行った。



③「埋立地問題を解決するには？」

ゴミの排出量削減を目標に、国道6号線のゴミ拾いを行い、廃棄されていたもののアップサイクルに挑戦した。また、ゴミの種類ごとに、どのようなリサイクル方法が適切なのか調査を行った。

④「広野町の多頭飼育の現状とは」

人と猫がよりよく共生できる社会を目指し、地元である広野町にいる野良猫の生態の観察、野良猫の保護・自宅での飼育、文献での調査等を行った。

⑤「若い世代が将来について考えられるようになるには？」

中学生に政治や社会への関心を持ってもらうことを目標に、自身の出身中学校でワークショップを行う計画を立て、中学校と交渉した。授業案を作成し、模擬授業を複数回行うことで、内容の改善を図った。

⑥「富岡町に写真を通じて何ができるか？」

富岡町役場と交渉したり、自身で現在の富岡町の様子を撮影したりして、震災前・直後・現在の写真を収集し、それらを用いて富岡町のマップを作成した。

⑦「町の活性化のためにはどのような交流が必要なのか？」

自身の出身地である双葉町の新旧住民の交流を深めるため、地域に伝わる「女宝財踊」に着目し、保存会の方々の協力を得て、双葉町内で住民の方々を対象にした踊りの体験イベントを実施した。



(3) 成果

どのプロジェクトにおいても自分たちの問題意識に基づき、課題解決のためのアクションを起こすことができた。当初の予定や想定と異なることが起きても、課題解決の方法を変更する等、柔軟に対応する様子を見ることができた。

(4) 課題と展望

インタビューやワークショップの開催等、人と関わる活動には意欲的に取り組む生徒が多かったが、一方で、文献や官公庁のデータにあたって、自分の考えの裏付けを行ったり、知見を深めたりすることに意識が向いている生徒は少ない。生徒が経験と知識の両輪を意識して、探究活動を進められるようにサポートしていくことが、次年度以降の課題であると考えられる。

3. 3. 2 メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は、双葉郡を中心とした地域が抱える課題に対し、情報の発信や過去の記録（アーカイブ）といった手法を通して、その解決に向けた活動を行っている。メディア・コミュニケーションという枠を超えたテーマを設定し探究活動に取り組む生徒も多い。

(1) はじめに

2年次からの総合的な探究の時間では自分自身の興味関心と1年次に得た地域課題を結びつけ、より具体的に探究を進めた。タイムリーな話題として処理水放出にはじまる地域課題に関連するものから、自らの経験に基づいたテーマ、さらに教育関連や芸術分野に至るまで多岐にわたる。そのため彼らに寄り添うアドバイザーの関わり方も、個々人の興味関心と地域課題との関連性や、調査の方法、客観的データの活用の仕方、など柔軟かつ生徒の方向性を明確に示せるようなサポートの仕方が必要となった。以下に実例を挙げる。

(2) 実施内容

- ・福島と世界の架け橋プロジェクト
東日本大震災の語り部として福島の今の姿を伝え、東日本大震災を風化させないために、無知・無関心の人に他県の高校生と対話・交流を行った。
- ・なぜ日本人は他国より英語を使ったコミュニケーション能力が劣っているか
単語やジェスチャーだけでコミュニケーションがとれるのではないかと、という仮説のもと、簡単なディベートを英語で話すイベントを開いた。
- ・アートで障がいという枠を無くすために障がいという言葉を通して理解を深めてより良い社会を目指していきたいという思いをもとに、自分自身が通う施設でパソコンを使ってデジタルのアートを描いた。
- ・福島の魚の安全性を広めるためには？
福島の魚の安全性をPRし、全国に発信することを目的とし、身近な場所で釣れる魚の種類や調理方法の紹介をした。
- ・Caféふう売上あげあげプロジェクト
Caféふうが抱える、赤字であることと、交流の場が生まれにくいことの改善を試みたほか、地域の大人と高校生の交流の場を作るために、対話を目的としたイベントを開催した。
- ・法はブラックでレッドでちょっとグリーン
国連や子どもの権利条約が定めている法律にある、

子どもの意見表明権が日本では普及されていないことに着眼し、日本と他国の法律や現状を比較したほか、地元の弁護士の方や法学部の大学教授へのインタビューを行った。

- ・自分に自信を持とう！
メイクや美容法を使って、一人一人が自分に自信を持ち、自己肯定感を高め、同世代の人と共有したいと思い、メイクの講習会に参加し学んだことを、友人に実践するといったアクションを行った。
- ・演劇で地域を笑顔に
浪江町の現状について調査し、自ら所属する演劇部での活動を用いて、町民とのコミュニケーションを図るイベントを企画、立案し、実際に浪江町を訪れ、演劇ワークショップを開催した。
- ・ゲームで伝える富岡町
富岡町に若い世代が少ないことから、若い世代の人達にゲームを通して富岡町を理解してもらえ、ゲームを制作した。

(3) 成果

身近な話題から地域の課題と結びつけ、自分たちなりに考察の視点を持ち、アクションを行えたことは成果であるといえよう。コロナ禍から明け、地域の方々の協力のもと、アクションを行えたり、また近隣へと出かけ現地調査を行えたりと、行動の幅が広がり、よりデータや素材を收拾することが可能になったことは、探究により深みを持たせられたという意味で大きいと考える。

(4) 課題と展望

今年度はアクションを行う機会は増えつつあったが、地域とのつながりや行動の範囲の限界から、思うように進められない生徒がいた。地域人材とのつながりを大切にしながら、身近な課題と世界の課題をつなげる、広い視野と行動を起こすための思考力、積極性をより持つことで、さらなる知見を深めることができると考える。

3. 3. 2 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たに「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

再生可能エネルギー探究ゼミでは、探究の動機付けとして学校周辺の産業や自然環境に着目し、各々のフィールドワークや基礎実験などをなるべく全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒10名、7つの探究テーマを設定し、探究活動を進めてきた。

(2) 実施内容

①テーマ：色素電池

川内村のブルーベリーの搾りかすからアントシアニン色素を抽出し、実際に太陽光電池を作成するところである。

②テーマ：川内村の魅力を発信！

村の自然に親しみを持ち、どのようにして守られているのかを調べ、その魅力を広めたいと考えている。

③テーマ：人と海の関わり

昨年度の活動をふまえ、海と触れ合い、海を好きになってもらう海洋教育、またそこを通じて防災教育を念頭に活動を行った。請戸漁港の玉野さんたちにお世話になり、ツアーを行うことができた。参加した小学生には心の底に、海洋について前向きな印象を与えるものになったと確信する。



④テーマ：福島の魚

釣り好きが集まり、テーマを「福島の魚」とし処理水問題と関連させて探究している。福島の漁業にさらに深い愛着と使命感を持って生活することを期待する。

⑤テーマ：「海藻を呼び戻すために」

ウニの生態を調べたが、水温や食性に関して様々な知見が得られた。今回の飼育に関しては、2学年の生徒が協力をしてくれ、今後テーマを変えて引き継がれていることが期待される。

⑥テーマ：スポ GOMI

GOMI（ごみ）という悪印象を持たれそうなものを取り上げ、スポ GOMI という競技にして楽しみ、さらにこみの行く先までにも視点を置いた探究。

⑦テーマ：葛尾村に人を呼ぶために

多くの人に村の存在を知ってもらい魅力を発信したいと考え、ゼミ生や寮生を対象に第二回葛尾村キャンプ(川内村と合同)を実施した。

生徒たちは自分を育んでくれた地域への愛着を再認識するとともに、それを周囲に訴えて何らかの形で受け入れてもらえるという肯定感を持つことができた。



(3) 成果

先にも記したが、今回の活動を通して生徒たちは自分を育んでくれた地域への愛着を再認識するとともに、それを周囲に訴えて何らかの形で受け入れてもらえるという肯定感を持つことができた。、将来の地域の活動に明るい兆しにつながっていくのではないかと感じられた。

(4) 課題と展望

今後もお互いが協力して、各グループの探究活動を進めていきたい。また、「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を実現できるように継続的に努力していきたい。

3. 3. 2 アグリビジネス探究ゼミ

アグリビジネス探究ゼミは、双葉郡の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究するゼミである。

(1) はじめに

令和5年度は、スペシャリスト系列農業および商業の生徒から成り、計6名（男子1名女子5名）で実施している。自ら関心のある事柄と「農業」や「商業」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。

(2) 実施内容

テーマ及びキーワードは、次の通りである。

テーマ	キーワード	編成
① 檜葉町の魅力発信と特産品を使った商品開発	檜葉町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、さつまいも、ゆず	個人
② オリーブを使って町おこし	六次化産品 オリーブ	個人
③ 大熊町の風評被害払拭に関する探究	大熊町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、いちご、キウイ	個人
④ 小麦粉を使わず米粉を使用したお菓子を作る	小麦アレルギー、六次化産品、風評払拭、米、米粉	個人
⑤ 美容を通して食品廃棄物を減らそう	美容、六次化産品おから、グミ、ガトーショコラ	グループ

(3) 成果

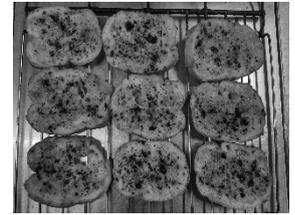
① 檜葉町の魅力発信と特産品を使った商品開発

檜葉町のために何かしたいと思い、私がやりたいことを will can need で表した。 will が物を作りたい Can が農業科で物を作れる need は風評被害の払拭にした。株式会社マルトと連携して、檜葉町のさつまいもを使ったお菓子やパンをつくってPRを行った。



② オリーブを使って町おこし

広野町のオリーブを様々な人達に知ってもらいたいと考え、広野中学校で収穫したオリーブを使ってマドレーヌやクッキーおよびラスクを製造した。



③ 大熊町の風評被害払拭に関する探究

幼い頃、私が住んでいた大熊町は、昔は「フルーツの町大熊」と呼ばれていた。故郷の大熊町の力になりたいと考え、大熊町の特産「いちご」「キウイ」を使って商品を開発し販売を行った。



④ 小麦粉を使わず米粉を使用したお菓子を作る

小麦アレルギーの人でも食べることができるお菓子を開発した。米粉を使用して、パン、煎餅、ホットケーキを製造した。米粉でお菓子を作るのはとても難しいことを知った。



⑤ 美容を通して食品廃棄物を減らそう

美容と組み合わせて食品廃棄物を減らそうと考え、豆腐製造で廃棄される「おから」を使用して、グミ、ガトーショコラを製造した。



(4) 課題と展望

自分で商品を企画し、試作を行ったが、レシピの完成度および製造技術が不十分のため、思うような製品をつくるができなかった。しかし、自分自身、失敗を繰り返して改善しながら学んでいく姿勢が探究活動であると考える。

これまでの活動を通して、自ら地域の方々とコミュニケーションを取り、原料を入手し、イベントに参加するなど、多くの経験を通して深い学びができたと思われる。

3. 3. 2 スポーツと健康探究ゼミ

震災や原発問題の余波もいまだに残り、不自由な環境で生活を送っている人々や風評被害で苦しんでいる地域や人々がいる。スポーツを通してこの地から世界で活躍する選手を輩出することが地域の活性に繋がるはずだ。その一翼を担うトップアスリート生がこれらの地域課題に対して、スポーツを通して何ができるのか。自身の競技力を向上させるためには何が必要なのか。など『スポーツの力』を多方面から考える探究を行った。

(1) はじめに

スポーツを通して持続可能で豊かな地域の実現を探る他、競技力向上、障害の予防などトップアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行い、グローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

① 方向性の再検討

2年次から本格的に進めてきた探究活動のゴールを目指すためにもう一度、活動内容の再検討をした。自分たちの目的とは何なのか、他に課題解決のための手立てはないのかなど、担当教員との面談などを通して、より深い学びを得るための計画を作成した。2年次で進めてきた活動を継続しつつ、新たな取り組みを加えて進化した探究活動ができるよう再検討の時間を設けた。

② 調査、アクション

2年次からの活動に加えて新たな取り組みを考え、活動してきた。また、担当教員との面談を行い、活動状況を確認しながらアクションが思うように進まない生徒に対してはこちらから寄り添い、できる限り生徒主体になるような支援を心掛けてきた。

高校生アスリートが求める食事とは

寮生活を送る中で、普段食べている寮食がアスリートにとって望ましい味付けや栄養素が含まれているのか疑問を持ち、寮生にアンケートを実施したり、栄養士や医師にインタビューをしたりした結果を踏まえて高校生アスリートが求める理想の献立を考え、実際に調理をし、試食会を行った。



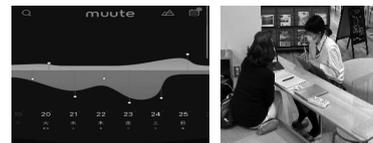
スポーツブランドを通して地域を盛り上げる

双葉郡の魅力を通してスポーツを通して広めたいと考え、本校を会場にしたイベントの立案をした。いわき市にあるアウトドアブランドと連携し、その会社で生産している糸を使用したミサンガ作りの体験ブースを文化祭で出店して実際にスポーツから繋げた地域の情報発信に貢献した。



メンタルの状況はスポーツにどう影響する？

自分の体験から、メンタルの状況がトレーニングやゲームにどのよ



うな影響を及ぼすのかについて探究を深めた。アプリを使用して自分の精神状況をグラフ化したり、専門家から話を聞いたりしたことをまとめた。また、「笑顔」と「言葉」が自身のメンタルや力の発揮にどの様に作用するか実験した。

(3) 成果

本ゼミに所属する生徒は、トップアスリート系列生として日頃からスポーツに真摯に取り組んでおり、競技力向上や障害予防、スポーツを広める、などの競技に絡めた探究を行ってきた。外部の方々と連携を図りスポーツを軸に様々な探究を展開することで、競技をしているだけでは身に付けることのできなかつた知識や考え方に探究を通して学ぶことができ、自身の競技への向き合い方が大きく変わった生徒もいた。多方面から競技（スポーツ）について考えることで、偏った考え方ではなく広い視野を持って物事を捉えられるようになった生徒も多く、将来に繋がった活動であったと感じた。



(4) 課題と展望

一方で、トップアスリート系列の生徒は、3年次になるとそれぞれ最後の大会を控え、今まで以上に競技へ打ち込む時間と熱量が多くなるため、思うようにアクションに取り組めないことも多い。特に9月に最終発表会が行われる非常に限られた時間で計画的、かつ迅速にアクションを実施しなければゴールには近づかない。以前よりもトップアスリート系列が取り組みやすいテーマ設定にはなったが、より担当教員で連携して進捗状況を確認し、見守り、声掛けのバランスを考えながら支援していきたい。この活動が、競技力向上に役立つことのほか、アスリートのセカンドキャリアにも役立つものであることは間違いない。その意味でもトップアスリートの探究活動の在り方を今後も試行錯誤していく。

3. 3. 2 健康と福祉探究ゼミ

健康と福祉ゼミでは、14名の生徒が自らの興味・関心のあるキーワードと「健康」や「福祉」の分野を関連させたテーマを設定し、家庭科、体育科、福祉科の教員3名で担当しながら探究活動を進めてきた。生徒が設定したテーマは、障がい者の活躍に目を向けた「パラスポーツの認知度を上げるためには」、HPSの生きづらさを緩和しようとするための「HPSを知ろう」、心の病の防止に着目した「よりよいメンタルヘルスを」、子どもの健康を考えた「運動が苦手な子どもはどうすれば動くことを好んでくれるか」「子どもの嫌いな食べ物をなくそう」、LGBTQ+について取り組んだ「世界はカラフルだ!」「虹色の世界を!!」、双葉郡の地域課題に触れた「さようなら2011 こんにちは2023」「愛とは何か?」「双葉郡と愛」について、それぞれグループ学習や個人研究などを行った。

(1) はじめに

昨年度に設定したテーマで、2年間様々な事柄を知り、様々な人の考えに出会いながら探究活動に取り組んできた。図書室の本やインターネットなどでの調べ学習をはじめ、アンケートの実施、調理、フィールドワークを行い、また定期的に担当教員との面談を実施するなど個に応じた支援を行ってきた。

(2) 実施内容

今年度は3年次の4月下旬に中間発表会を行った。各自で取り組んできた探究活動を共有し合い、振り返りの機会にすることができた。発表を通して、外部講師の方や在校生から様々なコメントを受け、再びアクションを起こすなどし、ブラッシュアップを積み重ねてきた。同時進行でアブストラクト作成、セルフエッセイを書き、9月に最終発表を行った。その後、論文の執筆にあたった。

ここでは、「双葉郡と愛」についての研究を紹介する。ウェディングプランナーになりたいと思っている一方で、コロナ禍、結婚式場がないなど様々な理由で結婚式を挙げることができていない人がいることを知った。結婚式を主催したいという好奇心から英語の授業でクラスの人たちと協働し合い、ダニエル先生夫妻の結婚式を執り行うことに成功し、自信を得ることができた。



しかし、双葉郡葛尾村で結婚式を挙げることは想像以上に、簡単なことではなかった。結婚式の実施計画を立

案したが、熱中症の心配、お盆、稲刈りで忙しいなどの理由から実施が困難になってしまった。式の実現はできなかったが、葛尾村に足を運び、昔、葛尾村で行われていた“祝言式”と呼ばれる日本古来の結婚式のお話や、東日本大震災後の変容を知ることができた。



また餅つき、山菜取り、田植えなどの体験を通して地域の方との交流を深めることができた。

(3) 成果

このように探究活動を進める中での葛藤や失敗は、新たなことに気付かされると同時に、次なる手立ての思考力、原動力となり、問題解決力が鍛えられた。また、地域をフィールドワークしたことで地域社会の理解につながったことや、地域社会の一員としての意識を高めるなど、プラスの影響をもたらすことができた。さらに地域の方との対話、文化的な体験活動は、より良い未来への創造につながることを期待できる。

(4) 課題と展望

生徒自身の興味・関心がどのように発展したであろうか。「探究の時間が楽しみ」、「探究の時間にこれがやりたい」など、生徒が自律的に行えるような探究心と様々な人との連携体制が課題である。今後も探究を通して身に付けた力を活かし、様々な経験を重ね、人間として何をすべきか、どのようにすべきかなどを考え続け、地域の未来を創る取り組みにつなげていきたいと考えている。

3. 3. 3 進路探究 キャリア学習

(1) はじめに

2年次より「進路探究」として設けられたこの時間であるが、3年次ではより生徒たちが将来の進路について深め、自己を見直し、進路実現に向けて自ら具体的に動き出すための時間として位置づけた。主に進学希望者、就職希望者と、希望進路別に分けた講座と全体に関わる講座に分け、外部講師による講演等を中心に展開していた。

(2) 実施内容

・ライセンスアカデミーによる面接、小論文指導

6月、進学・就職者全員を対象に開催した。面接指導は各クラスに1人ずつ講師が配置され、面接の意義の説明の後、実技指導が行われた。入退室の仕方、姿勢、質問に対する答え方等、具体的にご指導いただいたほか、クラスの生徒の前で一人ずつの実践であったことから、良い緊張感を持った状態で生徒は練習できたようである。

小論文も同様にその意義と具体的な書き方、実践演習とその添削という流れで行われた。進路希望が明確でない限り、小論文や志望理由書は思うように書けない、ということを生徒は自覚し、今後の進路活動に向けて大きく舵をきった者も多かったようである。

・奨学金に関する講義

上記の面接、小論文指導と時期を同じくして開催した。進路に関わるお金について、生徒自身が理解することで、進学の際の金銭面におけるトラブルを防止するとともに、進学先が明確でない限り金銭的な見通しも立たない、という観点から、面接や小論文指導等の進学指導と時期を合わせて開催した。「進路月間」のようになったが、それぞれの関連性を生徒も理解し、特に自らの進路をなかなか決められない生徒にとっては、具体的に動き出さなければいけないという自覚を持つことができたと思う。

・共通テスト申し込み指導／共通テスト事前指導

共通テスト受験者に向けた指導。例年行われているが、コロナ禍明けということで特に前年、前々年と異なるところや、教科、科目の確認など細部にわたっての指導を実施した。直前の事前指導では、会場までの交通手段、当日の注意事項や万が一の事態の対応など

を、いずれも進路指導部が中心となり進めた。

・着こなしセミナー／ビジネスマナー講座

進路が決定した生徒が多くなってきた時期に、社会人としての在り方を外部講師を招聘して講演いただいた。着こなしセミナーでは、公的な場での着こなしや振る舞いを、紳士服コナカ平店店長からご指導いただいた。生徒をモデルとして、スーツの着こなしや、冠婚葬祭時の服装、バッグや靴の選び方について紹介していただいた。生徒自身が着用した感想を述べたり、トレンドや色の組み合わせ等について説明があったりしたため、生徒は興味深く臨んでいた。

・本校就職支援員による講話

就職希望者を対象に、定期的に行われる。本校進路指導部に常駐する就職支援員の方から、就職先の選び方、求人票の見方、企業見学や受験当日の心構えなどを生徒の進路希望に合わせて丁寧にご指導いただいた。企業から内定をいただいたのちも、今身に付けておくべきことや今後各会社において必要となることなどを生徒に教示していただき、毎度、生徒は身の引き締まるような思いで拝聴していた。

(3) 成果と課題

生徒の進路意識を高め、具体的な行動を促していくという当初の目的に関しては意義のある結果が出たと思う。特に時期を定めて、進学について志望理由書の書き方や奨学金など多方面に考えなければならないことや、保護者との相談が欠かせないことを生徒に自覚させられたことは大きな収穫であったと言える。生徒も、これらの講座をある時期にまとめて行ったことで、前向きな姿勢で取り組み、また、自ら進路先について調べたり、保護者と話を進めたりといった、具体的な行動に結びつけられたと言えよう。課題としては進学、就職それぞれの進路先が決定したのち、より気を引き締めて「社会に出るとはどういうことか」を自覚させられるような手を打った方がよいのではないかという点である。生徒の気が抜けないうちに、進路先に向けての学習や、就職先での業務について考えさせられれば、最後まで落ち着いた生活で学習に打ち込めるのではないだろうか。

3. 3. 4 探究活動発展のための発表会（未来創造探究 生徒研究発表会）

高校2年次から2年間取り組んできた「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。本校における課題解決型学習の成果を披露する機会として、調査アクションのみならず、課題を解決するアクション、生徒自身の総括、社会への提言等を発表した。様々な分野の第一線で活躍されている方（専門知審査員）や地域の課題に取り組んでいる方（地域知審査員）に審査をお願いした。今年度は高校が61、中学が14プロジェクト参加し、加えてWWL 県外連携校である仙台二華高校の生徒たちを招き、3プロジェクトに探究活動の取り組みについて発表してもらった。発表部門はコンテスト部門と対話交流部門、ポスターセッション部門（ポスターまたはスライド）の3つに分け、コンテスト部門の上位発表のみを全体会に進出する形式を取った。

（1）概要

- ① 目標
- 1) 地域課題解決のための探究と実践に取り組む学習「未来創造探究」の成果をまとめて発表することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（D 表現・発信力、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 2) 発表を聴講することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（A：社会的課題に関する知識・理解、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 3) 保護者、地域の方々、県内外の教育関係者に本校の探究活動の内容を発信し、ステークホルダーとの協働関係をより強固なものにする。

② 日時 令和5年9月24日（日）8：40～15：45

③ 内容 9：00～11：40 分科会

コンテスト部門	9：00～11：00
対話交流部門	9：00～11：40
ポスターセッション部門	9：10～11：15

11：40～12：30 昼食・休憩
 13：00～15：00 全体会
 15：05～15：30 閉会行事（結果発表、総評）

④ 審査員 専門知・地域地を持つ審査員7名

	氏名	所属	
1	田村 学 様	國學院大學人間開発学部教授	全体会審査員
2	松岡 俊二 様	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科 教授	全体会審査員
3	平山 勉 様	一般社団法人 双葉郡未来会議 代表理事	全体会審査員
4	青木 淑子 様	富岡町3.11を語る会、元富岡高校校長	コンテスト1 審査員
5	永井 祐二 様	早稲田大学 環境総合研究センター 研究院教授	コンテスト1 審査員
6	前川 直哉 様	福島大学 教育推進機構 准教授	コンテスト2 審査員
7	佐藤 亜紀 様	HAMADOORI13 事務局	コンテスト2 審査員

（2）詳細

① コンテスト部門

コンテスト部門における発表のチェックポイントとして、以下の項目を示した。

- ・地域が抱える課題をおさえているか
- ・全国や世界の課題と照らし合わせた考察があるか
- ・課題解決に向けた調査や実践の報告があるか
- ・社会や未来に向けた提言があるか

・学んできた内容を自分の進路や生き方に繋げているか
 分科会においては上記審査員に加え本校教員がチェックポイントに基づき審査を行い、上位4プロジェクトが全体会で発表する流れとなった。

今年度は高校から10プロジェクト、中学から4プロジェクトがコンテスト部門に出場し、7プロジェクトずつ2会場を用いて分科会を実施した（発表プロジェクト詳細は【資料4】参照）。特徴として、高校は6つのゼミ

から満遍なくコンテスト部門に挑戦するプロジェクトがあり、発表内容も多様なものとなったことが挙げられる。

表彰結果は以下の通りである。

「未来創造探究 最優秀発表賞」・・・1件

・ウニと生態系

「未来創造探究 優秀発表賞」・・・3件程度

・法はブラックでレッドでちょっとグリーン

・海を学ぼう!!!

・Café ふう売上あげあげプロジェクト～人と人が繋がる居場所～

「未来創造探究 発表賞」・・・3件程度

・海洋放出について考えるー反対運動を始点にー

・私と檜葉とさつまいも

「未来創造学 優秀発表賞」・・・2件程度

・鉄を追い

・Imagine future energy

「共感賞」・・・全体発表から生徒投票で1件選出

・法はブラックでレッドでちょっとグリーン



② 対話交流部門

本部門では賞は設けず、会場ごとのメンバーで対話の時間を多めに設定し、探究活動のヒントや課題に対する考え方について議論を深めることを目的とした。他2部門とは異なり、発表と聴講だけでなく、生徒や教員、地域の方々が一緒になって話し合い、模造紙にメモ用紙を貼りながら意見交換する形式で進めた。

高校からは8プロジェクト、中学からは3プロジェクトが参加した。話し合う内容が複雑にならないようにある程度テーマ（『#〇〇』の形式で示した）の近いものを会場ごとに分けて配置した。詳細は【資料5】参照。

《第一会場テーマ》

[前半] #周囲にどのように関心を持ってもらうか

[後半] #インクルーシブ・障がい

《第二会場テーマ》

[前半] #ウェルビーイング・豊かさ

[後半] #国際交流

《第三会場テーマ》



#震災後の風化とまちづくり@富岡

対話主体の発表形式は昨年度から続く試みであったが、今年度は全体プロジェクト数が例年に比べて少なかったこと、3部門に分かれていたこともあり、比較的少数での対話が可能となり、活発に議論が行われた。

③ ポスターセッション部門（ポスター/スライド）

将来的に WWL 国際会議を開催することを踏まえて、コロナ禍以来あまり行われてこなかったポスター形式の発表ができる部門を作るということで今年度新設した。高校3年次にとっては、これまでのプレ発表会（2年次10月）、中間発表会（3年次4月）ともにスライド発表のみとしており、ポスター制作・発表は初めてとなる生徒がほとんどだったため、アリーナ会場に電子黒板を運び込んでスライド発表もできる選択式とした。

ポスター発表もスライド発表も、1プロジェクトにつき2回発表する機会を与え、会場内で生徒が見て回れるように時間も調整したため、発表・聴講をバランスよく行うことができた。WWL 県外連携校である仙台二華高校にはこちらの部門で参加していただき、本校生徒たちにとって非常に良い刺激となる発表をしてもらった。

会場内に投票台紙を設置し、ポスターセッション部門共感賞を選考した。

「ポスターセッション部門共感賞（高校の部）」・・・1件

・ハートの強さで勝利を掴め！

「ポスターセッション部門共感賞（中学の部）」・・・1件

・自分が双葉の良さになるには

(3) 成果と課題

3つの部門を設けたことで、生徒の様々な発表スタイルやニーズに応える形となり、探究活動の深化・質の高いフィードバックの提供につながった。

審査員からは、生徒の「取り組み方」に対する多様な表彰を設定することや、生徒・教員が共に学ぶ、教科学習と総合学習の好循環モデルの創出と組織的な対応についてのご助言をいただいた。

次年度からは3年次5月に最終発表会の時期を早めることとなる。ポスターセッション発表のための機会をいかに与えていくか、より多様化する探究内容にあった発表形式・部門や会場編成をどのように設定していくかについて考えていかなければならない。

3. 4 海外・国内研修

3. 4. 1 ドイツ研修

本校では、開校年度からドイツを訪れている。本校における高校一年次ドイツ研修では、地方創生イノベーションスクールの一環として、Think Green をテーマとし、2030 年に問題となる地域の課題と共通する世界的な課題についてアクションを提言するため、平成 28 年度にミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校と交流を行った。それ以来、同校とはオンラインも含めた交流を毎年継続している。本校では未来創造探究として、原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりについて、それらを福島のみならず、全世界が共有すべき「持続可能な社会づくり」として探究している。ドイツの環境都市フライブルクを訪問することにより、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩とするためにドイツ研修を実施した。東日本大震災によって、地域課題の先進地ともいえる状況に陥った福島県・双葉郡が、どのような街づくりを行っていくべきかについて考え、帰国後の学びに繋げた。

1. 日程・参加者

派遣期間： 令和 6 年 1 月 6 日（土）～16 日（火）
参加生徒：

役職	番号氏名
リーダー	1511 鈴木 里桜
副リーダー	1422 長谷川翔哉
副リーダー	1527 門馬 沙英
事前研修	1414 齋藤 琴音
事前研修	1526 山野辺翔太
スケジュール管理	1411 車田 秀雄
スケジュール管理	1523 村山昊志朗
記録	1417 須藤 翔磨
記録	1528 吉田はるか

引率団：

齋藤夏菜子(英語科・企画研究開発部副主任)
小林 知弘(英語科・高校 1 学年担任)

2. 実施内容(日本での事前研修)

(1) Ernst Mach Gymnasium 校との交流

事前に、それぞれのプロフィールを共有し、ホームステイのパートナーを決めた。その後個人で連絡を取り合い、オンラインによる交流を続けてきた。年末年始を使ってバーチャルホームステイも行い、日本の食事や文化、部屋の様子などを紹介し、交流を深めた。

(2) 在外県人会の方々との交流

期日：令和 5 年 11 月 16 日（木）

在外県人会サミットとは、海外の福島県人会と県、県人会同士の交流を拡大し、在外県人会のネットワークによる本県の現状や魅力等の発信と本県の復興・創生を加速することを目的に開催されているものである。その第 4 回が開かれ、訪問先の一つとして本校を訪問した。学校を代表して学校紹介のプレゼンテーションを行い、校舎内を案内した。



(3) 小松理虔さんによる講話

期日：令和 5 年 11 月 22 日（水）

小名浜の活動家、小松理虔さんが提唱する「共事者」という考え方についてご本人に講話を依頼した。この講話は、メンバーからのリクエストで実現したものである。また、このイベントはオープンにし、誰でも参加できるようにした。

小松さんの言う「共事者」について齋藤幸平という人はこのように言及している。

「当事者と非当事者の線引きは分断を生む。「真の当事者」へと語りを限定していくことが、多くの人にとって「自分には語る資格がない」どころか、考える能力さえも奪うことになる。その先にあるのは無関心と忘却。それでは社会問題は全く改善しない。「自分は当事者ではないから発言するのを控えよう」というのは一見マイノリティに配慮しているようで、単にマジョリティの思考放棄、それは考えなくても済むマジョリティの甘えであり、特権。3.11 誰もが加害者であり被害者でもある。それが「共事者性」。(『ぼくはウーバーで捻挫し、山でシカと戦い、水俣で泣いた』KADOKAWA)

社会課題に対して、どんな濃淡があってもいいから、「自分は共事者である」と言うことができれば、社会課題の解決のために一歩を踏み出すハードルが下がるはずだ。

震災から 12 年以上経った今、新たに ALPS 処理水の海洋放出のような新たな課題が生まれている。より一層、当事者を置き去りにしない、共事の心が大切だということを学んだ。



(4) 会津大学・留学生との交流

期日：令和 5 年 11 月 23 日（木）、24 日（金）
会津大学の外国人留学生と共に、双葉郡の震災遺構や南相馬のロボットテストフィールドなど様々な箇所をまわった。詳細については別途記録があるので省略する (3.4.4)。

(5) プレゼン・演劇作成

ドイツで発表するプレゼンテーションと演劇は、ゼロから生徒たちが議論して考えた。世界の様々な問題や、震災や過去の歴史に対する記憶の継承

について、当事者という言葉で分断を生むのではなく、共事の心を持って対話（オープン・ダイアログ）することの大切さを伝えたかったのだが、そもそもチームの中でオープン・ダイアログができてきているのか？という疑問に至った。伝えたいことを考えながら、果たして自分たちはそれが出来ているのか？という問いは、彼らを大きく揺るがし、チームとして研修に取り組む姿勢を変えるきっかけとなった。

(6) Facebook を活用した事前インプット

昨年度からの新カリキュラムにより、アカデミック系列が毎日 7 時間の時間割となった。集合研修の時間を捻出することや、学校内外の授業外の活動を全員で行うことはこれまで以上に困難を極めた。そこで、Facebook グループを作成し、そこに企画研究開発部の教員や地域の方などに入っていただき、研修日程の共有、研修内容や写真・動画の共有などで活用した。



地歴科の教員からはドイツに行く前に知っておくべき歴史についての解説動画や、プレゼンや演劇を作る上で知っておくべき世界情勢についての Web リンク等が共有され、生徒は自分のペースでインプット学習を行うことができた。



(7) 調理実習

現地の交流会で日本食を作るため、冬休みを使って調理の練習をした。現地で手に入る食材と、日本から持っていきべき食材を考え、豚汁、ほうれん草のおひたし、だし巻き卵、おにぎりを作ることにした。ドイツからの留学生も一緒に参加し、ドイツのお菓子を作り一緒に食べるなど、忙しい事前研修の合間の息抜きとしても良いリフレッシュとなった。

(8) ALT との英会話練習

毎日昼休みの 30 分を使って、ローテーションで英会話を行った。日常会話を中心に、ALT にホームステイを意識した実践的なレッスンを用意してもらい、少人数でじっくり話すという訓練をした。少人数制にしたことで、一人一人丁寧にすることができ、生徒たちも英会話を楽しむことができた。

3. 実施内容(現地での研修)

(1)フライブルク

① tram による移動

フライブルクの住民が日頃使っている、tram

(路面電車) を使って移動をした。フライブルクの tram は、環境保全のための交通政策と切っても切れない関係にある。70 年代に酸性雨による黒い森の枯死が起き、それが自動車交通量の増加による排気ガス汚染が原因だったことから、少しでも自動車排気ガスを減らすために、自動車から徒歩・自転車や公共交通への転換をはかろうという機運が高まった。フライブルク市は都心への自動車乗り入れを規制し、郊外から来たクルマは、tram の駅に隣接したパークアンドライド駐車場に停めて、tram に乗り換えて都心に向かう。路面電車の線路には、騒音防止だけでなく環境保全のために芝生が植えられている。tram での移動は過去の研修でもなかったことであり、いかに tram が便利な乗り物かを体験することができた。



② エコステーション(環境教育センター)

エコステーションは 1986 年に BUND (ドイツ環境自然保護協会) の働きかけで完成した建物である。1986 年はチェルノブイリ原発事故の年であり、環境について考える機運が高まった年でもあった。ここには、1 期生が訪問した際に植えた木がある。まずはその木を見に行った。



その後、屋内に戻り、地球が 1 年間に生み出す生物資源を、年初から数えて人類が使い果たしてしまう日を示す「アースオーバーシュートデー」についての講義を受けた後、市販の化粧品やクリームなどに入った液体プラスチックを調べ、その後自然素材を使って石鹸やスキンケア製品を作ることによってプラスチックフリーな選択ができるということを学んだ。

最後に、地域の方々も招いて我々が用意したプレゼンテーションと演劇を披露した。現在の原子力発電所における ALPS 処理水の海洋放出の問題について、研修チームなりに対話を重ねて出した考えについて、ドイツの環境自然保護の観点から忌憚のない意見をもらうことができた。

日本は震災後、原発の稼働を停止しているが、その代替となるエネルギーを自給することができ

ず、化石燃料の輸入に頼っている。昨年末にドバイで COP28 が開かれ、「原子力発電の設備容量を 2050 年までに世界で 3 倍にする」という宣言に、22 カ国が賛同した。今後原発をどうしていくかは日本のエネルギーを考える上で避けて通れない問題であり、このことについてフライブルクの方々と意見を交わすことができたことは貴重な経験となった。



③リヒルトフェーレン バッハ職業訓練学校

この学校は、日本で言う実業高校にあたる。日本との違いは、入学前に自分が将来就職する企業と契約を交わす必要があり、生徒は将来の具体的な目標を実現するために、就職後に即戦力となる理論と技術を学ぶことができる。そのため、徹底した現場主義を貫いており、実習に使うボイラーや自動車等の機材はできるだけ最新のものを取り入れて授業を行う。勿論、環境に対する配慮も欠かしていない。また、移民を教育するプログラムがあり、職業訓練と言語教育など移民が社会で受け入れられるための技術を習得させることに力を入れている。ウクライナからの移民も多く受け入れているという話も聞くことができた。



④ヴォーバン地区

第二次世界大戦後に市が買い取り、多様な住民が快適な生活を送れるように開発を進めた最先端のエコタウンである。団地を建設する際には、設計から住民を巻き込んだと聞き、その能動性市民性に驚いた。

街全体がいくつかのブロックに分かれており、従来のように家の前に車が通れる道路があるブロックもあれば、住宅地に一切車を入れないよう設計されているブロックもあり、開発当時住民がニーズに合わせて住むブロックを選んでいった。子育て世帯の居住者が多いエリアは、大きな公園を挟んで団地が建っており、地域住民全体で子供を見守ることができる仕組みになっていた。また、大きな窓から太陽光を取り入れ、暖房の使用頻度を減らすことができるパッシブハウス仕様になっており、子供や環境に優しい作りになっていた。

⑤フライブルク大聖堂

フライブルクのミッテ（旧市街地）を案内して



いただき、石畳とベヒレ（水路）が美しい街並みを歩いた。とりわけ美しいのが、旧市街地中心部にあるフライブルク大聖堂である。1354 年に起工、1513 年に完成。ロマネスク様式とゴシック様式が混在し、高さ 116 メートルの尖塔がある。芸術的価値が高い祭壇やステンドグラス、彫刻などの装飾の美しさには感嘆の声が上がった。

大聖堂の外では、普段はマーケットがぎっしり立ち並び賑わっているのだが、この日は農家のストライキの影響でお店がほとんどなかった。何千人もの農民がトラクターを持って集まり、連邦政府の農業政策に対する抗議デモが行われていた。当日は CNN や BCC などでも取り上げられており、現地に来なければ見ることができない光景だった。



(2)ミュンヘン

①Ernst Mach Gymnasium 校との交流

ミュンヘンでは全員がホームステイをするため、初日の朝はホテルをチェックアウトし、全ての荷物を持ってタクシーで EMG に向かった。事前にオンラインで交流を深めてきたため、学校ではやっと会えたことを抱き合って喜んでいった。我々の発表では、ドイツ語による自己紹介から始まり、フライブルク以降ブラッシュアップしてきたプレゼンと演劇を発表した。

EMG の生徒や教員は発表



に熱心に耳を傾け、たくさんの感想や質問をくれた。

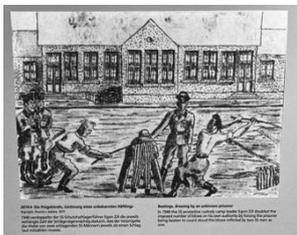
夜は、学校の近くの公民館で夕食会を開いた。我々は日本食を、EMG の生徒達はバイエルン地方の

郷土料理を作り、ホストファミリーや多くの学校関係者も参加しての楽しい会となった。ドイツの生徒の反応が知りたいと興味本位で作った納豆巻きが思いの外大人気で驚いた。この日からそれぞれがホストファミリーの元で3泊4日を過ごすこととなった。



②ダッハウ強制収容所

ダッハウ強制収容所は、ナチスが1933年に設立した最初の常設強制収容所である。親衛隊の収容所護衛兵のトレーニングセンターであり、この組織と慣例がすべてのナチス強制収容所のモデルとなった。歴史総合の授業で「検証 ナチスは『良いこと』もしたのか？」(小野寺拓也・田野大輔/岩波ブックレット)を読み、事前研修として「夜と霧」(ヴィクトール・E・フランクル)の内容に触れていた。



Arbeit macht frei (働けば自由になれる)という文字が刻まれた門を通り、広大な敷地を歩いた。展示室には、収容時に没収された遺品や、当時の証言、写真、映像が並び、その凄惨さに生徒は言葉が失っていた。

この収容所の初期の囚人は、ナチスの政治に反対する活動家や、ドイツ共産党員、社会民主党员、労働組合員、エホバの証人、ロマ族(ジプシー)、同性愛者、常習犯で占められていた。一万人以上のユダヤ人男性が収容された(水晶の夜)と呼ばれる暴力の結果、ダッハウ収容所のユダヤ人の囚人数は、増加した。更に、ドイツを発展させるために収容所の人たちは軍事工場や自動車製造、鉄道、また、新しい強制収容所を作るためなどの理由で強制的に労働を強いられていた。ドイツにとって強制収容所は大事な「産業」だったという。

今回、EMGの生徒も数名同行した。日本の高校生とドイツの高校生と一緒に展示を見てまわり、このようなことを2度と繰り返さないためにはどうすれば良いのか共に考えることができた。

この日はとても寒く、防寒着を着ていても寒さが身に染みる天気だった。当時、この場所で、最低限の薄い衣服で身を寄せ合って暮らしていた人々は、我々以上に苦しい寒さを経験していたのだと想像した。

ドイツでは、自国の過ちを認めている。教育にお

いてもナチスのプロパガンダを繰り返さないために、批判的思考力を大切にしているという。振り返りで、生徒から「自分達の歴史教育について考えたい」「東日本大震災や原子力災害について、私たちは学校で当たり前のように学ぶけれど、県内の他の学校はどうだろう。知識の格差をどうすれば埋められるだろう」という問いが出た。引き続き事後研修で議論していきたい。

③ミュンヘン市街地案内

ミュンヘン滞在中は、本校で訪問を予定していたダッハウ強制収容所や最終日のFamily Dayを除いて、現地でのプログラムは全てEMGの生徒と先生がプログラムを考えてくださった。生徒によるガイドも大変分かりやすく、楽しく4日間過ごすことができた。

現地でのプログラム内容は以下の通り。

1/11(木): ドイツ博物館

1/12(金): マリエン広場周辺ツアー

(聖ペーター教会、ビクトリアマーケット他)

1/13(土): ヘレンキームゼー城ツアー

1/14(日): Family Day (ホストファミリーとの1日)

EMGの生徒たちは、ツアーガイドとして素晴らしいアテンドをしてくれた。街の歴史や、建物の説明など、事前に時間をかけて準備してくれていたのだろうということが伺えた。いつかEMGの生徒達が日本を訪問することがあれば全力でお迎えし、これまでの恩返しをしたい。彼らのホスピタリティに心から感謝している。



④ホームステイ

EMGの生徒の家庭に1人ずつホームステイをした。現地の家庭で数日過ごし、異文化生活を体験したことによって、国や文化の違いを楽しみ、友情を育んだ。最後の別れの時間、ホストファミリーと涙を流して抱き合う姿に、特別な時間を過ごしたことが伺えた。



4. 研修の成果と課題

開校年度から続く研修であり、現地校との繋がりも強固なものになっている。今後もお互いにとって学びの深い交流となるようにしていきたい。課題としては、帰国後の学びの共有である。校内だけでなく、地域にも広く学びの還元ができるよう発表の機会を持つと共に、多様な方と学びの共有と対話の場を持ちたいと考えている。

3. 4. 2 ニューヨーク研修（令和4年度）

本校がSGH指定校であった期間から続く本事業は、新型コロナ感染拡大に伴い中止や代替を余儀なくされていた。SGH指定最終年度となった2019年度（本校4期生）およびグローバル型初年度の2020年度（本校5期生）、そして昨年度（本校6期生）も渡航を断念してきた。このような状況のため3年に渡って国内での代替研修を実施してきたが、今年度（本校7期生）は3期生以来4年ぶりにニューヨーク現地への渡航が可能になった。

（1）チームビルディング

本研修は、地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。

本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたいという意志を持った8名の生徒たちが選抜された。原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきかから生徒たちは議論を重ねる。研修前後には積極的に地域と学校に学びの成果を還元する。

参加者8名を選抜する際には、以上の観点を踏まえた内容および自分の探究と地域・世界とのつながりについての志望理由書を重要視し選抜した。

（2）事前研修①（伝承館研修、語り部交流会）

期日：令和4年12月21日（水）

令和5年1月23日（月）

令和4年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の一環として、NY研修参加生徒7名で東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れ、当時の被害状況への理解を深め、福島の実況の課題について把握した。

上記イベントに参加できなかった生徒1名について、後日伝承館で行われた令和4年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部交流会」にオンライン参加し、プレゼンテーションを用いて自身の被災体験と現在の学校生活について発表を実施するとともに、県内高校生の被災体験や取り組みについての発表を聞いた。

（3）事前研修②（会津大学留学生との交流）

期日：令和5年2月20日（月）

会津大学主催のプログラム「2022年度東日本大震災・原子力災害伝承館と福島ロボットテストフィールド等視察」へ参加した。同プログラムでは上記2つの施設に加えて請戸小学校を訪れ、福島が抱えてきた課題と復興への取り組みを客観的にとらえ、今後革新的な未来のために何ができるかを実感することを目的としている。

会津大学からは13名の留学生を含む21名が参加し、本校NY研修生徒8名、留学生2名と合わせて計31名がグループに分かれて研修を行った。

英語を用いたコミュニケーションのみならず、外国人から見た福島の印象や、専門分野を学ぶ大学生ならではの思考から未来の可能性について共に探る良い機会となった。



（4）事前研修③（その他）

以下の内容を事前研修として実施した。

- ・英語コミュニケーションのトレーニング
- ・課題図書『This Very Tree』（Sean Rubin 著）、『災害ユートピア』（Rebecca Solnit 著）、教育関連書籍を各自1冊選択
- ・社会科教員による9.11、アメリカ史講義
- ・映画『1/10 Fukushima をきいてみる 2022』鑑賞会&交流会参加
- ・小玉直也氏（NPO 法人アースウォーカーズ）との懇談
- ・NHK Special 混迷の世紀 第9回「ドキュメント国連安保理～密着・もうひとつの“戦場”～」視聴と哲学対話
- ・UNIS-UN 2023 Conference Debate 練習

上記に加えて、NY現地でのプレゼンテーションに向けたスピーチ作成、スライド作成、プレゼンテーション練習、UNIS-UN Cultural Showcase で披露するダンスの練習等を実施した。

（5）ニューヨーク現地での研修

期日：令和5年3月10日（金）～18日（土）

活動内容：

① 国際機関関係者との意見交換

国連日本政府代表部による「国連とSDGs」に関する

講義を聞き、福島の人たちが持続可能な世界の実現に向けて何を為すべきなのかを考える。また、各国の国連関係者に福島復興に向けた自身の実践について発表を行い、持続可能な世界の実現について意見交換を行う。

② UNIS-UN での各国同世代との交流

国連職員の子弟等が通学する UNIS (国連国際学校) が主催し、各国の高校生が参加する生徒国際会議 UNIS-UN (会場：国連総会会議場) に参加し、各国の同世代とグローバルな課題について議論を行い、交流する。

(2023 テーマ：Turning the Page: A New Chapter in Education)

③ 現地 NPO と連携した同世代生徒意見交換

現地の NPO と連携し、NY の多様性を包含するコミュニティ形成について学ぶとともに、市内在住の同世代に福島復興に向けた自身の実践について発表し、グローバルな課題について意見交換を行い、交流する。

④ 現地行政職員との意見交換

NY 市の職員に向けた自身の実践について発表し、福島と世界の課題解決について意見交換を行う。

⑤ シティズンシップに関するフィールドワーク

The Apollo Theater や Schomburg Center for Research in Black Culture で、NY における黒人文化の歴史と、その記憶の伝承等について学ぶ。また、9.11 Memorial Museum の視察と意見交換を行う。

⑥ 生徒たちの計画による自由研修

多様性と能動的市民性が息づくニューヨークの文化を体感する。また、異国の地で行き先や移動手段も自分たち自身で計画し行動する経験を積む。

プレゼンテーション発表内容：

『Paying it forward
from Fukushima』



2011 年 3 月の東日本大震災・原子力災害発生時の自分たちの体験とふたば未来学園入学後に学んだことを踏まえて、次世代への「恩送り」として地域社会あるいは世界に向けて活動していることを紹介し、福島の現状の課題を解決に導くための対話の場 (Open Dialogue) の必要性を訴える内容である。 ※Canva でスライド作成

3月10日 (金)

初日は、NY 市役所の Chisato Shimada 氏、同僚の Christopher Haight 氏、Naiyiri Booker 氏をホテルの一室に招き、用意したプレゼンテーションを見ていただ

き、対話の時間を設けた。

Christopher 氏と Naiyiri 氏は NY 市役所公園局の水に関わる (川、池、海、湿地等) 研究者の方々である。プレゼンテーション内で言及した福島の原発処理水の問題を中心に、生徒の探究活動のヒントになるようなアドバイスを多数いただいた。

3月11日 (土)

2 日目は黒人文化の原風景が残るハーレムでの研修として、まずは The Apollo Theater を見学した。The Apollo Theater の歴史、ハーレムはどういう街なのかについて学んだ。

その後は African Market の散策を実施。セネガル出身の方が開いた店に案内していただき、Africa in Harlem という取り組み・考え方や、黒人やアフリカに住む人々に対する偏見についての話を聞く機会に恵まれた。

午後は黒人文化の歴史のアーカイブが残る Schomburg Center の見学と、ハーレムの学生たちとの交流を実施した。アイスブレイクのゲームで親睦を深め、生徒が準備したプレゼンテーションを発表した。ハーレムの学生たちは、最初は福島のことをほとんど知らなかったが、発表を通して、福島が直面している風評被害や処理水の問題と、黒人差別の歴史やミンガン州フリントの水汚染公害問題を重ねて、共感しながら真剣に聞いてくれた。

3月12日 (日)

3 日目は 9.11 家族会の Meriam 氏と 1 日目もお世話になった Chisato Shimada 氏の案内で World Trade Center 周辺の散策を行った。Meriam 氏は写真を見せて当時を振り返りながら、9.11 の出来事について丁寧に説明して下さった。

9/11 Memorial Museum の視察では、事前研修で複数回訪れた東日本大震災・原子力災害伝承館と同じ役割を有する施設の見学を通し、歴史を後世へ伝え残すこと、それを学ぶことの大切さを改めて感じる事ができた。

その後は、本校の NY 研修で縁のあるロバート柳澤氏のご自宅を訪問した。Meriam 氏を始めとする 9.11 家族会の方々にも集まってお話しいただき、生徒によるプレゼンを実施した。家族会の方々には真摯に生徒のプレゼンを聞き、多数の質問とコメントをして下さった。用意していただいたご馳走をいただく中で、日本に留学予定の学生とコミュニケーションを取ろうとする生徒の姿も見られた。

3月13日 (月)

4日目、午前中は国際連合日本政府代表部を訪問し、志野光子大使、大嶋勝公使のお二方にご挨拶をさせていただきました。生徒は事前研修として視聴した番組の感想と、それを踏まえた対話の内容、NY Project の取り組みについて報告した。志野大使と大嶋公使からは激励の言葉をいただき、その後生徒の探究活動に関する質問を基に対話を行った。

続いて児玉啓佑参事官にご挨拶し、国連やSDGs、児玉参事官自身の取り組み等についてのブリーフィングに参加した。プレゼンテーション披露では「想像以上に素晴らしいものでした」と感想をいただき、プレゼンをより良くするためのアドバイスや探究活動への助言、チームプロジェクトにおいて大切にすべきことなどを教えていただいた。

午後はUNIS (United Nations International School) のプログラムに参加した。Cultural Showcaseには各国の高校生が参加し、自国の文化を紹介するパフォーマンスを披露した。本校生徒も事前に申し込みをしており、何度も練習したダンスで会場を盛り上げることができた。生徒は国籍が異なる相手とでも感動を共有できる楽しさや達成感を感じたようだ。

その後は生徒の希望に応じて2つのWorkshopへ参加し、周りの外国人生徒とコミュニケーションを取ったり、協働して作品を作り上げたりした。

3月14日(火)

5日目は国連国際学校 UNIS (United Nations International School) が主催する生徒国際会議UNIS-UNへ参加した。世界中の学生が国連本部のGeneral Assembly Hall (総会議場)に集い、講話を聞いたりDebateをしたりするプログラムである。

【Day1 Keynote Speaker (講演者) と概要】

- ・ Mr. Christopher de Bono, Deputy Director responsible for Communications, UNICEF 気候変動によって教育の機会を奪われる子どもたち
- ・ Sheikh Manssour bin Mussallam, Secretary-General, Organization of Educational 教育で何を学ぶべきか
- ・ Dr. Lauren Rumble, Associate Director Gender Equality for UNICEF 教育のジェンダー平等、女性の教育機会均等について

Day1のDebate Motionは“*Incorporating AI into education will have positive or negative effects*”であった。事前に選ばれた学生が議論するのを聞き、最終的に投票を行う。事前研修でALTの協力の下、立場を

決めて理由や根拠を考えてきたこともあり、いくつかの例や単語について聞き取って自分なりに考えることができたようだ。

3月15日(水)

【Day2 Keynote Speaker (講演者) と概要】

・ Dr. Roser Salavert, Co-Founder and Director of the NYS/NYC Professional Development 「他人の靴を履く」思いやりのある教育システム

・ Soraya Fouladi, Founder and CEO of Jara eラーニングの普及、The Jara Unitの紹介

※上記に加え、Student Moderated Panel Discussion

Day2のDebate Motionは“*Education should be private rather than public.*”であった。結果的に指名されることはなかったが、本校ならではの視点から様々な要素について考え、質問を準備して挙手することができた。3期生ぶりのUNIS-UNの現地参加はハードルの高いものだったが、生徒は色々な新しい経験をしたり、教育の世界的な問題について自分事として考えたりする機会を得ることができた。

3月16日(木)

最終日となる7日目は、国連本部Civil Society UnitのHawa氏や、UN Youth Representativesの皆様、福島の問題と世界の問題を重ね合わせつつ、持続可能で平和な世界の実現に向けた提言を盛り込んだプレゼンテーションを行った。

国連関係者の方々、プレゼンを通してふたば未来生の取り組みや福島・日本の現状をよく理解できたと仰っていた。また、発表内容について、対話・交流の場を開くことの大切さ、そしてそこから生まれてくる新たな分断に立ち向かうための助言をくださった。生徒たちのこれからの取り組みに期待し励ましてくれる声かけの数々に、生徒たちは安堵しながらも身の引き締まるような思いだったと思われる。

現地での研修プログラムを一通り終えて、生徒からは「色々な経験と失敗ができて良かった」「周りのメンバーを尊敬できた」「人生が変わった」という感想があがった。



※3月17日(金)、3月18日(土)は移動日

(6) 成果と課題

チームビルディング

メンバー選抜において、自分の探究と地域・世界とのつながりについて志望理由書に書く必要があったことで、全員が探究活動の内容を深く振り返ることにつながり、それぞれの取り組みを深化させようという意識づけをすることができた。ドイツ研修に参加した者とそうでない者、海外渡航や国際交流経験の豊富な者とそうでない者等、多様なメンバーを選出したことで生徒間での学び合いが活発に生まれた。8人という少人数編成になったことでチームの結束力が高まりやすく、仕事をスムーズに分担することができた。

事前研修

事前研修は現地での活動を有意義なものにするべく、大きく分けて、①プレゼンテーション作成のために福島・世界のことを知る、②ディベート等を含めた英語によるコミュニケーション・思考の強化という2つの軸で行われた。

基本的にチームで協働して取り組むことで、チームプロジェクトの進め方を学び、実践するという経験が得られた。チーム間での連絡共有に Facebook グループを使用したこと、プレゼン等の作成に Google Document や Canva を使用したことで、アーカイブとしての機能を有しつつ同時作業で効率的にプロジェクトを進めることができたこと、関係教員からのフィードバックが容易であったことも1つの大きな成果である。

また、事前研修の内容に加えて、UNIS-UN 2023 のトピックであった教育の問題に関連するポスターを作成する課題・授業を行うなど、研修に参加していない生徒も巻き込んで思考を深めながら、研修生徒の学びを他生徒へ還元する役割も果たすことができた。

ニューヨーク現地での研修

全体を通して、英語でのコミュニケーション(特にリスニング)で困難を感じる機会は多く、生徒は英語学習に対する強い動機付けを得ることとなった。また、普段の授業においても、ただ原稿を読むようなものではなく、ディベート等で必要とされる即興性と論理的思考力に英語活用力を組み合わせさせたトレーニング等、より実践的な英語力を醸成する内容を考案していく必要性が感じられた。一方で、教科書で学ぶ基本的な英文こそがコミュニケーションの核となるということも併せて意識づけできると良いと感じた。しかし、生徒が研修の中で積極的に相手に話しかけたり言葉を発しようとしたりする姿が見られるようになったことは大きな成果である。

研修終了後に取得したルーブリックの自己評価からは、生徒が NY 研修を通して自身を大きく成長させることができたと感じていることがよく分かる。下記の資料は NY 研修に参加した8名の生徒のみを対象とした、1年次以降から取得しているルーブリックの自己評価の平均の推移である。NY 研修後の振り返りでは、すべての項目が大きく数値を伸ばしており、生徒自身も最も伸びたと感じる能力として特に B(+1.25), E(+1.25), G(+1.50), J(+1.13)を挙げている。研修を通して得られたモチベーションを高く維持して、今後の事後研修や学校・地域への学びの還元をしていきたい。

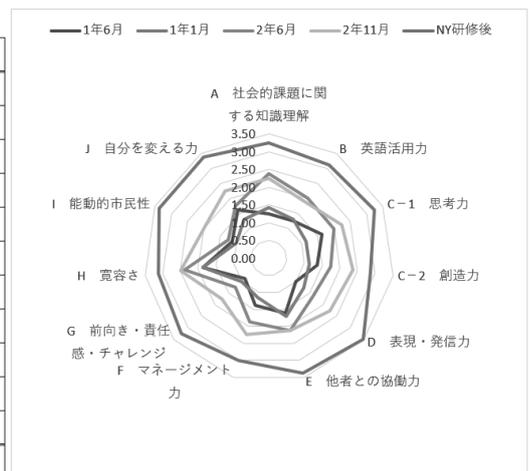
【生徒のルーブリック反省・感想】(一部抜粋)

- ・「研修の中でメンバーの良いところをたくさん見つけられたし協力できた。」
- ・「最初は何を言っているのかわからなくて会話も避けていたけど、後半になるにつれて聞き取れるようになっていった。」
- ・「プレゼン中、聴衆が良い反応してくれた事がとても嬉しかったため、これは自分もできるようにしたいと思い、メンバーと一緒に挑戦していた。」
- ・「ニューヨークの人にとっては相手の時間を無駄にしないことが礼儀(日本人の謙虚な性格は時間が無駄になる)と学び、テキパキと接するようになった。」
- ・「自分がやっている探究が、世界で起きている問題と共通点があることに改めて気づかされ、本当に全部他人事じゃないんだと思った。」
- ・(先輩へ)「心から頑張ってたよ良かったと思う。迷ってる人は絶対挑戦してほしい。」

※本校ルーブリックについての詳細は「第6章実施の効果とその評価」参照。

7期生 ルーブリック評価の推移 (2021年6月~2022年11月、NY研修)

	1年6月	1年11月	2年6月	2年11月	NY研修後	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.25	1.43	2.38	2.25	3.25	
B 英語活用力	1.25	1.29	2.00	1.88	3.13	
C-1 思考力	1.63	1.14	2.00	2.25	3.25	
C-2 創造力	1.38	1.14	1.75	2.38	2.88	
D 表現・発信力	1.00	1.29	1.63	2.25	3.50	
E 他者との協働力	1.63	1.71	2.13	2.13	3.38	
F マネージメント力	1.38	1.14	1.88	2.25	3.00	
G 前向き・責任感・チャレンジ	0.88	1.00	1.25	1.75	3.25	
H 寛容さ	1.88	1.86	2.38	2.50	3.13	
I 能動的市民性	1.13	1.00	1.25	2.00	3.38	
J 自分を変える力	1.63	1.29	1.75	2.25	3.38	
平均	1.36	1.30	1.85	2.17	3.23	



3. 4. 3 広島研修

原爆被害から復興した広島を訪問することで、過去を伝承する意味や、その困難さ、方法などについて考察するのが目的である。事前研修・事後研修では早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンターと共催する「1F地域塾」に参加した。

(1) 参加生徒

本年度より高校1年次のみでの研修となった。直前に参加予定生徒のインフルエンザ罹患が判明し、メンバーの入れ替えなどがあった。男女比は5:6であった。

(2) 事前・事後学習

事前・事後学習として第7～9回1F地域塾に参加した。1Fとはイチエフと読み、福島第一原子力発電所の通称である。戦災からの復興を果たした広島に行く前に、福島県・浜通りが抱える原発事故および廃炉事業の問題と未来について考察することを目的とした。詳細は本冊子の項目5.3に譲る。

(3) 実施内容(11月10～12日)

初日到着してすぐ広島県立国泰寺高校に向かった。2年生の探究の授業に混ざり、「ヒロシマ・フクシマの経験を後世に伝えるために必要なこと」「2030年のエネルギーミックスのグラフを作ろう」の二つの題でディスカッションを行った。緊張するふたば未来生を上級生でもある国泰寺生がリードしてくれ、思っていることを話すことができた。



夕方は平和記念資料館を訪問した。生徒の感想を紹介する。「正直、平和記念資料館が1番辛かった。大きく立ち昇るキノコ雲や水を求め空から降ってきた黒い雨に向かって口を開ける人の絵やその様子について描かれた文章。幼くまだあどけなかったであろう子供達のボロボロになった衣服や持ち物、それとともに綴られている遺族の思い出や深い悲しみ。火傷や放射線により蝕まれた見るに耐えない人々の体。それらの写真や絵、文章を見てもそれが78年前の広島で実際に起きたことだと頭が理解しなかった(…)人間が同じ人間に対してこれほどまで残虐になれるのかと思った。「一部文字があったであろうパネルの上から黒いシールが貼られていた。きっと

遺族からの意見があったのだろうと推測できる。仮に自分が遺族だったら、どうするだろうか。亡くなった人の遺品や写真の展示を許可するだろうか。ということを考えながら見てまわった。(…)広くこの悲劇を伝えられているのには、「遺族による展示の許可」という遺族の心情の犠牲があるからこそだ。

二日目は本校&早稲田大学企画の1F地域塾にも参加されている早稲田の高垣さんのガイドで平和記念公園フィールドワークを行った。彼の後輩の崇徳(そうとく)高校新聞部さんとも合流。爆心地、原爆ドーム、動員学徒慰霊塔、レストハウス(旧燃料会館)、原爆供養塔、韓国人慰霊碑、平和都市記念碑などのガイドを受けた。

生徒感想「たくさんの方が理不尽に命を落とした広島という地で「笑う」という行為すらしていいものなのかわからなくなった。また川を渡るための橋を渡れば、当時この川に皮膚がただれ苦しくて苦しくて仕方なかったであろうたくさんの人たちが飛び込んで死んでいったことを思い出して、辛かった。もう知れば知るほど、辛い気持ちが込み上がってきて心が沈んでいくばかりだった」。

被爆者講話として飯田さんという方からお話を聞いた。生徒感想「飯田さんの語りの強さから、



原爆が如何に衝撃的で悲惨だったが伝わってきました。飯田さんの話で一番衝撃的だったのは、原発に賛成することでした。つまり、核の平和利用です。私は正直、平和利用という言葉信じません。あれだけの人間の愚かさや学ばなさをこの研修、世界情勢を通して見てきて、信じるというほうが難しいと思います。(…)飯田さんに「原発にはリスクが付きまとい、そのリスクを背負った福島は原発事故を起こしてしまいましたが、このリスクについてどう思いますか?」と質問をしました。とても失礼だと自覚はしていますが、その回答に絶望を覚えました。その回答とは「リスクがないものはない。」

リスクを怖がっていたら何もできない。現在、原発というのは安全性が高まり、このような事故が起きる確率は限りなく低い。だからこそ、核の平和利用が重要なのだ」と簡単にまとめると、このようなものでした。私には、この回答がリスクを背負う側から目を背けているようにしか思えませんでした。また、リスクを背負うのは原発を請け負う地域だけではなく、原発の燃料となるウランを取る人々も含まれます。確かに、原発の恩恵は魅力的で環境問題への視野を向けると必要になってくることは理解できます。「リスクがないものはない。リスクを怖がっていたら何もできない。」この言葉に同意します。しかし、リスクを押し付けあって得る恩恵とは何でしょうか。それは平和といえるのでしょうか。この研修で平和を学びに来たはずでしたが、平和がわからなくなりました」。

その後高垣さんが所属するカクワカ広島さんが経営されるカフェ、ハチドリ舎でお昼&ワークショップをして頂いた。ここでも崇徳高校さんがいてくださって良い交流となった。グループトークのテーマは「広島で学んで、福島原発事故を伝承するにあたって活かせることは何か」であり、サブクエストとして①そのそもなぜ伝承するのか？ ②二つの場所が持つ課題の共通点は？ ③一緒にできそうなことはある？ という順番で考えを述べあった。最後の生徒が言った「もっと、もやもやしたい」という言葉が印象的だった。



感想を引用する。「そもそも何で伝承するのか」という問いが出た。(…) 私たちにとって伝承することが当たり前になっていて、その必要性や目的を疑うことすら忘れていたことにも気づいた。これから自分たちにできることを考えた時、自分が原子力や放射線など福島が経験した出来事に関することを知らないことに気づいた。(…)

広島は核兵器の廃絶と平和の大切さを伝えていくのだろうと思った。それに対して福島はどうだろうか。全くわからなかった。地震や津波が起こったためのために備蓄したり、ハザードマップを確認したり、家族との連絡手段について考えておくことが大事？ …でも原子力発電所の事故は自分には無関係で何もできることはない。発電所の人たちに同じ過ちを繰り返さないように願うことくらいしかできない。正直、福島が経験したあの日の教訓が何なのかすら私にはわからなかった。それと同時に答えが出るまで考え続けたいと思った」。

「特に印象に残っているのは崇徳高等学校の生徒さんの平和教育に関する話でした。話によると、平和教育はあまり上手くいっておらず、行動に移す生徒はごく一部しかいないということ、若者の原爆に対する興味は年々薄れているように感じるということでした。(…)なぜ、こんなにも平和について考えさせられる資料が豊富なのに関わらず、興味関心が薄れてしまうのでしょうか。これは、私の完全な憶測なのですが、平和について考える資料が原爆だけだからだと思います。(…)自分たちが被害者だと思い込むのは危険です。もし、平和教育が原爆の被害を中心とした教育だとしたら、平和を被害者の視点からしか考えられなくなってしまってもおかしくないと思いました。被害者だけの視点の何がいけないのかというと、罪悪感をあまりもつことができないからです。原爆の被害者側は日本で、加害者側はアメリカです。アジア侵略の被害者側はアジアの国々で、加害者側は日本です。2つの文章ではそれぞれ違う感情を感じることができます。前文は、悲しみや苦しみ、虚しさなどです。後文は、罪悪感や忌避したくなる感情などです。このようなことを考えていくにつれ、平和を考えるには以上のことは必要不可欠なのではないかと思うようになりました」。

三日目は宮島を観光し、帰路についた。



3. 4. 4 会津大学・留学生との交流研修

(1) はじめに

会津大学の留学生との交流事業は 2022 年から今回で 2 回目となる。今年度は 2 日間とし、11 月 23 日（木）～ 24 日（金）に以下のコースを回った。会津大学からは留学生 22 名と教員 3 名、本校からは海外研修メンバーを中心に 15 名の生徒（本校への留学生 1 名含む）と教員 2 名が参加した。東日本大震災から 12 年が経過し、これまで福島が抱えてきた課題と復興への取り組みを直接体感し、振り返ることで今後の未来のために何ができるかを会津大学で学ぶ留学生とともにディスカッションを行った。特に本校では海外研修に参加する生徒の事前研修として位置づけられているため、福島の現状を海外の方に向けて発信するためのアイデアについて議論した。

【23 日（1 日目）】

- 10：00-12：00 東日本大震災・原子力災害伝承館
- 12：00-13：00 双葉産業交流センター（昼食）
- 13：10-14：10 請戸小学校跡地
- 14：20-14：50 大平山
- 15：50-16：50 J-Village における震災講話・施設見学

【24 日（2 日目）】

- 9：00-10：00 福島国際研究教育機構（F-REI）で講義
- 10：30-11：50 福島水素エネルギー研究フィールド
- 12：00-13：00 福島ロボットテストフィールド（昼食）
- 13：00-16：00 視察、振り返りワークショップ

(2) 実施内容

11 月 8 日にオンラインで事前ミーティングを行った。研修当日はグループでの活動・交流となるため、事前ミーティングでは自己紹介や現時点での興味・関心事項などを交流した。

23 日当日は東日本大震災・原子力災害伝承館で会津大学の留学生と対面し、グループごとに各所を視察した。

初日の伝承館ではふたば未来生が英語で自分から話しかけることは難しそうだったが、留学生の方から気さくに高校生に話しかけてくれたためバスでの移動中は英語で両者が会話してる様子が見られた。



↑ 請戸小学校跡地での津波で教室の壁の流されている状況



↑ 2 日目振り返りワークショップでの様子



↑ 2 日目 最終発表の様子

(3) 振り返りと反省

本校生・会津大学の留学生とともに実施後アンケートから満足度の高い研修内容だった。次年度以降のWWL事業をさらに進めるために、留学生との交流プログラムを更に充実したものにしていきたい。



3. 4. 5 米国高校生との交流（スペシャリスト）

(1) はじめに

今年度、GLOBAL CLASSMATE (BY KIZUNA ACROSS CULTURES) に採択され、高校1年次スペシャリスト系列の生徒30名が、アメリカのテキサス州にある Lake Highlands High School の生徒たちと交流をした。

Global Classmates とは

日米各38校が参加し、9月から翌2月までの約半年間、日米各20～30名ほどの生徒達が、語学や表現などの授業、国際交流の部活動などの場を利用して、継続的にメッセージや写真、ビデオのやり取りを行うオンラインプログラムである。

(2) 実施内容

① CANVAS 上でのディスカッション

交流先の高校生は、日本語を勉強しているため、日本語と英語の両方を用いた交流を行った。CANVAS というオンラインのプラットフォームを使い、2週間ごとにトピックを作成し、そのテーマについて日本語と英語で意見交換を行った。トピックは以下の通りである。



DISCUSSION TOPICS

- 1) 自己紹介
- 2) トレンド
- 3) 私たちの学校へようこそ！
- 4) 冬休みに何をしましたか？
- 5) あなたが一生のうちにやってみたいことは？
- 6) ファストフード
- 7) Farewell (最後のメッセージ)



DEIB TOPICS

交流の中盤では、より深い内容について議論する DEIB が始まった。DEIB の定義は以下の通りである。

Diversity (ダイバーシティ・多様性)

国籍、価値観、障害、スキル、経験など、さまざまな属性や背景を持った人たちが共存している状態のこと。

Equity (エクイティ・公平性)

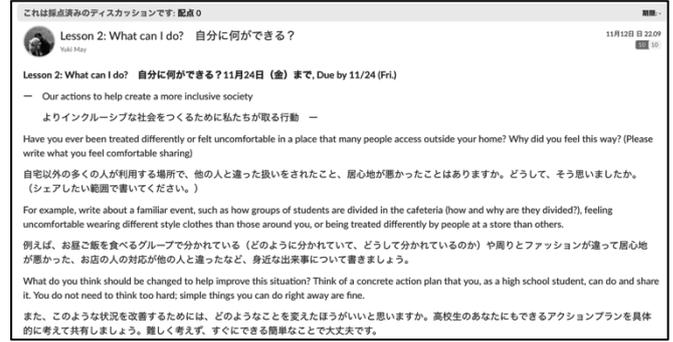
背景や属性に関係なく、すべての人が同じ機会に平等にアクセスできるようにすること。

Inclusion (インクルージョン・包括性)

背景の違いに関係なく、全ての人々が公正かつ敬意を持って扱われ、発言権を持てるようにすること。

Belonging (ピロニング・帰属性)

背景に関係なく、ありのままの自分が受け入れられ、評価され、歓迎されているとそれぞれが感じる状態のこと。



日本にいるとあまり感じる事のない「差別」について、LHHS の生徒の投稿を読み、服装や見た目で判断されたり、ちょっとしたことで偏見の目で見られたりすること、疎外感を感じたりすること等と、自分たちが日々感じる事と繋げて考えることができた。ALT と協力し、英語しか話さない部屋を作り、そこに生徒を1人ずつ入室させ、”out of place” を体験できるような授業を行った。生徒たちがどう感じたかをシェアした。その後、「これは、日本にいる留学生が日々感じていることだ」伝え、間接的に、自分たちの日々の行動を振り返る機会となった。

② おみやげ交換

omiyage exchange として、お互いにお菓子などを送り合った。パートナーに手紙とプレゼントを用意して、箱に詰める様子や、届いたプレゼントを開ける様子をビデオにして送り合った。



一人一人にプレゼントが渡されると、丁寧に日本語で書かれた手紙に喜び、見慣れないお菓子をみんなでシェアしながら異文化交流を楽しんだ。

(3) 振り返りと反省

事前アンケートでは、英語が嫌い・苦手と回答した生徒が多く、英語学習のモチベーションに課題があると感じていた。しかし、交流が始まると、教科書とは違い身近な話題について意見交換をし、アメリカの高校生との共通点を見つけ、すぐに仲良くなっていた。事後アンケートでは、「もっと会話ができるようになりたい」、「英語に興味はなかったが、いつかアメリカに行って LHHS の生徒と会ってみたい」等、Global Classmates に参加したことによって全生徒の英語への学習意欲に変化があったことがわかった。

次年度開かれるグローバル・クラスメート・サミットの参加候補生徒の交流ペアの1校にも選ばれ、募集人数を超える生徒の応募があった。さらに海外との交流プログラムが充実し、生徒のモチベーションが上がるように計画していきたい。

3.5 外部発表・交流

3.5.1 START2023 (山形・東桜学館での発表)

(1) START2023 での発表

2023年7月22日、令和5年度山形県立東桜学館高等学校 SSH 事業「START2023 (国際プレゼンテーション大会)」に、本校3年次生徒のグループと、本校2年次生徒のグループが参加した。3年次生徒のグループについては、令和4年度ニューヨーク研修帰国後の事後研修を兼ねたプレゼンテーションという位置づけで臨んだ。日本全国とタイ、マレーシア、台湾から高校生たちのグループが集い(一部オンライン参加)、35の発表が英語で行われた。他校の発表の質の高さや英語力から受けた刺激は大きく、本校生徒の英語学習のモチベーション向上につながった。

○理系発表(2年次グループ)

How to Observe Soil Unused in Okuma Town Due to the Fukushima Nuclear Accident Then Enrich Greenery There

by Suzuka Hoshino, Koharu Yamazaki, Asuka Kato, Ayano Kimura

○文系発表(3年次グループ)

Give yourself an edge-up! ~The importance of learning English in a globalizing world~

by Asumi Kobayashi, Kazayuki Sugata

○参考

山形県立東桜学館高等学校ホームページ

「国際英語プレゼンテーション大会(START2023)を開催!」

<http://www.touohgakkan->

[jhh.ed.jp/archives/ssh_info/32547](http://www.touohgakkan-jhh.ed.jp/archives/ssh_info/32547) (2023/07/26)



(2) 2023年度駐日外交団による福島復興視察ツアーふたば未来学園訪問における発表

2023年8月2日、駐日外交団が本校を訪れた際に、3年次生徒が上記と同内容のプレゼンテーションをブラッシュアップし、再度発表を行った。加えて本校2年次の令和4年度ドイツ研修参加メンバーが、同研修の内容について発表を行った。

本校の探究活動や海外研修の取り組みを、自らの進路希望と結びつけて活動する様子について、各国の大使から高評価をいただいた。

3.5.2 福島県高校生社会貢献活動コンテスト

(1) はじめに

標記のコンテストは、福島県内に在学する高校生が主体となっているグループまたは個人の社会貢献活動(地域や社会を良くしようとする活動)を対象としたコンテストである。ボランティア、復興、国際交流、まちおこし、製品開発などのほか、「地域や社会を良くしようとする活動」であれば、分野を問わず対象とされる。

(2) 実施内容

本年は社会起業部がコンテストに申し込み、本選へと進んだ。社会起業部では「知る」「伝える」「盛り上げる」を軸に、実際に現地を歩く、事実を自分たちの言葉で伝える、福島と他の地域を比較するなどの語り部活動を行っている。

知る活動では、震災で過疎化が進んだ広野町の限界集落への訪問や、宮城県の津波被災地での研修・同世代語り部との交流などを実施。伝える活動では県外の高校生・大学生との交流会に加え、実際に双葉郡を案内することもある。2022年12月の沖縄研修では街中で自分たちの活動を発信したほか、福島原発と沖縄の基地問題を比較する対話も行い、多くの共通点があることも学んだ。盛り上げる活動としては、県内のテレビ番組と協働し、自分たちで撮影した広野町のPR動画を放送していただいた。また部長の企画により、寮生・留学生を対象とした双葉郡のバスツアーも実施した(写真)。



震災当時5歳だった生徒たちは「震災を知る最後の世代」として、震災を経験していない次世代や県外の方に記憶を伝承していきたいと、思いを発表した。

(3) 成果と課題

9月9日のコンテスト本選で発表し入賞した。

3.5.3 ふるさと創造学サミット

(1) はじめに

ふるさと創造学サミットは震災後に各町村・学校での「ふるさと創造学」の取組を発信したり、学びを通じて交流・協同することで地域のつながりをつくる行事であり、今回で10回目を数える。今年は初めて本校での開催となり、双葉郡8町村立小学校・中学校・義務教育学校、福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校、福島県立富岡支援学校の児童生徒が一堂に会し、各校のふるさと創造学の取り組みを共有した。



(2) 実施内容

校内10の会場に分かれてセッションが行われ、本厚生は3つの発表を行った。発表タイトルは「私と檜葉とさつまいも」「自律神経を整える」

「福島の魚」とすべてスペシャリスト系列の生徒に発表をしてもらった。3人の生徒ともに探究学習で自らの興味・関心から生まれた問いからスタートし、それぞれの系列で学んだ成果を取り入れつつ発表を行った。



(3) 成果と課題

今回の発表会は小学生や中学生も聴衆として参加していたため、小学生でも理解できるように平易な言葉で自分の探究学習を説明する点がなかなか苦戦していたようだった。しかし、高校生の発表には多くの聴衆が集まり、とくに中学生の関心が高かった。双葉郡内の中学生に高校生の探究を知ってもらう機会がこのサミットしかないため貴重な機会となったが、この機会以外にも普段から探究学習を通じた交流を増やすこと重要である。

3.5.4 新潟WWL国際会議

期日：令和5年10月19日(木)～20(金)

場所：19日 スノーピークヘッドクォーターズキャンプフィールド・20日 三条高等学校

新潟県のWWL高校生国際会議に、生徒3名が参加した。

19日は、基調講演の後、事前に指定された16グループに分かれて分科会に参加。各グループでは、県内の大学に在学している海外留学生がファシリテーターを務め、国外提携校の同年代の学生はZoomで出席。

20日は、三条高校校舎に集合し、グループディスカッション体育館で代表者発表。本校からも1名が代表者発表を行った。

本校も国際会議を行う際は、地域の観光資源や、近隣大学の留学生などの人的資源を活用したい。以下は参加生のセルフエッセイ記述内容。

新潟の高校生の1人が「福島の風評被害はまだあるから…」と発言した。まさか同世代の高校生から福島の風評について聞くとは、と少し衝撃的だった。しかし、さらに衝撃を受けたのは、隣で話を聞いていた中国人の方からの感想である。「福島の魚は、危険だから、絶対に食べません。」「私の中国の友達も、福島の汚染水がこわくて心配しています。」「私は動揺し、すぐに言葉が出なかった。その後何とか危険では無いことを伝えようとしたが、相手には全く伝わらなかった。分かった、そうか、いくら科学的根拠を添えて「安全だ」と主張しても、彼らにとっては「安全」と「安心」は違うのだ。風評払拭を実現するには、彼らにどう「安心」を届けるか、伝えていくかを考えなくてはならない。

県外・国外の同年代の学生と交流して初めて、自分たちが暮らしている地域がいまだに抱える課題に気づくことができた。本校がWWLに採択されている期間に果たすべき使命も見えてきたように思えた。

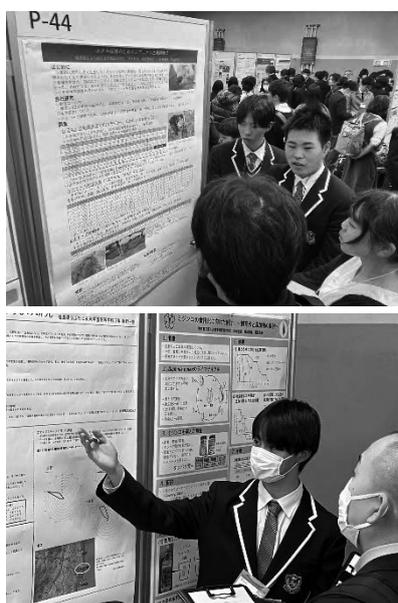
3.5.5 サイエンスキャッスル関東大会

(1) はじめに

今年度より探究ゼミの編成が変更になり、理系の自然科学地球環境ゼミが編成された。理系の探究として、データを収集・処理・分析し、数的根拠をもって検証する手法をしっかり身に付けていくことが重要である。また、様々な角度から物事を分析する視点を育てていくことも重要である。そのような観点から、本ゼミは校外の発表に積極的に参加することを勧めてきた。上記の大会には、事前の書類選考を通過した2探究、高校2年次生3名が参加した。

(2) 実施内容

大会は、令和5年12月2日(土)に昭和女子大学附属中学校・高等学校で開催された。本校からは、ポスター発表部門に、紺野一剣「五社山おろしの研究」、齋藤佑磨・古山寿智「ホテル保護のためのカワニナの生態調査Ⅰ」が出場した。発表時間の4分を十分にいかし堂々と発表し、審査員による質疑応答にもしっかりと自分の見解を示すことができ、素晴らしい発表だった。



(成果と課題)

ポスター発表部門は80の発表があったが、2発表と活動、またこれからの探究の方向性が明確であったことが評価されたようである。1つの事象を検証するための実験や検証活動がいかに重要であるかを実感した大会であった。大会後、ゼミ内で発表会を開き、探究をまとめていく上で大切な視点で共有した。



3.5.6 全国高校生フォーラム2023

期日：令和5年12月17日(日)

場所：国立オリンピック記念青少年センター

今年度は、コロナ禍・SGH時代から3年ぶりの対面開催。WWL事業校・SGHネットワーク校が集まり、ポスターセッションとグループディスカッションを行った。本校チームは、2年生3名、1年生1名で参加。

AM：生徒交流グループディスカッション

4人の生徒がそれぞれ別の会場に参加。テーマは、Diversity in my life, in your lives. 多様性について、自身の体験や考え、興味などについて英語でブレインストーミングを行い、各会場でミニプレゼンテーションを。本校生は各グループで中心的な役割を担い、自らの考えも発信した。

PM：ポスターセッション

4分間の英語でのプレゼンテーションの後に、4分間の質疑応答。審査員からは、4人それぞれの課題感について主に問われ、「コミュニティ」という言葉の共通認識について問われた。

準備から参加まで(分析)

ポスターを共同編集で作成し、ALTと生徒が連絡を取り合って原稿作成と発表・質疑応答の想定練習。結果、終日、英語でのやり取りには苦勞を感じずに過ごした。本校生は、CEFRのB1~B2の英語運用力。グループディスカッションではそれぞれが中心的な役割を担ったことから、コミュニケーションに前向きに臨むことができていた。

次年度への課題

次年度の発表については、遅くとも10月中には参加候補生徒をピックアップし、探究活動そのものをブラッシュアップさせたい。自然科学ゼミのようなものでも問題はなく、学校全体で一つのプロジェクトを成すようなポスターではなく、生徒の探究活動のサイクルの中の、少なくとも1プロジェクト目の考察まで済ませたものを発表させたい。発表4分という設定はおそらくそのためである。実施後の考察と次の課題発見まで行い、英語での質疑応答も今年度等のレベルまで磨いてあることが望ましい。

3.5.7 マイプロジェクトアワード福島県 Summit

マイプロジェクトアワード福島県 Summit は全国 Summit に向けた福島県予選として、今年度で4回目の開催となる「学びの場」である。本校からは1年生11件、2年生16件、3年生1件の計28件が参加した。

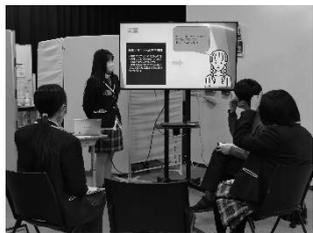
実施日：令和6年1月27日(土)終日

実施形態：オンライン

参加プロジェクト数：48件

1. マイプロジェクトアワード福島県 summit 発表リハーサル会

今年度は発表本番に向けたリハーサル会を実施した。当日は13名の生徒が参加し、生徒同士で発表の良い部分や改善点をコメントしあうことで、「自分ももっとデータを入れて説明したい」、「私もこれからもっとアクションをしたい」等という意見がみられ、自身の活動や発表を客観的に振り返る機会となった。また、リハーサル会から本番までの数日間、放課後の時間を活用し、お互いに発表しあって改善案を話し合うなど、最後まで自身の発表をブラッシュアップしあう姿が見られた。



2. マイプロジェクトアワード福島県 Summit

当日生徒達は分科会に分かれ、自身のプロジェクトの発表を行った。分科会では、福島県にゆかりの各分野の専門家や、起業家の方々、他校の生徒から質問や感想をもらい、活動内容について対話を行った。発表終了後の振り返りでは、自身の学びや気づきを言語化するとともに、今後の活動について考えた。

普段は関わりのない大人や他校の生徒との交流を通して、自分の活動の意義に気づき、さらなるモチベーションにも繋がったようだ。



3.5.8 第23回福島県総合学科 生徒研究発表会

(1) はじめに

第23回福島県総合学科研究発表会が本校アリーナ1で開催され、福島北、二本松実業、光南、小野、会津学鳳、いわき総合、相馬総合、ふたば未来学園の8校の代表生徒が参加した。この発表会は県内の総合学科の高校全9校が集まり、毎年各校持ち回りで開催されている。



(2) 展示発表部門 (午前)

午前中はアリーナ1で展示発表部門が開催された。発表時間4分間でポスターを用いたの発表や成果物の展示を行い、全体で15の発表が行われた。本校からはスペシャリスト系列商業3年の高野睦斗が「福島の魚」、スペシャリスト系列工業3年の上田大雅が「廃材を使って、エレキギターを作ろう!」をテーマに発表した。

(3) 口頭発表部門 (午後)

午後は各校からの代表者8名がプレゼンを行った。本校ではスペシャリスト系列農業3年の佐藤愛心が、「私と檜葉とさつまいも」と題し、発表した。



(4) 結果 口頭発表部門 優秀賞 (佐藤愛心)

本校からの観覧者としてスペシャリスト系列の全ての生徒と、アカデミック系列1年の生徒が参加し、他校の発表も含め、多くの取組を聞いた。特に1年次生はこれから本格化する探究活動の参考となった。

3.6 社会起業部の活動

3.6.1 社会起業部活動

社会起業部（本部）は双葉郡や福島県を「知る・伝える・盛り上げる」をモットーに他県から訪問する高校生・大学生と交流活動や動画製作等をしている。ここ数年は県からの補助金（チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業）を得て、夏季に一泊の研修（宮城で津波学習）、冬季に二泊三日の研修（2022年沖縄研修・2023年水俣研修）を行っている。

（1）地域を知る活動

広野町の限界集落・箒平地区や、双葉町のフィールドワークを行った。

（2）地域を伝える活動

留学生を含む寮生を案内した「双葉郡ツアー」の企画や他県の学生との交流を行った。交流相手は以下の通りである。横浜市の緑ヶ丘高校（7月21日）、三重県各地の有志の高校生（8月9日）、滋賀県の河瀬高校（8月22日）、早稲田大学の大学直営国際学生寮WISHの学生さんたち（8月24日）、大阪の高石高校（10月18日）、埼玉の大宮国際中等教育学校（1月16日）。

（3）地域を盛り上げる活動

福島放送と協働で夕方の情報番組「シェア！」で使用する動画を作製した。また、部員+αで只見線全国高校生サミットに参加し、12月10日のプレゼンテーション大会では最優秀賞を受賞した。

（4）県外研修

①宮城研修

8月3～4日、津波被害学習のため宮城研修を行った。参加した生徒は6名。初日は気仙沼リアス・アーク美術館で津波資料実物を見たのち、南三陸311メモリアルではラーニングプログラム「生死を分けた避難」を受けた。

二日目は投宿したホテル観洋さんの方がバスに乗り込んで戸倉地区および高野会館を案内していただく。単に避難マニュアルに従うのではなく、その場その場で危険を正しくイメージできるかが生死を分けた、ということが分かった。その後石巻に移動し、多くの児童が亡くなった大川小学校でお話を聞いた。

②水俣研修

福島の原因事故は核の問題としては広島的であり、NIMBY施設としては沖縄の米軍基地的であり、環境問題としては水俣的であるといえる。社会起業部では冬季に水俣と沖縄を2年かけてフィールドワークを行っており、

2022年末には沖縄研修、2023年の12月20～22日は水俣研修を行い11名の生徒が参加した。

初日は水俣病資料館を見学した。生徒は事前学習を踏まえて、水俣の歩みや実際の患者さんの思いに心を寄せているようだった。

二日目は一般財団法人水俣病センター相思社のNさんに同行していただきフィールドワークを行った。

水銀ヘドロを埋め立てたコンクリートの耐用年数が迫るなど、いろんな不安が残っているが、海は確実に再生されていること、慰霊碑の下に名簿があるが、差別があった歴史から名簿に名前を入れるのを嫌がる遺族もいること、新潟水俣病患者の昭和電工に対する裁判がなければ水俣病も「和解」させられていたこと、市税の60%以上を収める大企業チッソに対する告訴は市そのものを敵に回すことになったこと、等を学んだ。

昼食後は相思社の考証館を見学した。考証館で伝えたいのは正義ではなく正義との間にある葛藤、という言葉が印象的だった。夕方は水俣病患者でもあり、福島の処理水にも言及してくださっている杉本肇さんのお話を聞いた。水俣研修の詳細及び社会起業部の活動は右QRコードのFacebookに記載してある。

ホテルでの振り返りでは生徒は以下のような感想を出した。「水銀含有の土が入っているエコパークと福島の間貯蔵施設との類似性に気づけた」「加害者の立場に立つことも重要。分断を避けるためにどうすればよいか考えられた。これからの



「学びに活かしたい」

3. 6. 2 社会起業部カフェチーム

(1) はじめに

本校社会起業部は、「地域を知る・伝える・盛り上げる」を目的とし、本部・カフェチーム・製造班の3つに分かれてそれぞれの特長を生かした形で目的達成に向け活動している。その中でカフェチームは、学校内に設置されたカフェ“caféふう”を活動の拠点とし、カフェの運営やイベント企画を中心として学校内・外での活動に取り組んでいる。2年生1名、1年生9名の計10名の部員が「変化 交流 居場所を作るカフェ」のコンセプトのもと、学校内のカフェにとどまらず、学校外においても地域とどのような関わり方ができるかを模索しながら活動している。

(2) 実施内容

“caféふう”は、一般社団法人たんぼぼを経営母体とし、校舎内にあるみらいラボの一角に2019年6月にオープンした。カフェチームは、“caféふう”にて、週3日のカフェの営業や運営、カフェでできる企画の立案など様々な活動を生徒が主体となって行っている。

カフェは、週3日の生徒営業日は一般の方の利用も可能なことから教職員や生徒など学校内のみならず学校外の方とも多く接することができ、高校生としては貴重な実学に沿った学びを得ることができる。昨年度に引き続き、今年度も学校内のみにとどまらず、学校外にも足を運び地域のイベントに出店するなど学びの場を広げて活動した。

冒頭にもあるとおり、「地域との関わり方」を模索しているカフェチームは現在、双葉郡内で自分たちに何ができるか、自分たちの可能性は一体何であるのかの問いに対する解を迫している。まずは、自分たちが双葉郡を学ぶべきという考えから、双葉郡の文化や伝統について研修を行ったり、双葉町の復興に携わっている方とともに双葉町の活性化に向けて意見交換をしながら新しい取組に挑戦する準備をしているところである。

(3) 成果

・社員総会 5/29 (月)

カフェの経営母体は「一般社団法人たんぼぼ」である。法人であることから、定例の社員総会を行い、そこで理事改選や各種報告・検討を毎年5月に行っている。今年度の総会には、代表理事をはじめとして理事（教職員・生徒）や部員など計17名が出席し、法人理事の改選、決算報告、予算案の提示などを行った。司会進行も含めすべて生徒主体で行い、社員総会自体も生徒の学びとして吸収できる場とした。

・双来祭 6/25 (土)

新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い校内での飲食制限が緩和され、3年ぶりに双来祭でカフェとして参加することができた。双来祭でのカフェ活動は部員全員が初めてのことであったため、想定を上回る来客に焦りながらも日頃の活動経験から繁忙時にどのように行動すれば他の部員も動きやすいかをお互いに考えて活動している様子が見られた。1年生は入部して3か月足らずと少ない経験も関わらずお互いに助け合い声掛けを行う姿が

多く見られ、短い期間での大きな成長に今後の活躍を期待する。

・ふたばワールド in おおくま 2023 10/7 (土)

東日本大震災で一度途切れてしまったふたばワールドであるが、全国に避難した双葉地方の住民の交流の場として、故郷ふたばの絆を結ぶ機会として平成25年に復活した。双葉郡に元気を届けたい我々カフェチームは毎年参加させていただいており、1年生にとっては初の校外出店となった。今年度は東日本大震災の影響を特に大きく受けた大熊町での開催であり、復興への想いを込めながらそれぞれの部員が懸命に活動した。イベントでは、農業科が製造した「大熊町のいちご」、「大熊町のキウイ」を使ったドーナツを双葉郡の魅力や頑張っている姿勢を発信すべくお客様に一言添えながら販売した。

・ならSUNフェス in 2023 11/11 (土)

昨年度に引き続き檜葉町にてイベント出店を行った。農業科の「檜葉町のユズ」を使ったドーナツを販売し、イベントに訪れた檜葉町の方や町外の方に改めて檜葉町の魅力について意識していただくきっかけになればという想いも込めて活動した。昨年度と比べて来場者がとても多く、我々カフェチームの活動についても知っていただく良い機会となった。

・広野町暮市 2023 12/24 (日)

今年度も広野町駅前商店街の活性化と賑わいづくりのために開かれる「広野町暮市」に出店させていただいた。気温が氷点下の中、日頃からお世話になっている広野町への恩返しのためにと心を込めて接客・提供を行った。

「高校生がやっているお店なんてあるんだ」、「学校にカフェ？本当に!？」というお客様の声に、まだまだ自分たちの活動が広まっていないという反省をしつつも、たくさんの方から「頑張ってるね」、「今度学校のお店に行くね」といったあたたかいお言葉をいただき、今後の活動に対する意欲を新たにすることができた。



←パンフレットを用い
caféの案内をしている
部員

オリジナルコーヒー
「ふうブレンド」を
丁寧に淹れる部員→



(4) 課題

昨年度に引き続き、「SNSによるタイムリーな情報発信」と「交流の場としてのカフェのあり方」が課題である。イベント出店時のSNS利用はもちろん、「学校の中だから一歩踏み出しにくい」という意見を超越して、行ってみたいくなるようなカフェの魅力や日常的な情報発信により備えたい。

また、今後は地域の文化や伝統を取り入れた生徒主催の企画開催により外部の方を呼び込むことで交流の場としてのカフェの機能を十分に果たせるよう努力していきたい。

3. 7 未来研究会

変革者としての生徒の資質能力の向上と、教員の指導力向上のために行われてきたのが本校の現職教育「未来研究会」である。地域・世界の中の学校として、どのようなカリキュラムが実現されるべきかについて、その具体策について教職員同士が議論を行い、外部から講師を招待しカリキュラムの実現に必要な知見を得る機会として開校当初から行われてきた。しかしながら、中高一貫校の本格導入となる令和4年度よりアカデミック系列では7校時授業が導入され、それに伴う生徒の放課後の活動時間が短くなることや会議の持ち方、本校教職員の多忙感の解消(Teacher's Well-beingの実現)などの問題点が顕在化している。

(1) はじめに

今年度からWWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業が3カ年で始まることから、令和5～7年度の短期目標の共有を行った。これまでのSGH (スーパーグローバルハイスクール) 事業や地域との協働による高等学校教育価値推進事業(「グローバル型」)の8年間で探究学習の指導方法の確立やその指導方法を県内外へ発信する事業についてはある程度の成果を見ることができた。今年度以降はWWL事業への移行に伴い、更に高度な学習のあり方や従来からの懸案事項となっていた文理融合型のカリキュラム開発や教科学習と探究の往還関係の構築により軸足を置く方向で未来研究会の重点目標とした。

(2) 実施内容

今年度実施された未来研究会は以下の通りである。

① 第1回未来研究会 (4月6日)

最初の未来研究会ではWWL事業への以降に伴い、WWL事業の趣旨や3年間のロードマップを確認した。特に令和6年度は本校開校10年目となり、三島長陵校舎で学ぶJFAアカデミーの生徒たちが帰還する年である。また、令和7年度は東日本大震災から15年目となり、WWL事業の完成年度として高校生国際会議の実施やWWL研究成果発表会などの大きな行事も多くなる。まずは、令和5～7年度のWWL事業期間の3年間に関するロードマップと短期目標の確認を全体で共有した。

WWL事業のロードマップ



その後、今年度新たに探究の指導をする着任者も多かった事から、これまで行ってきた「未来創造探究ステージと関わり方全体像」について確認し、チェックリストを用いて生徒伴走スタンスの再確認を行った。内容は①自身が関わった生徒で、探究指導がうまくいった or 多く関わった1人を思い浮かべる、②その生徒への関わりを振り返り、ワークシートを記入するという内容である。

指導・伴走スタンスの開発

未来創造探究ステージ	態度の定着	指導スタンス
Stage 1	探究の意欲	探究の意欲を喚起する
Stage 2 (I)	探究の意欲	探究の意欲を喚起する
Stage 2 (II)	探究の意欲	探究の意欲を喚起する
Stage 3	探究の意欲	探究の意欲を喚起する
Stage 4	探究の意欲	探究の意欲を喚起する

② 着任者双葉郡課題把握フィールドワーク(4月6日)

午前の未来研究会終了後に、今年度着任者はバスで双葉郡のバスツアーを行った。ふたば未来学園で働く先生方に双葉郡が置かれている現状と地域復興の進捗状況を体験してもらおうツアーであり、開校後毎年行われているものである。



③ 第2回未来研究会（11月7日）

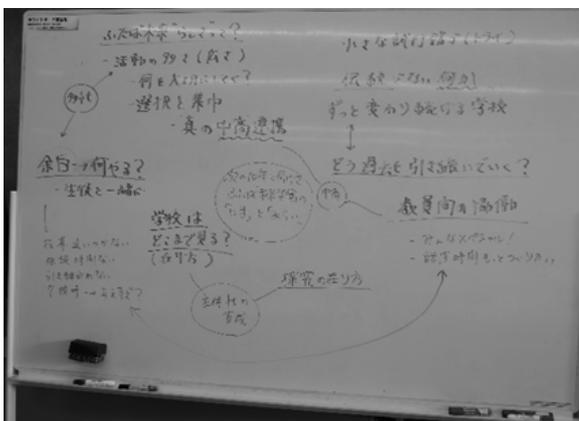
第2回目の未来研究会では、スクール・ポリシーの検討が中心であった。年度当初の未来研究会では3年間のロードマップを確認したが、次年度の令和6年度は開学10年目の年となり、令和7年度には東日本大震災から15年目の年となる。ここから、「ふたば未来学園のいまとみらい」をテーマとして、ワールドカフェ方式での対話を行った。最初に、開学から9年間の歩みの写真をヒストリー・ウォーク方式で振り返り、これまで（過去）を振り返った。次のワールドカフェでは「ふたば未来のいまとみらい」「変わっていくこと・変えていくこと・変わらず大切にしたいこと」をあげながら、議論をした。



<全体の方向感>

- ・学校らしさ（ふたば未来らしさ）を改めて言語化することが今一度必要ではないか？
- ・多忙化の議論なども、それを踏まえて取捨選択できると良いかもしれない。
- ・学校らしさを具体化していくことで、指導へのやりがいの増加、多忙化の解消に繋がれるのではないかと？
- ・ふたば未来学園にとってこの10年は、学校が設立される前も含めて「大人が頑張った10年だった」と感じている。だからこそ、次の10年は子どもたちとともに作る10年に出来ると良いのではないかと？

<議論中のメモ（キーワード）>



- ・「選択と集中」
- ・多忙感 → 余白（生徒と一緒に取り組む）
- ・学校はどこまでできるのか？
- ・真の中高連携

<今後の議論していく上でのポイント>

1) 「変革者」という言葉について

- ・「変革者たれ」という意味には「自己を変革する」（＝成長）と捉えることも出来る。ある意味「変革者たれ」という言葉は、自分の成長に真摯であれと言い換えることも出来るかもしれない。
- ・「変革者」という言葉については、変革したという結果だけを指すものではなく、試行錯誤しながらいろんな方面で何かを変えようとする姿そのものを「変革者」と解釈できることも出来るのではないかと？
- ・「変革者となるために何を学ぶことが必要なのか」という視点で生徒にあまり話をしていないかもしれない。
- ・学校の中で「変革者」の解釈可能性が高いことが指導の難しさにつながっているように考えられる。

2) 教員の多忙化について

- ・多忙感はそのどのグループでも異口同音に語られていた。
- ・多忙化によって、生徒との時間が十分に取れていないのではないかと感じる先生が多かった印象。

3) WWL 事業について

- ・WWL 事業にあるような「グローバル」については、英語科だけで取り組むべき問題じゃないのでは無いか？
例えば、数学・理科などでもそれを考えていく必要があるように考えられる。

4) 生徒のメタ認知力を高めるには

11月に本校教員3名が堀川高校への先進校視察を行った。この視察での一番の学びは、学校内のすべての活動が繋がっていて、それらすべてが「探究」というものにつながっているということであった。生徒が主体的に学ぶために教科の学習と探究学習がお互いに繋がっていることが重要であり、本校が掲げている「探究と教科の往還関係」に通じる話である。堀川高校の生徒は探究と教科学習を切り分けることなく学ぶことを重視し、かつ自分の学習の成果を定期的に振り返る「学びのアセスメント」の時間を取っている。自分の学習状況をモニタリングしたり、他者との協働の中で自己の学び方を絶えずアップデートする活動が学びに対する自己のメタ認知を高める方策であると考えている。未来研究会の中でも、「学校は何をどこまでやるか」という話がでたが、教員が学びを与える物量作戦ではなく、生徒自ら学びを取りに行ける方策を考える中で、学校の役割を明確にすることの重要性が改めて注目された。学校の役割を明確にし、生徒が自らすることと線引きをすることで、学校の多忙化解消と教員が本当にやりたい活動に取り組む時間の捻出ができるのではないかと考えている。

第4章 連携校の取組

4.1 県内連携校の取組

4.1.1 WWL事業連携校【福島県立福島高等学校】の取組み

(教頭 細谷 弘樹)

1. 本校の概要

本校は、明治31年、福島県第三尋常中学校として創立されて以来、125年の歴史ある伝統校である。平成15年から男女共学となり、現在、募集定員280人(7学級)、全日制課程、普通科単位制の学校として、本県の普通科教育を先取実践、牽引している。

平成19年度からスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、課題を解決する能力の育成や地域の復興、地域の創生を担う人材の育成を目指してきた。現在、第IV期目(令和4年度から令和8年度までの指定校)の2年目として、本校の教育目標である「世界を深く探究する高い知性と、人の痛みがわかり多様な他者と協働する豊かな人間性、自らと社会を変える変革マインドをもって、解決困難な課題に果敢に挑戦し、新たな価値や生き方、社会を創造する人間の育成」の実現を目指し、様々な取組を実践している。

2. 連携校における特色ある取組み

課題発見力養成講座

1年次のSS探究※において課題研究の手法を学ぶ7つの講座を本校教員が実施し、課題研究に向けて必要な力を育成している。※「総合的な探究の時間」にあたる本校の学校設定科目

学年ディベート大会

課題発見力養成講座の1つであるディベート講習会で学んだディベートの手法を使って、クラス対抗のチーム戦を行い、表現力や傾聴力、批判力の育成を図った。

高大連携講座

生徒は福島大学の先生方が本校で開講する20の講座から文理それぞれ2講座(計4講座)ずつ選択受講し、大学レベルの研究の話や課題研究の手法を学んだ。

全員課題研究(サイエンスリサーチ)

2年次では、生徒の興味・関心と社会課題、学術的な課題との接点を探しながら全員が研究テーマを設定し、教員や外部関係者からアドバイスを受けながら研究活動を進めていく。

海外校との共同研究

グローバルな視野と異文化への理解を深めるため、海外の高校生とオンライン会議を活用した共同研究を実施した。

日英サイエンス・ワークショップ

日本の高校生25名と英国の生徒25名による本校主

催のサイエンスフェアを実施した。フェアの期間では、福島の現状を伝え、そこから見えてくる課題についての議論や東北大学の協力のもと海外生とのワークショップを行い、科学的な研究について交流を深めた。

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)研修

英国のUCL大学の大沼信一教授(福島高校出身)がプロジェクトリーダーを務める研修プログラムに生徒3名が参加し、将来、世界的なリーダーになるための素地を学んだ。

T-JSSF2023 タイ王国研修

本校と姉妹校協定を締結しているタイ王国の「プリンセスチュラボン サイエンスハイスクール ナコンシー タマラート校」の紹介により「Thailand-Japan Student Science Fair 2023」に生徒4名が参加し、英語で研究の成果を発表した。

グローバルサイエンス

日本にいる外国人研究者の研究紹介や生徒達によるプレゼンテーションを行い、英語による表現力の育成やグローバルな視点を持った人材育成を図った。

ウメタンS(希望者による発展講座)

理系の内容に特化したSS探究の発展講座。オンライン講座であるため、県内外からの参加校も多く、地域の理数教育の発展にも貢献している取組である。

リベラルゼミ(希望者による進路指導部主催の講座)

授業では学べないテーマについて学ぶ講座。今年度は9回実施した。

医学コースの取組

令和4年度より1,2年生を対象に「医学コース」を設定し、医師や看護師をはじめとして医療従事者を志す生徒の職業観や基礎的な素養を体験実習や医療従事者の講演会等を通して養い、将来本県で活躍できる人材を育成している。



東北大学との取組(学問論演習の実践)

東北大学の先生によるオンライン授業。今年度は16回実施する予定である。

3. 課題と展望

- ・文理横断した学際的な学びやSTEAM教育を反映させた教育課程の編成
- ・大学単位認定制度の構築

4. 1. 2 WWL 事業連携校【福島県立安積高等学校】の取組み

安積高等学校教諭 遠藤直哉

1. 安積高校の概要

創立から139年を迎える福島県内で随一の進学校である。文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業に指定されており、理数系教育を特に強化している。文化活動及びスポーツ活動にも力を入れている一方で、生徒の基礎学力も非常に高く、多くの卒業生が国公立大学や有名私

立大学へ進学している。旧帝大や医学部など、難関大学への進学率も高いが、近年は東京大学などの最難関大学への合格者数が減少しており、その対策を急いでいる。令和7年度からは併設型中学校を開設予定で、6年間の一貫教育を実現するための教育カリキュラムを策定中である。

2. 連携校における特色ある取組み

SSH指定校であり、SS総合Ⅰ、SS総合Ⅱ、SSアカデミーⅠ、SSアカデミーⅡといった科目を設定し、論理的思考力、課題発見力、課題解決力の育成に取り組んでいる。海外との交流も積極的に行っており、ドイツ、フランス、タイの機関と連携し、現地高校生との生徒交流を実施している。地

域協働活動においては、地域課題をテーマにした探究活動を展開し、本校OB・OGにシニアサポーターとして協力していただいている。各分野の第一線で活躍する専門性の高い人材を招く試みは、生徒の視野を広げるだけでなく、学校と地域の連携にも繋がるものとなっている。

3. 課題と展望

生徒のレジリエンス、つまり困難な状況を乗り越える力が、以前に比べ低下していることが課題である。挫折経験が少ない生徒にとって、これは特に大きな問題である。VUCAな時代を乗り越えるためには、レジリエンスが不可欠である。そこで、本校では「開拓者の時間」というレジリエンス向上を目的とした講座を導入し、生徒の認知の歪みやABC理論を取り入れた心理学に基づく授業を通じて、多様な価値観の醸成や自己肯定感の向上を目指している。課題研究の指導はSSH事業の指定によりシステム化が進んでいるが、課題研究の深化という面ではまだまだ物足りない状況である。この深掘りする力は、単に探究活動をさせるだけでは限界があることがわかってきた。この状況を打破するために、今年度から思考力の育成に特化した授業を展開している。人間の能力の本質は抽象化力であり、生徒の能力育成のカギである。この力を身につけさせる方法として今年度1.2学年で5時間程度の時間を取って独自教材で授業を行っている。

そこで習得を目指した力は以下の4つである。

- ① 結果（具体）から原因（抽象）を探る力
- ② 目的（抽象）を意識しながら手段（具体）を考える力
- ③ 異なるもの（具体）を同じ構図の事象（抽象）として捉える力
- ④ 見えるもの（具体）の奥にある見えない事象（抽象）を見る力

また、抽象化に際して注意すべき点として以下の3つを挙げた。

- ⑤ 抽象化とは捨象を伴う作業だが、捨て去ってよいものかを吟味することは重要である。
- ⑥ 高次目的（高次の抽象）は低次目的（低次の抽象）を軽視しやすいので注意が必要である。
- ⑦ 人間は、合理化は得意だが、必ずしも合理的ではない。

次年度は、これらの内容についてテキストを再編集し、15時間程度を使って実施する計画である。授業の効果や生徒の変容については、来年度に報告したい。

4. 1. 3 WWL事業連携校【福島県立会津高等学校】の取組み

教諭 遠藤 俊太郎

1. 本校の概要

本校は、校是「好学愛校」「文武不岐」のもと、会津地区の進学指導拠点校に位置する普通科単位制の高校である。高い知性と豊かな人間性を育み、論理的思考力やコミュニケーション能力、リーダーシップを身に付けることにより、日本や世界で活躍できるグローバルリーダーとなりうる、自律的な生徒を育成することを目標としている。また、令和4年度入学生から単位制に移行し、その特長を生かした多様な学びと、大学等と連携した探究学習から得られる高度な学びの実現を目指している。

好学愛校
文武不岐

生徒の希望する進路の実現のために、「高い志」「目標」を持たせる取組み、興味・関心を持たせ視野を広げる取組み、学力向上への取組みに力を入れている。令和4年度からは医学コースを導入し、医学分野への関心を高め医師としての人間性を醸成することや、医学部進学に向けた学習指導・進路指導等の取組により、将来本県で活躍できる人材の育成を目指している。

2. 連携校における特色ある取組み

(1) 「高い志」「目標」を持たせる取組み

現役大学生（卒業生）による講演やOB・OG講演会などを行っている。令和5年度は、サッポロビール株式会社マーケティング本部から本校男女共学1期生のOG 沖井尊子氏を招き、「丸くなるな、星になれ。」という演題で全校生対象に講演を行った。

(2) 興味・関心を持たせ、視野を広げる取組み

大学教授等による出張講義やオープンキャンパスへの参加、大学等に出向いての最先端研究実習体験などを行っている。令和5年度の大学講座においては、1・2学年対象に、全18講座に分かれて大学教授等による出張講義を実施し、より専門的な学問に触れ学ぶ面白さを体感させるとともに、大学進学への意識を高める取組みを行った。また、希望生徒対象による大学訪問など、進路実現のための資質・能力の育成を行っている。



(3) 学力向上への取組み

日々の授業の質を高める教員の授業研究に加え、長期休業中の補習や予備校講師による特別講座、個別添削指

導などを通じて、生徒の学力向上を図っている。

(4) そのほかの取組み

・総合的な探究の時間における探究活動について

総合的な探究の時間を通じて「自ら課題を見つけ、自ら解決策を模索し、1人で歩き出す生徒の育成」を目標として、全教員で指導に当たっている。1学年では、「子ども」「観光」など9つのグループに分かれ、地域課題の解決を目指すグループ探究を実施している。2学年では、希望進路と関連した会津地域の課題を生徒一人ひとりが発見し、その解決を目指す個人探究を実施している。

・医学コースプロジェクトについて

元東京大学副学長（医学博士）の武藤芳照氏や会津若松医師会長の矢吹孝志氏による講演、医学部現役学生による講演・座談会などを実施した。2年次の総合的な探究の時間とも連携し、個人で地域の医療課題解決に向けた探究活動を実施している。

・ICT活用について

令和3年度から、本県の「ICTを活用した新しい時代の教育研究開発事業に係る指導力向上開発校」として、新たな教育指導の可能性を模索している。Google Workspace等を活用した新たな教育指導プラットフォームの構築や、教職員ポータルサイト等の充実による校務の効率化を行ってきた。授業における一人1台端末の活用についても、各教科で実践事例を蓄積し、授業公開等を通じて校内外に共有する取組みを行っている。

3. 課題と展望

・学力向上に向けた指導について

大学入試における総合・学校推薦型選抜など、入試形態が多様化しており、コンピテンシーベースでの資質・能力の育成や、それに向けた指導体制の構築が求められている。総合的な探究の時間も含めて、より有効な全体指導・個別指導の在り方を模索していく必要がある。

・探究活動における外部との連携について

探究活動の成果を発表・共有する場として、校内での課題研究発表会を実施している。校外でも高校生サミット等で提言を行う生徒もいるが、一部に留まっている。現時点では、探究活動に際して大学や行政、専門機関などと連携したり、指導助言を受けたりする機会がほとんどない。課題発見能力や情報収集能力、分析能力を高める機会として、こうした外部連携を進めていきたい。

4. 1. 4 WWL事業連携校 【福島県立会津学鳳高等学校】の取組み

(副校長 星 博人)

1. 本校の概要

本校は、大正13年に若松実業女学校として創立し、今年度百周年を迎えた。平成14年に若松女子高等学校から、共学による総合学科として会津学鳳高等学校となり、平成19年に会津学鳳中学校を併設して、県内初の公立併設型中高一貫教育校となった。中高一貫教育による進学型のプログラムを総合学科の中に組み込んだ特色ある教育を展開し、今年度で17年になる。

教育目標に「国際化、情報化社会に夢拓く力の育成」を掲げ、中学校から高校までの6年間を計画的・系統的な教育課程を設定している。また、令和3年度から3期目となるスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を受け、理数教育を中心に様々な研究機関や大学などと連携して課題解決型学習を展開している。

SSH 3期目の研究開発としては、Society5.0 や高度情報化の時代の実現、そして持続可能な社会に貢献する人材の育成のため、事業テーマ「サステナビリティ」及び「Think Globally Act Locally」を掲げている。会津から世界を創造する科学者として必要な資質・能力の向上を図る取組を行い、そのために必要な中・高・大の教育プログラムの研究開発を行うことを目指している。

SSH による教育課程上の特例については、高校1年生対象に「産業社会と人間」に替えて「SSH 産業社会」、高校2・3年生対象に「総合的な探究の時間」に替えて「SSH 探究」を開設し、全員が履修して探究活動を行っている。それぞれ、地域に根差した探究活動を行う「GS (グローバル探究) コース」と、それに加えて高度な理数探究活動を行う「SS (サイエンス探究) コース」に分かれており、生徒は自らの希望によって所属コースを決定している。

2. 連携校における特色ある取組み

(1) 高大連携協議会 (会津大学・会津大学短期大学部)

会津大学・会津大学短期大学部と高大連携に関する協定を交わし、高大連携協議会を設置している。主な事業は、大学教員等の本校への講師派遣「スポット講義」と本校生徒が大学、短期大学の授業科目を受ける「講義聴講」である。今年度は「スポット講義」を8講座実施した。また、希望者を対象にした「講義聴講」は、高校在学中ながら講義を聴講することができ、高校の修得単位に加えることができるうえ、会津大学・会津大学短期大学部に進学した場合、その単位が大学の単位として認め

られる。これらの事業に加え、今年度は高校1年生「GS (グローバル探究) コース」課題研究の中間発表会に、会津大学短期大学部の学生16名が助言者として来校し、生徒の発表内容についてアドバイスをした。高校2年生の課題研究中間発表では、短期大学部の先生8名が講師として来校し、生徒の発表に対して助言をいただいた。

(2) 地元企業との連携をいかした課題研究

高校1年生「GS (グローバル探究) コース」では、地元会津地区の各自治体や地元企業との連携をいかして、課題研究に取り組んでいる。その他、会津地区の高校生が地域企業からの課題に対し、自分たちの考えや解決策の意見交換をくり返して解決策を見出す「高校生による会津地域活性化プロジェクトALMS」を立ち上げ、約30社の地元企業や自治体の協力を得て地域に根ざした活動をしている。今年度は、会津工業高校とザベリオ学園高校の生徒とともに、9つのテーマで活動を行い、成果を発表した。

(3) 理数教育の拠点校となる探究活動

理数系部活動「SSH 探求部」では、全国総合文化祭で4部門に出場した他、「日本学生科学賞」や「野口英世賞」などで受賞するなど全国規模の大会で活躍している。さらに、「あいづサイエンスフェア」や「小学生のための科学実験講座」を開催し、小学生に自然科学への興味関心を育てる活動など地域の理数教育の振興に尽力している。

(4) 国際性を高める事業

海外研修として台湾の高校「建国高級中学」との交流を行っている。オンラインや現地での交流をとおして、科学の国際性と化学英語の重要性を認識させ、世界で活躍できる科学技術者の資質育成を目指している。

3. 課題と展望

本校では、令和3年度から入学者の定員減に伴い、教員定数も年次進行で減少している。本校の特色ある事業は、SSH 事業の拡大とともに広がりを見せているが、担当者の負担軽減と働き方改革の実現のため、持続可能な事業への展開が求められている。今後は、事業の精選を行いながら、会津大学や会津大学短期大学部との連携をより深めて、メンター制などを確立することや、地域企業や自治体の協力を得ながら、生徒の探究活動を校外で推進していくなど、外部機関とより有機的な連携を図っていくことが必要である。

4. 1. 5 WWL事業連携校 【磐城高等学校】の取組み

(教頭 深谷 誠)

1. 本校の概要

本校は明治29年に開校し、平成13年度入学生より男女共学化、令和4年度入学生より単位制が導入された。校是「知性と責任」のもと、いわき地区唯一の進学指導拠点校として、文武両道を実践するとともに、高い知性と時代の変化に対応できる生きる力や知徳体の調和のとれた豊かな人間力を身に付けることにより、日本・世界で活躍できるトップリーダーの育成を目指している。単位制の特長と福島S I H事業の成果を踏まえ、多様な学びと主体的な探究学習による高度な学びの追究に加え、医学分野への関心を高める取組を実践している。



企業訪問研修

2. 連携校における特色ある取組み

福島県教育委員会より指定された「福島スーパー・イノベーション・ハイスクール（福島S I H）」において、「地域の復興・未来の創造に向けて先端的研究に啓発する人材育成プログラム」をテーマに、新たな産業の創出・集積に資する研究者や経営者・起業家等、トップリーダーとして福島イノベーション・コースト構想を牽引し、浜通り地域・日本、国際社会で活躍できる人材を育成するため、以下のような取組みを行っている

(1) 最先端分野の学習

大学等の訪問調査や講義などを通じ、社会変革や技術変革に係る社会科学・自然科学の最先端研究への理解及び関心を深め、社会貢献への高い志を持った起業家、経営者、行政官、法律家、研究者、医師、技術開発者等の人材育成を目指す。

(2) 地域理解に向けた探究活動

地域の課題・現状を考察するグループ学習や、いわきアカデミア協議会と連携した地元企業の見学、経営者やスペシャリストとの出会いと対話等を通じ、人的ネットワークの大切さや地域社会及び地域産業への理解を深

める。

(3) 高度な探究活動

浜通り地域等で進む先端研究や産業集積等に関し、ICT 機器等を活用したフィールドワークや観察実験を行い、課題解決能力・プレゼン力、ディベート力の育成及び向上を図る。



津波被災地区探究

3. 課題と展望

限られた時間の中で多忙な学校生活を送る生徒が探究的な学びを深めていくことが最大の課題である。そのため、3年間を見通した「総合的な探究の時間」を計画、実践する。具体的には、コロナ禍で途絶していた外部人材の活用等を再開するとともに、現在の生徒に必要な活動を検討し、計画的に実施する。今後は、長期休業等の時期を活用し生徒が主体的に学びを深める機会を設定したい。

また、引き続き、教職員全体が生徒の探究活動を支援する体制や組織づくりに取り組むとともに、大学進学等の進路実現への連結、各教科との相互連携の拡大を図ることも課題と考える。



地域探究発表会

4. 2 県外連携校の取組

4. 2. 2 WWL事業連携校 【宮城県仙台二華中学校・高等学校】の取組み

(主幹教諭 尾形 広道)

1. 本校の概要

本校は明治37(1904)年に私立東華女学校として創立し、その後県立の宮城県第二高等女学校と合併、昭和23(1948)年には、学制改革により宮城県第二女子高等学校と改称、数多くの有為な人材を世に送り出し、今年度で119年目を迎えます。そして、男女共学、併設型中高一貫教育校の仙台二華中学校・高等学校として大きく生まれ変わってから14年目を迎えました。

校舎は仙台市の中心地に位置し、仙台駅から徒歩15分の立地で交通の便も良く、つねに最先端の学術や文化に接することのできる環境にあります。また、敷地内には同窓会館と国際バカロレア(I B)棟もあり、充実した学習環境が整っています。創立以来の文武両道の精神と、自由で明るく親しみやすい生徒の気質、地道ながらも誠実で礼儀正しい伝統の気風は現在も受け継がれています。

2. 連携校における特色ある取組み

特色ある取り組みとしては 1) 課題研究 2) 国際交流 3) 国際バカロレア(I B) 類型 があります。

1) 課題研究

「地球環境」をテーマとした探究学習をさらに追究し、学校設定教科「グローバルスタディ課題研究」において「世界の水問題」を解決するために国際的な課題研究に取り組んでいます。毎年2月には校内で課題研究発表会を行います。その他にも様々な学会やシンポジウムに積極的に参加し、研究成果を発表しています。



ふたば未来学園高等学校で行われた未来創造探究生徒研究発表会にて

2) 国際交流

今年度、高校2年次生徒は研修旅行で台湾を訪問しました。故宮博物院、九份・十分と行った観光地だけでなく、タイヤル族という原住民の村を訪問し国際理解を深めました。

「世界の水問題」に関連して、希望生徒が夏(雨季)と冬(乾季)にメコン川流域を訪問し約12日間のフィールドワークを実施しています。課題研究における現地調査が中心ですが、現地の高校との交流やホームステイも行っています。



ベトナムの
チョウタイン
第一高校との
交流の様子

また、毎年3月には高校1・2年の希望生徒をアメリカ・デラウェア州へ派遣し現地の高校生と交流を行っています。

国際交流を通して、生徒は広い視野で物事を捉えるようになり、より良い社会を作るには自分は何ができるのかを考えます。

3) 国際バカロレア(I B) 類型

令和3年4月よりディプロマ・プログラム(DP)が開始され、現在3年目を迎えています。東北で唯一の公立高校DP校として県内外から多くの方が視察に訪れます。1年次の早い段階で希望生徒を募り体験授業や面談を通して選択したのち、2年次と3年次の2年間でDP取得を目指します。I B類型の中でも希望進路によって文系と理系に分かれ選択授業を受けます。授業は少人数で対話を重視して進めています。外国人の先生が英語で行う授業もあります。海外大学を含めて多様な進路に対応しています。

3. 課題と展望

併設型中高一貫教育校として、高等学校は課題研究、国際交流やI B類型といった特色を生かして魅力ある学校づくりを行う必要があります。そしてその魅力を県内外に発信することも重要です。

また、併設型の中高一貫校であるため高校から入学した生徒と一貫生徒で学習進度の違いがあります。教育課程や学級編成についても引き続き検討していく必要があります。

4. 2. 2 WWL事業連携校 【山形県立東桜学館中学校・高等学校】の取組み

研究課国際交流主任 山口和彦

1. 本校の概要

本校は、県内初の併設型中高一貫教育校として平成28年に開校しました。「高い志」「創造的知性」「豊かな人間性」を基本理念とし、次の3つを教育目標としております。①地域社会及び国際社会の発展に貢献しようとする高い志を育てる、②豊かな感性や探究心と論理的な思考力を基盤とした創造的知性を育てる、③心身ともに健やかで、郷土愛と公共の精神に富む豊かな人間性を育てる。6年間の計画的・継続的な教育により、先進的な理数教育、国際理解教育を実践し、生徒一人ひとりの個性の伸長を図るとともに、自ら学び、物事に挑戦する心を育み、グローバルな視点を持ちながら、地域社会や国際社会の発展に貢献できる力を育成しています。

平成29年にSuper Science Highschool (SSH)に指定され、令和4年度より第Ⅱ期に入り、「中高一貫教育校を核としたやまがたの未来を拓くグローバルな視点を持った科学人材の育成」のテーマのもと、課題研究「未来創造プロジェクト」の一層の充実を図り、特色ある事業にチャレンジしています。

2. 連携校における特色ある取組み

(1) 国際英語プレゼンテーション大会の開催



ユネスコスクールのネットワークを通じて得たタイ、マレーシアの連携協力校を中心に、国内外の高等学校生を招待して探究活動の成果を英語でプレゼンテーションし、質疑応答も審査対象とする大会 START [ST(udy) A(ssembly) (of) R(earch) (at) T(ouohgakkan)]を令和4年から主催しています。研究内容に応じて5つの分科会場でそれぞれに審査、表彰されます。2年目となったSTART2023は、オンラインと対面のハイブリッド形式で行い、ノンシンウィッタヤコム中等学校(タイ・来校)、モンクット王工科大学トンプリー校(タイ)、SMKA コタキナバル中等学校(マレーシア)、國立臺北科技大學附屬

桃園農工高級中等學校(台湾)の4校が海外から、国内は兵庫県立豊岡高等学校、静岡北高等学校、東海大学付属高輪台高等学校、東京都立多摩科学技術高等学校、新潟県立新発田高等学校、岩手県立一関第一高等学校、秋田県立横手高等学校、宮城県立古川黎明高等学校、福島県立安積高等学校、福島県立ふたば未来学園高等学校の他、県内からも本校以外に4校が参加しました。

(2) 英語で発表する機会の増加

今年度、早速WWLコンソーシアム構築支援事業である全国高等学校生フォーラムにも本校から参加させて頂いたように、英語で発表する機会を増やすことは本校の目標の1つです。令和5年度はこの他にも、SciUS Forum(タイ国内の16の大学、19の学校が参加しての科学、技術、研究、イノベーションに関する研究発表と協働学習の大規模なフォーラム)にも生徒4名が参加した他、21世紀の中高生による国際科学技術フォーラム(SKYSEF2023; 静岡北高等学校主催)や東海大学付属高輪台高等学校 SSH 成果発表会(International SSH Presentation Seminar 2022)、2024 グローバル・サミット”Be a Bridge”(日本と台湾の高等学校生が社会課題の解決に向けたプレゼンテーションや討論会をする交流会; 山形県教育旅行誘致協議会主催)に参加しています。

(3) 特徴的な英語教育

SSHによる学校設定科目 CLIL English I・IIを高等学校2・3年次に設定しており、科学や社会に関することを、英語を通じて学ぶ授業が設けられています(2単位)。また、株式会社アルクが行っているSherpa事業により、金谷憲先生(東京学芸大学名誉教授)をアドバイザーに迎え、ディベートを中心とした中高一貫の英語教育・東桜モデルの開発に取り組んでおり、中学3年生で校内英語ディベート大会を行い、高等学校でも複数回英語の授業でディベートを取り入れたカリキュラムを進めています。

3. 課題と展望

海外との交流は、オンラインでは時差を含めた時間設定が、対面で行うには円安の影響などを含めた予算の問題が大きな課題となっています。研修旅行の日程が4泊までという制限があり、希望者を募っての研修は保護者の負担で実施せざるを得ない状況にあります。予算的な問題を解決できるならば、より多くの海外校との交流が可能になり、規模の大きな取組みが可能になるでしょう。

第5章 外部連携

5.1 外部連携

令和2年度から指定された「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）の3年間ではふたば未来学園と双葉郡による広域協働コンソーシアムを構築してきた。双葉郡教育復興ビジョン推進協議会や福島相双復興推進機構、福島イノベーション・コースト構想推進機構など双葉郡8町村との機関との協働によって、演劇プログラムや地域課題解決型探究の加速化を生み出した。特に双葉郡の8町村すべての地域の方々との協働できたことは、より充実した双葉郡地域把握フィールドワークや演劇プログラムづくりにつながっている。また、ここでできた協働関係は2年次以降の探究学習にもつながっていった。

今年度より WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に移行し、イノベティブでグローバルな人材の育成のために、新たなコンソーシアムを構築する必要がある。より高度な探究を進めるために、これまでの地域との協働機関に他に、今年度は新たに大学などの事業協働機関との連携を強化した。代表的な事業協働機関についてまとめる。また、各年次における外部連携実績リストについては、次項以降に掲載する。

① 東北大学

東北大学とは令和5年3月に福島県教育委員会と東北大学高度教養教育・学生支援機構との間で教育連携協定を締結した。本協定により、WWL事業拠点校（本校）と県内事業連携校の生徒が東北大学の生徒が東北大学の講座を履修できるアドバンスト・プレースメント（先取り履修＝AP）を実現するための協議が進められることとなった。

令和5年度は大学の先取り履修を整えるために、単位ではなくオープンバッジ（獲得した知識やスキルを証明する国際技術標準規格のデジタル証明書）の付与という形で「学問論演習」というゼミ形式の授業に本校生徒5名が参加した。10月の後期の授業で全15回の講義では「グループディスカッションとアイデア整理のスキルアップ講座」を受講した。

また、東北大学オープンオンライン教育開発推進センター（MOOC）のオンライン講座の推進など今年度は東北大学との連携が一気に進んだ。未来創造探究においては、理系分野の探究を中心に東北大学の教授から直接アドバイスを頂いたり、製作物についての分析依頼を行うなど、個別の探究における連携する事例も作ることができた。

次年度については、学問論演習の受講講座を更に多くの生徒に参加してほしいと考えている。また、今年度から継続して協議している内容として、論文作成能力や論理的思考を育成するためのアカデミック・ライティング講座の開設を進めていきたい。

② 早稲田大学

早稲田大学とは早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンターとの連携を継続している。毎年ふくしま学（楽）会を年2回開催している他、昨年度からはより地域住民と本校生と大学が協働の学びの場を作るために1F地域塾を年3～4回のペースで開催してきた。詳細については5.3を参照のこと。

③ 福島大学

福島大学とは地元の国立大学として未来創造探究における指導助言をいただく外、未来創造探究生徒研究発表会での審査員を毎年お願いしている。今年

度は2年次の探究学習を進化させるために「専門知識講義」の授業で福島大学の先生から講義を頂いたり、生徒の発表を聞き「壁打ち」をしていただくことで生徒の探究をより磨きをかけていただいた。

令和6年3月23日（土）には福島大学「地域×データ」実践教育推進室主催の公開シンポジウム『次世代がつなぐ“あの日”と“未来”～広島・神戸・福島「記憶の継承」』にて本校生徒と教員が発表する予定である。

④ 福島国際研究教育機構（F-REI）

福島を始め東北の復興を実現するために令和5年度に開設されたF-REIとは令和5年4月の設立記念シンポジウムで本校生徒が代表発表およびトークセッションを行った。また、代表発表を行った大学院生と社会人も本校の卒業生である。

9月にはF-REIの山崎光悦理事長をお招きして2年次生を対象にトップセミナーを開催した。また、令和6年3月には大学生・高校生を対象とした座談会に本校生7名が参加予定である。

WWL事業における長期目標の中で、「F-REIをはじめ、地域や全国・海外で世界と協働しながら活躍する人材の輩出に繋げる。将来地域に戻った人材が、福島国際研究教育機構をはじめとしたイノベーション・コースト構想推進の中核を担い、内発的人材と世界の研究者の協働による双葉郡復興を実現していくことを目指す」とあり、今後もF-REIとは連携を進めていくが、特にグローバルに活躍する企業や研究の最前線などの分野で連携を進められると良いと考えている。

⑤ その他

「グローバル型」事業で協働してきた双葉郡教育復興ビジョン推進協議会や福島相双復興推進機構、福島イノベーション・コースト構想推進機構などは引き続き連携を進める。また、NPO法人カタリバ双葉未来ラボとの連携については、5.4を参照のこと。

5.2 外部連携実績（1年「地域創造と人間生活」お世話になった方々）

コミュニケーションWS	2023/4/12	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC	1年 地域創造と人間生活			植浦菜保子	NPO法人PAVLIC	
		河野悟	NPO法人PAVLIC					森内美由紀	NPO法人PAVLIC
		有吉宣人	NPO法人PAVLIC					村田牧子	NPO法人PAVLIC
		北村耕治	NPO法人PAVLIC					山本雅幸	NPO法人PAVLIC
		宮崎悠里	NPO法人PAVLIC			演劇WS	2023/7/18	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC					河野悟	NPO法人PAVLIC
演劇WS	2023/5/2	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC					北村耕治	NPO法人PAVLIC
		河野悟	NPO法人PAVLIC					有吉宣人	NPO法人PAVLIC
		北村耕治	NPO法人PAVLIC					宮崎悠里	NPO法人PAVLIC
		宮崎悠里	NPO法人PAVLIC					植浦菜保子	NPO法人PAVLIC
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC				森内美由紀	NPO法人PAVLIC	
		森内美由紀	NPO法人PAVLIC				村田牧子	NPO法人PAVLIC	
		山本雅幸	NPO法人PAVLIC				山本雅幸	NPO法人PAVLIC	
		金恵鈴	NPO法人PAVLIC		演劇WS・成果発表会	2023/7/24.25	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC	
		館そらみ	NPO法人PAVLIC				北村耕治	NPO法人PAVLIC	
演劇WS	2023/5/10	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC				宮崎悠里	NPO法人PAVLIC	
		河野悟	NPO法人PAVLIC				植浦菜保子	NPO法人PAVLIC	
		北村耕治	NPO法人PAVLIC				村田牧子	NPO法人PAVLIC	
		有吉宣人	NPO法人PAVLIC				山本雅幸	NPO法人PAVLIC	
		宮崎悠里	NPO法人PAVLIC				武井希未	NPO法人PAVLIC	
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC		哲学対話	2023/5/23	神戸和佳子	長野県立大学	
哲学対話	2023/5/23	神戸和佳子	長野県立大学				平田オリザ	芸術文化観光専門職大学	
		西山溪	開智国際大学				大倉英揮	黒目写真館	
		川向思季	長野県立大学		成果発表会	2023/7/25	明石重周	J-ヴィレッジ	
		麻生修司	都留分科大学				田村善孝	東京電力福島復興本社	
		竹岡香帆	都留分科大学				青木裕介	ぶらっとあっと	
		大平桃花	都留分科大学				松本佳充	双葉高校元教員	
演劇WS	2023/5/30	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC				中井俊郎	NARREC	
		河野悟	NPO法人PAVLIC				青木淑子	富岡町3.11を語る会	
		北村耕治	NPO法人PAVLIC				滝沢月子	富岡中央医院	
		宮崎悠里	NPO法人PAVLIC				下枝浩徳	葛力創造舎	
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC				平山勉	ふたばいんふぉ	
		森内美由紀	NPO法人PAVLIC				神崎克訓	鹿島建設	
		山本雅幸	NPO法人PAVLIC				鈴木謙太郎	木戸川漁業協同組合	
「演劇を通して地域の課題を知る」インタビュー	2023/6/6	小泉良空	プロジェクトふたば				佐藤亜紀	HAMADOORI13	
		松本佳充	双葉高校元教員				柴口正武	元広野中学校	
		志賀風夏	天山文庫		哲学対話	2023/8/29	神戸和佳子	長野県立大学	
		青木淑子	富岡町3.11を語る会				西山溪	開智国際大学	
		佐藤亜紀	HAMADOORI13				川向思季	長野県立大学	
		鈴木謙太郎	木戸川漁業協同組合				麻生修司	都留分科大学	
		平山勉	ふたばいんふぉ				竹岡香帆	都留分科大学	
		明石重周	J-ヴィレッジ				大平桃花	都留分科大学	
		菅野孝明	まちづくりなみえ		哲学対話	2023/9/12	神戸和佳子	長野県立大学	
		青木裕介	ぶらっとあっと				西山溪	開智国際大学	
		滝沢月子	富岡中央医院		ヒューマンライブラリー	2023/10/31	日野涼音	群馬県立女子大学	
		下枝浩徳	葛力創造舎				青木裕介	ぶらっとあっと	
		木村紀夫	大熊未来塾				谷田川佐和	株式会社Orai	
「演劇を通して地域の課題を知る」フィールドワーク	2023/7/4	小泉良空	プロジェクトふたば				田村稜真	福島大学 大学生	
		松本佳充	双葉高校元教員				関城夢	福島大学 大学生	
		志賀風夏	天山文庫				高橋恵子	Rodriguez	
		田村善孝	東京電力復興本社				鈴木恵子	語り部	
		増子啓信	大熊学び舎ゆめの森				中井俊郎	日本原子力研究開発機構	
		鈴木謙太郎	木戸川漁業協同組合				小松理康	ヘキレキ舎	
		平山勉	ふたばいんふぉ				江尻浩二郎	東日本国際大学	
		明石重周	J-ヴィレッジ				高橋大就	一般社団法人「東の食の会」	
		菅野孝明	まちづくりなみえ				猪狩僚	いわき市役所	
		神崎克訓	まちづくりなみえ				平澤俊輔	いわきFC	
		滝沢月子	富岡中央医院				横須賀直生	おかしなお菓子屋さんLiebe	
		下枝浩徳	葛力創造舎				小林 奨	YONOMORI DENIM	
		磯辺吉彦	ぶらっとあっと		未来創造探究ブレ発表会	2024/2/6	高木市之助	T.I.G.D.	
		中井俊郎	NARREC				横須賀直生	Liebe!	
		志賀秀陽	大熊未来塾				山根麻衣子	ローカルライター	
		田中秀昭	鹿島建設				中井俊郎	NARREC	
		青木裕介	ぶらっとあっと				平澤俊輔	いわきFC	
		佐藤亜紀	HAMADOORI13				青木裕介	ぶらっとあっと	
		青木淑子	富岡町3.11を語る会				北村耕治	NPO法人PAVLIC	
		柴口正武	元広野中学校				有吉宣人	NPO法人PAVLIC	
演劇WS	2023/7/11	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC				宮崎悠里	NPO法人PAVLIC	
		河野悟	NPO法人PAVLIC				植浦菜保子	NPO法人PAVLIC	
		北村耕治	NPO法人PAVLIC				森内美由紀	NPO法人PAVLIC	
		有吉宣人	NPO法人PAVLIC				村田牧子	NPO法人PAVLIC	
		宮崎悠里	NPO法人PAVLIC				山本雅幸	NPO法人PAVLIC	
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC				宮崎悠里	NPO法人PAVLIC	
		森内美由紀	NPO法人PAVLIC				植浦菜保子	NPO法人PAVLIC	
		村田牧子	NPO法人PAVLIC				森内美由紀	NPO法人PAVLIC	
		山本雅幸	NPO法人PAVLIC				村田牧子	NPO法人PAVLIC	
							山本雅幸	NPO法人PAVLIC	

2年「未来創造探究」お世話になった方々

探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職	
共生社会探究ゼミ	2023.10.3	川崎興太	福島大学教授	1
共生社会探究ゼミ	2023.12.5	猪狩僚	いわき市役所	2
共生社会探究ゼミ			広野児童館 館長	3
共生社会探究ゼミ			広野こども園 園長	4
共生社会探究ゼミ		佐藤教頭	教頭先生(広野小学校)	5
共生社会探究ゼミ			広野小学校3.4年生の先生	6
共生社会探究ゼミ			広野小学校3.4年生	7
共生社会探究ゼミ		吉田泰子	陽なたぼっこ 店主	8
共生社会探究ゼミ		谷川攻一	ふたば医療センター附属病院 医院長	9
共生社会探究ゼミ		水口公美	ふたば未来学園高等学校 栄養教諭	10
共生社会探究ゼミ		中澤真弓	日本体育大学 准教授	11
共生社会探究ゼミ		八嶋美加	合同会社木の実 多機能型重心児デイサービスどんぐり	12
共生社会探究ゼミ		小熊真奈美	富岡支援学校	13
共生社会探究ゼミ		西山将弘	はなのころ	14
共生社会探究ゼミ		太田毅	いわきオートキャンプ場DAN～暖～	15
共生社会探究ゼミ		下釜幸恵	あおば児童クラブ	16
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.8.17	安島 大司	株式会社マルト商事	17
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.8.17	仁井田 務	株式会社マルト商事	18
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.10.6	徳田 辰吾	ネクサスファームおおくま 取締役兼工場長	19
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.10.6	渡部 高行	ネクサスファームおおくま 管理部管理課 課長 生産部販売管理課	20
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.10.6	安島 大司	株式会社マルト商事	21
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.10.6	仁井田 務	株式会社マルト商事	22
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.10.31	仁井田 務	株式会社マルト商事	23
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.10.31	見城 周平	株式会社マルト商事	24
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.12.5	仁井田 務	株式会社マルト商事	25
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.9.24	木下 麻美	がらがらどん	26
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.12.16	木下 麻美	がらがらどん	27
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.11.25	谷田川 佐和	株式会社Oriai	28
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.12.16-18	谷田川 佐和	株式会社Oriai	29
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.1.6	谷田川 佐和	株式会社Oriai	30
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.11.3	磯辺 義彦	NPO法人広野町わいわいプロジェクト	31
地域社会・経済産業探究ゼミ	2023.6.1	徳田 辰吾	ネクサスファームおおくま 取締役兼工場長	32
人間科学・文化・芸術探究ゼミ	2023.12.12	花見 憲一	福島県浜児童相談所	33
人間科学・文化・芸術探究ゼミ	2023.7.18	エミリ	大熊町住人・農家	34
人間科学・文化・芸術探究ゼミ	2023.7.5	山田美香	福島大学地域未来デザインセンター	35
人間科学・文化・芸術探究ゼミ	2023.12.26	窪田文子	医療創生大学	36
自然科学・地球環境探究ゼミ		佐伯さん	大熊町役場	37
自然科学・地球環境探究ゼミ		鈴木さん	大熊町役場	38
自然科学・地球環境探究ゼミ		渡邊 優翔	Ichido株式会社	39
自然科学・地球環境探究ゼミ		土井 杏奈	KUMA・PREスタッフ	40
自然科学・地球環境探究ゼミ		平澤 桂	福島虫の会	41
自然科学・地球環境探究ゼミ		大越さん	はびまる福島	42
自然科学・地球環境探究ゼミ		秋山 杏由子	福島大学	43
自然科学・地球環境探究ゼミ		植松 康	東北大学	44
自然科学・地球環境探究ゼミ		山崎 剛	東北大学	45
自然科学・地球環境探究ゼミ		鈴木 正範		46
自然科学・地球環境探究ゼミ		坂本 壮	東北大学	47
自然科学・地球環境探究ゼミ		青砥 和希	NPO未来の準備室	48
スポーツ医・科学探究ゼミ	2023.9.19	西嶋尚彦	筑波大学大学院名誉教授	49
スポーツ医・科学探究ゼミ	2023.11.28	西嶋尚彦	筑波大学大学院名誉教授	50
スポーツ医・科学探究ゼミ	2023.12.12	西嶋尚彦	筑波大学大学院名誉教授	51
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.2.14	西嶋尚彦	筑波大学大学院名誉教授	52
				53
				54
				55
				56
				57
				58

3年「未来創造探究」お世話になった方々

探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職	
原子力防災探究ゼミ	7月以降複数回	谷津田陽一	双葉町結ぶ会	1
原子力防災探究ゼミ	7月以降複数回	大島遊亀慶	双葉町結ぶ会	2
原子力防災探究ゼミ		猪狩幸子	一般社団法人富岡町観光協会	3
原子力防災探究ゼミ			とみおかアーカイブミュージアム	4
原子力防災探究ゼミ			富岡町商工会	5
原子力防災探究ゼミ	7月以降複数回	加村めぐみ	双葉町教育委員会生涯学習課	6
原子力防災探究ゼミ	7月以降複数回	菅原さん	双葉町教育委員会総務課	7
原子力防災探究ゼミ	2023.7.15	高倉洋尚	初發神社宮司	8
原子力防災探究ゼミ	複数回	山根辰洋	双葉町会議員	9
原子力防災探究ゼミ	7月以降複数回		双葉町商工会	10
原子力防災探究ゼミ	7月以降複数回	谷津田敬子 他	女宝財踊保存会	11
原子力防災探究ゼミ			豚井専門店 豚吉	12
原子力防災探究ゼミ			手打ち中華そば白玉家	13
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	昨年度から継続	野地雄太	株式会社Beyond Lab	14
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	昨年度から継続	齋藤裕喜	YONOMORI DENIM	15
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	昨年度から継続	小林奨	YONOMORI DENIM	16
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	山澤亮治	株式会社ヤマサワプレス	17
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回		富岡町役場	18
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回		株式会社大和田測量設計	19
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	小島和美	Caféふう	20
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	川瀬吏恵	福島県石川町地域おこし協力隊・高校魅力化コーディネーター	21
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	深澤諒	結のはじまり	22
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.06.17	日野涼音	認定NPO法人底上げ	23
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.06.17	山根 辰洋	一般社団法人双葉郡観光研究協会	24
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.06.17	丸山菜々子	読売新聞	25
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.08	渡辺義信	福島県議会議長	26
スポーツと健康探究ゼミ	2023.3.22	忽那和幸	リズムインストラクター	27
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	山本詩央理	元カタリバスタッフ	28
スポーツと健康探究ゼミ	2023.7.5	久保翔太	JFAメディカルスタッフ	29
スポーツと健康探究ゼミ	2023.3.26	半谷正彦	キャニオンワークス取締役社長	30
スポーツと健康探究ゼミ		四家卓也	Re-Birthゼネラルマネージャー	31
スポーツと健康探究ゼミ		山田みか	広野町みかんクラブ	32
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	青木さん	元気教室	33
スポーツと健康探究ゼミ	2023.1	江川賢一	東京家政大学人間栄養学部教授	34
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	山田美香	早稲田大学理工学術院	35
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	藤木泰寛		36
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	佐藤敬人		37
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	アンタルクルニア	ふたば未来学園バドミントン部スペシャルコーチ	38
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	榎本佳治	ふたば未来学園バドミントン部チームドクター	39
再生可能エネルギー探究ゼミ	2023.05.23	片岡亜優	宮城大学	40
アグリ・ビジネス探究ゼミ	複数回		株式会社マルト	41
健康と福祉探究ゼミ	昨年度から継続	齋藤裕喜	YONOMORI DENIM	42
健康と福祉探究ゼミ	昨年度から継続	小林奨	YONOMORI DENIM	43
健康と福祉探究ゼミ	複数回	山澤亮治	株式会社ヤマサワプレス	44
健康と福祉探究ゼミ	昨年度から継続	下枝浩徳	葛力創造舎	45
				46
				47
				48
				49
				50
				51
				52
				53
				54
				55
				56
				57
				58

5. 3 早稲田大学との協働

これまで生徒の探究学習において、地域での実践を加速できた一方で、学術的な知と接続することによる科学的概念への昇華（抽象的に思考し、転用できる概念的なものの見方・考え方の獲得）には課題があった。このことから、学知の接続を目的として2018年以降、早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンターとの連携を重ねてきた。2022年には早稲田大学環境総合研究センターとの連携協定を締結した。

(1) 実施内容

①第6回1F地域塾

5月20日13:00-18:05、本校会場で行った。参加者は48名。事前学習として本校生徒は12日に処理水放出にまつわる2つの新聞記事を読んで問いを出していくワークを行い臨んだ。全体のマネジメントを務めたのは日本ファシリテーション協会の田坂逸朗さんである。

生徒たちが事前学習で出した問いを共有し、そのやり取りのなかでにおい立ってきた問いを田坂さんがつかまえ、紙（テーマカード）に書き並べる。参加者は「これは私の問いだ」とエンパシーを感じたカードの前に集い即席の分科会で話し合う、1人しかいなかったら1人で考える。田坂さんのコメントが興味深い。「学生さんの問いをもとに話し合いますが、学生を質問攻めにしないでください。そして答え攻めにもしないでください」。

20ぐらいの問いが出た、例として以下のようなものがあった。「情報源が同じでも見ているところが違うから対立が生まれる？」「賛成派は理屈、反対派はメンタル、それではいつまでも変わらないのか？」「怒りがあると対話ができない。どうしたら冷静になれる？」「意見は多様であっていいと思えるには？」「そもそも私は何が疑問なんだろう」。

ある生徒は「人は本当に不利益に対して冷静になれるのか？」を選び、こんなことを考え、話し合った。「不利益をこうむるのは少数派、少数派に多数派が「冷静になれ」というのも二重の暴力性がある。多数決と民主主義は違うような気がする。多数決は少数派を黙らせてしまう。民主主義は敗れた少数派にも納得感をもってもらお



うとする。お任せ民主主義が失われた30年を生んだ。当事者だから冷静になれない？ なるべきではない？」。

「対話と議論も違う。議論は結論を出す必要がある。専門家の説明は「科学の棍棒で殴られていると感じる」可能性も。対話は結論が出ない覚悟をしなければならない。他者理解が前提で、もやもやを引き受け、考え続ける必要がある。疑問と問いも違う。疑問は「あなたに答えて」。問いは「一緒に考えてもらいたいこと」。

②第12回ふくしま学（楽）会

7月30日、「私たちの創造的復興とは何か?：福島復興と日本社会」とテーマに本校を会場に行われた。2年次の佐藤優香が「復興をめぐる対話の難しさ」を、麿琉花が「廃炉をめぐる対話」をテーマに



発表するとともにパネルディスカッションに参加した。その他、双葉町の浅野撚糸、楡葉町のしろはとファームの講話を聴いた。明治大学の島田剛さんは言う「原発は第二次産業を作ることは難しかった。浅野さんとしろはとさんの取り組みは、震災以前からできなかったことへの挑戦」。また浪江町出身で福島東高校に勤務する高橋充滿先生は言う「福島県浜通り地方は「復興予算の草刈り場」ではないはず。一方で、この地域の人口が発災時より増えることはないのは明らか。人口減と経済成長を両立させるためには「生産性」を高めるしかない。しかし、この「構造」の究極が、人災である原発事故をもたらしたのではなかったか。これでは、「新しいムラ」ができるだけでしょう」。

後半はグループ討論を行った。このような話題が出た。「復興という言葉は未来志向すぎる。原子力災害は何だったのか？ 過去を見ないと。言葉によって無理やり未来志向にしていこうという感じ。原子力災害は総括がない。水俣、沖縄、広島のような教訓がない。福島の問題は核という意味では広島の的でもあるし、環境問題という意味で水俣的でもあるし、迷惑施設という意味では沖縄

的でもある。近代の諸課題の総決算のようなもの。

③第7回 1F地域塾

生徒事前学習では原発事故や処理水について以下のように問いを出し合った。「どうして原発の安全神話を信じてしまったのか？ 疑問を持たないのが楽だった？」「政府は「関係者の理解なしに放出しない」と言っていたが関係者って誰？ 漁業者だけ？ 理解とは？ 賛意を示すこと？ 承認すること？」「アメリカの事故炉スリーマイルは蒸発処理。環境に放出するという意味ではどれも同じだが、どれがマシか住民が決めた。福島は話し合いがなく「住民で考えた」とは言えない。処理水、決め方に問題があったから決めてからもめる。この先デブリの問題などもある。海洋放出をこれからのレッスンにしなければ」「IAEAの「正しい情報」を知らないで騒いでいる人もいる。「本当のことを知ったうえで」考えてほしい。でもそれは新たな安全神話を作ってしまうのでは？」「正しさの棍棒」を振りかざしているのでは？」「マスメディアが協力的になるべき？」「処理水」の安全神話づくりにメディアも加担するべき？ →マスメディアが権力に追従し太平洋戦争でこの国は滅んだ。それは危険。

本会は9月9日に行った。午前中には福島第一原子力発電所を見学し（高校生以上）、午後は学校で「1F廃炉の現状と1F廃炉の先を考える」をテーマに本校の高校生4名といわき市の漁師さんとの座談会を行った。1F視察には50名が参加し、本校で開催した第7回1F地域塾には69名が参加した。

午後の部ではまず塾頭の松岡先生より「間違っている・正しいを決めるのが対話の目的ではない」「廃炉には冠水工法、気中工法・充填固化工法などがある」など確認し、その後生徒4人と漁師の新妻さんが参加者の前で感想と



問い出しをした。「廃棄物をどうするの？」「情報の発信、どうするの？」「決め方・話し合い方について」「教育、場づくり、次世代の関心、面白そう、考えてみたいと思わせる仕掛けは？」。その後のグループ討論では上記の問いについて話し合いをした。

④第8回 1F地域塾

12月9日、午前中はバスで中間貯蔵施設を見学し、午後は富岡町の「学びの森」で座談会を行った。

大熊町の中間貯蔵工事情報センターから中間貯蔵・環境安全事業(株)(JESCO)の方が同乗して大熊町側の施設を巡る。900世帯があった「元集落」にかつて福島のあちこちに点在していた黒いフレコンバッグが集約、処理されている。高齢者施設があった高台で下車すると、北側に第一原発がみえ、想像以上に距離が近く驚いた。

その手前には貯蔵施設がピラミッドの土台のように造営されている。その土地は、相馬中村藩主とともにやってきた農家による700年の歴史を持つ田畑だったそう。先祖伝来の土地を簡単に譲れない、となかなか賛同いただけなかったそうだが、ある方が、避難先でみるフレコンバッグを見て「私が土地を譲らないことで復興を妨げているのでは」と葛藤し、譲ることをきめたという。

「学びの森」に移動し、振り返りを行う。塾頭の話のあとに、高校生・双葉町の地権者さん・環境省職員・JESCO職員による座談会があった。ここで出た話をまとめて、3つの問いを作った。

「もし自分が2015年・2045年の地権者だったら？そしてその時どうなっていたら「復興」といえる？」「最終処分は県外というけどどうやって他県の人に理解してもらえる？そもそもせっかく集めた土壌を再び全国に運ぶのはどうなの？」

「もっと自分ごとに思えるには？現地を知ってもらうには？」。

グループに分かれ、それらのことを話し合った。



⑤ 第9回1F地域塾

1月28日に予定している。

5.4 コラボ・スクール（双葉みらいラボ及び未来創造探究カリキュラム開発支援）

認定 NPO 法人カタリバとふたば未来学園では 2017 年より協働し、放課後の居場所・学びの場「コラボ・スクール双葉みらいラボ」の運営と、未来創造探究のカリキュラム開発に取り組んでいる。

双葉みらいラボは校内中央に位置する地域協働スペースを活用し、生徒たちが放課後に集うコミュニティスペースとなっており、学校と地域の「潮目」の場所として大学生や社会人、地域の大人たちとの「ナナメの関係」に溢れた生徒にとっての居場所・学びの場となっている。

カリキュラム開発支援では各学年に学校支援コーディネーターを配置し、先生と協働しながら「変革者たれ」の実現に資する未来創造探究のカリキュラム開発等に取り組んでいる。

(1) 双葉みらいラボ

○概要

コラボ・スクール双葉みらいラボは、ふたば未来学園内の地域協働スペース内に設置。施設内は大きく 2 つのエリアに分かれている。生徒が自学自習に取り組む協働学習ルーム、生徒が交流の場や居場所として用いる地域協働スペースである。

また施設内には「カフェふう」が併設されており、地域交流の起点として、卒業生や地域の大人などが年間延べ 500 名以上が来館し、多様な人材が生徒に関わる場所となっている。

生徒は毎日 50 名程度の生徒が来館しており、大きく 3 つの過ごし方を自身で選び、放課後の余暇を過ごしている。

○「いる」場として

カタリバのスタッフがユースワーカーとして常駐することで、コミュニケーションを通して意欲喚起の土台となる「安心安全なセーフプレイス」をつかっており、生徒の日常や進路に至るまで、思春期世代特有の複雑な悩みを相談できる場となっている。

○「やる」場として

探究学習（マイプロジェクト）におけるアクションの個別相談やキャリア相談、自習支援、スタッフ主催の学習イベントも行っており、生徒の主体的な学びをサポートする場としても機能している。

○「つながる」場として

探究学習やキャリア支援を通じて、生徒と地域・外部人材の出会いの創出コーディネートにも積極的に取り組んでいる。また学校と地域の関わりの裾野を広げるために、年に数回、映画上映会兼交流会を地域に開いて開催するなど、地域における社会教育、生涯学習の機能も果たしている。

○「第 3 の居場所」や「地域協働」の社会的意義

こども家庭庁「こどもの居場所づくりに関する指針（※1）」によれば、居場所の求められる背景として「地域のつながりの希薄化、少子化の進展により、こども・若者同士が遊び、育ち、学び合う機会が減少しており、『こども・若者が地域コミュニティの中で育つ』ことが困難になっている。特に過疎化が進展する地方部では、こうした傾向が一層懸念される」が挙げられる。また内閣府「子供・若者インデックスボード 4.0」（※2）では「居場所の数と

自己認識（自己肯定感、チャレンジ精神、他）の前向きさは概ね相関」とするという報告もある。

また日本財団「18 歳意識調査」（※3）によれば、自身と社会の関わりの項目について日本の若者は他 5 カ国と比べて最下位である。特に「自分は大人だと思う」「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」がそれぞれ 3 割に満たず、他の国に差をつけて低い。

これらの背景を踏まえると、双葉みらいラボは、多感な時期を過ごす中高生の発達の土台となる「わたしらしくいられる場」「安心安全にチャレンジができる場」を担保しつつ、「地域や社会との関係性づくり」を通じて社会性や市民性を育むことを後押しする場といえるだろう。

来る人口減少社会において、行政サービスに頼るだけでは地域は立ち行かず、自律や自治の意識を獲得し、「自分らしい社会参加」の仕方を模索できる機会は、双葉郡における「最高学府」だからこそ重要だと認識している。

双葉郡出身のある卒業生が「原発事故の影響で今は廃墟になってしまったかつば寿司は、わたしにとっては家族との思い出の場所だった。誰かの誕生日などお祝いごとをして楽しかった思い出しかない」と語っていた。率直に言えば、地域復興は未だ道半ばだ。「避難」という形で突然関係性が断絶された地域だからこそ、そして地縁が希薄になる現代社会だからこそ、「わたし」と「地域社会」の関係性を編みなおす営みとして、持続的に場づくりに取り組んでいきたいと思う。

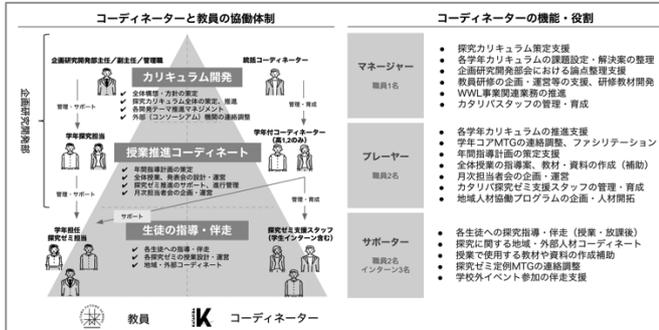


～双葉みらいラボの様子～

(2) 「未来創造探究」カリキュラム開発支援

○概要

カリキュラム開発では主に高1、2年次に担当コーディネーターと伴走スタッフを配置し、先生と協働して授業設計、教材作成、生徒伴走、地域コーディネートなどに取り組んでいる。



以下、今年度の主な取り組みと成果を記載する。

○高1「オリエンテーション」授業の改善

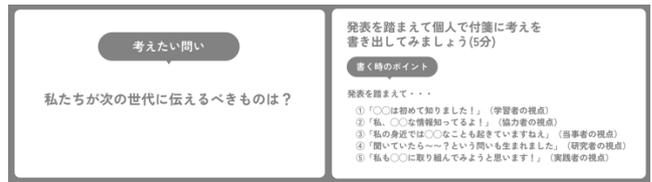
未来創造探究に取り組む意義を各生徒が語り、それが活動への動機づけになることを目指して、ジグソー法を活用した授業設計に変更をした。生徒と「ふたば未来学園で探究を大切にする理由」「探究的な学び方とは?」「卒業生が語る探究を進め方のコツ」の3つの視点を得た上で、「これから探究を進める際に大切にしたいこと」を言語化した。

○高1「教員協働の仕組み化」トライアル実践

近年、未来創造探究の指導体制として教員間の経験差による、背景や指導ノウハウの共有が課題になっていた。そこで今年度は高1で初めて探究の指導に入る教員に2ヶ月間程度「メンター教員」をつけ、週1程度メンターとメンティーでコミュニケーションを取り合うことに取り組んだ。体験したメンティーからは「探究学習の授業の最終ゴールが何なのか、どこにファシリテーションしていくべきなのか想像できるようになった」「生徒の状況をどう見たらいいのか、何を見たらいいのかやどういことを言ったらいいのか、働きかけたらいいのか、ということがわかった」などの感想が挙がった。

○高3研究成果発表会「対話交流部門」

昨年度から部門制が定着してきた発表会だが、今年度は「対話交流部門」の内容を大幅に見直した。分科会ごとに探究テーマを踏まえて「対話の問い」を設定し、発表生徒(高3)とそれ以外の生徒、参加している地域住民等が問題意識を共有したり、地域の状況を更に深掘りしたりする場となった。



○未来研究会でのワークショップ実施

11月7日の未来研究会では「ふたば未来学園のいまとみらい」というテーマでワールド・カフェを行った。来年度開校10年目を迎えるにあたって、開校からこれまでの写真(約200枚)を見て振り返り、次の目指すべき方向性を教員、カタリバスタッフで対話した。開校当初や旧校舎時代の写真を見て新着任教員が開校当初の雰囲気を変えて確認する場面も見受けられた。



(3) 「探究研修センター」機能

○概要

探究学習をはじめとした取り組みのノウハウについて、県内外への波及を目的として単なる視察の受入に留まらず、「研修センター」機能の強化に取り組んでいる。今年度は文科省主催「新時代に対応した高等学校改革推進事業」対面研修や、WWLコンソーシアム構築支援事業における事業連携校教員研修を実施し、総計54校100名の教員・教育関係者に対して研修を行った。



～12/5 WWL 事業連携校教員研修の様子～

第6章 実施の効果とその評価

6.1 ルーブリック評価

本校では生徒の資質・能力をはかる指標のひとつとして独自のルーブリックを作成し、定期的に評価を行っている。ルーブリックは本校で育成したい生徒像でもあり、これを用いた面談も行いながら、総括的評価としてだけでなく、形成的評価として活用し、生徒の目標設定等に活かしている。ここではルーブリックの推移を分析し、本校生の特徴や学年ごとの特徴等について考察する。

(1) はじめに

平成27年度に開校した本校では、「未来創造型教育」を目指すグランドデザインの下、開校直後4月、教員全員による教員研修会(本校では「未来研究会」と称する)を実施した。県下全域から赴任した教員集団はそれぞれの想いを抱きスタートを切った。そこで、新しい学校・教育としての「育成したい生徒像」としての共通イメージを持ち、互いに意思疎通を深めていくために、ワークショップ形式での意見交換会を行った。

開校当時、入学してきた子供たちの8割は原発事故で避難を強いられた地域の出身であった。子供たちの状況は多様だが、数カ所の避難先を転々とし、学力に課題を抱えている子供も多かった。また、避難する中で不登校となってしまった生徒も存在した。一方で、地元への愛着や、世界からの支援に対する感謝の気持ちから、社会に貢献したいという意欲の強さも感じられた。「この子供たちが卒業する3年後に、どのような姿になっていて欲しいか」教職員全員が付箋に書き込み、出し合いながら議論を重ねた。

研修後、「育成したい生徒像」に必要な「育成したい能力」を分析し、共通項をまとめると同時に、本校の校訓である「自立」「創造」「協働」を意識し、福島県双葉郡教育復興ビジョン、OECD キーコンピテンシー等の内容を踏まえ、本校のルーブリックを作成した(巻末関係資料参照)。

ルーブリックの言葉の一つ一つに、教職員の感覚や想いが反映されている。例えば、「寛容さ～異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとする事ができる」という項目である。この地域は今、放射線の安全性に関する考えが違う者同士の衝突や、避難した人と帰還した人との間での気持ちのすれ違いなどに直面している。考えの違う人を排除しても地域復興はままならない。仕事をする上でも生活をする上でも、考えの違う他者との関わり合い無くして成り立たない。考えの違う人を説得していく交渉力と言

うより、異なる考えも受け入れ、ユーモアを持って接し、包み込んでいく「あたたかさ」が必要であると私たち教職員は考えた。この力が土台となって、別の項目に定義された「他者との協働力」が発揮される。

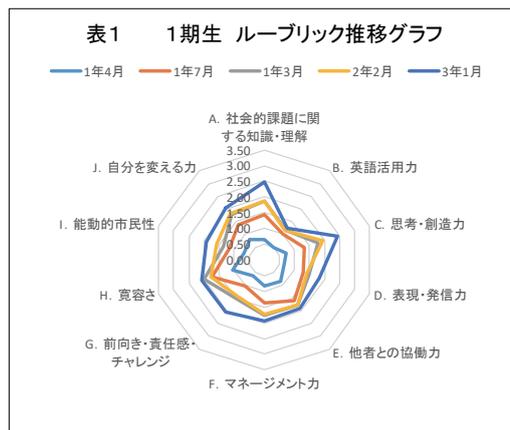
また、「表現・発信力～どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる」という項目も同じように教職員の想いが詰まっている。震災や原発事故のバックグラウンドを否応なく背負ってしまった子供たちは、世界中のどこに行っても意見を求められる。その時、言葉を発せず沈黙すれば、風化や風評に繋がっていく。例え突然指名されたときでも、自分の言葉で語れることが大切だ。話し相手のバックグラウンドも考えながら、定量的なデータの説明や定性的な復興のストーリーを組み合わせ、情緒にも働きかけながら相手の心を動かす力が求められる。

開校して真っ先に行ったのが、このルーブリックの設定である。目指す資質・能力を明確化して、その目標に向けて学校をあげて取り組むために、よそから借りてきた表面的な言葉では無く、自分たちの視点・言葉で定義することを重視した、学校全体の欠かせない出発点である。指導の重点の設定も、授業の展開も、学習の評価も、学校評価も、このルーブリックと関連づけながら展開していくことを目指している。

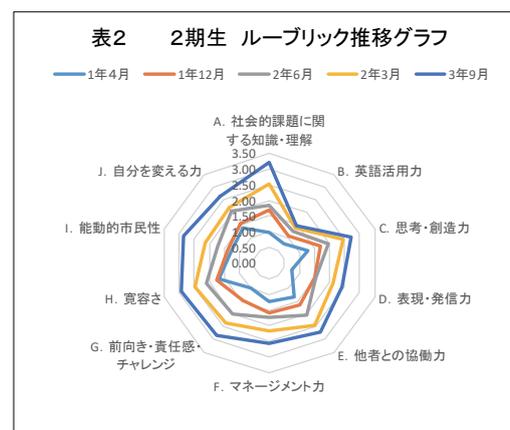
開校から9年が経過し、ルーブリック評価は学校に定着している。当初は年度終了時に生徒がどの程度資質能力を伸ばしてきたか検証する、いわゆる「総括的評価」として使ってきた。しかし、ルーブリック評価は本来生徒個人が活用すべきものであるという考え方から、生徒ひとりひとりにフィードバックし、その先の目標設定等に活かすような「形成的評価」として使うため、ルーブリック面談を導入した。面談は手間がかかるものの、メタ認知の向上にも役立っていると思われ、生徒、教員共に好意的に捉えている。また、2年間かけてルーブリックの改訂を行い、令和3年度からCの思考・創造力をC-1思考力、C-2創造力と分けて運用している。

(2) 1期生(平成27年度入学生)から9期生(令和5年度入学生)のルーブリック評価(表1~9, 図1~9)

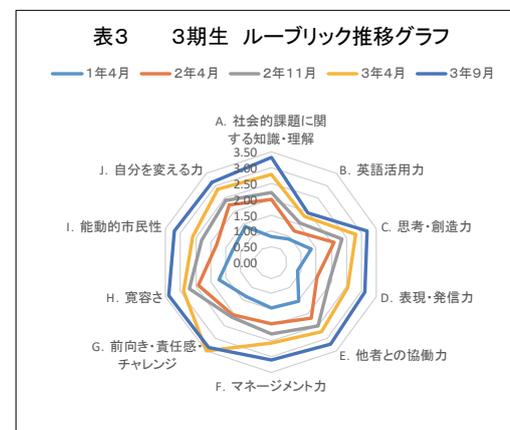
	1年4月	1年7月	1年3月	2年2月	3年1月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.65	1.43	1.87	1.88	2.48	
B. 英語活用力	0.50	1.00	1.17	1.14	1.26	
C. 思考・創造力	0.74	1.32	1.78	1.94	2.43	
D. 表現・発信力	0.64	1.28	1.47	1.42	1.83	
E. 他者との協働力	0.85	1.59	1.77	1.80	1.90	
F. マネージメント力	0.84	1.37	1.75	1.71	1.96	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	0.62	1.03	1.50	1.43	2.04	
H. 寛容さ	1.06	1.73	1.98	1.77	2.07	
I. 能動的市民性	0.66	1.17	1.36	1.57	1.91	
J. 自分を変える力	0.78	1.38	1.78	1.81	2.04	
平均	0.73	1.33	1.64	1.65	1.99	



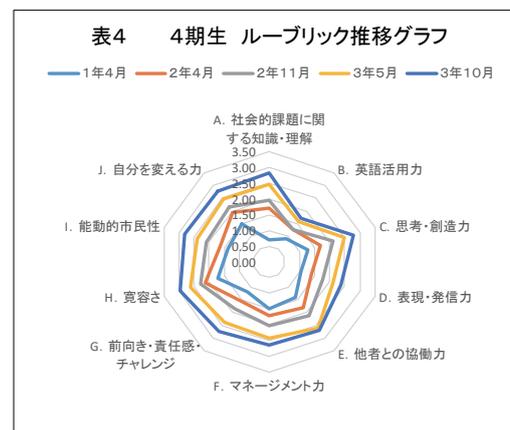
	1年4月	1年12月	2年6月	2年3月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.98	1.70	1.85	2.52	3.20	
B. 英語活用力	0.78	1.05	1.25	1.39	1.46	
C. 思考・創造力	1.28	1.70	1.98	2.47	2.71	
D. 表現・発信力	0.75	1.51	1.54	2.10	2.40	
E. 他者との協働力	1.35	1.66	2.04	2.45	2.73	
F. マネージメント力	1.23	1.60	1.73	2.17	2.55	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.00	1.45	2.00	2.35	2.86	
H. 寛容さ	1.66	1.77	2.11	2.47	2.95	
I. 能動的市民性	1.27	1.39	1.73	2.13	2.84	
J. 自分を変える力	1.40	1.56	2.04	2.19	2.63	
平均	1.17	1.54	1.83	2.22	2.63	



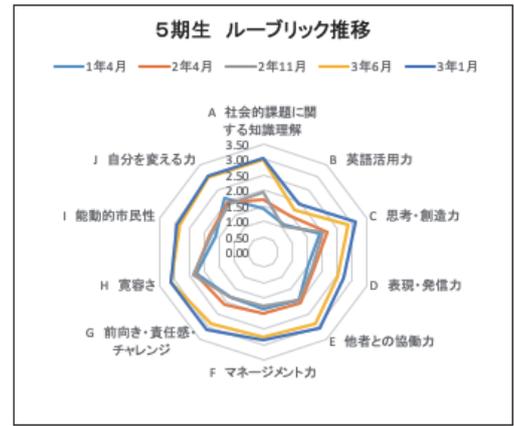
	1年4月	2年4月	2年11月	3年4月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.83	1.99	2.21	2.80	3.33	
B. 英語活用力	0.93	1.23	1.54	1.79	1.95	
C. 思考・創造力	1.34	2.07	2.37	2.81	3.18	
D. 表現・発信力	0.89	1.51	1.92	2.55	3.09	
E. 他者との協働力	1.51	2.18	2.52	2.71	3.21	
F. マネージメント力	1.45	1.96	2.27	2.58	3.10	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	2.06	2.15	3.47	3.35	
H. 寛容さ	1.73	2.39	2.70	2.92	3.39	
I. 能動的市民性	1.26	1.80	2.29	2.61	3.21	
J. 自分を変える力	1.39	2.25	2.43	2.86	3.15	
平均	1.27	1.94	2.24	2.71	3.10	



	1年4月	2年4月	2年11月	3年5月	3年10月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.69	1.71	1.96	2.48	2.83	
B. 英語活用力	0.89	1.29	1.28	1.59	1.70	
C. 思考・創造力	1.27	1.68	2.11	2.49	2.77	
D. 表現・発信力	1.04	1.40	1.75	2.10	2.36	
E. 他者との協働力	1.42	1.80	2.11	2.59	2.68	
F. マネージメント力	1.49	1.71	2.04	2.43	2.64	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.19	1.54	1.84	2.40	2.72	
H. 寛容さ	1.69	2.12	2.26	2.63	2.95	
I. 能動的市民性	1.38	1.63	2.09	2.39	2.81	
J. 自分を変える力	1.51	1.95	2.17	2.48	2.78	
平均	1.26	1.68	1.96	2.36	2.62	



5期生	1年4月	2年4月	2年11月	3年6月	3年1月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.43	1.70	1.94	2.98	3.04	
B 英語活用力	1.11	1.44	1.06	1.71	1.95	
C 思考・創造力	1.91	2.18	2.04	2.87	3.13	
D 表現・発信力	1.52	1.72	1.64	2.51	2.69	
E 他者との協働力	1.93	2.02	1.94	2.88	3.07	
F マネージメント力	1.83	1.97	1.77	2.77	2.87	
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.80	2.09	1.82	2.88	3.14	
H 寛容さ	2.25	2.31	2.38	3.15	3.15	
I 能動的市民性	1.62	1.81	1.78	2.81	2.92	
J 自分を变える力	2.16	1.98	1.91	3.01	3.04	
平均	1.76	1.92	1.83	2.76	2.90	



6期生	1年4月	1年11月	2年6月	2年10月	3年5月	3年9月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.69	1.89	2.24	2.54	2.80	3.17	
B 英語活用力	1.23	1.27	1.49	1.75	1.91	1.95	
C 思考・創造力	2.05	2.07	2.45	2.67	2.85	3.18	
D 表現・発信力	1.78	1.72	1.92	2.29	2.63	2.94	
E 他者との協働力	2.15	2.20	2.23	2.51	2.79	3.14	
F マネージメント力	1.96	1.98	2.15	2.49	2.77	3.01	
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.20	1.99	2.39	2.45	2.87	3.31	
H 寛容さ	2.58	2.44	2.58	2.84	3.08	3.22	
I 能動的市民性	2.07	1.89	2.02	2.48	2.80	3.08	
J 自分を变える力	2.16	2.16	2.42	2.67	2.85	3.26	
平均	1.99	1.96	2.19	2.47	2.73	3.03	

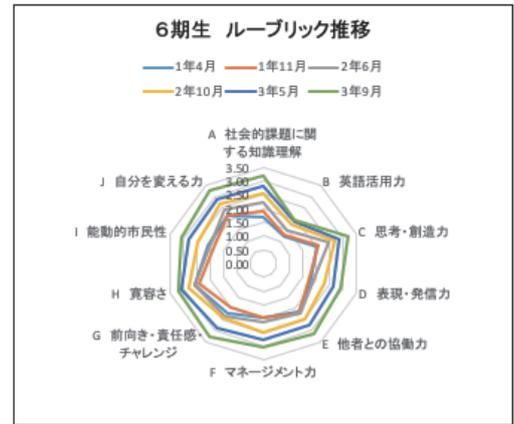


表7 7期生 ルーブリック推移表	1年4月	1年11月	2年6月	2年11月	3年4月	3年10月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.16	1.17	1.43	1.60	2.23	2.71	
B 英語活用力	1.00	1.01	1.02	1.15	1.41	1.75	
C-1 思考力	1.55	1.09	1.35	1.79	2.16	2.64	
C-2 創造力	1.62	1.01	1.38	1.72	2.16	2.70	
D 表現・発信力	1.21	1.22	1.22	1.51	2.06	2.51	
E 他者との協働力	1.50	1.47	1.61	1.68	2.24	2.65	
F マネージメント力	1.37	1.26	1.37	1.74	2.14	2.67	
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	1.14	1.11	1.62	2.00	2.54	
H 寛容さ	1.77	1.44	1.77	1.92	2.34	2.80	
I 能動的市民性	1.30	1.14	1.28	1.55	2.02	2.54	
J 自分を变える力	1.52	1.37	1.56	1.79	2.33	2.69	
平均	1.39	1.21	1.37	1.64	2.10	2.56	

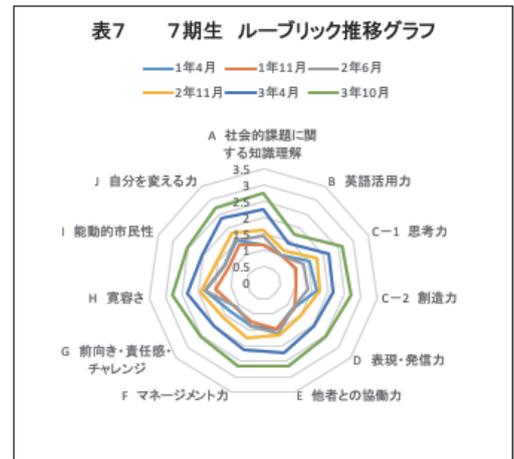


表8 8期生 ルーブリック推移表	1年5月	1年11月	2年6月	2年10月		推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	2.03	2.42	2.34	2.75		
B 英語活用力	1.50	1.71	1.55	1.92		
C-1 思考力	2.40	2.63	2.62	2.88		
C-2 創造力	2.26	2.47	2.35	2.69		
D 表現・発信力	2.04	2.10	2.24	2.51		
E 他者との協働力	2.32	2.44	2.24	2.60		
F マネージメント力	2.02	2.24	2.36	2.49		
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.08	2.36	2.28	2.40		
H 寛容さ	2.38	2.83	2.48	2.82		
I 能動的市民性	2.08	2.19	2.19	2.34		
J 自分を变える力	2.34	2.64	2.45	2.69		
平均	2.13	2.37	2.28	2.55		

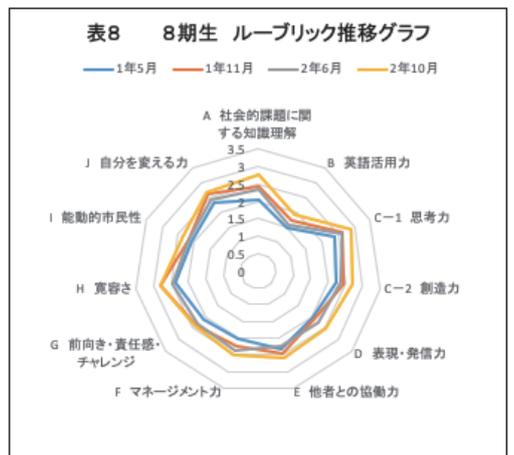
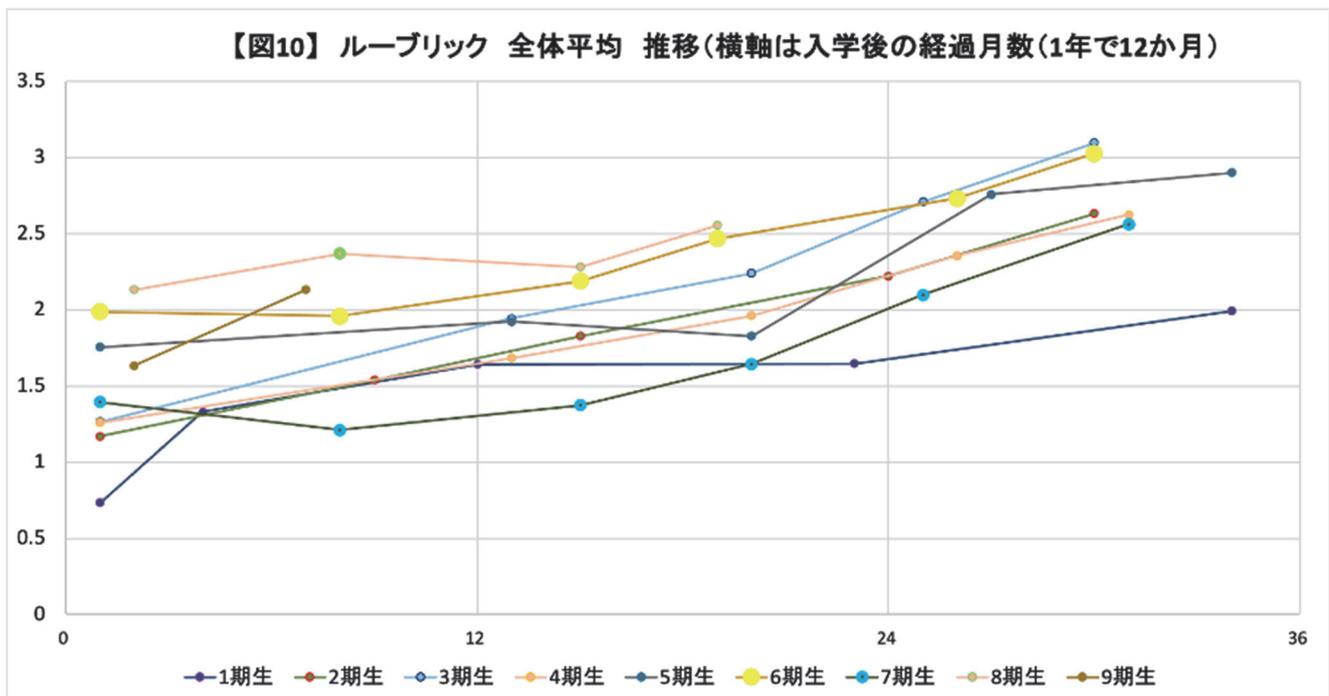
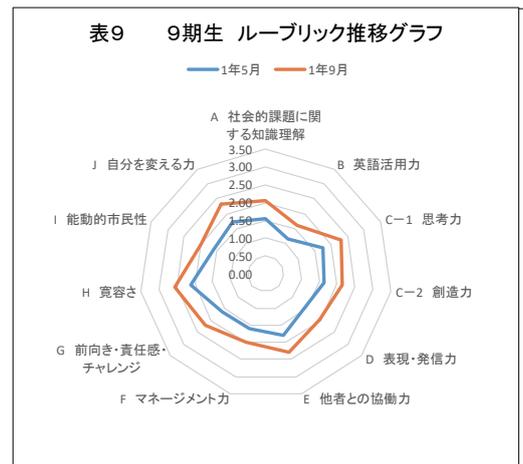


表9 9期生 ルーブリック推移表	1年5月	1年9月					推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.56	2.05					//
B 英語活用力	1.16	1.63					//
C-1 思考力	1.74	2.31					//
C-2 創造力	1.63	2.14					//
D 表現・発信力	1.44	1.96					//
E 他者との協働力	1.79	2.28					//
F マネージメント力	1.59	1.99					//
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.61	2.22					//
H 寛容さ	2.12	2.56					//
I 能動的市民性	1.61	1.99					//
J 自分を変える力	1.73	2.31					//
平均	1.63	2.13					//



(3) 1期生から9期生の平均値の推移

1～9期生のルーブリックの推移について、値の全体平均値の推移グラフを(2)図1～9に示す。1～4期生までは1年次から3年次まで順調に値が高まっているのに対し、5～6期生は、1年次最初から値が高く、その状態をほぼ維持したまま推移している。6・7期生については、入学最初のルーブリックの数値よりも年度の途中でいったん数値が下がる傾向がみられる。これについては、1年次の演劇の学習を通じて、自分をメタな視点で見つめなおしたときに、「自分のできなさ」を厳しく現状分析できるようになったことに起因すると考えられる。8・9期生は中学校からの一貫生が入ってきた学年である。8期生はルーブリックの初期値が例年になく高い。中学校から3年間ルーブリックを取り続けているため、継続して力をつけていると見ることができ、6・

7期生同様に探究学習を行って後で一旦数値が下がる現象が見られた。高校入学後に様々な教育活動でメタ認知能力(自分自身を客観的に捉える能力)が高まると、ルーブリックに示されたレベルをより冷静に捉えられるようになると思われる。

これまでのところ、どの学年においても、最終学年に2年次後半から3年次にかけて探究学習が本格的に進んでいく時期に大きく上昇する傾向がある。最終目標に掲げるルーブリックの平均3.5はかなり野心的な数値ではあるものの、まだ達成できた学年はない。今年度より採択されたWWL事業で、更なる教育学習の深化にチャレンジしている最中であるので、引き続きルーブリックの検証をしながら活動に取り組んでいきたい。

(4) 9期生(令和5年度1年生)の評価

9期生は6月と11月の2回ループリックを取得した。1回目の取得は例年の学年より遅くなってしまったが、初期値の平均は1～4期生と同程度の数値となり、例年並のスタートとなった。2回目の11月は地域創造と人間生活の演劇プログラムが一段落し、未来創造探究での個人の探究テーマを設定する時期での取得となった。特に前回からA、G、Hの数値が伸びている。通常の高校での授業に加え、演劇プログラムでの双葉郡の課題に対する地域理解の知識やグループで演劇制作に取り組む際の「寛容さ」「前向き・責任感・チャレンジ」の数値が伸びているのは、狙い通りといえる。

ただ、9期生は中学校からの2期一貫生が多いため、8期生同様にこれまでの1～7期生の数値よりも高めに突出している。ループリックの平均値からは見えてこないが、一貫生と高入生を分けて分析すると、1年9月のデータでは高入生のループリックの平均値が1.99に対して、一貫生のループリックの平均値が2.36(学年平均値2.13)となっており、入学種別だけではなく系列別の統計など、分析は詳細にできると考える。なお、ループリックの評価と検証については、3月にWWLの検証委員会にて検証方法も含めて研究を進めていきたい。

(5) 8期生(令和5年度2年生)の評価

8期生のループリックは、全体的に最初から数値が高いことが特徴である。これは、中高一貫1期生(一貫生)が高校進学した学年であることが大きな影響を与えている。一貫生は、中学の3年間、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークショップや哲学対話を行っていたため、「表現・発信力」や「創造力」、「他者との協働」、「思考力」の基礎的な力が備わっている。そんな生徒たちが8期生の4割を占めており、地域創造と人間生活や探究の授業において、自分と違う他者の意見を否定せず、共に対話しながら物事の本質を捉えたり、自己を開放し他者と協働する雰囲気を作ったりすることができたことが、結果として全体の数値に現れたと言える。

その一方で、今年度の数値については2年6月の平均値は前回のループリックより低下(2.37→2.28)し、2年10月の数値は2.55と伸び悩んだ。2年生の生徒の探究の内容を考えれば、もう少し数値が期待できるところである。1年次の自己評価が高すぎたために、探究を通じてメタ認知力がつき、自分の資質・能力をより冷静に見たという考えもできる。

(6) 7期生(令和5年度3年生)の評価

7期生のループリック評価平均値の推移は、他年次とは大きく異なる傾向で推移している。入学後すぐ(1年次6月)の評価から、2回目(1年次11月)にかけて、今までほとんどの年次が上昇傾向にあったにもかかわらず、平均値が下がってしまっていた。これは生徒一人ひとりの自己評価が低いことに起因していると考えられる。未来創造探究の授業においてゼミ配属が決定した時点(2年次6月)までは、例年と比較しても低い数値が出ていたが、探究活動を進めプレ発表を実施した後(2年次11月)は、A～Jまですべての項目が今までで最も高い数値となり、大きい上昇傾向を見せた。これは探究活動と発表会でのフィードバックがある種のスモールステップとなり、多くの生徒が達成感を得ることができたことが最も大きな要因であると考えられる。

3年次では3年4月の中間発表会終了後と3年9月の最終発表会終了後の2回ループリックの測定を行った。

1年次～3年次を通じ最も伸ばした資質・能力は、A 社会的課題に関する知識理解(+1.55, 昨年比+0.07)、F マネージメント力(+1.30, 昨年比+0.19)、D 表現・発信力(+1.299, 昨年度比+0.13)、C 思考・創造力(+1.13)の順番である。全般的に7期生はカリキュラム実施前(1年4月)の数値平均が1.39の低位からスタートした。学年構成上の特徴として、5・6期生と比べると学年全体の人数が100名を切っており、人数が少ないという特徴がある。未来創造探究が2年4月より始まり、一番課題解決の探究アクションが進み最終発表会を迎える3年9月までの間が約1年半(18ヶ月)の時間があるが、1～7期生までで18ヶ月のループリックの伸長率を比較すると7期生が一番伸長率が高い(+1.29)。この数値は探究アクション(調査のためのアクション・課題解決のアクション)を通じて、自己の資質能力を伸ばしていった生徒が多いことを示している。また、7期生は高校入学時よりコロナ禍での学習活動の制限がかかっていた。1年次のドイツ研修は代替研修も含めて実施することができず、多くの活動の機会を奪われていた。2年次のNY研修では派遣人数を減らすことにはなったが、なんとか3年ぶりの研修を行うことができた。海外研修に参加したメンバーを中心に、事前・事後指導を通じて2年次後半から3年次にかけてB 英語活用力(+0.26)を大きく伸ばすことができた。

6. 2 ルーブリック評価の定量的分析（アクセンチュア株式会社）

本校において独自に設定したルーブリック評価に基づき、定期的に測定してきた。その結果を基に、アクセンチュア株式会社様と一般社団法人次世代教育・産官学民連携機構（CIE）様の視点から生徒の成長、変容を客観的に確認することに取り組んだ。その結果、全体的に成長している一方で、指標ごとの伸びの大きさに違いが確認できた。主に社会的課題に関する知識・理解、思考・創造力、前向き・責任感・チャレンジ、能動的市民性といった要素が成長しており、未来創造探究等の活動を通じた影響が現れていると考えられる。実際の活動内容と分析結果を比較することで、次年度以降のカリキュラム検討に活用することができる。

(1) はじめに

本校では、指導の重点の設定、授業の展開、学習評価、学校評価等をルーブリックと関連づけながら展開することを目指している。ルーブリックの指標、レベル設定は全教員で議論を重ね、自分達の言葉で定義した。4 カテゴリー（「知識」、「技能」、「人格」、「自らを振り返り変えていく力」）、10 指標を定義し、それぞれ5段階のレベル（1-5）を絶対評価になるよう設定した。

- 知識：A 社会的課題に関する知識・理解、B 英語活用力
- 技能（スキル・コンピテンシー）：C 思考・創造力（7期生からはC-1 思考力、C-2 創造力に分離）、D 表現・発信力、E 他者との協働力、F マネージメント力
- 人格（キャラクター・センス）：G 前向き・責任感・チャレンジ、H 寛容さ、I 能動的市民性
- 自らを振り返り変えていく力：J 自分を変える力

<データ取得タイミング>

令和3年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
7期生			○									
8期生				○								
9期生												

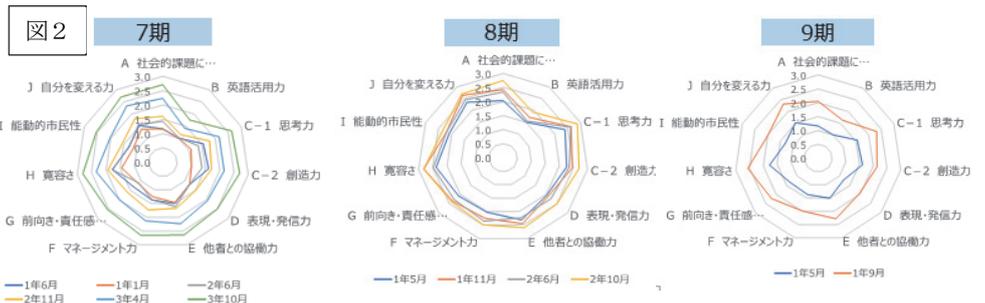
令和4年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
7期生				○								
8期生					○							
9期生												

令和5年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
7期生		○										
8期生				○								
9期生						○						

- 【7期生】
 ・ 令和3年 1年 6月、1月
 ・ 令和4年 2年 6月、11月
 ・ 令和5年 3年 4月、10月
- 【8期生】
 ・ 令和4年 1年 5月、11月
 ・ 令和5年 2年 6月、10月
- 【9期生】
 ・ 令和5年 1年 5月、9月
- ※ 測定においては、自己評価に加え、生徒間レビューの実施により評価の客観性をもたせている。

測定においては、自己評価に加え、教員によるルーブリック面談を実施することで評価の客観性をもたせている。

データ分析はプロボノとして関わってアクセンチュア株式会社に依頼し、次項以降のデータ分析、示唆出しを行った。（OECD 東北スクール、地方創生イノベーションスクール2030 東北クラスターにおいても福島大学と協働でルーブリック評価をしており、その知見も活用して実施していった。）

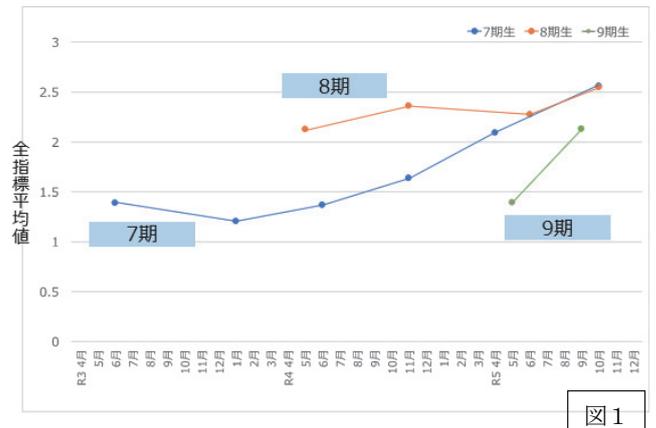


(2) データ分析の概要

今回の分析対象は、全ての測定時に回答している学生のみとした（7期生：計76名。入学時から卒業までの推移を見るとともに、7期生と8期生、9期生を比較しながら、指標ごとの傾向、生徒の系列ごとの傾向、海外研修有無別の傾向などの分析を進めていった。

1) 7期生・8期生・9期生の平均値の推移

7期生は2年後半までの到達度が低かったものの、進級に伴い大きく成長が確認できた。8期生は1年時から高い水準を維持している。9期生は、入学当時に比べて大きな成長が確認できた。



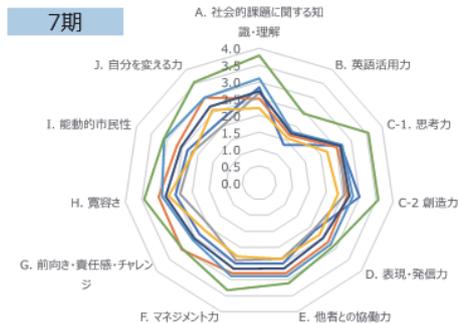
2) 全体ルーブリック評価の学年別平均比較

左より7期生、8期生、9期生の順にグラフが示されている。全ての学年で進級に伴い多くの項目が点数を伸ばしていった。一方で、B. 英語活用力については全ての学年でどの測定時点においても他の項目と比べて最も低い点数で推移している。この傾向は1~9期生のすべての年次で見られる傾向である。（図2）

(3) 生徒の系列ごとの比較

3-1 所属ゼミごとの比較 (7期生)

7期生最終の所属ゼミ別到達レベル (3年10月)



7期生の所属ゼミ別成長度合い (伸び) *

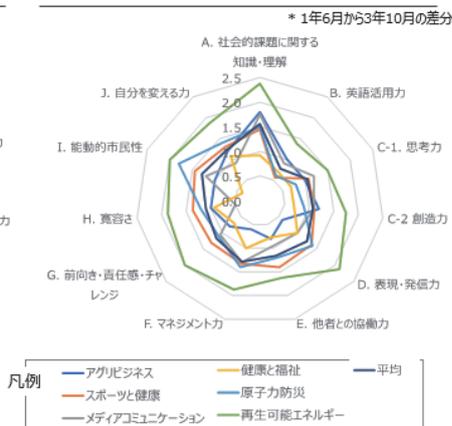
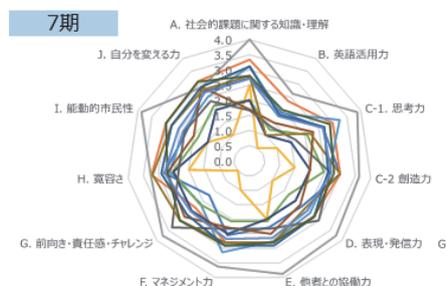


図 3

3-2 入学系列ごとの比較 (7期生)

7期生最終の系列別到達レベル (3年10月)



7期生の系列別成長度合い (伸び) *

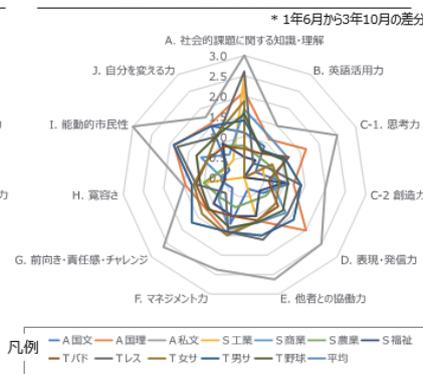


図 4

図 3 は所属ゼミごとに比較を示している。「再生可能エネルギー」が到達レベル、成長度合いともに高い水準にあった。

「原子力防災」の「I 能動的市民性」、「メディアコミュニケーション」「アグリビジネス」の「A 社会的課題に関する知識・理解」の伸びは他ゼミに比べて高かった。

図 4 は入学系列ごとの比較を示している。「A 私文」が到達レベル、成長度合いともに高い水準にあった。他に 2 点以上の伸びが確認されたのは、「A 国理」「T 女サ」の「A 社会的課題に関する知識理解」、「A 国理」の「D 表現・発信力」であった。

(4) 各指標における成長推移 (7, 8, 9 期生)

図 5

7期						8期				9期	
1年6月	1年1月	2年6月	2年11月	3年4月	3年10月	1年5月	1年11月	2年6月	2年10月	1年5月	1年9月
H 寛容さ	1.77	E 他者との協働性	1.47	H 寛容さ	1.77	H 寛容さ	1.92	H 寛容さ	2.34	H 寛容さ	2.80
C-2 創造力	1.62	H 寛容さ	1.44	E 他者との協働性	1.61	J 自分を変える力	1.79	J 自分を変える力	2.33	A 社会的課題に関する知識	2.71
C-1 思考力	1.55	J 自分を変える力	1.37	J 自分を変える力	1.56	C-1 思考力	1.79	E 他者との協働性	2.24	C-2 創造力	2.70
J 自分を変える力	1.52	F マネジメント力	1.26	A 社会的課題に関する知識	1.43	F マネジメント力	1.74	A 社会的課題に関する知識	2.23	J 自分を変える力	2.69
E 他者との協働性	1.50	D 表現・発信力	1.22	平均	1.39	C-2 創造力	1.72	C-2 創造力	2.16	F マネジメント力	2.67
平均	1.42	平均	1.21	C-2 創造力	1.38	平均	1.69	平均	2.16	E 他者との協働性	2.65
F マネジメント力	1.37	A 社会的課題に関する知識	1.17	F マネジメント力	1.37	E 他者との協働性	1.68	C-1 思考力	2.16	平均	2.64
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	I 能動的市民性	1.14	C-1 思考力	1.35	G 前向き・責任感・チャレンジ	1.62	F マネジメント力	2.14	C-1 思考力	2.64
I 能動的市民性	1.30	G 前向き・責任感・チャレンジ	1.14	I 能動的市民性	1.28	A 社会的課題に関する知識	1.60	D 表現・発信力	2.06	G 前向き・責任感・チャレンジ	2.54
D 表現・発信力	1.21	C-1 思考力	1.09	D 表現・発信力	1.22	I 能動的市民性	1.55	I 能動的市民性	2.02	I 能動的市民性	2.54
A 社会的課題に関する知識	1.16	B 英語活用力	1.01	G 前向き・責任感・チャレンジ	1.11	D 表現・発信力	1.51	G 前向き・責任感・チャレンジ	2.00	D 表現・発信力	2.51
B 英語活用力	1.00	C-2 創造力	1.01	B 英語活用力	1.02	B 英語活用力	1.19	B 英語活用力	1.41	B 英語活用力	1.75

図 5 は各指標における成長推移を示した。7 期生最終時点で上位 3 指標 (H 寛容さ、A 社会的課題に対する知識、C-2 創造力)、下位 3 指標 (I 能動的市民性、D 表現・発信力、B 英語活用力) の入学以降の推移について可視化した。「社会的課題に対する知識」、「創造力」は 1 年時には下位グループであったが、3 年までに大きく成長した。「能動的市民性」、「表現・発信力」、「英語活用力」は、ほぼ全期間を通じて平均以下であった (前向き・責任感チャレンジも同様であった)

(5) 今後の展望

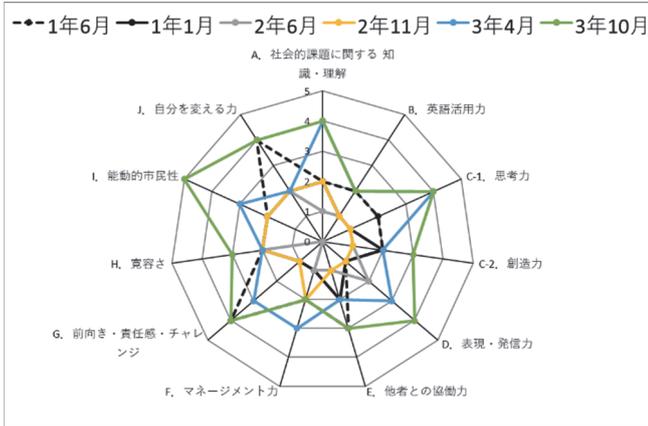
これまでのルーブリックを用いた指標を確認してきたが、WWL 事業でのグローバルでイノベーティブな人材要件として、I 能動的市民性、B 英語活用力、C-2 創造力を重点目標としてカリキュラム開発を進めたい。

6. 3 7期生の個別評価

7期生のうち、未来創造探究の各ゼミ 1～2人ずつ生徒をピックアップし、本人の活動の様子とルーブリック評価の推移について分析した。

○生徒 S.S (原子力防災探究ゼミ)

【平均値】 2.36 (1年6月) → 3.45 (3年10月)



アカデミック系列理系の女子生徒で、福島県中通りの出身である。1年次に国際放射線防護ワークショップに参加したことをきっかけに、原発処理水の海洋放出に関心を持つようになった。小中学校では震災や原発事故についてほとんど学ぶ機会がなく、本校の探究の授業や双葉郡フィールドワークで、初めて知ることが多かった。

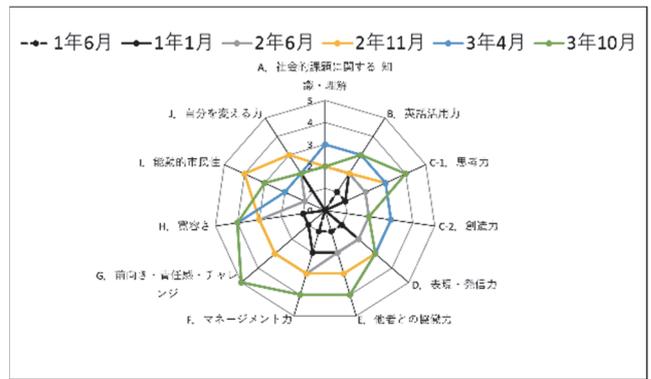
ワークショップを通して処理水は安全であると考えようになり、海洋放出に反対する人々が多いことに疑問を感じたことから、反対派の意見の背景を明らかにすることを目標に探究活動を始めた。反対する理由等を調査していくうちに、風評被害を懸念して反対する人々に着目するようになった。地元の漁業関係者へのインタビュー等を行い、当事者の不安の声を聞くことで、自身の考え方が変容していった。自分の考えを発信するために、「ふくしま学(楽)会」に参加し、校内で海洋放出について学ぶイベントを開催した。また探究での取組について新聞社からの取材を受けた。本人は、探究を通して、多面的な視点を持つことや、他者の考えに対する想像力を持つこと、伝えることの重要性を学んだと述べている。

ルーブリック評価を見ると、1年6月には2.36だった平均値が、1年1月、2年6月には1点台に低下しているが、2年11月からは上昇し続け、3年10月には3.45に到達している。項目ごとに1年6月と3年10月の数値を比較すると、特に「社会的課題に関する知識・理解」「思考力」(2→4)、「表現力・発信力」(1→4)、「能動的市民性」(2→5)の項目で大幅な数値の上昇が見られる。

探究活動を通して、特に原発の廃炉や海洋放出についての知識を得たこと、漁業関係者をはじめとした様々な方から直接話を聞いたこと、学会での発表や新聞社からの取材で自分の意見を発信する機会を得たこと等が、これらの数値の推移に反映されていると考える。

○生徒 K.S (メディアコミュニケーション探究ゼミ)

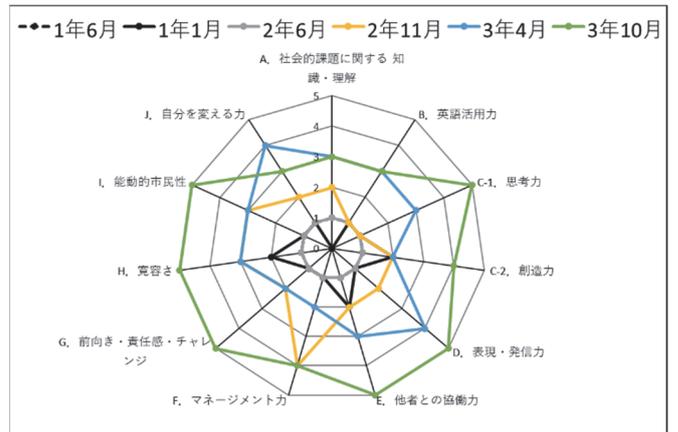
【平均値】 0.55 (1年6月) → 3.27 (3年10月)



本生徒は「なぜ日本人は他国よりも英語のコミュニケーション能力が低いのか?」という問いを基に、英語運用能力に関する調査と、実際にアプリを用いたり海外研修に参加したりして外国人とコミュニケーションをとる、日本人生徒を集めて簡単な英語でディベートに挑戦するイベントを開く等の活動を行った。本生徒も含め、探究活動の内容が進路選択に密接に結びついた生徒はルーブリックの評価値が比較的大きく伸びる傾向が見られる。

○生徒 A.K (メディアコミュニケーション探究ゼミ)

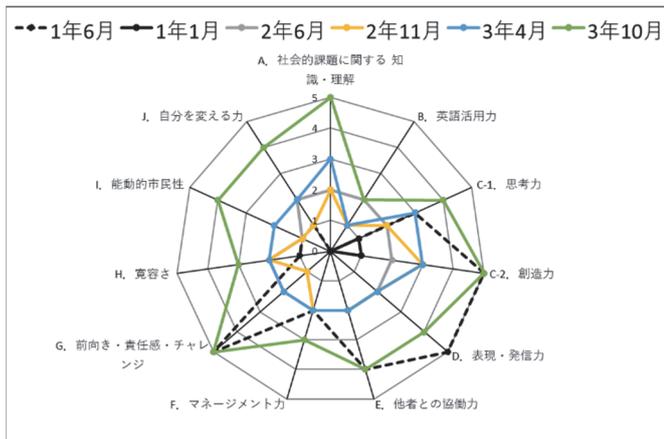
【平均値】 1.00 (1年6月) → 4.27 (3年10月)



本生徒は「世界と福島の架け橋プロジェクト」と題して、福島の諸課題について他県や海外の人々に伝える語り部活動を実施した。探究活動の内容が、部活動や短期留学、海外研修などの諸活動と相互に結び付き、本人の成長に劇的な変化をもたらした。特に海外研修参加後(3年4月)の伸びが大きい。

○生徒 M.S (アグリビジネス探究ゼミ)

【平均値】 2.45 (1年6月) →3.91 (3年10月)



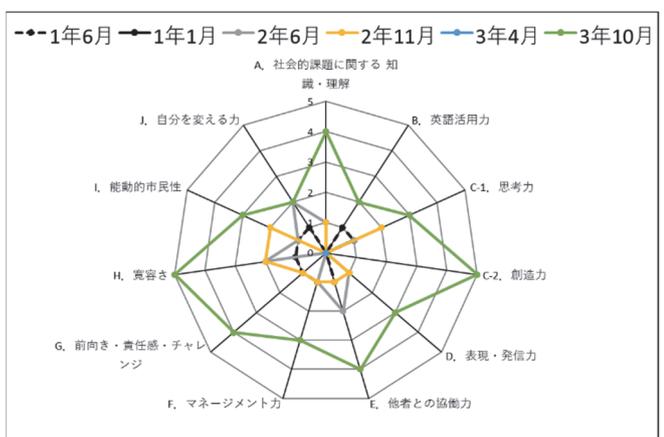
いわき市出身での生徒である。小学生の時にスポーツ少年団に所属し、檜葉町で活動をしていた思い出がある。震災後、小学生の頃と比較して現在の檜葉町のギャップに驚いた。震災前と比べて人口がまだ戻っていないことから檜葉町の魅力発信をテーマに探究活動に取り組んだ。

テーマが決まると、積極的に商品開発の試作を行い、外部の企業や関連団体と連携して商品化に向けて活動を行っていった。活動を通して多くの方々との関わりを持つことで、コミュニケーション能力も高まっていった。特に3年生になってからからは、実際に自分の開発した商品が、市内の大手スーパーで販売されることになり、自分の実際に販売活動に携わった。

ルーブリック評価も3年生になってからの伸びが大きくなっている。特に3年最後に行った調査では、社会的課題に関する知識・理解と前向き・責任感・チャレンジの自己評価が、最大の5であった。また、多くが4の評価を付けるなど、3年間で大きな成長が顕著にみられた。

○生徒 W.M (再生可能エネルギー探究ゼミ)

【平均値】 0.73 (1年6月) →3.45 (3年10月)



川内村から本校の寮に寄宿している、アカデミック系列の女子生徒である。東日本大震災から村の人口が減り、

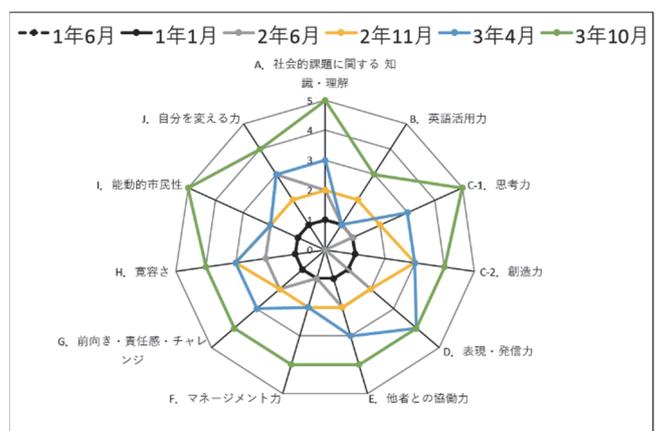
これからの過疎が心配される川内村で、自然や村の人の魅力をPRしたいと活動を行った。

環境などにも目を向け、清掃センターにFWに行き、ごみの行方について調べ、地域の自然環境やCO2削減について考察したり、村で活動をしている志賀風夏さんにインタビューし、昔ながらの人たちの思いを受け継ぎつつ、自分なりの考えを持って活動する同年代の先輩の姿に共感したりと、自分の感性を働かせ自分なりに考えている様子が見られた。また、同じように葛尾村の魅力をPRしたい生徒とコラボし、FWを企画運営し、下級生（高校1年生2名、中学生1名）にその魅力を発信することができた。これらの活動で本人は「探究を始める前は川内村のことが好きだとぐらいにしか思っていなかったですが、この探究を進めていく中で自分は村民の一員であることを忘れないようにするという意識が高まったような気がします。(中略) 地域を活性化できるような人間になりたいという思いが強くなりました。」

とあるように地域に対する帰属意識の高まりがみられた。

○生徒 R.A (スポーツと健康探究ゼミ)

【平均値】 1.00 (1年6月) →4.18 (3年10月)

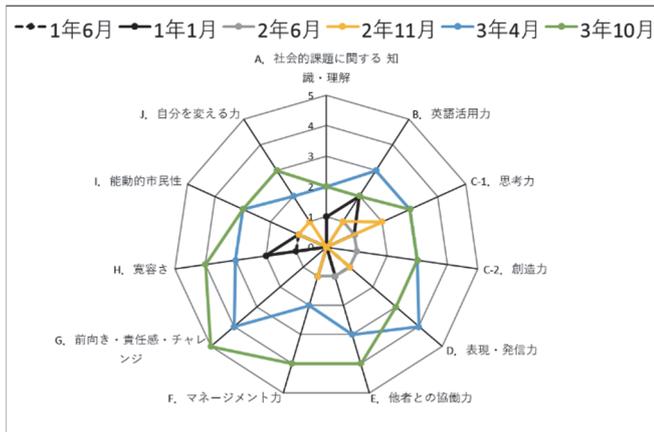


いわき市から本校に通う、トップアスリート系列で男子サッカー部に所属する生徒である。東日本大震災前のJ-villageにサッカー選手が集まりJFAアカデミー福島にサッカー選手が通じて広野町に活気を自分たちも届けたいと思い「This is football」というテーマのもと活動を行った。学力的にはあまり高い方ではないが、何事にも元気に一生懸命に取り組む生徒である。サッカーを通して小学生に身体を動かすことの楽しさを伝え、活気や笑顔を広めることを「元気教室」「キッズコミット」などのスポーツイベントを自分たちで企画から運営まで実施した。企画の全体像からグループごとの役割分担を考え、仲間と協働し、準備段階から抜けなく取り組むことができた。宣伝活動の一環で地域のスポーツクラブや

小学校とも連絡を取り、ポスター掲示や呼びかけを実施した。イベント当日も持ち前の明るさやコミュニケーション能力を發揮し、小学生がいきいきと楽しく活動する姿を引き出していた。この探究活動を通してルーブリック評価からも社会的課題に関する知識理解や思考力などの項目で大きな変化が見られ、人間性の成長が窺える。

○生徒 S. I (スポーツと健康探究ゼミ)

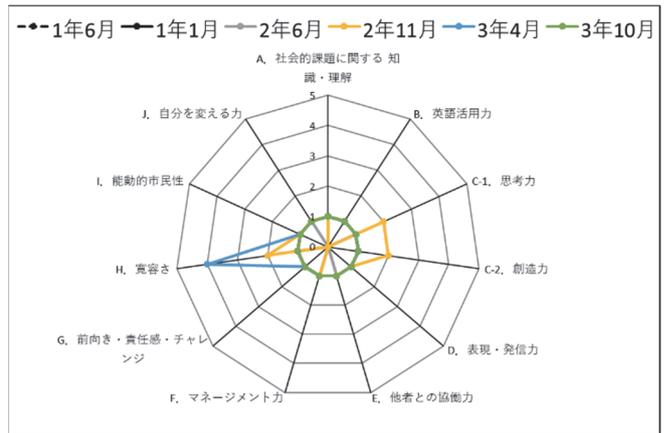
【平均値】 0.45 (1年6月) →3.27 (3年10月)



立志寮から本校に通う、トップアスリート系列のバドミントン部に所属する女子生徒である。「メンタルの状況はスポーツにどう影響するか」というテーマのもと活動を行った。基礎学力は比較的高く、どんなことにもコツコツ取り組むことができる生徒であるが、自身の競技成績や人間関係で悩んでしまい登校できないといった時期もあった。そんな自分を、現状を変えたいと力を入れて取り組み、この探究活動を通して物事の捉え方が大きく変わった。ルーブリック評価の内容からも前向き・責任感・チャレンジの項目や他者との協働力の項目、寛容さの項目など高い評価になっており心の成長が窺える。まずは自分を知ることからスタートし、アプリを利用して毎日の自分の気持ちの変化を知る取り組みを続けた。そこから様々な場面・環境・出来事の中で自分の感情がどの様に変動するかを客観的に見ることによってどのような対策をとれば良いかなどを考えた。また、心理学に精通する大学教授や実業団で活躍する選手などにインタビューをして様々な考え方を知る機会となったのも視野を広げることに繋がり、人として大きく成長することができた。競技を行っているだけでは身に付けることのできない力を探究で習得したように思う。

○生徒 Y. R (健康と福祉探究ゼミ)

【平均値】 1.00 (1年6月) →1.00 (3年10月)



いわき市から本校に通う、スペシャリスト系列【農業】の生徒である。将来、服飾関係の仕事我希望しており、探究では「服を1から作ってみて周りはどういう反応をするのか」をテーマに活動を始めた。インターネットを活用し、見よう見まねでブラウスの製作をした。製作過程で少しずつ形になっていく楽しさ、面白さを知った。しかし、服を作っただけでは自己満足で終わってしまうとの考えから、富岡町のYONOMORIDENIMさんの所に足を運び、デニムのお店を見たり、話を聞いた。ここでの出会いを通して、服作りへの想いが強くなっていった。東日本大震災から12年が経ち、処理水問題が耳に入ってきた。海に対するマイナスなイメージをプラスに変えるためにファッションでどう表現するか考えたとき、処理水について書かれた新聞記事だけでドレスを作成することにした。生徒は、探究の時間を通して自分の興味関心を高められたと同時に、自分の地域の課題を見つめ直す時間になった。ルーブリックの評価を見ると、アクション後に思考力、創造力、寛容さの評価が上がっていることが分かる。探究過程の小さな心の変化と学びが今後の自己実現に生きることを期待している。

6. 4 3年間を通した各取組に関する評価

本校で探究に関連する科目（地域創造と人間生活、総合的な探究の時間（未来創造探究））や海外研修について、生徒がどのように捉えてきたのか、7期生に対してアンケートを行った。（実施時期：令和5年10月、回答生徒数：82人）

<意識調査>

以下の表に示す内容について探究の授業についての意識調査を行った。Q1～Q3は地域との関わり、Q4～Q6は探究と教科の関わり、Q7～Q11は自分自身と社会との関わりについてである。

表 調査項目と結果（数値は回答の割合）

（4：とてもそう思う 3：そう思う
2：あまり思わない 1：全くそう思わない）

	質問項目	R5				昨年比
		4	3	2	1	
Q1	探究授業を通じて、地域に対する興味関心が高まった。	24.7%	61.7%	12.3%	1.2%	-6.4%
Q2	探究授業を通じて、自分と地域とのつながりが増えた。	22.2%	53.1%	24.7%	0.0%	-9.4%
Q3	探究授業を通じて、地域のことが好きになった。	21.0%	53.1%	25.9%	0.0%	-10.7%
Q4	探究授業を通じて、探究学習で学んだこと、教科学習で学んだこととのつながりを感じるようになった。	17.5%	52.5%	26.3%	3.8%	-7.6%
Q5	探究授業を通じて、探究学習に教科学習で学んだことを活かせるようになった。	19.8%	49.4%	24.7%	6.2%	-8.5%
Q6	探究授業を通じて、教科学習の必要性を感じるようになった。	14.8%	58.0%	21.0%	6.2%	-4.8%
Q7	探究授業を通じて、世界や日本で起こっている課題を自分の身近に感じるようになった。	25.0%	58.8%	15.0%	1.3%	-5.1%
Q8	探究授業を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった。	34.6%	48.1%	13.6%	3.7%	1.1%
Q9	探究授業を通じて、自分の考えや意見が深まった。	36.3%	55.0%	8.8%	0.0%	1.8%
Q10	探究授業を通じて、自分のことが好きになった。	12.5%	38.8%	40.0%	8.8%	0.8%
Q11	探究授業を通じて、自分が動けば社会は変えられると思った。	16.0%	45.7%	32.1%	6.2%	-12.7%

ほぼ全ての項目について肯定的意見（3，4）を半数以上の生徒が回答しているが、昨年、一昨年度との比較からの数値が低下している。特に気になる数値としては、Q3「探究授業を通じて、地域のことが好きになった」とQ11「探究授業を通じて、社会を変えられる」である。「グローバル型」の指定が終わり、今年度よりWWLコンソーシアム構築支援事業に移行した。グローバル人材の育成の色を強めて、世界との繋がりを重視するようになったが、その分これまでよりも、「地域とのつながり」が薄れたので、その点は次年度以降の課題としたい。

ほとんどの項目は例年通り8割以上が肯定的評価となっているが、Q8「探究学習を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった」やQ10「探究を通じて、自分のことが好きになった」という数値が昨年度よりも増加した。ここ6・7期生の傾向として、震災からの時間経過に伴い、地域の課題から真正面に向き合い、課題を解決する探究が少なくなってきている。このことは、探究のバリエーションが増えたことと相反関係にある。次年度についても、セルフエッセイ（なぜその探究に取り組むのか）や3年間の学びの軌跡を振り返らせることで、探究と進路活動の連動した指導体制の構築について検討していく必要がある。

<取組別評価>

1～3年の間に実施してきた主な取組を示し、その中で印象に残った取組、力がついた取組を調査した。

表 印象に残った取組、力がついた取組（数値は人数）

項目	印象に残った取組み	力がついた取組み
A 1年次 プチ探究	5	3
B 1年次 双葉郡バスツアー	24	14
C 1年次 マインドマップ講座	0	2
D 1年次 演劇ワークショップ	15	14
E 1年次 しくじり先生	15	13
F 1年次 探究オリエン	0	0
G 2年次 探究オリエンテーション（未来創造探究導入、ゼミ座談会、マイキーワード探し、先輩の探究紹介など）	1	0
H 2年次 3年生の中間発表会	0	0
I 2年次 問いづくり講座	0	1
J 2年次 GWの調べ学習	1	1
K 2年次 ゼミごとに分かれての活動	4	14
L 3年次 中間発表会	2	4
M 3年次 最終発表会	13	9
N その他	0	0
総回答数	80	75
回答生徒	82	82

例年 多い項目

今年度特に多い項目

回答については複数回答も可としてアンケートを行っており、平均すると一人あたり2.1個程度（昨年平均2.5個）回答している。印象に残った取組と力がついた取組で数値は似通っている。今年度の傾向として、印象に残った取り組み・力がついた取り組みともに1年次の双葉郡バスツアーをあげる生徒が多かった。演劇と探究の連動性を高める取り組みをした点については、十分目的を達成できたと考えられる。

6. 5 進路や在り方生き方への影響に関する評価

探究活動が卒業時の進路や在り方生き方にどのような影響を与えたのか調べるために、3年次生徒にアンケートを行った。なお、このアンケートは平成30年度から始めており、今年度が6回目である。

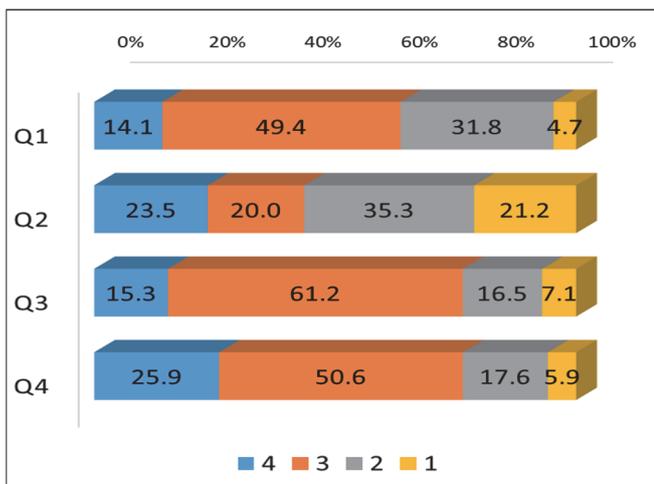
実施日：令和6年1月

対象生徒：7期生3年次生徒 85人

内容：以下のアンケート項目に対して、1～4の4観点で選択、さらに具体的事例などを記述で回答。

結果：

質問項目		4	3	2	1
Q1 未来創造探究は、あなたの卒業後の具体的な進路選択に影響を及ぼしましたか？	7期生	14.1	49.4	31.8	4.7
	6期生	16.9	41.1	30.6	11.3
	5期生	25.2	41.7	25.2	7.8
	4期生	23.4	42.3	27.9	6.3
	3期生	18.6	31.9	34.5	15.0
Q2 未来創造探究での活動を、入社試験や入学試験に活用しましたか？	7期生	23.5	20.0	35.3	21.2
	6期生	24.2	31.5	29.8	14.5
	5期生	25.2	32.0	22.3	24.3
	4期生	32.7	33.6	20.9	12.7
	3期生	24.8	34.5	22.1	18.6
Q3 未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？	7期生	15.3	61.2	16.5	7.1
	6期生	29.0	56.5	12.9	1.6
	5期生	27.2	60.2	9.7	2.9
	4期生	31.3	57.1	10.7	0.9
	3期生	25.7	54.9	16.8	2.7
Q4 未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？	7期生	25.9	50.6	17.6	5.9
	6期生	33.9	35.2	26.2	9.7
	5期生	28.2	59.2	9.7	2.9
	4期生	35.7	54.5	8.9	0.9
	3期生	38.9	47.8	10.6	2.7



- 4 大きく影響した（繋がった・活用した）
 - 3 ある程度影響した（繋がった・活用した）
 - 2 あまり影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）
 - 1 全く影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）
- 表中の値は割合 (%) である。

Q1、Q2については高卒時の進路選択、いわば短期的な進路について、探究活動の影響があったかどうかについてのアンケートである。Q1では64%（昨年度+6%）の生徒が進路選択に影響があったと回答している。この項目は毎年60%程度で推移しており、今年度は上昇が見られた。

Q2においては探究活動を進学・入社試験で活用したかという問いに対して44%（昨年度-12%）の回答であった。この数値は4期生の66%を最高値として、例年少しずつ低下している数値であるが、今年度は特に低下が目立っている。数値上は低下しているものの、生徒のコメントで「総合型選抜でアピールする内容が増えた」というものも多く、この項目も大切にすることがある。

Q3、Q4は長期的な観点から、社会との関わりや自身の在り方生き方に関するアンケートである。いずれも抽象度の高い問いであるにも関わらず例年8～9割の生徒が肯定的に捉える結果となったが、今年度についてはQ3の数値は76.4%（昨年度85.4%）と大きく低下した。Q4は76.5%（昨年度69%）と大きく上昇した。

Q4の項目では地域社会に対しての関わりについてや、探究学習を通じて「復興とはなにか」を自分なりに表現したコメントが多かったことは3年間の探究学習と真摯に向き合ってきたことの証拠のように思う。

また、Q3、Q4の質問について、肯定的な評価(4・3)を選ぶ生徒について、アカデミック系列の生徒が肯定的な評価をする比率が高い傾向が多かった。また、系列に限らず、探究学習を通じて、変化のあった価値観について実例をあげて述べていた生徒が多かった。

高校生と社会の関わりを問う『18歳意識調査「第20回-社会や国に対する意識調査-」(日本財団、2019年11月) (<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2019/20191130-38555.html> 2023年3月閲覧)と本校生の今回のデータを比較すると、本校生は社会に対する課題意識を明確に持ち、社会に積極的に関わろうとする意欲が高いことが特徴といえるであろう。

20191130-38555.html 2023年3月閲覧)と本校生の今回のデータを比較すると、本校生は社会に対する課題意識を明確に持ち、社会に積極的に関わろうとする意欲が高いことが特徴といえるであろう。

	自分を大人だと思う	自分は責任がある社会の一員だと思う	将来の夢を持っている	自分で国や社会を変えたいと思う	自分の国に解決したい社会課題がある	社会課題について、自分や他人と語り合いたいと思う
日本	29.1%	44.8%	60.1%	18.3%	46.4%	27.2%
インド	84.1%	92.0%	95.8%	83.4%	89.1%	83.8%
インドネシア	79.4%	88.0%	97.0%	68.2%	74.6%	79.1%
韓国	49.1%	74.6%	82.2%	39.6%	71.6%	55.0%
ベトナム	65.3%	84.8%	92.4%	47.6%	75.5%	75.3%
中国	89.9%	96.5%	96.0%	65.6%	73.4%	87.7%
イギリス	82.2%	89.8%	91.1%	50.7%	78.0%	74.5%
アメリカ	78.1%	88.6%	93.7%	65.7%	79.4%	68.4%
ドイツ	82.6%	83.4%	92.4%	45.9%	66.2%	73.1%

参考資料：18歳意識調査「第20回-社会や国に対する意識調査-」(日本財団)

6. 6 学校アンケートによる評価

本校の教育活動全般を評価するため、毎年1回、保護者、生徒、教員によるアンケートを行っている。このうち、本事業に関係するものについてピックアップした。

対象：本校舎高校1～3年の生徒、保護者、教員

回答数：保護者207名、生徒166人、教員75人

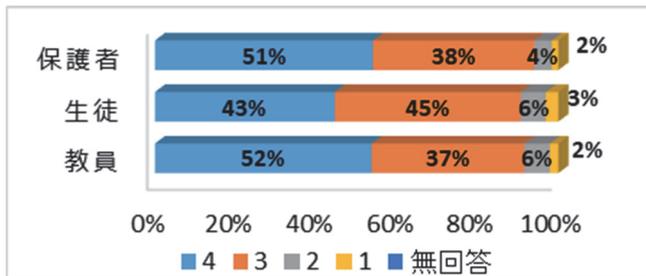
回答：以下の4段階および無回答による回答

4：思う 3：ある程度思う

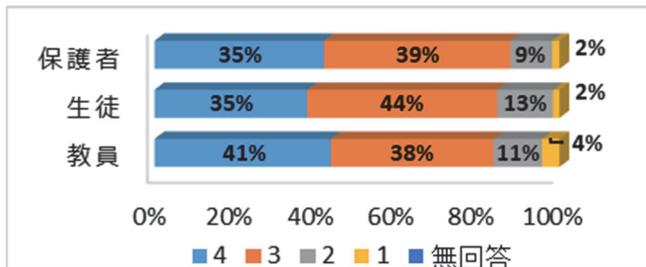
2：あまり思わない 1：思わない

アンケート項目と結果：

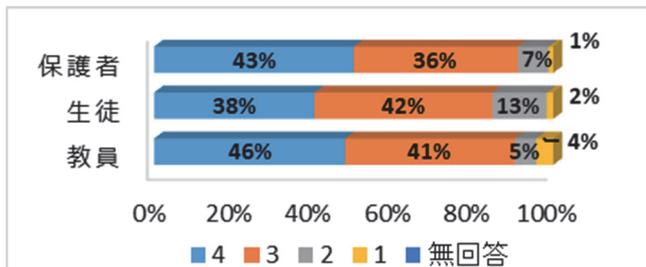
Q1 アクティブラーニングをはじめ、探究する力を育てる充実した授業が行われている



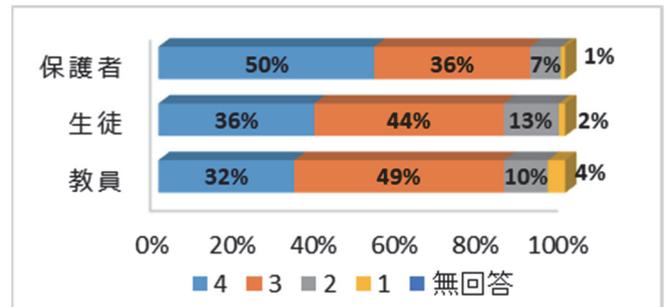
Q2 地域の課題に向き合う授業や活動が行われている。



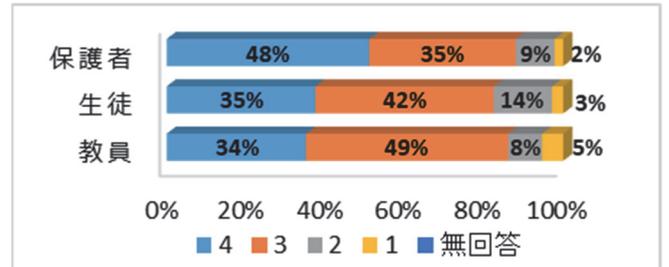
Q3 地域の課題に取り組むために、地域の方々や国内外の様々な組織と連携している。



Q4 地域の課題に向き合う授業や活動が、復興を目指す地域にとってプラスになっている。



Q5 地域だけでなくグローバルな視点(SDGsなど)を持つような取組が展開されている。



回答いただいた保護者、生徒、教員、いずれも肯定的意見(4+3の回答)が非常に高く、本事業の取組は高く評価されている。

Q1では生徒・保護者ともにアクティブラーニングや探究する力を育てる授業がふたば未来学園の取り組みと認知されている様子がわかる。また、保護者からの肯定的評価が88%(一昨年56%)から2年連続で上昇しており、本校の探究学習の成果が地域の方々にも浸透した結果と言える。しかし、教員が昨年比-9%となっており、数値が後退している理由について分析する必要がある。

Q2では、WWL事業でグローバル人材の育成を強調するところもあり、地域の課題に向き合う授業や活動の数値の低下が著しい。この値では、どの対象についても-10%近く数値が低下している。

Q3は外部連携の状況についてのアンケートである。Q2同様に、実際には地域の課題に取り組む探究は継続しているものの一昨年度の肯定的評価(約80%)から90%近くに上昇したが、80%程度で推移している。

Q4は探究活動の地域へ与える効果についてである。この質問についても肯定的意見が80%で推移している。

Q5はグローバルな視点についてである。WWLコンソーシアム構築支援事業ではグローバルな視点を重視しているが、教員からの肯定的評価は上昇(+3%)しているものの、生徒の肯定的評価が下降(-12%)している。生徒の海外研修や海外留学、留学生との交流など日常での国際交流の機会は増えているが、生徒の実感には結びついていない。今後は、通常の授業においても、グローバルな視点を意識しながらのカリキュラム構築が求められる。

6. 7 設定した目標の達成度

WWL構築支援事業では目標設定については、短期目標、中期目標、長期目標が設定されているが、具体的な数値目標は求められていない。そのため、本校では短期目標については令和2～4年度に指定を受けた「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の際に設定した目標を準用することで目標の達成度を測定することとした。今年度の達成度について以下に示す。またそれぞれの項目について以下にまとめた。

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング) 構築支援事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

	項目	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	目標値
		SGH4年目	SGH最終	Glocal1年目	Glocal2年目	Glocal最終	WWL1年目	
a	本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値	2.63	3.1	2.62	2.9	3.03	2.56	3.5
b	卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の	-	84	89	87	63.4	76.5	70%
c	本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合（本事業に関する5つの項目の平均値）	-	調査なし	67	88.5	90	81.7	70%

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

	項目	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	目標値	
		SGH4年目	SGH最終	Glocal1年目	Glocal2年目	Glocal最終	WWL1年目		
a	地域の個人、団体との協働による 課題探究プロジェクト数	目標	22	31	40	45	45	50	50件
		実績	31	40	52	58	69	58	
b	視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数	目標	調査なし	調査なし	200	230	230	250	250人
		実績	調査なし	調査なし	178	192	376	467+a	
c	生徒の外部発表、コンテスト応募件数	目標	30	35	40	45	45	45	45件
		実績	30	35	42	56	55	58	

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

	項目	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	目標値	
		SGH4年目	SGH最終	Glocal1年目	Glocal2年目	Glocal最終	WWL1年目		
a	本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数	目標	133	150	165	180	180	250	250
		実績	150	165	301	310	321	235+a	

以上の数値はすべて2024年1月31日までの数値となる

第7章 研究開発の成果と課題

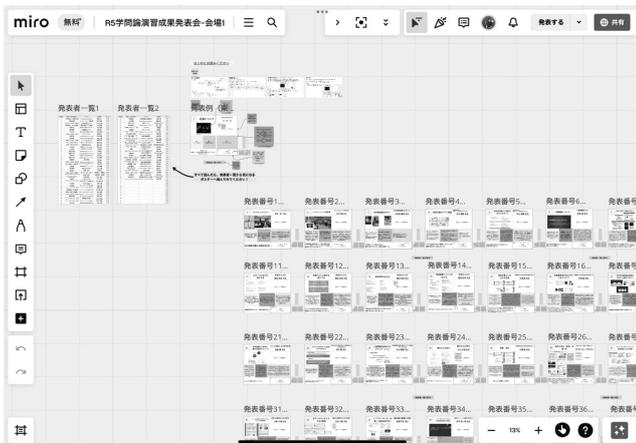
開学初年度より文部科学省より5年間のスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業【H27~R元年】と3年間の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）【R2~4年】に取り組んできた。今年度よりWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業について、「原子力災害からの復興をはたすグローバル・リーダーの育成」の構想名を掲げて、1年目の取組みを始めた。この構想自体はSGH事業からWWL事業までの9年間大きく変わっていない。探究学習を学校のコアカリキュラムに据えて継続して研究開発した成果について、以下のようにまとめる。

7.1 研究開発成果概要

WWL事業では目的を4つ掲げた。

- ① 本県から東北地区に展開するグローバル人材育成のアドバンスト・ラーニング・ネットワーク（福島ALネットワーク）の形成
- ② 探究・海外研修・APを体系的に位置づけたカリキュラム開発
- ③ 地域や世界の課題解決に貢献する人材の育成
- ④ 「教育」と「創造的復興による持続可能な地域実現」の相乗効果創出

①では管理機関である福島県教育委員会との協働体制を構築することから始まった。特に初年度は体制を整えることに注力し、事業協働機関である東北大学との連携強化のために東北大学との先生方との対話の場を持ち、APの導入に向けての議論を開始した。大学の先取り履修を整えるために、今年度は単位ではなくオープンバッジ（獲得した知識やスキルを証明する国際技術標準規格のデジタル証明書）の付与という形で「学問論演習」というゼミ形式の授業に本校生徒5名が参加した。10月の後期の授業で全15回の講義では「グループディスカッションとアイデア整理のスキルアップ講座」であり、大学生の授業に高校生が混じり、グループディスカッションを進めた。担当した大学の教員の話では、高校生がかなり奮闘しており、大学1年生にとってもかなり高校生から刺激を受けたというコメントを頂いた。



学問論演習で使用したオンラインホワイトボード『Miro』を活用したオンライン授業

また、福島ALネットワークを形成するために、福

島県内の連携校6校や県外連携校2校との連携関係を強化した。具体的には県外連携校である宮城県仙台二華中学校・高等学校と山形県立東桜学館中学校・高等学校を訪問し、WWL事業の趣旨説明や具体的な協働方法について議論した。また、両校で企画した発表会や交流会に本校生徒が参加したり、本校の生徒研究発表会に県外連携校をお招きして生徒研究発表をしてもらったりなど、相互の発表会の乗り入れを初年度から実現することができた。県内連携校においても、福島高校と安積高校のSSH研究発表会で本校生がポスター発表を行うなど発表会の相互乗り入れを実現することができた。令和6年度の本校の生徒研究発表会では、事業連携校7校全てに参加してもらう予定である。

②については主に拠点校であるふたば未来学園のカリキュラム開発に関することである。ここでは大きく4つの話題について論じる。

（1）新しいゼミ編成の実施

令和5年度より探究ゼミの編成を変更し、より学術分野を意識した探究ができるようにした。福島の抱える真正な（Authentic）課題と、世界の課題を重ね合わせた未来創造型の探究・課題解決の実践を通じて、原子力災害からの復興をめざすために、福島の課題に即した従来のゼミ編成をより文理融合的なテーマ編成とした。

これまでの本校の課題であった理系探究が再生可能エネルギー探究ゼミだけだったため、より広範な範囲の探究を行うために、自然科学・地球環境探究ゼミに改変した。福島県の浜通りには研究開発拠点多くあり、これらの研究機関との連携を図った。今年度は大熊町の土壌の研究や相双地区の水生生物に関する研究など、これまでにない理系分野での研究が多く登場し、サイエンスキャッスルや他校のSSH発表会など様々な外部発表の機会が得られた。

自然科学・地球環境探究ゼミの他にもスポーツ医・科学探究ゼミなどの探究も大きく進んだ。従来の「スポーツと健康」の探究では食生活やスポーツを活用した地域活性化など、毎年テーマが重なる傾向にあった。そのため、トップアスリート系列の生徒を中心に、自分の競技力向上のための探究に取り組む生徒が増加している。競技力向上を行う上で、専門家による指導が欠かせない。体育科の教員を中心にゼミの指導を行っているが、体育学部の大学教授と連携しオンライン会議やデータの取り方のレク

チャーなどまた新たな取組が多く生まれるようになってきたことも今年度の大きな成果といえる。

(2) 未来創造探究ポータルサイトの準備

これまで SGH 事業とグローバル型事業の成果をまとめ、探究の授業で使用した教材の共有化や生徒発表動画など普段の探究の指導で活用するデータをふたば未来学園共有の「コモン（共有財産）」と位置づけ、先生方により活用しやすいようにするために、ポータルサイトを作成した。



<未来創造探究ポータルサイト>

内容は以下のように構成されている。

- 未来創造探究とは（理念や3年間のタイムスケジュール、発表会ごとのチェックポイント等）
- 探究教材（探究ノートや外部へアポイントをする方法の教材、ポスター資料の作り方等）
- ゼミ運営（ゼミ運営の考え方やツール）
- プチ探究（教材や過去の生徒のプチ発表動画）
- 演劇教育（演劇の進め方や過去の演劇作品）
- 先輩の発表動画
- その他（外部連携者リスト、論文執筆について）

現在は仮運用の形だが、令和6年度からは各先生方に使用していただき、より使いやすいサイトにアップデートしていく。また、一部生徒にも活用してもらえるように作業を進めるつもりである。特に新たに着任する先生方には積極的に活用してほしいと考えている。探究の指導法や取り組みが膨大な蓄積となっており、新たな着任した先生方にスムーズに探究に取り組んでもらうために、着任者へのホスピタリティを高めることも大事な取り組みである。

(3) 探究学習をより高度化するための外部人材の活用

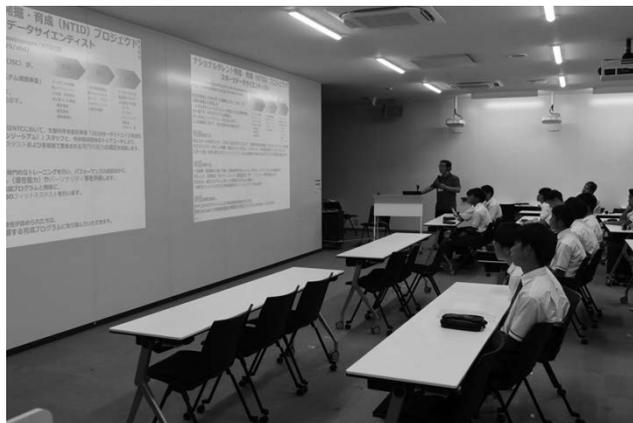
これまでの探究では、生徒の探究テーマに応じて外部人材を教員が見立てて紹介する形を取っていた。境界知（地域のことをよく知る「地域知」を持つ地域の方や研究分野についての「専門知」を持つ大学教授などを含めた知）との接続については、外部発表会の際にゲストで来ていただいて際にミニ講義という形で授業をしてもらったり、直接アポを取って個別に指導をして頂く形が多かった。生徒のニーズと教員の専門性がぴったり合致するのでより探究を加速させる要因にもなっていたが、個別対応が多かったため、他の生徒の学びにあまり繋がらないなどの問題点も多く出ていた。そのため、今年度は高校

2年生を対象にゼミごとに専門家を招き、調査のためのアクションを行っている2年生前半期というタイミングに合わせて専門知識講義を行った。また、1時間を講義の時間に充て、残りの1時間は講義を受けてのディスカッションや生徒の探究発表に対するアドバイスなどの時間に活用した。今年度は以下の先生方にお越しいただいた。

- 共生社会探究ゼミ
福島大学 川崎 興太先生
- 共生社会探究ゼミ
いわき市役所 猪狩 僚さん
- スポーツ医・科学探究ゼミ
筑波大学 西嶋 尚彦先生（9・11・12・2月）
- 自然科学・地球環境探究ゼミ
福島大学 佐藤 理夫先生



共生社会探究ゼミ・福島大学 川崎先生による講義



スポーツ医・科学探究ゼミ

筑波大学 西嶋先生による講義

今年度は進路指導部とも連携し、昨年と同じように大学教授による模擬講義を2月に実施した。お呼びした大学教授と講義テーマは以下のとおりである。

- 川口 立喜先生（会津大学 グローバル推進本部 国際戦略室 室長・上級准教授）
「異文化理解と課題解決への第一歩 : 一人ひとりが創り出す未来」
- 梅村 一之先生（医療創生大学 薬学部教授）
「くすりと治療と感染症のおはなし」

- 渡部 厚一先生 (筑波大学 体育系教授)
「スポーツ医学～その役割と可能性～」
- 猪股 宏先生 (東北大学 未来科学技術 共同研究センター 特任教授)
「地球温暖化と二酸化炭素 ～CO2 は悪者でない、カーボンニュートラルでの役割～」
- 植松 康先生 (東北大学 未来科学技術 共同研究センター 特任教授)
「過去の強風災害に学ぶ –地球温暖化に伴う台風の大規模化に備えて–」
- 大村 達夫先生 (東北大学 未来科学技術 共同研究センター 名誉教授)
「社会インフラの整備と エコロジカル・ネットワーク再生による 健全生態系の保全 ～河川流域を事例として～」
- 川添 良幸先生 (東北大学 未来科学技術 共同研究センター 名誉教授)
「常識を破る一月は地球の衛星ではない」
- 圓山 重直先生 (東北大学 未来科学技術 共同研究センター 特任教授)
「巨大システムにおける安全神話の崩壊 –原発事故から学んだこと、 航空機や新幹線から学ぶべきだったと–」
- 河合 伸先生 (東日本国際大学 経済経営学部 学部長・教授)
「地域経済—スマートシティ構想について—」

今回の模擬講義では中学生も希望を取り、自分が興味のある講義に参加をした。どれも生徒の知的好奇心を高める話であり、一つしか聞けないのがもったいないぐらいである。動画での撮影で保存し、生徒の探究の講義に活用する予定である。また、実施時期については、より生徒に効果的なタイミングで実施できるよう、引き続き進路指導部との連携を図っていきたい。

(4) グローバル探究の推進

WWL 事業では地域の課題と世界の課題を重ね合わせることを主眼においており、世界の課題を教科や探究の授業で学習していくことが重要である。世界の課題を学ぶ機会として重要なことは海外研修の充実である。海外研修では1年生でドイツ研修、2年制でニューヨーク研修を行うが、メンバーに選考した生徒は自分たちで学習するだけではなく、事前学習として様々な学習に参加する。今年度は他校で英語プレゼンテーションコンテストや他の WWL 事業拠点校の高校生国際会議に参加し、グローバルな視野を持つ機会を増やしていった。

7月には山形県立東桜学館中学校・高等学校の英語プレゼンテーションコンテスト (START) に本校生徒2発表 (6名) が参加した。SGH ネットワーク校が参加する発表会以外では初の取り組みとなった。また、10月には新潟県立三条高校が拠点校となって取り組んでいる高校生国際会議に本校生徒3名が参加した。



START2023の様子



新潟県 WWL 国際会議の様子

また、海外研修の事前研修として、会津大学の留学生との交流研修を行った。会津大学との協働は昨年から2回目である。今年は日程を2日間に拡大しプログラムを双葉郡の原子力災害伝承館や請戸小学校などの伝承見学をおこなったり、ロボットテストフィールドなどを留学生と一緒に見学したりした。また、研修の最終日には学習の成果を英語で議論し、これからのふくしまをどのように復興させるかを英語でプレゼンテーションを行った。



会津大学の留学生との交流研修の様子

③の 地域や世界の課題解決に貢献する人材の育成や④の「教育」と「創作的復興による持続可能

な地域実現」の相乗効果創出については、WWL 事業指定後の長期目標に関連する内容となる。

人材の育成については、本校では人材要件ルーブリックを用いて、生徒の資質・能力について分析を行っている。詳細については、別ページ(6.1)を参照いただきたい。

7. 2 コンソーシアム組織との協働

昨年までのグローバル事業では地域との協働を重視し、双葉郡 8 町村をカバーする広域コンソーシアムを結成し、本校の教育活動や本事業の取組について共有することができた。1 年次の演劇プログラムや本校の探究活動では地域の方々と常に連携をとれる体制ができあがった。しかし、WWL 事業では双葉郡にある地域の組織とのコンソーシアム組織は立ち上がっていない。また、他の WWL コンソーシアムと比較すると、本校のコンソーシアムは地域の企業(特に国際的に活躍するグローバル企業)との連携が極めて弱い。グローバル企業は世界で活躍する人材が身につけるべき資質・能力開発についての実践例や蓄積を多く持っている。今後、WWL 事業指定期間中に地域人材の活用とともにグローバルな視野で活躍する企業との連携が急務と言える。

7. 3 今後の課題

WWL 事業事業 1 年目を終えて、今年は連携事業の整備に多くの時間がかかった。これまで述べてように、成果も多かったが、次年度以降に取り組みたい内容として主に 3 つの課題について述べる。

① 中高 6 年間で連動した探究カリキュラムの開発とさらなる探究の高度化

今年は自然科学・地球環境探究ゼミやスポーツ医学探究ゼミなど理系分野の探究方法の開発については、充実した取り組みができた。しかし、本校の探究は地域課題解決の手法を多く取り入れており、この形で探究の指導を行ったところ、自然科学・地球環境探究ゼミやスポーツ医学・科学探究ゼミなど地形のゼミを中心に、探究が足踏みする事態がいくつかのプロジェクトで起こった。原因は研究手法の差であり、これまでの地域課題探究の手法とは明確に齟齬が生まれている。そのため、理系分野特有の研究手法について、指導方法も含めて研究を進める必要がある。また、本校の探究の特徴である個人探究についても、「協働しながら学ぶ」ことが求められる今日の学びにおいては、「チーム探究」の重要性も再確認できた。特に、一つのテーマについて複数年かけて探究するようなプロジェクトの場合は研究主体の継続性などが大きな問題となる。理系探究の指導方法については、SSH 指定の高校との協働によって見えてきた部分であるため、更に深めていき

いと考えてある。

② 文理融合・教科横断的なカリキュラムの開発

本校では令和 7 年度入学生の教育課程の見直しと学校設定科目での文理融合カリキュラムの設定を進めている。今年度はスクールポリシーの策定に向けて未来研究会などで議論を行ってきたが、教育課程の話とともに常に話題に登るのは「働き方改革」をどのように進めるかという話題である。つまり、教師と生徒にとって限られた時間をどのように使うかを考えることである。その中の鍵は、教科横断的な授業やクロスカリキュラムを意識的に組み入れることで、教育課程上の授業時間数を減らしていくという考え方である。しかし、単に授業時数を減らして済む話ではない。同時に行わなければいけないのは、生徒が自分で学習を調整しながら、計画を立てて学習する「自立して学ぶ学習者」に育てるかという議論である。次年度は以下の内容を中心にカリキュラム開発を進める。

- ・学習と総合探究、教科と探究の往還関係の構築
- ・偶発的なクロス・カリキュラムから教科横断的な学習をカリキュラムに統合する方法の研究
(毎年学校全体でテーマを設定し、それぞれの教科からアプローチする仕掛けが必要)
- ・データサイエンスなど指標を活用した探究の課題設定

③ 地域復興と教育の相乗効果を生み出す探究学習(＋生徒・教員・地域の方の三者が探究学習を通じて、ウェルビーイングが向上する形)

先述のカリキュラム開発にも関連するが、WWL 事業の開発テーマである「原子力災害からの復興を果たし、新たな社会を創造するグローバル・リーダーの資質・能力の育成」を目標に掲げながら、「原子力災害からの復興」とは何かというテーマから遠ざかる感じがある。グローバル人材が強調されている分、本校がこれまで取り組んできた「地域課題解決」と今の WWL 事業の関係をもう一度整理する必要があるだろう。これは常に本校のスクールポリシーは何かを確認する作業でもある。

・教員のウェルビーイングを高める方策は一般的には多忙化解消だがビルド&スクラップするには、教育効果の検証が必要である。毎年、教員による検証は行っているが、教員の見立てだけではなく専門家からの助言と検証が必要だと考えている。次年度はカリキュラムの開発の指針として、これまで取り組んできた教育活動の評価に基づいた次年度の計画立案を進めていきたいと考えている。

7. 4 カリキュラムアドバイザーからの総括

はじめに

幾つかの学校の探究活動や発表会の視察を踏まえて、WWL 拠点校・連携校の現状と今後の事業のあり方について述べたい。「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」に変わり2年が経った。この10年で驚くほど地域との連携が進み、生徒たちの地域理解も格段に進んだ。「地元商店街を元気にしたい」「自分たちの学校をもっと活気づかせたい」など、地域の活性化をテーマとしたさまざまな探究活動が行われている。科学的な課題研究への取組みも進み、レベルは確実に上がっている。それはとても喜ばしいことではあるが、発表等を見ると「活動あって学びなし」という状況になっていることが少なくない。もちろん、どんな活動にも何らかの学びはある。ここで問題にしたいのは、それが汎用性のある、未来に繋がる学びなのかどうかということだ。

現状分析

先日、勤務校である安積高校で課題研究発表会があった。県内では有数の進学校であり、ポスターは見やすくまとめられ、発表も淀みなく進む。一見すると、よくまとまった発表が続く。しかし、中学校で学ぶ三角ロジックもできていないグループも多い。主張を裏付けるだけのデータや根拠がなく、多角的な視点からの考察もされていない。明確な理由や原因までたどり着いていないのだ。結果と原因は相対的なものであり、多くの場合、原因だと思ったものは結果であり、さらに原因がある。この結果（具体）と原因（抽象）が理解できていない。同様に、手段（具体）と目的（抽象）も理解できていない。手段に固執し、目的を見失っているケースも多く見られる。これらの思考力を探究活動の中だけで学ぶことは極めて難しい。具体の共通点を抽出して一般化（抽象化）し、時にはさらに抽象化する。概念化ともいわれるこの作業があつてこそ、その学びは生きる力となる。しかし、現状ではまだまだ不十分であり、探究活動だけで身につけさせるにはハードルが高い。

学びの仕組みと実践例

（1）人間の強みは何か

霊長類である私たちが持つ知能行動は他の動物にはない。知能行動の定義は、「過去の経験や知識を活かし、今までやったことのないことができるようになること」とある。例えば、人は過去の経験や知識から、熊は音に対して敏感で逃げるという特徴（共通点）を見つけ出し、それを応用して熊を近づかせない熊鈴という方法を編み出した。この知能行動の本質は、共通点を見つけ出すという抽象化と、鈴を使えばいいという具体化にある。これは、帰納法と演繹法と呼ばれるものである。

（2）抽象化とは何か

言葉そのものの意味は、具象から共通点を抜き出すことである。抽象と言われるものには、次のようなものがある。一般化・概念化・言語化・本質・原因(因果関係)・目的・原理、原則・共通点・構造・文脈・意図・価値などである。さらに、抽象化の切り口は多様で、どの観点で上記を捉えるかで抽象化されるものが変わる。この人間の行う抽象化にはどのようなものがあるのかを理解しないと、使いこなすことは難しい。

（3）学習教材の開発

そこで、抽象化を大きく4つに分け、抽象化に際して注意すべき点も3つ挙げ教材を作成した。

抽象化力として目指す力

- ①結果（具体）から原因（抽象）を探る力
- ②目的（抽象）を意識しながら手段（具体）を考える力
- ③異なるもの（具体）を同じ構図の事象（抽象）として捉える力
- ④見えるもの（具体）の奥にある見えない事象（抽象）を見る力

抽象化に際して注意すべき点

- ⑤抽象化とは捨象を伴う作業だが、捨て去ってよいものかを吟味することは重要である。
- ⑥高次目的（高次の抽象）は低次目的（低次の抽象）を軽視しやすいので注意が必要である。
- ⑦人間は、合理化は得意だが、必ずしも合理的ではない。

この7つのポイントを理解させるスライド（教材）を作成し授業実践した。以下作成スライドの一部

52 練習 幽霊が怖い理由を考えなさい。

結果 原因



53 具体と抽象の行き来 練習

大学に入れるか不安だ。
AI時代に生き残れるか不安だ
将来、幸せになれるか不安だ
...

見えない・わからないから怖い → 見えない・わからないをなくせば、怖いから開放される？

抽象 ↑ 帰納法 ↓ 演繹法

具体

幽霊は怖い	通り魔は怖い	コロナは怖い	放射線は怖い	地震は怖い
幽霊の正体説明 幽霊離脱は説明できる！	犯罪者情報の告知	可視化と知識	放射線の知識	地震予知

120 何か腑に落ちない、その理由を探る力

2023 日本の国会の話

ガーシー議員は2022年7月に初当選して以来、一度も国会に出席していない。自民党と立憲民主党は1月24日、今の通常国会でも欠席が続いた場合には“懲罰”を科す方向で一致している。

Q.懲罰委員会で登院停止が検討されることについて。

カーシー氏 登院していないので、登院停止してどうするんだろうなどは思いますが、（登院停止）したいのであればほってくださいって感じですよ。登院してないのに登院停止にして、不登校の学生を停学にするのと一緒ですよ。支離滅裂だなって気がしますが。

この論理、どう思いますか？

手段と目的を混同させて、誤魔化している

議論のすり替えという誤魔化し方
目的を隠し、手段に焦点を当てて誤魔化す。（よく使われる手ではある）

122 東京工業大学は、2024(令和6)年4月入学の学士課程入試から、総合型選抜および学校推薦型選抜において女性を対象とした「女子枠」を導入します。(東工大HPより)

賛成？ 反対？

そもそも、平等って何？

結果（1時間×5回終了時）

生徒の事後アンケートの結果は、具体と抽象についての理解が深まり、学習効率が向上したことを示していた。多くの生徒が、日常生活や学習において「具体と抽象」の視点から物事を捉えることで、理解力が向上し、興味や関心が広がったと答えている。このことから、抽象化の能力を身につけることは、学びを深め、多角的な思考を促進する上で非常に有効であることが分かる。

まとめ

抽象化の能力を身につけることの有効性に疑いはないが、学習効果の薄かった生徒がいたのも事実である。そうした生徒たちには、知識量が少なく、過去の経験や知識と繋げられないという傾向が見られた。知識や経験が少なく抽象化力の低い生徒への具体的な対応等、方法論の面ではまだまだ改善の余地がある。しかし、抽象化力を育てる教育（一を聞いて十を知る生徒を育てること）は、これからの教育の核になるものである。その方法論をWWL事業の中で作り上げていきたいと考えている。

【資料1】教育課程表

学校番号 (67)

令和5年度教育課程単位計画表

福島県立ふたば未来学園高等学校 (本校舎)

〈普通教科・科目〉

全日制の課程 総合学科

教科	科目	令和5年度			令和4年度			令和3年度			備考
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	
国語	国語総合							4			
	国語表現									3	
	現代文A								2		
	現代文B								2	2	
	古典B								2・3	2・3	
	現代の国語	2			2						
	言語文化	2・3			2・3						
	論理国語		2	1・2		2	1・2				
	文学国語		1	2		1	2				
歴史	世界史A								2	2	
	世界史B								3		
	日本史A								2	2	
	日本史B								3		
	地理B								2	2	
	地理総合	2			2						
	地理探究			3			3				
	歴史総合	2		2	2		2				
	日本史探究		3			3					
公民	現代社会							2		2	
	倫理			3			3			2	
	政治・経済			2			2			2	
数学	数学I	1・3・4			1・3・4			3			
	数学II	3・1	1・3・4		3・1	1・3・4			4		
	数学III		1・3	3		1・3	3			6	
	数学A	2	2		2	2		2	2		
	数学B		2			2			2・3	2	
	数学C		2			2					
	数学活用									2	
理科	科学と人間生活	2	2		2	2		2			
	物理基礎	2	2		2	2			2		
	物理		2	4		2	4			5	
	化学基礎		2			2		2		3	2
	化学	2	2	4		2	4		2		
	生物基礎	2	2	2	2	2	2	2	2		
保健体育	生物		2	4		2	4			5	
	地学基礎	2			2				2		
	体育	2	3	2	2	3	2	2	3	2	
芸術	保健	1	1		1	1		1	1		
	音楽I	2		2	2		2	2			
	音楽II									2	
	美術I	2		2	2		2	2			
	美術II									2	2
	書道I	2		2	2		2	2			
外国語	書道II									2	2
	コミュニケーション英語I							3			
	コミュニケーション英語II								4		
	コミュニケーション英語III									4	
	英語表現I							2		2	
	英語表現II								2	2	
	英語会話									2	
	英語コミュニケーションI	3・4			3・4						
	英語コミュニケーションII		2・3・4	2		2・3・4	2				
	英語コミュニケーションIII			3・4			3・4				
家庭情報	論理・表現I	2	2		2	2					
	論理・表現II		2			2					
	論理・表現III			2			2				
	家庭基礎	2			2			2			
情報	情報の科学							2	2		
	情報	2		1	2		1				

〈専門教科・科目及び学校設定教科・科目〉

教科	科目	入学年度									備 考	
		令和5年度			令和4年度			令和3年度				
		1	2	3	1	2	3	1	2	3		
		必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	
農 業	農 業 と 環 境			2				2				課題研究は、2・3年次継続履修。 総合実習は、2・3年次継続履修。 食品製造は、2・3年次継続履修。
	課 題 研 究			3	3			3	3		3	
	総 合 実 習			3	3			3	3		3	
	農 業 情 報 処 理										2	
	野 菜				2				2		2	
	草 花			2				2			2	
	食 品 製 造			2	2			2	2		2	
	微 生 物 利 用										2	
	造 園 技 術										2	
	農 業 と 情 報				2				2			
地 域 資 源 活 用				3				3				
工 業	工 業 技 術 基 礎			3				3			3	
	課 題 研 究				4				4		3	
	実 習				3				3		3	
	製 図			2				2			2	
	生 産 シ ス テ ム 技 術										2	
	環 境 工 学 基 礎										2	
	電 気 基 礎								3			
	電 力 技 術				2				2		2	
	社 会 基 礎 工 学				2				2		2	
	地 球 環 境 化 学			2				2				
商 業	電 気 回 路			3				3				
	工 業 環 境 技 術				2				2			
	生 産 技 術				2				2			
	ビ ジ ネ ス 基 礎			2				2				
	課 題 研 究				3				3		3	
	マ ー ケ テ ィ ン グ			3				3			2	
	商 品 開 発										2	
	広 告 と 販 売 促 進										2	
	簿 記			4	2			4	2		3	
	財 務 会 計 Ⅰ										3	
家 庭	原 価 計 算				3				3		2	
	ビ ジ ネ ス 情 報										2	
	情 報 処 理			3				3				
	ビ ジ ネ ス 法 規				2				2			
	ビ ジ ネ ス コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン				2				2			
	ビ ジ ネ ス マ ネ ジ ム ン ト				2				2			
	観 光 ビ ジ ネ ス				3				3			
	子 ど も の 発 達 と 保 育									2	2	
	生 活 と 福 祉		2・4					2・4		2・3		
	フ ー ド デ ザ イ ン		2		3			2		3	4	
情 報	保 育 基 礎		2		2		2		2			
	住 生 活 デ ザ イ ン		2				2					
	フ ァ ッ シ ョ ン 造 形 基 礎		2				2					
	保 育 実 践				2				2			
	課 題 研 究				4				4			
	介 護 福 祉 演 習				6				6			
	情 報 メ デ ィ ア										2	
	ア プ リ ケ ー シ ョ ン と プ ロ グ ラ ム										2	
	情 報 デ ザ イ ン			2				2			2	
	福 祉	社 会 福 祉 基 礎								2		
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 技 術									3			
生 活 支 援 技 術											4	
介 護 総 合 演 習											4	
体 育	こ ころ と け ゝ の 理 解								2			
	ス ポ ー ツ Ⅱ	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
音 楽	ス ポ ー ツ Ⅲ	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
	ソ ル フェ ー ジ ュ										2	
美 術	鑑 賞 研 究										2	
	器 楽 描 素										2	
英 語	鑑 賞 研 究										2	
	英 語 演 習				3				3		3	
人 文	総 合 英 語 演 習				4				4		4	
	国 語 演 習				3				3		2	
	世 界 史 演 習				3				3		5	
	日 本 史 演 習				3				3		5	
	表 現 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン				2				2			
理 数	数 学 演 習			1	3・5			1	3・5		4	
	総 合 数 学 演 習			2・3	3・5			2・3	3・5		6	
	応 用 数 学				2				2		2	
	微 分 積 分 演 習				3				3			
	数 理 数 学				5				5			
	化 学 演 習				2				2		2	
	生 物 演 習				2				2		2	
	地 学 演 習				2				2		2	
産 業	物 理 演 習				2				2			
	理 科 総 合 演 習				3				3			
農 業	ス ペ シ ャ リ ス ト 基 礎		2			2						
	Webデザイン&Webプログラミング				2				2			
工 業	農 業 集 子 演 習				2				2			
	地 域 エ ネ ル ギ ー				2				2		2	
探 究	保 健 体 育			2	1			2	1			
	ト ッ プ ア ス リ ー ト 概 論											
総 合	地 域 創 造 と 人 間 生 活	2				2						
	産 業 社 会 と 人 間								2			
小 計	総 合 的 な 探 究 の 時 間	1	3	2	1	3	2		3	3		
	ホ ー ム ル ー ム 活 動	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
組 編 成	合 計		74~			74~			74~			
			77~			77~			77~			
			5			5			4			

【資料2】ルーブリック表

福島県立たば未来学園中学校・高等学校 人材育成要件・ルーブリック (6 April 2021 Ver.)

学力概念	No	資質・能力・態度(まとめると)	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
知識 Knowledge "What we know"	A	社会的課題に関する知識・理解 一般常識や基礎学力をつけながら、世界・社会の状況の変化やその課題を理解するための知識を身に着ける。	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	地域の復興に向けた課題や、目の前の課題についての基礎的な知識を得る。	環境・エネルギー問題など持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題について基礎的な知識を得る。	社会の課題について、習得した知識を深掘り、周辺情報や関連情報を集め理解する。	社会の課題について、目の前の課題と関係する知識を俯瞰して理解する。
	B	英語活用能力 英語を使ったコミュニケーションができるようになる。	英語でコミュニケーションをとる関心・意欲・態度を持ち、自分のことについて英語で簡単に伝えられる。	自分の興味関心のあることや、地域について英語で説明できる。	地域や研究内容について、原稿を元に英語でスピーチし、簡単な質疑応答ができる。(CEFR B1レベル)	地域や研究内容について、即興で英語でスピーチし、意見交換ができる。(CEFR B1レベル)	地域や研究内容について、スピーチ・事例などを交えながら英語で説得力を持って主張し、議論できる。(CEFR B2レベル)
思考力	C-1	物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、スケールの大きな考え方ができる。	与えられた情報を整理できる。	目的のある課題やその解決のための内容を論理的に掘り下げることができる。	メディアを活用して情報を集め、情報を分析・評価し活用しながら課題を発見したり設定できる。	現実と理想の差を踏まえながら、広い視野・大きなスケールで既知の事実について批判的に考え、本質を追求することができる。	未知のことについて粘り強く考え、自分の考えや常識にとらわれず、本質的・根源的な問いを立て、多面的に考えることができる。
	C-2	創造力 自分なりの見方や好奇心を持って試行錯誤し、社会に新たな独創的価値を創造することができる。	アイデアを生み出そうと、自分なりの見方や考え方に基いた観察や思考を行うことができる。	好奇心をもって、他者との違いを生み出そうと行動できる。	目の前の課題に対して、これまでに得た知識や技術を関連づけて活用しながら、自分なりのアイデアを実践しようとして行動できる。	行動する中での出会いから得られた知見や発想を取り入れ、自分なりのアイデアを社会的に価値あるものに高めることができる。	試行錯誤(創造のスパイラル)を繰り返しながら、価値を更に発展させ、社会に新たな独創的価値を創造することができる。
技能(スキル・コンピテンシー) Skills "How we use what we know"	D	表現・発信力 どのような場でも聴くことなど、他者の共感を引き出せる。	自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。	突然指名されたときでも臆せず、集団の前で自分の意見や考えを相手に伝えるように表現することができる。	テーマや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考慮したり、テクノロジーを活用したりしながら、分りやすく伝えられる。	多様な人々へ、熟慮とストーリーを持って関に落ちる形で説得力ある発信を行い、共感を得ることができる。
	E	他者との協働力 異文化・異なる感覚の人、異年齢等を乗り越え、仲間と協力・協働しながら互いに高めあえる行動が取れる。	集団や他者の中で、決められたことや指示されたことにより一人で取り組むことができる。	集団や他者の中で、自分の役割を肩書き、個性を活かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる。	集団や他者との間で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を作ることができる。	分断・対立、文化・国境を越えて、社会を委ねる形での行動について、互いに高めあう同志としての関係をつくれる。	
マネージメント力 自分や組織での取り組みを計画し、進められる。	F	指示を受けながら作業を実施できる。	指示を受けながら作業を実施できる。	指示を待たず、解決に向けた適切な目標を設定し、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	全体として必要な作業を洗い出し、自分の作業に優先順位をつけて、複数の課題に同時に処理することができる。	作業の繋がりが、全体スケジュールを意識し、チームやメンバーで作業を適切に役割分担し目標に向けた行動ができる。	今後のスケジュールやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。
	G	前向き・チャレンジ 自分を意味する存在として考え、自信を持って取り組む、課題解決のために自分の役割を見つけて、全力で取り組む、決まらぬまでやり続ける。	自分を意味する存在として考え、物事をポジティブに捉えることができる。	自分に自信を持ち、目の前の課題を自分のこととして好意的に捉えて、主体的に取り組める。	集団や他者の中で、自分の役割を見つけて、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任をもち、失敗してもその失敗を糧とすることができる。	
人格(キャラクター・センス) Character "How we engage in the world"	H	寛容さ 異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるめたたかさを持ち、協調して共に高めようとする。	集団や他者の中で、他者を受け入れ、思いやりの場を創ることができる。	集団や他者に対して、思いやりをもって行動し、周囲の幸せを考えられる。	集団や他者に対して、思いやりをもち、周囲の幸せを考えられる。	考えの違う他者の意見や存在を受け入れ、自分や社会をより良くしていくための重要なものとして受け入れられる。	
	I	能動的市民性 社会を支える当事者として意識を持ち、地域や国内外の未来を真剣に考えることができる。	所属する集団の一員としての自覚を持つ。	社会の一員としての自覚を持ち、社会の抱える問題に目を向けようとする。	社会に貢献しようとする意識と自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼそうとする。	社会・未来を良くしようとする志を持ち、自分自身の意見を他者に真剣に語るすることができる。	
自らを振り返り変えていく力(メタ認知) Metacognition "How we reflect and learn"	J	自分を変えようとする意識を持ち、次の行動や、将来の夢に繋げる。	自分を向上させるために、自分自身で目標を立てることができる。	自分を向上させるために、自分の目標と理想の差を見つめることができる。	自分の目標に近づこうと努力し、自ら行動することができる。	社会の中で自分の役割や意識を俯瞰して考え、自分の目標や将来の夢と関連づけて大局的に行動できる。	

協働

自立

【資料3】運営指導委員会

令和5年度 WWLコンソーシアム構築支援事業 第1回運営指導委員会記録

1 期日 令和5年11月28日(火) 15:00~16:30 オンライン開催

2 出席者(敬称略)

- (1) 運営指導委員
田熊美保委員(OECD教育スキル局シニア政策アナリスト)
鈴木寛委員(東京大学公共政策大学院教授)
田村学委員(國學院大學教授)【欠席】
- (2) ふたば未来学園中学校・高等学校(校長、副校長、企画研究開発部主任)
- (3) 認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ(拠点長)
- (4) 管理機関(福島県教育庁高校教育課)

3 開会行事

- (1) 主催者挨拶(高校教育課長)
- (2) 事業拠点校校長挨拶
- (3) 出席者紹介
- (4) 委員長及び委員長代理選出

4 報告及び協議

(1) 令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」の取組について(事業拠点校より)

- ・SGH、グローバル型の8年間を経て、成果の分析、発信をどうすべきかを念頭にスタートした。
- ・早稲田大学と7月に連携協定を締結し、地域の方と一緒に「1F地域塾」を立ち上げた。
- ・探究のゼミ編制をより高度かつ文理融合型に変えていく準備をしてきた。
- ・9月の発表会では、コンテスト部門と対話部門を新たに設けた。
- ・本校生徒と地域の方で、「ごちゃまぜ探究会議」を開催した。
- ・ドイツ研修とニューヨーク研修では、新型コロナの影響でなかなか海外研修に行けなかったが、生徒の学びを止めずに、来日している留学生と研修をする形で実施してきた。昨年はようやく海外に行くことができた。海外に直接行って学んできた生徒が今、一生懸命に生き生きと探究に取り組んでいる姿を見ると、海外で実際に学ぶことは、本当に生徒のエンジンになると実感した。
- ・グローバル型の研究成果発表会では、全国から150名以上が参加し、全国に向けて発信できた。

(鈴木寛委員)

ふたば未来では組織として、探究の指導体制があり、指導力が向上するようなエコシステムができつつあるのは素晴らしい。これをぜひほかの学校に広めていただきたい。またそれを広める中で、自分たちのやっていることをもう一回、自己認識し、さらにより良いものにしていくというきっかけにもなる。

(田熊美保委員)

エコシステムで広がっていくことや「ごちゃまぜ探究会議」は本当に良い。そのノウハウを情報共有していただきたい。また、コロナでも海外旅行の代替案として留学生を巻き込んだところも良い。引き続き国内におけるグローバルという点でWWLでも大切にしてほしい。情報共有において、他校とシェアする際に良い事例集のみをパッケージ化せず、皆さんの苦労も含めた形の方が受け取る側に広まりやすいのでは。

(2) 令和5年度事業実施計画について(事業拠点校より)

- ・目標に関しては、今までのことを継続、進化させていきたい。特に1年目は、環境整備が重要。
- ・探究を軸としたカリキュラム編成やゼミ編制においては、大学と連携してアドバンスプレイスメント(以下、AP)を絡めたカリキュラム開発をしっかりとやっていきたい。今年度は東北大学と試行的に取り組んでいる。次年度以降に実施できるための論点整理が必要。
- ・生徒のウェルビーイングも考えたカリキュラムを検討していきたい。
- ・高校生国際会議のために、プレ会議をやるなど準備を進めたい。

(田熊美保委員)

高大接続が入試でなく、探究で繋がるのが素晴らしい。ただし、APで繋がっている生徒だけではなく、そうではない生徒の受け皿も必要で、多重層になるとなお良い。その生徒の学びの段階が合った上でのAPだと良い。高校生国際会議は、どこまで生徒が主体でやるかを考えると良い。テーマがまだ決まっていなければ、生徒と先生のウェルビーイングを一つ柱にすると良いのでは。

(3) 令和5年度事業実施状況について(管理機関より)

- ・アドバンスト・ラーニング・ネットワークを形成するために、福島アドバンスト・ラーニング・ネットワーク推進会議、事業拠点校・事業連携校連絡協議会を開催した。
- ・令和5年3月に教育連携協定を締結した東北大学との取組が始まった。「学問論演習」という講座に

において、大学生と高校生が合同履修するという取組を試行的に始めている。条件を満たした生徒にはオープンバッジが発行される。ふたば未来学園高校と福島高校の13名が参加しており、理解度も満足度も高いが、講座の開講時間が夕方であるため、負担感がある生徒がいる。開講時間が課題。

(4) 今年度取り組んでいきたいことと今回の協議題について(事業拠点校より)

- ・事業立ち上げのための環境整備、本事業の成果を図る指標の検討をしたい。
- ・教科学習の質的転換を図り、探究的な学びに繋がるようにしたい。
- ・スクールポリシー検討の際には、生徒と教員が共通認識を図ることが大切である。
- ・教育活動の中で、授業の評価、学習におけるクオリティが低下している部分があるのではないかと、ということがあり、どんなことに集中的に資源を投じていくかという議論も必要。生徒が自分で計画を立て、その学び方を自覚するメタ認知力をいかにつけていくのが非常に重要と考える。

(鈴木寛委員)

メタ認知を獲得することは重要かつ興味深いテーマだ。他の生徒のやっていることをたくさん見る、さらに評価する経験をするとうい。例えば、生徒がプレゼン、生徒が評価することは一つのアイディア。

(田熊美保委員)

自律した学習者になるためには、スクールポリシーが生徒たちの中で共通言語になっているかが重要。それがカリキュラムになっていく。エストニアは、自治、自律を理念としており、生徒も一緒にスクールポリシービジョンを作っている学校もある。例えば、学校カリキュラムにおいて、金曜日を自分で授業を考える日としている学校もある。どうカリキュラムを評価するのかは、スクールポリシーにあるビジョンの自律した生徒であるか否かという点に関する評価指標と連動している。点(カリキュラム)と点(評価)を結んでデザイン設計をすることが大切。OECDでも各国がどうカリキュラム効果測定をしているのか調査をしている。東北大学とも話をしている。

(事業拠点校副校長)

自律した学びを獲得するために探究活動があると思う。他人のやり方を見て、修正したり試したりして自分で学びのデザインをしていくという主体的な学びになるために探究的な学びがある。生徒が主体的にということに対して、まだ努力が必要。教員の意識改革についてもご指摘をいただきたい。

(鈴木寛委員)

今の日本の生徒に最も足りないのは自由な時間と空間。自律やエージェンシーのためには、総合的な探究の時間ぐらいは何も指示されなくていいのでは。教員も同じで、ちゃんとやらないというのを目標にする。苦痛だと思うが、それに挑戦してみたらどうか。

(田熊美保委員)

福島の皆さんの「ちゃんとする」のが解けた瞬間を見てきた。福島の高校の先生と大阪の中学校の先生が混じっただけでも、福島の先生方がゆるくなられた例がある。また、「ちゃんとする」環境だと、高校生は失敗を恐れて解の定まっていな学びを不安に感じ、ゼロから1を生み出す環境になっていない。WWLの環境整備においては、学びの環境とカリキュラム設定などしっかりやると良い。

(事業拠点校企画研究開発部主任)

鈴木先生のお話は大変励まされる。また、エストニアがどのように学びを作っているのか知りたい。

(田熊美保委員)

先ほど述べたエストニアの学校では、スクールビジョンを生徒と一緒に作るというステップをきちんと踏んだ上で、できている。大阪の中学校でも、そのエストニアの学校に伴走している研究者がアドバイザーに入っており、ゼロから1を創るというのが学校のビジョンの一つになっている。また、エストニアの「見方・考え方」の授業(異なる教科の教師と森を散歩する)を知った日本の中高校生が、教科の先生と農園を自由に散歩することを企画している。「教科の眼鏡」で散歩すると、同じ空間でも、異なる発見をすることができるという取組もある。WWLで教科学習をどうほぐすか、探究とどうつながっていくかを考える。まずは見方・考え方から取りかかる。

(事業拠点校校長)

スクールポリシーは、生徒と共通言語になっているので、理想像をさらに効率よく目指していけるように作っていききたい。互いに評価する観点は非常に大切で、メタ認知力を育成することによって自律した学習者を目指していきたい。生徒に伴走しながら良い教育を提供できるように頑張っていきたい。

タイムライン	7	8	9	10	11自然科学・人間科学	12競技力向上	
~13:55 事前準備 14:00~14:10 開会行事	会場	みらいシアター				選択8教室	選択10教室
	外部講師	—				佐藤理夫教授 (福島大学共生システム理工学類 エネルギーコース)	西嶋尚彦教授 (筑波大学大学院) ※オンライン
教員	草野	池端	大谷	鈴木敬	駒木根	遠藤太	
①	菊池紀莉 八木香練	阿部女哉 荒川幹 諸橋運 川崎葉子	山形遥 渡部咲希	木村麗華 野口唯花 五十嵐瞳生	猪狩麟 四家遙 古山寿智 齋藤佑磨	影山輝心 中本徹平	当たり前にした い身体を使い方 とトレーニング ジャンプ力向上 メソッド
②	八木香練	川崎葉子	渡部咲希	五十嵐瞳生	古山寿智 齋藤佑磨	中本徹平	
③	佐藤心花	谷聖彩	遠藤詩幸 金澤煌大	中井直歩	林佳瑞	早田凌 岡田一沙	筋トレして競技力 向上
④	石上琴乃	阿部柊	根本陽葵	猪狩佑紀	星野寿々花 山崎こはる	仲田海吾 落合派斗 田端友貴	スピードを上げ て競技力向上
⑤	鷹琉花	阿部一葉	山野刃聖	黒木笑夏	紺野一剣	山岡七海	女性アスリート について
⑥	佐藤麗香	大越佑哉	村岡拓海	鈴木七海	菅波海斗	武山敏治 渡辺元氣	目指せフリー キックマスター
⑦	中島空音	伊藤珠弓	伊藤拓海	鈴木七海	鈴木慶那 橋本明佳	永田和希	音楽とスポーツ の関連性
⑧			発表数が他チームより少ないため 発表時間が前後する可能性が あります。	多くの人に海洋 ゴミ問題について 関心を持って もらうには	おなかすいたか らザリガニを食 べたい		

【資料4】生徒探究テーマ一覧 高校3年次（コンテスト部門・対話交流部門）

	コンテスト部門(みらいシアター)	コンテスト部門(協働学習ルーム)
9:00 ～ 9:15	#citrus～広野みかん発信プロジェクト～【中学】	Imagine future energy【中学】
	室井郁 山本あこ 山本樹	堀川蒼太 原百香 橋本諒
	-	-
	私たちがチーム#citrusはマルトさんと協力し広野みかんを使用したスイーツを商品開発しました。私たちが見つけた広野みかんの魅力は、酸味が強く、甘いスイーツの味を引き立てられるところです。私たちの発信の目的は、広野町の人や町外の人にも広野みかんについて知ってもらうことです。最終的には広野みかんを通して広野町についての認知度が高まることをゴールとしています。私たちはこれまでマルトさんとの共同開発の打ち合わせ、試食会、様々な場所へのポスター掲示、広野町長をはじめとした広野町役場の方々に表敬訪問、販売会などを行ってきました。多くの方が広野みかんに興味を持って下さり、活動してよかったですと感じました。	双葉郡が再生可能エネルギー(主に水素発電、太陽光発電、風力発電)の発電地として地形的、環境的な面からみて適していることが分かり、それらを発信することで双葉郡の新たな魅力になると考えた。双葉郡で再エネが行われていることを発信することで原発の悪いイメージをなくすことができ、双葉郡のもとの魅力に気づいてもらって再エネを新たな魅力として知ってもらうことを目的としている。そして多くの人に魅力を知ってもらうことが第一のゴールとしている。今までしてきたことは様々なところに行き魔炉や再エネの話を調べてきた。そして双葉祭の発表で調べてきたことを発表しアンケートを取ったところ少数だが知ってもらうことができた。
	広野みかん 商品開発 スイーツ	再エネ 原発 風評削減
9:15 ～ 9:30	鉄を追え【中学】	ぶどりーむ【中学】
	藤東佑和 眞船新巖	伊藤素弓 作山心彩 土田葵衣
	-	-
	浜通り地方の海岸には砂鉄がとでも多くあり、中世ではたたら製鉄が盛んで日本でもトップクラスだった。地元の人に製鉄の歴史を知ってもらうことが探究の目的。アンケートや聞き込み調査などを通して地域の方々にはあまり地元の歴史に興味を持つ人が少ないことが分かった。私たちは魅力あふれる製鉄の歴史に興味を持たれないまま忘れられることをとめたい。そのためこの探究で調べたことや実験の結果を地域の子供に地域の歴史教育として伝え、地域の活性化につなげることを目標としている。	私たちは中学一年生の時、メンバーひとりひとりでワインブドウについて調べていました。その後、同じ「ワインブドウ」について調べていた私たちが集まりこのメンバーで川内村のワインブドウについて探究していくことになりました。私たちの探究の目標は、震災からの復興を目指して始まったこのワインブドウという特産品の魅力や、それを作る生産者の思いを皆さんに届けていくことです。私たちはそれをより伝わりやすくするため、川内村でとれたワインの搾りかすを使った染め物に思いを乗せて発信しています。今年の八月には学校で染め物の体験会を開き、川内村のワインブドウの魅力や染め物の魅力を肌で感じてもらうことができました。
	地域復興 歴史教育 鉄	ブドウの搾りかす SDGs 染め物
9:30 ～ 9:45	法はブラックでレッドでちょっとグリーン	ウニと生態系
	菅家菜々子	高岡龍助 大越斗輝
	メディア・コミュニケーション探究ゼミ	再生可能エネルギー探究ゼミ
	私は国連や子どもの権利条約が定めている、法律への子どもの意見表明権が日本では普及されていないことに着眼した。主なアクションは学術論文や書籍、新聞から得た情報をもとに、日本と他国の法律や現状を比較した。また地元の弁護士の方や法学部の大学教授へのインタビューをはじめ、マイプロジェクト、県議長との懇談会等に参画した。しかしながら地域との協働という観点では、ほとんど活動していないため反省点である。現段階の考察ではノルウェーのような修復的司法の制度運用とともに、各家庭が法律と触れ合う機会づくりが大切だと考えている。	①ウニが大量発生による磯焼け。 ②ウニやその養殖の研究をしている宮城大学に行った。 ③ウニを駆除する。他は、最近では、増えすぎたウニを一旦陸にあげ、陸生の植物(クローバーやキャベツ、クズなど。たいいていの植物は食べると言われている。)を与え、肥やしてから出荷する方法。実際に僕たちは飼育はできたが肥やすことはできなかった。そこまで時間がなかったことが原因。 ④日本は食べるという策がある。また、法律を変える必要もあると思う。一番簡単なのは漬けて殺していくこと。正直、これしか無いと思う。
	法律 子ども 国際交流	ウニ 生態系 磯焼け
9:45 ～ 10:00	よりよいメンタルヘルスケアを	アートで障がいという枠を無くすために
	辻浦羽彩	三瓶竜也
	健康と福祉探究ゼミ	メディア・コミュニケーション探究ゼミ
	①職場、学校などの環境が原因で心が病む人が増加している。環境が悪いだけで心が病んで人生が台無しになるなんてもったいない。ストレス発散に着眼し、どうしたらストレス発散ができるのか、みんながストレス発散できる環境を作るか、などを考えている。 ②ふたば未来の高校生と教職員約40名にストレスチェックアンケートを実施。ふたば未来の人間は多大なストレスを抱えていることが分かった。 ③ストレス発散のためのお菓子作りをする会を開いた。 ④世界幸福度ランキングで、日本は先進国にも関わらず47位と非常に低い結果だった。日本人はストレスを溜めていて日常生活で幸福を感じにくいのではないかと考えている。	障がいという言葉を忘れずに理解してもらう為にアートを通じて理解を深めてより良い社会を目指していきたい。 調査アクションは自分が通っているi-stepという施設でパソコンを使ってデジタルのアートを描いて頂いて、自分自身も描いて見ました。それをホームページに載せる直前まで進みました。今後はアートを利用して外部の人に伝えるようにどの方法があるか模索しております。僕が考えた考察は、日本は世界に比べて障がい者の受け入れがまだ厳しいと考えていて政府は受け入れをしようために政策を提示していますが、それでもまだ理解が世界に追いついていないので、少しでも受け入れてもらいたくて探究を通していきたくと思います。
	ストレス発散 メンタルヘルス ストレス	障がい アート 理解発信

【資料4】生徒探究テーマ一覧 高校3年次（コンテスト部門・対話交流部門）

10:15 ～ 10:30	<p>海洋放出について考える —反対運動を始点に—</p> <p>佐藤志保</p> <p>原子力防災探究ゼミ</p> <p>①海洋放出の問題を理解するためにはどうしたらよいか ②2F、浪江原発建設時に起こった反対運動についての本を読んだ。海洋放出に対する住民の理解度をテレビ局や新聞社の世論調査をもとにまとめた。いわきと平潟の漁師に海洋放出についての意見を聞いた。 ③本校の生徒に向けて処理水と海洋放出について考えてもらうイベントを実施した。 ④処理水について正確な情報が国民に浸透していないことが反対の主な理由になっている。漁業者側は風評被害が起こる可能性がある限り賛成することはできない。反対派の意見に重点を置いたからこそ海洋放出が一概に正しいといえない理由が分かった。</p> <p>海洋放出 反対運動 国民の問題意識</p>	<p>野球の楽しさを伝えよう プロジェクト</p> <p>尾島健太 佐藤一之成</p> <p>スポーツと健康探究ゼミ</p> <p>長年に渡り、日本人と共に様々な記憶やドラマを生み出してきた野球。伊良部、衣笠、清原、ローズといった数々の有力選手を生み出してきた日本だが近年その日本野球人口減少が著しく激しいものとなっている。その要因としては子供達の野球離れ、tvの野球放映の減少等、様々な問題が掲げられる。つまり、日本人が野球という娯楽に触れる機会が無くなっていると分析した我々は、地域の小学生に遊び感覚で野球というスポーツの楽しさというものに触れさせる事にした。</p> <p>野球人 交友 魅力発信</p>
	<p>海を学ぼう!!!</p> <p>神山美咲</p> <p>再生可能エネルギー探究ゼミ</p> <p>①処理水、防災意識の希薄化、海水浴場の封鎖等に伴う、海に触れる機会の減少 ② 請戸小学校等の施設見学 ③ 寮の指導員や海に関わる職業の方々へのインタビュー・インターネット調査 ④ 相馬双葉漁協請戸と協力し、本校高校生・周辺小学校の生徒を対象に、漁港の仕事や海について学ぶイベントを開催した。 ⑤ 処理水や環境問題などは難しいイメージがあり、自主的に学ぼうという人はあまりおらず発信することも難しい。だが“楽しい”を軸に据えた活動は企画する側も参加する側もハードルが低く、どの年代の人でも気軽に行動を起こせる。このような活動が広まれば環境問題や処理水等の大きな課題の解決につながるのではないかと考えた。</p> <p>海 漁業 交流</p>	<p>私と檜葉とさつまいも</p> <p>佐藤愛心</p> <p>アグリ・ビジネス探究ゼミ</p> <p>私が解決したい課題は檜葉町の特産品が少ない事と風評被害についてです。アクションはまず檜葉町ゆず研究会会長の松本広行さんにインタビューをしました。その際にはゆずの栽培や有機栽培について教えていただきました。次に特産品を作るという課題を解決するために地元のさつまいもを使ったお菓子を一つつくるPRLたいと考えました。その時に担当の先生と話をしてその中で、地元企業の「復興プロジェクト」を知り参加することになりました。そこで、さつまいもを使ったパンの制作を考えました。</p> <p>檜葉町 食品開発 特産品</p>
	<p>大熊町の風評被害の 払拭を目指して</p> <p>宍戸涼果</p> <p>アグリ・ビジネス探究ゼミ</p> <p>①大熊町の風評被害払拭を目指して町に人が戻ってきてほしい。福島県の農作物は安全だと伝えたい。 ②ネットで検索をした。どうやって復興のお手伝いをすればよいか考えた。 ③ネクスフォームおおくまに協力依頼、活動の内容を説明、いちごを譲ってもらった、商品製造の依頼(いちごのマドレーヌとフィナンシェ)、標葉祭りに出店、アンケートの実施、設問が少なかった・記述式の質問がなかった→2回目のイベント参加を決意、大熊産キウイのマドレーヌを作成、おおくま学園祭2023に出店、アンケートを実施、集計した結果を元に考察、NHK“被災地の声”に出演 ④特産品を使った商品で地域のイメージを良くしていきたい。</p> <p>風評被害 復興 魅力発信</p>	<p>Caféふう売上あげあげプロジェクト ～人と人が繋がる居場所～</p> <p>遠藤果穂</p> <p>メディア・コミュニケーション探究ゼミ</p> <p>Caféふうが抱えていた課題は、①地域の人の来客が少なく、赤字なこと②せっかく来ても交流の場が生まれにくい、この二点だ。①の課題に対しては、顧客の層ごとに新規獲得とリピーター獲得に目的を分けて、先生が集まる場所に毎日お知らせを書いたり、地域のお祭りなどに出席したり、SNSを使ったりするなどの販売促進活動を実施した。②の課題に対しては、地域の大人と高校生の交流の場を作るために、対話を目的としたイベントを開催した。地域の大人と高校生が交流する場所を作ることによって、高校生は人間関係を広げ自信をつけ、地域の大人は地域復興の仲間が増えるなど、相互に良い効果をもたらすと考えた。</p> <p>地域交流 居場所 対話</p>

【資料4】生徒探究テーマ一覧 高校3年次（コンテスト部門・対話交流部門）

	対話交流部門(選択9)	対話交流部門(選択10)	対話交流部門(多目的3)	
9:10 ～ 9:30	ゆるくまじめに政治を学ぶ会	人がいなくても生きる集落【中学】	そうだ富岡、行くべ【中学】	9:10 ～ 9:30
	鴨川絃音	大森春花 志賀陽向 渋谷歩性	生田愛華羽 藁谷優花 上西さくら 渡邊咲斗	
	メディア・コミュニケーション探究ゼミ	-	-	
	①若者の政治への関心、知識が足りない！ ②アンケート調査 ③政治家・かわいいをテーマにプチ講演 ④政治に対して新しい見方を持つことで、政治に関する正しい知識を身につける・積極的に選挙に参加するようになるのではないか？さらに、ネット上の政治家に対する批判的な書き込みも、誹謗中傷問題に関連付けられるかもしれない。	私達は広野町の山奥にある箒平という集落について探究しています。なぜこの場所を探究しているのかというと誰も調べていなくて、綺麗で、珍しい場所だからです。この箒平集落はほとんど人が住んでいない過疎集落です。ネットの情報もほほい状態に始めたこの探究ですが、何度か箒平に行き、箒平の魅力を知ることが出来ました。また、住民の方々の思いも知ることが出来ました。私達が箒平を探究して見つけた新たな魅力は「人がいなくても集落が成り立っている」ということです。この魅力を元に箒平のカードを作ったり、座談会を行いました。私達がやってきたことや箒平の新しい魅力などをスライド、対話を通してお伝えします。	私たちの班が目をつけたのは震災前後の富岡町です。フィールドワークに行った際、「若い人が少ない」や「物の揃いが悪い」ということを聞き、自分たちに何かできないのかと思いました。さらに話を聞くと人が少ないということは事業が来るメリットがないということも聞きました。そこで私たちは富岡町の事を知っているが富岡町に興味がない人達は富岡町を知らないのではと思いました。そこで少しでも興味を持って貰い富岡町に来るきっかけを作りたいと思い、私たちの班は富岡町の震災や原発のことについて説明、掲示している施設をツアーで回っているような動画を作成して投稿をすることによって不特定多数に見てもらえると考えました。	
	政治 若者 推し活	集落 過疎化 景観保持	動画 ツアー 魅力発信	
9:30 ～ 9:50	馬と共に生きる【中学】	愛とはなにか	ゲームで伝える富岡町	9:30 ～ 9:50
	箱崎真香	土屋樹 渡邊縫 草野理香子	大津怜奈	
	-	健康と福祉探究ゼミ	メディア・コミュニケーション探究ゼミ	
	皆様は引退馬をご存じでしょうか。今、引退馬は注目を集めつつあります。なぜならとある大きな問題を抱えているからです。私の探求はこの問題を完全に解決したいというわけではありません。これから引退馬はどうなるべきか、そもそも問題視するべきか。そして私たちに何ができるかを私の発表を通して考えていただけたらと思います。今回のプレゼンテーションではそもそも「引退馬って何？」「競馬って何？」という馬に関する知識がない方も分かりやすくご紹介いたします。	①双葉郡に結婚式場がなく地元で結婚式を挙げたいという人達が結婚式を上げられない。 愛について知りたい！愛されたい！ ②インタビュー調べ学習 ③学校の人や校外の人に愛ってなんだと思いますかと聞きまわった！ 調べ学習 ・対話イベント ・地域イベント参加 ④結婚する人が増える→子供たくさん→少子高齢化防止	若い世代の人達に分かりやすく富岡町を伝えるにはどうすれば良いか。という課題の元探究を行っています。自分の町について話しても入る場があるけれど訪れる若い世代が少ないこと。震災前と比べ人口は増えつつあるが未だ戻っていない人が多数である事。以上の事実を踏まえ、実際に現地に赴き、建造物の使用許可を頂きつつゲーム制作を行っています。ゲーム制作に関し、実際地方創生RPGを制作している地方団体も存在しているため、聖地巡りや町を楽しく学ぶことで過疎化や少子高齢化の対策になるのではないかと考えています。	
	引退馬 殺処分 安楽死	少子高齢化 LGBT 結婚する人少ない	地域発信 ゲーム イラスト	
	#周囲にどのように関心を持ってもらうか	#ウェルビーイング・豊かさ	3.11は僕らに何を伝えたいのか？	9:50 ～ 10:10
	2つの発表を踏まえての対話(30分) 9:50～10:20	2つの発表を踏まえての対話(30分) 9:50～10:20	藤原知也	
	休憩 10:20～10:30	休憩 10:20～10:30	原子力防災探究ゼミ	
			震災が分からない人達が増えている中その記憶を風化させないために、、、 原子力発電に関する知識を本から学んだ。富岡アーカイブミュージアムで館長さんからお話を聞いた。そこから得た知識をまとめて分かりやすく中学生に伝えてより深い議論をしてもらうためにはどうすれば良いのかということを常に考えていた。 中学生に授業をすることで記憶が風化されないように残していく。中学生の頃から問題提起について深く知り知恵をつけることでそこに自分の意見が生まれその意見を交換することで地域の課題解決などに繋がるのではないかと？人でも考えることも大切なことであるが、人と対話をするコミュニケーション能力が必要になると考える。	
			震災 教育 模擬授業	

【資料4】生徒探究テーマ一覧 高校3年次（コンテスト部門・対話交流部門）

10:30 ～ 10:50	<p>パラスポーツの認知度を上げるためには</p> <p>緑川歩幹</p> <p>健康と福祉探究ゼミ</p> <p>パラスポーツの認知度が低い、障がい者に対する差別や偏見を感じる。自分自身がパラスポーツについて知らなければいけないのでまずは調べ学習から始めた。県内でパラスポーツを取り上げているイベントはないか調べた。県内でのイベントはほとんど終わってしまっていたため県内にパラスポーツ協会がないかを調べた。福島県内に協会の本部があることが分かったが、練習会で田村市の陸上競技場を使っていることが分かり二年生の夏休み中にアポを取り実際にパラスポーツの練習会に参加した。学校で同じゼミのことポツチャを行った。障がい者のことを同じ人間としてみていないから興味を持たないのではないのだろうか。</p>	<p>福島と世界の架け橋プロジェクト</p> <p>小林明日美</p> <p>メディア・コミュニケーション探究ゼミ</p> <p>①対話と交流の場が少ない ②語り部イベントの参加、部活を通して他県の高校生と交流など ③イベントの開催、ニューヨーク研修への参加など ④ニューヨーク研修に参加して福島と世界の共通点を見つけることができた。</p>	<p>休憩 10:10～10:20</p> <p>#震災後の風化とまちづくり@富岡</p>
	<p>パラスポーツ 車いす</p>	<p>国際交流 語り部 コミュニケーション</p>	<p>3つの発表を踏まえての対話 (50分) 10:20～11:10</p>
	<p>理解されにくい人とどう関わるべきか</p> <p>齋藤 菖</p> <p>メディア・コミュニケーション探究ゼミ</p> <p>①障がい者差別 ②本やインターネットで障がいについて調べた。学校の生徒職員、地域の学校やデイサービスを通してアンケート実施。 ③まだできていない。 ④【最初のアンケート】障がい者と関わることがなかった人は、関わったことがある人より2倍、障がい者についてマイナスな印象を持っている。障がい者と関わることがない人→「接し方が分からない」「関わることがあれば関わる」→日常的に関わる場を作れば良いのでは(学校とか) 【次のアンケート】子供(ハンデ持ち)が学校でうまくやっていると心配、インクルーシブ教育を望む等の意見→インクルーシブ教育について調べる。</p>	<p>ハロートーク！～なぜ私たちは英語のコミュニケーション能力が他国より劣っているのか～</p> <p>菅田風之</p> <p>メディア・コミュニケーション探究ゼミ</p> <p>私の探究テーマは、「なぜ日本人は他国より英語を使ったコミュニケーション能力が劣っているか」というテーマです。活動した中で出てきた仮説として、単語やジェスチャーだけでコミュニケーションがとれるのではないかと。NY研修のワークショップで気づいたことは、自分の意見が言えることが重要だということです。また、相手に英語ができないと見せたくなく、完璧を目指す自分がいました。帰国後、失敗してもいい環境で簡単なディベートを英語で話そうというイベントを学校で開きました。10数人ほどが来て、結果的に自由に意見を出すことができ英語を間違えても恥ずかしくないという感想が出ました。</p>	
<p>障がい児 インクルーシブ教育 学校</p>	<p>英語 コミュニケーション グローバル</p>		
10:50 ～ 11:10	<p>#インクルーシブ・障がい</p> <p>2つの発表を踏まえての対話 (30分) 11:10～11:40</p>	<p>#国際交流</p> <p>2つの発表を踏まえての対話 (30分) 11:10～11:40</p>	

各プロジェクトの概要には、
 ①解決したい課題
 ②解決に向けた調査アクション
 ③課題解決のためのアクション
 ④全国や世界の課題と照らし合わせた考察
 +プロジェクトに関係するキーワードが最大3つ記載されています。

令和5年度指定
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業
研究開発実施報告書
第1年次

令和6年3月

編集・発行 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
校長名 郡司 完
住所 〒979-0408
福島県双葉郡広野町中央台1丁目6番地3
電話番号 0240-23-6825
FAX番号 0240-23-6828

印刷・製本 八幡印刷株式会社
住所 〒970-8026
福島県いわき市平字田町82-13
電話番号 0246-23-1471
FAX番号 0246-23-1473

